



大徳心記

特別  
イ 4  
3163  
36



頁  
14  
3163  
26

大隈言道

佐佐木信綱  
梅野滿雄  
編

序

泰西の古語を曰く福者  
故に、認あらしむ、我が鏡  
おの歌人大隈之道は如き  
も久、故に、余却せられ

之聲も彼も珠も繡稿も徳  
むももかかうしは豈古と東  
西の通款もあらずや彼は福屋  
華院町の事象も生れか  
資性風雅少くも和歌と嗜

かも未だ世に識る者も  
を以て晩年大坂に上りし  
も知ると令一日志す困難世  
か適々余が父乃高余を母  
して大坂飛屋敷も在り物せ

し際をれを彼が窮情を憫  
み抱く女の中若くは多侍を  
為す一女の傍に父が湖池加邊を  
天王寺屋敷に居ると云ふ  
ま多侍を彼が接待役と爲

付乃如音と云ふ  
云ふ

言道と云ふ父とは如上の由  
縁ありしを以て随て余の家  
名は彼が御女と云ふ歌の巻

紙をとけきも懐中のと云す將  
た短冊と謂ふすしと夥し  
あししと父歿後は詩と愛  
玩まるも計かく當時の余等  
子供共に新金乃壁張り用を

し此が近隣の人々惜  
し氣がなく今も與つたらん  
物換り星移り茲も端を  
くも云々の証奇口文學博士  
佐々木信綱君は禮識を汲く

始<sup>は</sup>久<sup>く</sup>淡<sup>たん</sup>河<sup>が</sup>三<sup>さん</sup>音<sup>おん</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ごん</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ごん</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ごん</sup>  
五<sup>ご</sup>数<sup>すう</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>  
れ<sup>れ</sup>初<sup>はつ</sup>道<sup>だう</sup>の<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ごん</sup>の<sup>の</sup>言<sup>ごん</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>か</sup>  
を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>  
能<sup>のう</sup>あ<sup>あ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>彼<sup>か</sup>が<sup>が</sup>刺<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>層<sup>そう</sup>姓<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>

吾<sup>われ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>吾<sup>われ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>吾<sup>われ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>吾<sup>われ</sup>人<sup>にん</sup>  
是<sup>こゝ</sup>れ<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>家<sup>か</sup>の<sup>の</sup>和<sup>わ</sup>史<sup>し</sup>の<sup>の</sup>玉<sup>ぎよ</sup>は<sup>は</sup>各<sup>かく</sup>道<sup>だう</sup>  
を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>  
乃<sup>すなは</sup>馬<sup>ば</sup>の<sup>の</sup>伯<sup>はく</sup>樂<sup>らく</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>けい</sup>女<sup>にょ</sup>  
是<sup>こゝ</sup>を<sup>を</sup>展<sup>てん</sup>の<sup>の</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>の</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>の</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>の</sup>女<sup>にょ</sup>

今春四月父の五十四回忌  
に當り余は福園を下りて  
法事一に當りて不奇なる  
哉之乃亦去年五十四回  
忌ありと少く亦父と因縁の

淺からざる事哉思はむ  
之を集りて上梓して同好の  
人亦願せんとす名園秘蔵  
之人亦言造り因り余を亡  
父の塚ありて即ち余の家才



かゝる心豈奇過と謂はる  
を得んや

累々埋末とく世を捨て  
たる云々の香歌は彼が五十  
回心と共なり花咲く春を得

と得たにこそ芳香香と致ち曾て  
故つとすら認めむと云ふは  
云々の名は今や吾人  
満るべし認めらぬとす時  
呼言道也以下地不

瞑去——聊か此感を述  
へて序文と為す

大正六年十月

金子澤太郎



吾邦等九派再臨  
已々天神  
柏者打手（？）書（？）書（？）

(國孫磨氏所藏)

## 緒言

貝原益軒龜井南冥の名は世に高けれど、福岡が生みし大いなる歌人大隈言道の名は、久しく埋没して世に知られざりき。志かも言道は、福岡の爲に、はた國文學史上に、永遠の光を放てる偉人なり。

吾人が、わが大隈言道の名を始めて識りしは、今より二十年前、明治三十一年の夏の夜、神田末廣町なるさる書店の店頭で草徑集三巻を求めし時にありき。途上街燈の光に照らして拾ひよみせし歌のなみく／＼ならぬに、心ときめく思ひして家に歸り、終に夜をとほして讀み了へぬ。その斬新なる歌風に打驚きつつ、かかる未知の天才を發見し得つる喜ばしさに堪へざりしその折のおもひは、今も忘れがたし。かれ、恰も當時編輯しるつる續日本歌學全書の近世名家集に收めて、世に紹介しき。爾來言道につきて注意を怠らざりしに、草徑集以外の家集の稿本も世に出で、言道の事蹟、就中その最も異彩ある門弟野村望東尼との關係なども知らるるに至りぬ。殊に、近く筑前なる梅野滿雄君、言道の研究にいそまれ、言道の著書事蹟等、頗る精しくするを得たり。

大正六年七月二十九日は、言道歿後五十年に當るをもて、この機にのぞみて、精選せる言道の歌集を世に公けにせまほしく思へりしに、舊福岡藩士工學博士團琢磨君この擧を賛し、出版の資を捐らるることとなりぬ。而してこの事に就いては、子爵金子堅太郎君、井上公二君、醫學博士弘田長君のいたづきまた尠からず。こたびこの一卷刊行せられ、わが言道の面目をとこしへに世に傳ふることを得るに當り、特に記して感謝の意を表す。

本書に收めつる言道の歌集、歌論、及び傳記のうち、歌集は、言道の作の現存せること明らかなるものの全部（草徑集、ささのや集、歌文珍書保存會刊行本、梅野君蒐集の草徑集二篇、續草徑集等、及び短冊懷紙等の筆跡）より予が新たに抄出し、稿を改むること數回にして成し得つる所なり。ひとりごちは、言道が歌論の著にて、はやく其名を聞きしかど見ることを得ざりしに、梅野君が安川敬一郎翁の斡旋によりて平岡良助君所藏の稿本を借得て寫されしものにかかる。こぞのちりは、ひとりごちの原稿ともいふべき隨筆にして、今年五月予が言道の遺跡を訪ふべく福岡にもせし折、辛島小四郎君より借來りしものなるが、ひとりごちと重複せる節鈔からぬを以て、多少の省略を加へつ。「大宮人の束帶せる如き歌のみが歌にはあらず」の一句の傳へらるるのみなりし言道が歌論は、この二著によりて初めて之を知るを得たり。また、大隈言道傳は、梅野君が數年の苦心によりて成りしもの、言道の事蹟は、本篇によりて極めて明らかにせられ、從來雲間に片鱗を現はしし金龍は、殆どその全身を見るを得たる感あり。

なほ、言道の歌風歌論の一斑を知らしめむ爲に、歌人大隈言道の一篇を卷首に添へつ。讀者に資することあらば幸なり。

大正六年十月

佐佐木信綱識

大隈言道目次

緒言……………一—三

歌人大隈言道……………佐佐木信綱著……………一—三六

大隈言道集……………佐佐木信綱選……………一—三三

ひとりごち……………大隈言道著……………一—二六

こぞのちり……………大隈言道著……………一—二〇

大隈言道傳……………梅野滿雄著……………一—二四

挿入書畫

言道筆蹟(二種)

言道稿本ささのや集

同 ひとりごち

言道肖像及び故宅





## 歌人大隈言道

佐佐木信綱

之を和歌史に徴するに、和歌は奈良朝の萬葉集時代、平安朝初期の古今集時代、及び平安朝末期の新古今集時代、この三つの黄金時代を経て、已にその代表的發達をなしたる觀あり。而して新古今の華麗なる歌風に、ある意味にて發達の極に達せし和歌は、それより後の鎌倉時代、足利時代、戰國時代に於いては、大體に於いて衰退の底に沈み、萬葉の自然と、新古今の情趣とは殆どかへりみられず、新勅撰の平凡無趣味の歌風を學んで、その末益、濁りては、殆ど何等の生氣と、何等の光彩との認むべきものなかりき。この間に生ぜしものとは、所謂古今傳授、所謂制禁の詞、所謂師範家といふが如き、いづれも和歌の本性と全然反對せる、而して詩歌の發達を沮害すべき弊習なりき。

徳川の文教興隆の機運は國學の方面にも及びて、江戸の戸田茂睡、難波の下河邊長流、圓珠庵契沖等の諸先覺者は、或は歌論によりて、或は萬葉集の訓詁註釋によりて、中世歌學の迷夢を覺しぬ。去かも歌論といひ、萬葉の研究といひ、いづれもこれ學問なり。而して學問によりてまつ破られたる中世歌學の桎梏は、それとともに、實際の作家に於いても自ら破られざるを得ず。上記の諸先覺者の歌風、また自ら之を中世諸家の作に比して、多少の生趣をもたらしき。而も彼等諸學者は、もとより専門の歌人にはあざりき。その歌風に未だ清新の情趣の鮮かに認むるを得ざりしは、固よりその所なりといふべし。而して近世の歌壇が、眞に中世以後の和歌史上に一生面

を拓きしは、萬葉主義の歌人賀茂真淵の出現を見ての後なりき。真淵いでて、ここに久しく顧みられざりし萬葉歌風の古古と雄健と天真とは、近世歌壇に再現したり。彼は單に萬葉の言語と調とを學びしのみならず、實に萬葉の精神を了得したり。而して和歌の本源たる萬葉の精神を了得せる彼は、同時にまた和歌の眞諦を了得したり。而して真淵につづいて出でしは、小澤蘆庵及び香川景樹の兩歌人なり。たゞこと歌を唱道せし蘆庵、「歌は理わるものにあらず調ぶるものなり」と喝破せし景樹は、ともに縣門の崇古を斥けて、歌は人情自然の發表なりてふ眞淵その人が抱きしと同じき理想を、古今の歌風に求めたり。この兩者、殊に景樹の天才が近世歌壇にもたらしし清新の趣味に至つては、大いに注意すべきものとす。而して桂園の歌風また、一方にその末流に及んで流弊に墮したりといへども、直門中には、熊谷直好、木下幸文の如き、一面いよいよ桂園風の特色を發揮して、眞情流露てふ點に於いて、尠なからざる發達を示ししものを出だしぬ。而してこの間に於いて、荷田在滿、本居宣長によつて唱へられたる新古今主義の宣傳あり。この兩者は、實際の作歌に於いては、さばかり稱すべきものなかりしといへども、歌論に於いては、近世歌學史上の異彩をなせり。同じくまた縣門の歌人村田春海、橘千蔭によつて成されたる、江戸派一派の流麗なる歌風あり。かくの如くにして、近世の歌壇はとりどりに色美しき千草の咲き亂れたる秋の野邊の如く、見る目もあやなるばかりなりき。去かも尙これらの諸歌人、いづれも多少その個人的特色を發揮し得たりといへども、なほ大體に於いていはば、萬葉風、古今風、新古今風の三歌風を再現したるものといふべかりき。而して近世の歌壇が、眞に個人的歌風をなしし歌人を出だして、眞の近世的意義を發揮せしは、幕末の頃にいたりてなりき。越前に出でて萬葉風のうちに更に獨特の歌風をなしし橘曙覽、大平の門に出

でて萬葉に新古今の情趣を交へたる雄麗の歌風をなしし加納諸平、その特殊の境遇閱歷より慷慨悲憤の調をなしし勤王家諸志士中の歌人等、即ちこれなり。而してこれらの人々と同じ列にありて、而もこれらの人々の間にありても、新しき歌風といふ點に於いて、最も大いなる光を放てるは、實にわが大隈言道その人なりき。

大隈言道は、かくの如き近世歌壇の一大才なるにも拘はらず、而してまた、比較的遠からざる時代の人なるにも拘はらず、その歌風、全く時流と懸隔せりしたため、その名も殆ど傳はらざりき。故に吾人が十數年前その家集草徑集を續日本歌學全書第八編に於いて文壇に紹介せし當時に於いては、その傳記の如き、また著書の如き、之を精しくすること困難なりき。然るに爾來世に志を同じうする人々と研究を重ね來りし結果、漸う明らかになり來りしもの少なからず。殊に近時梅野滿雄君の努力によりて、頗るその事跡を審かにすることを得、又家集歌論等の未知の遺稿を發見するを得たり。いままづ、今日までの研究の結果にもとづきて、その略傳を記さむ。

言道は福岡の人、藥院抱安學橋の家に生る。時は寛政十年、即ち本居宣長が大著古事記傳完成の年として近世學問史上最も記すべき年に屬す。父は茂助言朝といひ、母は刀鍛冶信國又左衛門光昌の三女なりき。父の家は商をこととせしも、父祖ともに文雅の嗜みふかく、殊に父は書に巧みなりき。言道は父母の第四子にして、幼より讀書を好みぬ。八歳父を失ひ、九歳兄に別れぬ。夙く福岡の書家二川相近に學ぶ。相近は九州に於ける鈴屋派の重鎮青柳種磨の交友にして、書家としてすぐれしのみならず、和歌に就いても一隻眼を有せし人、その歌風は未だ時様を出づるに至らざりしも、言道が夙く彼の提撕をうけしこと大なるは言ふをまたす。言道長じて後、父の業を受けて家業につとめしが、研學の志一時もやまず、いよく造詣をつみぬ。天保三四年三十五六歳の頃、彼は

従來の歌風をすて、始めて一家の歌風を詠み出づるにいたりぬ。言道が近世歌壇の異彩たるにいたりしは、もとよりこの覺醒以後にあり。而してこの覺醒に就いては、彼が中年の作「ひとりごと」てふ歌論の書に明言せるところなり。これより彼は、自ら「天保の歌人」を以てをり、自ら「天保の歌」を作るを以てこととせり。その頃より家運漸う傾きしを以て、彼は三十九歳にして家を弟言則にゆづり、自らは妻子を具して、市外今泉なる池萍堂に隠棲しぬ。而して天保十年、四十二歳にして豊後なる廣瀬淡窓の門をたたいて漢學を學びぬ。爾後益々詠歌にいそしみ、安政四年六十歳にして大阪に出で、在阪十年に及びしも、その歌風世の容るるところとならずして國に歸りぬ。かくて慶應四年七月二十九日、病を得て郷里に卒す。享年七十一。その墓は福岡藥院なる香正寺にあり。

言道は、和歌は二川相近に、儒學は廣瀬淡窓に學びたりといへども、未かも覺醒せる言道の歌風と、この學統とは殆どその關係なしといふべし。未かして言道は、郷里及び大阪に於いて門弟を有せしこと、必ずしも少なからざりしといへども、特に歌人としてすぐれたる人は之なきが如し。否、唯一人の野村望東尼ありて、言道の爲に大いなる光彩を放てり。望東尼は、明治維新の生める女丈夫にして、平野國臣、高杉晋作等と事をもにせる勤王家の一人たり。女丈夫としての功績は、世に顯著なり。歌人としての面目も、さきに吾人の紹介せしところなれば、ここに再説せじ。ただ一言記せざるべからざるは、一つには、彼望東尼は、その特殊の人格と閱歷との發揮てふ點に於いて、もとより獨特の歌風を有せしとはいへども、之を一般の作に於いて見るに、明らかに言道の歌風を學びて、その堂に達したるものなること、而して二つには、由來人格と閱歷とに於いて特殊なる人といへども、その作歌に於いてはその發現を見ざるを、むしろ吾が國古來の歌人にならひとせるに、望東尼に於い

てはひとり異例をなせるは、また實に言道その人の歌論の精神の感化おほかるべきことの二點とす。而して更に、兩者の師弟互に相信し相許したる關係の極めて美しかりしことに至つても、大いに注意すべき點にして、女丈夫望東尼をかくの如き門弟として有せしことは、言道が人物の又決して凡庸ならざりしことを證して餘りありといふべし。

## 二

和歌を以て消閑の遊戯となし、その文學としての眞意義を解せざりしは、吾が國古來よりの謬見なりき。而してかくの如き謬見の生じ來りしは、亦決して其故なきにあらず。蓋し中古以來、和歌が全く貴族的文藝となれりし結果、自然かくの如き性質を帶び來りしは明らかなる事實にして、かくの如き謬見の生じ來りしは、全く之に基づくなり。然りといへども、これ決して文藝たる和歌の本質にあらざることは言ふまでもなし。一般人士のかくの如き謬見を抱くは、なほ恕すべし。ただ遺憾とすべきは、中古以來多くの歌人輩出して今日にいたりといへども、歌人その人にして、眞にこの謬見より脱して、よく和歌の精神を了解し、隨つて自己の歌人たることを以て、その貴むべき天職なることを信ぜし人々に至つては、殆ど見ること稀なる一事なり。この事こそ痛嘆すべき極みなれ。中世堂上歌學の時代に於いては、和歌は雜藝の一つと考へられき。所謂傳授などいふことの生ぜし原因またここに求むべし。學問の光輝き出でし近世にいたりて、かかる傳授といひ秘事といふが如き陋見こそ全く破られつれ、なほ和歌は古學の方便と考へられむとする傾全く去りやらざりき。即ち之を一言にていへば、和



歌は古學に囚はれたりき。かくの如きは、近世歌壇に縣門の流を汲める古學者が大いなる勢力を占めつるおのづからの結果として、殆どおしなべての思潮をなしき。

もしかくの如き間にありて、よく眞に和歌の眞義を了解し、歌人たるの天職を自覺し、堂々と自己の専門歌人たることを誇とし、その一生を歌に捧けたる人ありとせば、その人の思想とまた事業とは、貴とからずとせずや。而してかくの如き人を近世の歌壇に求むるに、之を得ること極めて尠なし。その尠なきが中に、最も明瞭にこの資格をそなへたるものとして推奨しつべきは、一人は香川景樹にして、他の一人は實にわが大隈言道なり。

景樹が歌に對して熱心にかつ忠實にして、貧困と戦ひつとも、ただその道の宣傳につとめ、自己の歌人としての天職の偉大なることを自覺し、邁往直進せし生涯は、眞に尊敬に價す。而してわが言道に至つても、これらの點に於いて、景樹に相のづることなかりき。言道も亦一生を純然たる歌人として過ぐしぬ。彼も亦中年以後非常なる生計の苦をつづけぬ。彼も亦、世の歌人にあきたらず、自己の歌風を唱道して戦ひぬ。去かも彼に殊に重んずべきは、あくまでも平民の歌人として終始せし點なりき。彼は福岡の商人として生れ、後家業を弟にゆづりて、歌のみを以てたつにいたりしまで、一商人たりき。歌人としてたつに至りても、あくまでも平民の歌人なりき。景樹がなほ長門介また肥後守をその懐紙に志るせりとは、選を異にせり。

而してかくの如き言道が、その歌人としての精神と主義とを明瞭に大膽に宣傳せるものは、實に近く發見せられたる歌論「ひとりごち」及び「こぞのちり」とす。この兩書は、ともに分析的組織的の學問的著述にあらずして、むしろ胸裏よりわき出づる彼が體得の眞理を隨筆的に書き記したるものにして、その筆致の力と光彩とに富める

點に特色を有することは、景樹の詠草奥書にも似、自ら學者の著ならずして、歌人の著たる趣あり。而してたとひ精細は缺くも、その所説の徹底せる點に於いては、はるかに景樹に勝れり。ひとりごち及びこぞのちりの成れりしは天保の頃、彼が中年の時にして、彼が和歌における覺醒後にかかる。即ち彼が歌論はこの兩書によりて代表せられたりといふべし。

その所論の根本の要旨は、一般歌人の歌は囚はれたる歌にして眞の歌にあらず、歌は須らく個人が眞實の感情の發表ならざるべからずといふにあり。而して吾人が本編の序説に、在來の歌風の變遷の大勢を叙して、言道の歌人としての意義に言及せし文字を読みし人は、この要旨の意義を了解すること困難ならざるべし。乞ふ、この要旨を述べたる彼の文字の頗る氣慨に富み、所信に充ちたるを見よ。まづひとりごちの卷頭に曰く、

「僕かりに木偶歌と號けたる物あり。魂靈なくて姿も意も昔のものなり。かかる歌は千萬首よめりとも籠にて水を汲むが如し。當世の人の歌此籠をもらざるは少なし。然るに、此木偶、何年せば靈や入り來たらむ。僕つらく、田舎人の歌を見るに、木偶にて世を終る人多し。古人は師なり。吾にはあらず。吾は天保の民なり。古人にはあらず。みだりに古人を執すれば、吾身何八何兵衛なる事を忘る。意のうはべのみ大臣の如くなりて、よむ歌さぞ尊きことにてもあるべけれども、そは賈人の冠袍を着たるなり。全く眞似にて、歌舞伎を見るが如し。或歌よみに喩して曰く、眞似ならば易きもの、歌舞伎役者も菅丞相になると。まこと菅相公たらむと欲する者、俳優の如くせんや。また古歌の如き歌よまむとするもの、藝の如くせんや。善人たらむと欲せば、先づ心よりはじむべし。善き歌よまんと欲せば、先づ心よりはじむべし。心を種としてわが歌を詠するに、全く不似を以て古人にちかし

とす。古人によく似たるを以て古人に遠しとす。」またこぞのちりに曰く「わがものを詠まんとすれば異體になり、異體ならじとすれば古人のものになる。歌の難きところなり。されば、古人の歌をいくつ詠みたりとて、不<sub>レ</sub>詠も同じ事なり。生涯歌なくて歌よみなるは悲しむべし。」また曰く「禪宗にて無<sub>レ</sub>宗是宗といへる、わが歌も流なし。」と。

その辭氣の峻烈なるを見るべし。一般歌人の歌を精神なき木偶歌と罵り、吾は天保の民なり、古人にあらずといひ、全く似ざるを以て古人に近しとし、わが歌も流なしといふ。かくの如き明瞭にして大膽なる所信を有し之を言明せし人、彼をおいて何人もあるなし。されば彼は、古學派の萬葉風の作に對しては、ひとりごちに「萬葉詞のみにて作る歌は、心は今の卑俗にて、かの町人の衣冠なるを心づかでは、吾も古人になりたる心地すべし。靈魂を失へる時なり」といひ、宣長がうひ山ぶみの歌論については、「その論、歌を作りものにゆるしたる趣なれば、己はとらず、又こぞのちりに、「いとあらくしきいひざまにして論するに足らず」といひ、又、「本居ぬしの道は、歌を作りものに許したり。己れが道は、自然を以て咏嘆せんとする志なれば、歌の善凶を見るにも異同あれば、其立てたる道の論はあるべけれども、歌の善凶は論じがたし。彼方にて善きも、此方にて凶しとすること互にあるべし。」といへり。近代の歌人中にては、景樹に最も同情をよせたるも、理りなり。

かくの如き思想よりして、彼は或は當時の題詠に囚はれたる作り歌を誇りて、ひとりごちに、「己れ初學に諭して曰く、歌は花月を詠むものにはあらず。その月花につけて吾心を言ふものなり。かく教へたるは、心を種とする事を忘れじ、月花の講釋歌を詠ませじといふなり。己れをおきて月雪の上のみ言へば、自身はいかにありて

も、歌は歌にて別物となる。後世これにながるる歌多ければ、さる本の意を知らしめむとて、月雪をよむものにはあらずと教へたり。目にかかる所の月雪、耳にきく所の鳥聲、歌の種となれば、それにつけて感嘆すべき事なり」といひて、當時の一般の歌風を、月花の講釋歌となしぬ。所謂作爲の歌の弊を攻撃して痛切なりといふべし。而して彼の特に主張せし點としては、少くも四つを數ふべし。第一は歌における個人性の發揮を高調力説せしことなり。ひとりごちに曰く、「人の面のかはる如く、歌も人に似て別々なり。其性質、松もあり竹もあり柳もあり梅もあり、孰れも同じからず。更に搖ぐまじき所あり。師なる人あやまりて柳の性を松にせんとし、竹の生れ付を梅にせんとす。また學ぶ人、さる事かと想ひ、同じく己が性質、よき所あるもあしき所あるも志ひて變ぜんとす。いたくあるべからざる事なり。松の性は松を以てよきに長じ、柳は柳を以て長せん事云に不<sub>レ</sub>及。さすれば己が生れ付の事なれば、松の勇壯なる、竹の眞直なる、柳のたをやぎたる、己が性にまかせて長じ、とりどりにめでたくなるべし。さるを教へあやまりて強ひたる事をするより、松も生涯柳の風を作り、竹も生涯梅の風をして終らば、己が性の美なる所は現はれず、あらぬものになれり。歌を作り作らぬと言ふ事も、此所にはじまる。かく言へばとて、梅柳の如く其性にまかせおきて學ぶ事のなきといふにはあらず。歌はもとより學ぶべきものなれば、己が生れ付に任せてよく長ぜむ事を求むべし」と。一には歌人としての自覺の徹底せるを見るべく、一には師としての用意の正しきを見るべし。第二には、歌の想の廣かるべきを説けるなり。曰く、「歌の體いろいろある物を眞實を好むとて、唯涙ぐましく、まめなる事ばかり言ふは偏れるなり。もとよりまめなる心の時はまめなる事を言ひ、戯れたる時は戲言をいふ事なり。世の中に絶えて櫻のなかりせばとうめき出たる時もあれば、又、いざ櫻

われも散りなんと潑り立たる時もありて、種々に歌の様變るべし」と。後に述ぶるが如く、洒脫飄逸の作風をその特色とせし彼の言として、殊に聽くべし。第三には、地方的特色を詠まむことをすすめたるなり。曰く、「博多福岡に住みながら、其地を詠める歌當世少きは何ぞ。博多と詠める歌續風土記にも數々見えたるを知らざらむや」と。第四には、用語の自由を主張せしことなり。ここのちに曰く、「漢語梵語も今は國語同前なるは、嫌ひなく歌にいふべきものながら、その選びをせねばならぬことになりてより、歌學びよくせずはいはれぬことになりたるなり。今の人の平語の如く歌詞を自由にせずば、おのが心のままをいひいづること難かるべし。さればかく、詞のよしあし其姿などを習ひ得て其後に詠むことになりたるは、いと悲しきわざならずや。」と。見るべし、平語の如く歌詞を自由にせんこと、その理想なりしことを。而してこれが、彼に於いて單に理想にとどまらざりしことは、之をその作に徴して知るべし。

以上は、言道が歌人として懷抱せりし精神と意見となり。其天保の民の歌を主張せし精神の偉大なるを見よ。その個々の意見の卓拔なるを見よ。これらの思想、いづれも彼の見識の時流を抜くことはるかなるを示す。去かも、殊に主んすべきは、彼の説くところが、學者の理論にあらずして、歌人の實際的經驗上の言なりしことなり。殊に彼に於いては、その言説たる、最も力強き實行をその背後に有したり。換言すれば、これらの思想、これらの主張、一つとして空理空論にあらずして、いづれも彼によりて實行せられたるところなりき。即ちその詠歌として現はれたるところなりき。否むしろ、その歌論は、彼に於いてはやがて作歌なりしなり。これ彼が天成の歌人たりし故ならずんばあらず。この點に於いても、古今風の軌範を殆ど脱するを得ざりし景樹に比して、彼ははる

かに徹底せりき。ここに於いてか、個々の言説に於いては、その明瞭さ強さ等の度合こそ異なれ、彼の説くところの主意、必ずしも近世諸歌人の歌論中に之を求め得られざるにあらざるにも拘はらず、彼の歌論は、近世に於ける諸家の歌論中、おそくは、最も進歩せる最も力づよき思想とせらるべきなり。

今や吾人は進んで、彼の作歌について説かざるべからず。

## 三

萬葉古今新古今の三歌風を通じて形成せられ來りたる和歌には、一の大いなる通有性あり。そは何ぞといふに和歌が中古以來貴族的文藝として發達し來れる歴史上の理由よりして、自ら生じ來し古典的性質なり。所謂古典的性質とは、思想用語方面に於ける雅びかてふ理想なり。此性質は、趣味の野卑蕪雜てふ弊をさけ得たる點に於いては、まさしく和歌の爲に喜ぶべきものをなし得たれども、一方に同じく構想用語兩方面に於いて、無變化單調に陥らしめ、歌想といひ歌詞といふ型を作りなし來りたるは、和歌の爲に悲しむべきものとなす。かくの如くにして、類想は繰返され、用語は束縛せられぬ。その結果は、和歌は殆ど始めより一種の型のうちに囚はれたる觀をなしぬ。中世堂上歌學の歌の如きは、その極端に赴きたる例に過ぎず。たまく、獨創の才ある作家の出づるありても、わづかにこの型のうちにして多少自らを發揮するものあるに止まりぬ。この傾向は、近世に於いても又全く之を脱するを得ざりき。始めより、或は萬葉主義、或は古今主義、或は新古今主義をそれく、唱道せし歌人に至りては、もとより然り。たまく、その大いなる歌才の故に、自らその型のうちにして型を出でむとせし

もの、ままこれなきにあらざりしも、その程度たる、殆ど微々たるものにてありき。眞淵然り、蘆庵然り、景樹また然りき。特に古來の代表的歌風を祖述することなくして多少自己の歌風を主張し、もしくは詠みなし人といへども、自らこの歴史的歌風のいづれかにその立場をとらざるを得ざりき。良寛然り、曙覽然り、諸平然り、文雄また然りき。

かくの如き大勢のうちに於いて、ひとりわが言道はやや趣を異にしたりき。當時の一般歌人の歌を木偶歌と罵しり、月花の講釋歌をすて、所謂「大宮人の束帶したる如き歌のみ歌にあらず」となし、縣居の歌風鈴屋の歌論をさへ攻撃し、自ら天保の歌人を以て任じたる彼言道、而してもとより歌論家にあらずして歌人、論議の人にあらずして實行の人たる彼は、實にその歌風に於いて、近世諸歌人中最も在來の型を脱し、囚はれたる歌をして解放せしめたる人たり。即ちこれ虚偽の歌をしてまことの歌たらしめたるものに外ならず。

言道の歌の大いなるは、この歌を囚はれより脱せしめたる點に存す。而してこは、その着想に於いて、その修辭に於いて、またその用語に於いて、その情調に於いて、様々に發揮せられぬ。彼の歌風に存する諸々の特長は凡てこの立場に立つて之を考ふるを得べく、又考へられざるべからず。

まづ彼の歌の大體の情調としては、在來の歌の古典的性質に伴ひて自然存したる一種重く、るしき感じをやぶり自由輕快の感じを有せることなり。而して之とともに、貴族社會の文學となりしといふ歴史的性質上、在來の歌に自然具はり來たる悲哀的情調を殆ど全く脱して、樂觀的情調を具へたり。

かくの如き輕妙樂天の歌風の當然の結果として、彼の得意の詩境は、在來の和歌の特色ともいひ得べき感傷的

なる悲哀的感情を述べたる主觀詩にあらずして、自然人事の種々の事物に特殊に感興を寄せたる叙事叙景の詩なり。特に彼に注意すべきは、在來の和歌の大部分をなせる戀愛の歌の如きは、殆どこれなかりしことなり。戀愛を詠ぜずして、あかも一個の歌人たる、この一事に於いても、すでに彼の才の非凡なるを見るべし。要するに吾人は、彼に於いて一種の人世を解脱せる客觀詩人の面影を想像し得るを感ず。

まづ之を彼の歌の題目に就いて見むに、戀愛を除いては、在來の歌人の詠みしところは殆ど凡て網羅せると共に、一般歌人の多く、或は殆ど全く詠まざりし題目にして、彼の好んで、或は特に詠みしもの少なからず。たとへば、桃實、とくさ、ほほづき、をばこ、豆、うど、いも、ねぎ等の植物、さざき、こがら、むくどり、蝸牛、蟹、子子、白魚、飛魚等の動物魚介、風車、水車、羽帚、烏銃、紙薦、桶等の器物、いづれもその詩材たりき。

ことに蝸牛のごとき、普通の歌人の多く詠ぜず、また彼等にとりて難題なりしものをとらへても、次の如き作を詠めり。

いかばかりふりたてぬとも蝸牛角おそろしと人の見まじや

おくまれる家をぞもたる蝸牛わがあさましきふしどには似す

雨ふらぬ木葉がくれの蝸牛いつ引き出づる車なるらむ

ゆく／＼と見ゆれどおそき蝸牛いくかの道の垣ほなるらむ

そよといふささのさ音に引入りてなきがらがほになるかたつぶり

行きがたき梢をゆきて蝸牛いとむづかしき道ごのみかな

年を経て家はなれえぬかたつぶりはなれぬ家はおのれのみかは  
はちす葉の上につまゆかたつぶり日くれ道のみ遠けなるかな  
黄昏の軒のつまゆかたつぶり日くれ道のみ遠けなるかな  
その想の廣きこと、また伎倆の非凡なりしことは、この一例を以ても見得べし。  
その他、顕微鏡を詠じて、

いたづらにわが身フルゴロオトガラス水に蟲ある事も知らずて  
ふらすこを詠じて、

わがさけの限見えたるフラスコに人の命も悲しかりけり  
蛆板を詠じて、

かず知らぬ魚の命はいたの上のかたなの跡に志るしぬるかな  
風車を詠じて、

妹が背にねぶるわらはの現なき手にさへめぐる風車かな  
といへるなど、いづれか斬新ならざる。

人事の方面にては、彼は特に子供、老、親子、また眠などの題目を好み詠めり。これらまた一般歌人の多く詠まざりしところなり。

子供を詠みては、

こたへするこゑ面白み山びこをかぎりもなしによぶ童かな  
さし柳さしていくかも経ぬものを根ざし引きみる友わらはかな  
童べの枕のもとのかのほりのめめの空にや舞ひあがるらむ  
幼なけも早なくなれる童さへ背におはるるや樂しかるらむ  
など、いづれも子供の心持、子供の有様を巧みに詠めり。

老を詠みては、

いつしかも我とりなれてうしろ手の老の姿は誰にならひし  
老らくの古へがたり古へはおなじ事のみありしばかりに  
親子を詠みては、

あけぬれど親の心の暗のうちに朝いせさする家の少女子  
子をねする親もねぶりて灯火のひとりさやかに更くる夜半かな  
また單に人間の上にとどまらず、動植物の上に就いても、親子とか老とかいふことを好みよめり。たとへば、  
先だちて山路すぎゆく牛の親に子牛よりくる村時雨かな  
まだしくもまだ見ゆる子を親がらす飛びならはしにさそふなるかな  
つばくらめ親まちわびて並べれば我もおそしと見る軒端かな  
おのが子の巢立さそひて野の雲雀手も及ぶべき空にてぞ鳴く

何とかや人心地して親のもと引放ちうき園の竹の子  
さく花も老いぬるままに人馴れてなよびやはらぎたる枝かな  
などの如し。

次に、眠に關するものゝ題目も、彼の好み詠みしところなり。たとへば、  
あぢきなく物もふよりはまどろまむまだ一時はぬる間あらまし  
今はとてうちぬる時は命さへわが身と共にのぶかとぞ思ふ  
さめなくに志ひてさませるうたた寐の心は未だ寢てこそありけれ  
むらすすめ庇にあさる音さへもいつより聞きし朝いなるらむ  
かかる類もまた、殆ど先蹤を見ざるところなり。

次に、尋常普通の題目を詠みても、着想の奇抜、觀察の精細等に於て、或は清新に、或は人の意表に出で、新  
面目を發揮せるもの多し。

就中、彼の好み詠みし題目は、櫻、月、及び酒等なり。

櫻花は、古來歌人の慣習的好題目たり。まかも眞に花の美を愛し、花の美をうたひ得しこと、言道の如きは  
尠なし。わづかに其の偶を西行上人に求め得べきのみ。櫻をうたひし歌は、彼の集中最も多し。而して、

あかずしてかへりし故かおもひ寐の夢路につづく花の山みち  
夢にてはちりし軒端のさくら花さむるまにく又さきにけり

近く見て遠く見て又さくら花いかさまにてもあはれなるかな  
居ならびて見る花なれど面白き枝の蔭にはわが身ありけり  
などの勝れし作、極めて多し。また月の歌にも、

よく見ればわれにめやすく親しくて遠くもあらぬ空の月かけ  
入れば入る出づれば出づる月かけと我は友にて友ならなくに  
皆人の我ものがほにめづれども誰が友となき大ぞらの月  
唯ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれとのものぞ廣き大路は  
酒は、また彼の好みてよみしところなり。

なき時はなくて幾日か過ぐすらむある日は酒のあるに過ぎつつ  
今日は今日あらむ限は飲み暮らし明日のうれひは明日ぞうれへむ  
わがどちはいたく酔はてて酒のまぬ月一つこそ寒く見えけれ  
秋の雨のさびしき今日を友もなし海苔を火にあててひとりこそ飲め  
等のたぐひなり。

その他、くさぐさの題目にわたりて、彼の特長の現はれし作を擧げむに、  
かささせるささぬも過ぐる橋の上の夕ぐれちかき雨のはれがた  
まづしくておくる人なき別路につつき立ちたる道の邊の松

鶯のなく一聲にわすれけり何處にかゆく我身なりけむ  
窓に窓むかひあひたる大船の一夜どなりのなつかしけなる  
そなたには窓さへなくて山里の家のそとの山吹の花  
夏川のくづる岸のあやふきに生ひてきたる撫子の花  
よそよりも夏になりぬるほど見えてあけ放ちたる川づらの宿  
今までに人をのせこし駒さへものりたる古賀のわたし舟かな  
よそよりはいづれも同じ村鳥おのが妻こそつまも見知らぬ  
のきかひにいこひなれたる道の邊の石やおそしと待ち渡るらむ  
釣りも得で歸る籠かごの空しきをかるめ顔にもふく嵐かな  
行く人を田舎童の見るばかり立ち並びたるつくつくしかな

等、讀み來れば彼の詩才のいかに卓絶して、尋常茶飯の事物の間に詩趣を捕ふる才の非凡なるかを見るべし。  
以上主として、彼の得意とせし客觀的の方面に於いて彼を見たり。夫かも彼が客觀詩人なりしといふことは、  
決して彼に同情同感の乏しかりしといふことにあらず。否反對に、彼が上記の如き客觀的の方面にすぐれたること  
とも、彼の同情同感が深く細やかなりし故ならずばあらず。さればその主觀的の方面に於いても、彼の作には、  
たとひ戀歌もしくはそれに類せる感傷的のものこそなければ、切實なる感情を以て人を動かす作、決して少なしと  
せず。

彼に、貧苦を嘆き貧苦に同情せる作多し。その多くは彼自らの經驗のうちより生れたる作なりとす。

あはせては又とき放つ古衣かくてぞ春も秋もへにける  
折々はさらぬ家にも行きねかしいつより來ぬる身のまづしさぞ  
我身こそ何とも思はね妻子等の憂してふなべにうき此世かな  
いつしかもむなしくなりて降る雪のさむき夜にたく炭俵かな  
親なけば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて  
聞きすてて飯たく親の見ぬ間にも聲のかぎりになくうなるかな  
くまぐまにかくれくもゆくものを身にさしあてて吹く嵐かな  
たらちねは米の志ろをや待ちぬらむまだ片荷だにうりもせなくに(瓜賣)  
中々に桑こかひてもいとなしにうまれ合ひたる身のすくせかな(蠶婦)  
のたくひをよめば、文字のうちに無限の涙のこもれるを感すべく、又、述懐の作としては、  
品高き事も願はず又の世は又わが身にぞなりて來なまし  
さく花に遊ぶを見れば鳥だにもはむことのみは思はざりけり  
死出の山こえくてゆく先までもわが敷島の一すぢの道  
いづれも、歌人としての彼の信念の強きを見るべし。  
水にだに浮くかる石のかるければ沈む時なき身のやすさかな

あたひにもなる時なくて我園のやせたる竹の世の寒さかな  
一は自足、一は不平、とりどりに面白し。

又、或は自己に對し、或は他人に對し、或は世に對して述べたる諷刺的の作に至つては、輕妙のうちに銳きところありて、一種特殊の趣をなせり。たとへば、

拂へども立ち舞ふ塵の去りやらでただおき所かふるなりけり  
生ひたてるところひきくて谷の松峰の草にも及ばざりけり  
罪人を失ふ磯に立並みてうき世あそびの家もありけり  
所せく隣隣をへだてたる世の中垣のむつかしけなる

枝をればあと見ぐるしくなる花を否といはれぬ人の世ぞかし  
櫻花さきな亂りそ今の世はやつるにこそ人もあなづれ

生きたるを殺さじといはば仇をなす虎狼も市に出でぬべし  
人ごころくちてはなれて桶の輪のわかれくゝになるぞすべなき  
の如きあり。

さらに幕末多難の時勢が、この平民歌人の作にいかにも現はれたるかを見むに、慷慨悲憤の作は決して彼のことにはあらざりき。あくまでも歌人を以て任じたる彼には、その門下に野村望東尼の如き勤王家を出だししにも拘はらず、向陵集、姫嶋日記に見るが如き作殆ど之あるを見ず。夫かも彼には別種の趣ある作あり。

ここかしこせめ戦のうれたさに民は野がくれ山がくれして

門はしる人の音にもおどろきて何か心のさわぐ世の中

難波瀉あし原せまき世になりてさわがしけさのまさる頃かな

物さわがしき世の實況之を伺ふべく、

亂れゆく末をも知らで豊かなる世に生れしと思ひつるかな

ゆたかなる世をすぐしきて何とかやまことの軍まことともなし

安かりし御世にたぐひてことさまに俄にもものむつかしきかな

✓ 世中はいと驚きし事だにも笑ふばかりになりけるかな

✓ 當時の民心の實情、けにもとおぼゆ。更に、

樋の口の花はいくさもせぬものをあまたいたでを負はすなるかな

きのふまでいくさありつる海原も立てる霞はのどけかりけれ

に至つては、愈彼の面目の發揮せられたるを見る。

最後に彼の歌の修辭的方面に就いて見むに、一般に用語句法の斬新自由なりしことは、上記の歌の殆ど凡てにわたりて知り得るところなり。左に單に主なる例を挙げおかむ。

まどろめば野を近づけて枕邊にあるここちする葦さわらび  
いつよりか入相の鐘はなりつらむ心づきたるはての一こゑ



志ぶく、にまがひく小田のことひ牛うたれぬさきに歩めと思へど  
うきままの世の腹立も咲きけちておのがゑまひになせる花かな  
忘れたる事はなきやと思ふ間にとほくなりゆく港出の船  
何事も心にしまずみ山邊の道のぬかりのうはとろけして  
かくれるてわがあと去らぬ影法師るならびてだに月を見よかし  
年を経てなきに志るきをよきことのあるべかしくも思ふ行末  
また、一首全體として句法のかはれるものには、

聞えずばなほ聲だかに道とはむこなたにゆくや志賀の山越

ひきつれて大路出づなり馬車また馬くるま牛車牛

などあり。

修辭法の方面に於ける彼の歌のいちじるき特色は、擬人法なり。彼の如く多くまた巧みに擬人法を用ゐし人は、わが國の歌人中前後に例あらず。而して擬人法は彼に於いては單に修辭のための修辭ならずして、その萬物に對してよせたる同情同感の結果なりとす。彼には非情の草木もまた眞に有情のものと見えたりしなり。彼の歌の輕妙なる興趣も、またその切實なる感情も、この修辭法と離つべからざる關係あり。

彼の歌といへども、もとより缺點とし短所とすべき所なきにあらず。たとへば、多作歌人のならひとして類想の多きこと、句法の自由不羈なるあまり、語格上よりいはば無理なる嫌あるもの少なからぬこと、氣品の清高、語調の雄健といふ如き點のなきこと等、なほ數へつべし。志かも、かくの如きはいづれもその長所の半面たり。彼に徒らに之を責むるは、寧ろ長所を矯めしむることに外ならじ。もし又、彼に戀歌の殆どなかりし事は前に記しし所なるが、こはわが國の歌人中特記すべき點にして、古來の歌の最も主なる領域をなししこの方面を離れて、志かもかくの如き一大歌集を有せしこと、この一事を以てするも、彼の歌人としての伎倆の非凡なりしことは之を認めざるべからず。

以上彼の歌が、その情調に、その思想に、その修辭に、古來の因襲を脱して、一新境を開拓せる事實は、疑なしといふべし。之を上記の彼が歌論と對照し來りて、所謂「天保の民」の歌てふ標語の眞意は、一層よく了解するを得べし。

## 四

之をその歌論に考へ、更に之をその作風に徴し來りたる結果として、わが大隈言道の歌が和歌史上に於いて特筆すべき獨創的の所産なることは、今や明瞭なりといふべし。彼の作風は、決して萬葉古今及び新古今等の既成的歌風の模倣にあらず。彼には、最も著き個人的特色あり。即ち從來の和歌の通有性たる古典的性質の囚はれより和歌を脱せしめて、和歌に輕快なる別趣の境地を開拓せしことこれなり。ここに彼の歌の個人的特色は最も多く現はれたり。

而して、所謂輕快てふ彼の歌境に於いて、特に偉とすべきは、この種の作風の往々にして墮せむとする狂歌的

境地と全然その性質を異にせる點なり。狂歌もとよりまた一種の趣味ありといへども、畢竟その遊戲的要素に富める點に於いて、その概ね野卑なる點に於いて、或は又その往々にして諷刺その他の實際的要求に勝てる點に於いて、未だ純正なる詩歌を以て許しがたし。言道の作風には、決してこの種の弊なし。彼の歌風の斬新も奇抜も、或はまた輕妙も、あくまでも詩歌としての特色なり。これ彼の一個の詩人たる所以なり。彼の歌の境地たる、凡庸の才を以てすれば、狂歌に墮すべきもの少なからざるにも拘はらず、よくその詩歌たるの趣致と品位とを失ばざりしは、蓋し彼の歌人としての天分を見るべきものたり。もしそれ、或は深遠といひ、或は優麗といひ、或は沈痛といひ、或は雄健といひ、或は高古といふが如き境地は、固より彼自らのことにあらず。

而して、その輕快なる歌風の一面として彼に存する客觀詩人たる特色に至つては、更に大いに注意せざるべからず。古來殆ど専ら抒情詩として發達し來れる和歌に、最も缺けたるは客觀詩的方面なり。ここに於いてか、むしろ朦朧的の美を主とせる、所謂情景一致の妙味こそこれを求め得られつれ、觀察の精緻、寫生の微妙、新趣の躍動といへるが如き特色は、古來殆どこれを和歌に缺けり。この點に於いてわが言道の作風の如きは、和歌史上に全く一生面をひらけるものといふべく、かの繪畫史上、狩野派に對する圓山派にも比ぶべきか。

かくの如く考へ來らむか、獨創性の發揮てふ點に於いて、古今の歌人中、わが言道の如きは蓋し稀なりといふべし。獨創性やがて個人性は詩歌の生命なり。言道の歌人としての位地や大いなりといふべし。

去かも一方より考ふれば、言道といへどもまた時勢と郷土との生みし一歌人なり。彼の獨創性はもとより生得なりといへども、また外圍の事情の多少之に影響し感化するところ或は無からずとせじ。種磨を経て宣長に遡る

鈴屋の歌風の彼に影響するところなかりしことはいふまでもなし。彼はその歌論に於いて宣長を攻撃し却つて景樹に同情せり。彼の直接の師相近といへども、覺醒後の彼に對しては殆ど何等直接の影響の認むべきなし。淡窓に學びしてふ漢學上の閱歷に於いても、殆ど同じ。ただ縣門江戸派京都派の諸歌風が、漸うその末流に趣きて生趣を失はむとし來りし時勢は、蓋し從來の歌にあきたらずして、自ら彼の如き歌人を生ずるに至りしならむとは想像にかたからず。思ふに、曙覽を生み、殊に言道を生みし幕末歌壇の大勢は、けだし政治的大勢と同じく、歌壇に於ける舊勢力瓦解の時機なりしならずばあらず。次に彼の吾人がいはゆる輕快の風に至つては、思ふに商業繁華して、人心寛濶なる福岡地方の氣風に負ふところ尠しとせじ。余は言道の遺蹟をさぐるべく福岡を訪ひ、恰も「どんたく」の祭日に際して、市民歡喜快樂の狀を目撃して、殊にこの感を切にしたり。ここに於いてか、わが和歌史の大才言道は、實に又福岡市が天下に誇るべき一偉人と稱するを得べし。

「人は知らずとも、己れを磨きさへすればよし」と稱して、その獨特の歌才も生前殆ど世に知らるるところなく、死後また永く埋没し來りし彼が、先に吾人これを世に紹介してより十數年、漸う世に光を放ち來れるさへあるに、こたび「大隈言道」一卷出版の事ありて、その面目今やほほ世に遺憾なく傳へらるるを得たることは、吾人紹介者として、歌壇のために喜びこれに過ぎず。而してひとりその歌風のみならず、終世、歌人たる自覺を有して、操持極めて高かりし彼が人格の光輝は、又大いに現時の歌壇、ひいては一般社會を覺醒せしむるものあるべしと信ず。よつてここに舊稿を改めてこの一編をものし、歌人言道推獎の意を明らかにす。然れども倉卒の間の筆にかかり、到底彼の全豹を盡くすを得ず。吾人は、本文の讀者が、直ちに歌集及び歌論に就いて親しく言道自らに聽か



# 大隈言道集

佐佐木信綱選

年の初めに  
霞

吾門のいささ小川も流れきぬ春は樂しきものにぞありける  
庭きよくはらひてけりと見るばかり晴れたる空の朝霞かな  
なにとなくなつかしげなる霞かな隠せるかたや昔なるらむ  
はるがすみ流るるなべに遠方のあらら松原もとばかりして  
花折りて夕川わたるをとめらをけしきにこめてたつ霞かな  
たちかはる霞を見れば朝な朝な昨日に同じ野はなかりけり  
春の野に橋うちわたるわが身をば霞に添へて人や見るらむ  
限なくとほくは行かて近きよりたびたび歸る春のさむさか  
ある物を使ひはてたる初春にあまり多きはさむさなりけり

野 霞  
橋 霞  
餘 寒

春

春 雪

花もまたかく咲かむとの程見せにつもるか枝の初春のゆき  
 ゆくりなく雨となりきて春の雪おのれをけすは己なりけり  
 鶯 鳴く度に聲もかはりて鶯のそのまだしきがいとあはれなり  
 われなくば庵のうちにも入りくべきふせ屋の窓の鶯のこゑ  
 長き日をひまなく鳴きて鶯のいこひがてらの枝づたひかな  
 さびしさにすべなくをれば木間より物いひかくる鶯のこゑ  
 木間よりいかに聞くらむわらはべのすさびにまぬる鶯の聲  
 餘りにも今日のみ鳴きて鶯のおぼつかなみの明日の聲かな  
 鶯の鳴く一聲にわすれけりいづこにか行くわが身なりけむ  
 ながき日のながながしきにたへやらで夕暮がほにやむる鶯  
 うめが枝に人く人くと鳴きながら見ぬかほつくるにはの鶯  
 花の枝たれか折るらしわがそのにおどろきさわぐ鶯のこゑ  
 鶯のあわただしげに聲すなりおどろくまでは花も散らじを  
 なくばかり雨に志をれてある花をなぐさめがほの鶯のこゑ

雨中鶯

寢覺鶯

朝鶯

夕鶯

行路鶯

隣鶯

山家鶯

梅

かきたれて降る春雨に鳴きもせず身じろきもせぬえだの鶯  
 うたたねの夢さめがたに夢ならでまこと聞きつる鶯のこゑ  
 朝まだきこころ鳴くなり夕ぐれにこゑのこしても寝ぬる鶯  
 はてもなく聞かまほしきに鶯のつかれてやむる夕暮のこゑ  
 雲間より夕日のかげのさすままにもよほされても鶯の鳴く  
 永き日も夕ぐれがたになりはてて今日のかぎりの鶯のこゑ  
 ゆく人をとほく過して花の間に又なきいづるうぐひすの聲  
 さばかりの我身じろぎにかげうせてとなりの聲になれる鶯  
 何となく人や頼むうぐひすも家かたつきてすめる山ざと  
 梅の花思ふばかりの枝の樹をこころに植て見る寝ざめかな  
 生ひのぼる方に心やよせつらむうめの立枝の花のすくなき  
 うめのはなさける宿さへとざしけり小笹の郷のはるの朝北  
 えもいはず心にほしき梅のえだ思ひあてても人の折れかし  
 餘りにもやせからめける梅の枝心いられにとくや散るらむ

梅村睡起 人の如手を出すとはなけれども身を引たつる梅が香ぞする  
 折 梅 打垂るる垣根の梅を引よぢてはなつも折るも惜しき枝かな  
 夕 梅 夕暮は枝も見えねど軒の梅のまばらにさけるはなの眞白さ  
 梅 香 よひよひに枕はなれずかをりきて我に戀する園のうめが香  
 水邊 梅 庵の戸を少しひらくを園生より知り顔にくる夜半の梅が香  
 行路 梅 川水もそなたによりて流れゆく梅の木蔭のなつかしきかな  
 荒村 梅 梅咲ける蔭へとゆきて立歸りまたゆく川のおもしろきかな  
 畠 梅 梅かをる風にまよひてそなたへと俄にをるさとの中みち  
 山家 梅 里人はさかりもめでずさく梅も荒たるまがき草むらのうち  
 柳 梅 たわびたるみちおもしろし畠中の一樹の梅を見に通ふころ  
 あはれみて折る人もなし山里のやせさらばへる柴垣のうめ  
 折とりてさしし姿もうせなくにうちたれがほになる柳かな  
 なよやかに去だりなしたる青やぎの心なきをば心とぞ見る  
 あさましく庵の軒端はあれたれど靡きよりてもそふ柳かな

待月見柳  
 柳村夕鐘  
 門 柳  
 柳 上 鳥  
 若 菜  
 芹  
 二 月

春

雪折のくやしかりつる一枝よりちぢに生ひいづる青柳の糸  
 さし柳さしていくかもへぬものを根ざしひきみる友童かな  
 折々にうごきやみぬる青柳はながき春日にねぶるなりけり  
 おもしろくなびけと思へば僅かにも動きてやむる青柳の糸  
 もえいでていと若げなる柳原あさみどりにて久にあれかし  
 ふく風のゆたけき今日は青柳のなびく姿になるころかな  
 風吹けば人のたもとも青柳も同じすがたに行くけしきかな  
 家暗きかげに立ちたる柳のみいまだ待ち得ぬありあけの月  
 夕暮の鐘のこゑにもゆりげなく柳のいとの去づかなるかな  
 うちたるる柳のいとの片よりに月もそひ行く夕ぐれのかど  
 梢よりなにの鳥かもたちつらむうごきのこれる青柳のいと  
 行通ふ人をのみ見て少女どもいつ摘みたむる若菜なるらむ  
 引けばあらふ水ながれきてなつみ川清き根芹のあり所かな  
 になはれてゆく梅さへも盛なる京みやこのはるのきさらぎのそら

池邊春艸  
海邊春草  
土筆

みぎはまで生ひくだりきて池水のますとき知らぬ岸の春艸  
もえ出でし磯の若草風ふけばまたもいさごの下になりぬる  
人しれずかしらいでてやありつらむ庭の土筆のけさの村立  
春さむみ道の長手の長きにも立てるつくしの二つ三つのみ  
行く人をゐなか童の見るばかり立並びたるつくつくしかな  
春の野の近づく火をも知らずして並び立てもをるつくしかな  
ふまるるも今かとおもふ春駒の蹄がもとのつくつくしかな  
歸り來てねたる童のたもとより頭いだせるつくつくしかな  
山里はつみとる人もひとりなし畠のつくしの春のたちがれ  
僅にもかづける土を出でかねて手をふれまくのほしきさ蕨  
わらはども芽をつむ苔の下蕨たをるばかりになるも待ずて  
もえ出でてひらくまさごの下蕨おのれも春の花ごころかも  
淺茅生につまとたぐひてゐる雉の景色とりてもたてるさ蕨  
ここにもと人にいふ間にさ蕨のありか失なふ春の野邊かな

蕨

博多の市人野遊したる

程もなく野邊のさ蕨老にけりあはれ吾世もかくぞあらまし

雲雀

春の野の茅原を廣みうたへども舞へども花にあく時ぞなき  
己が子の巢立さそひて野の雲雀手も及ぶべき空にてぞ鳴く  
百とりに聲うちませず鳴くひばり心ひとつに思ひあがりて  
人にのみ子を思はせて夕雲雀うはの空にはいかで鳴くらむ  
暮れぬべきみ空になりていや繁にいま又あがる夕雲雀かな  
なく雲雀みなおちはてて大空のかすみさびしき野邊の夕暮  
春たてばいそぎ羽たたき歸る雁をしむ心をえも知らずして  
きぬるかと思れば程なく童べの歸りいそぎのはるの雁がね  
かへる雁かへりて春もさびしきに童の拾ふ小田のこぼれ羽  
たたなはる山もかひなし行く雁の事ぞともなく越ていぬれば  
百千鳥さへづる春のこゑのうちにわりなく雁の別をぞする  
かへる雁また引かへせたちばなのをどの岬の志まあひの風

歸雁

燕

たびにしていのち果てじと歸る雁かへる心は我にてぞ知る  
風吹けば皆ひとかたにむかひつつなみ居し燕いつ歸りけむ  
つばくらめ親待ちかねて並べれば我も遅しと見る軒端かな  
仰ぎ見る殿の御門のたかきやにかげかすかにもとぶ燕かな  
童べのみるおもてさへそのごとく並びあひたるひな遊かな  
み山べの花も咲きぬと告げくなりさもあるらむか今日の日影に  
まとゐする人のなかにも打垂れて咲きまじりたる糸櫻かな  
ありき見るわが目の前に枝たれて折らればやとの花の枝哉  
まだしとは聞きしものから山櫻思ひやりては宿にあられず  
わが宿におひぬと思へさくらばなもとの山邊も今は忘れて  
世中のはしたものなる我身こそ花にま近きすのこにはをれ  
花の枝を攀なむとする人見れば吾もをらるる心地こそすれ  
都邊は家のみ多しわがさとは花こそいたく咲きさかえけれ  
山櫻さける色香にさそはれてたかきこころになる春べかな

花  
ひいな遊び

少女等も花折りもてばおのづから騒がしからずなる姿かな  
世の寶ありはあれども花のごとおほくて尊たかき物なかりけり  
いかばかりありても尊たかし櫻花數すくなきをめづる世ながら  
ちる歎のちにしあれば今の間を樂しましめて花やあるらむ  
何となく吾がたちよれど櫻花去れる顔なり吾がたをるとは  
老の身は訪ひ訪はるべき方もなし歩み歩みて花のもとまで  
さく花も世のまじらひはあり顔に情なき木に枝かはすなり  
櫻花さきなみだりそ今の世はやつるるにこそ人もあなづれ  
いまさらに老の袂をふれましや花を折りしは若きほどなり  
まれびとの訪へばよろこぶあがた人あく色なしの花盛かな  
花みるは世の事業のまほなるをたはぶれ事にいひ去らふ也  
おくれじと人より先にわれゆきて中々花にあはぬ今日かな  
さき出づる庭の櫻の獨ゑみさはなにごとかをかしかるらむ  
花もなき宿とややがて成ぬべきこふ人毎に折らせ折らせて



世の中にわがねがふことただ二つ命ながさと花となりけり  
とふ人に花をぞいたく折らせつる主は果敢な手だに觸なで  
厭はれて世にもあへなく成しより花見る事を身の業にしつ  
花見れば花の心の豊けさのうれたき身にもうつるなるかな  
さく花も老ぬる儘に人なれてなよびやはらぎ垂るる枝かな  
己が世のめであやまちぞ櫻花このあだものを友としつるは  
みる人を數多つどへて咲く花の喜ばしさはゑまひにぞ知る  
盃をさしたる人もなきものをそらゑひしたる花のいろかな  
世をよそに花にのみこそ向はるれ後言たるる心地あしさに  
人ならでもたる吾子を誰か知るおほし立てたる櫻なりけり  
何事も打捨てやすくあぢきなきわが物ごりにこりぬ花めで  
さく花のかげ見る水にうつろひて知れる翁の淺ましきかな  
さく花にあくがれ出でていつしかと家竈をもすつるばかりぞ  
櫻ばなまだ咲くべくはとほけれど心きざせる山のいろかな

みる人のめでも譏りも聞ながら否びかへさでゑめる花かな  
宿にしてめでし心の見ゆづりに何處の花もおのがとぞ見る  
世渡りのいとなさ知らぬ櫻花おのれひとりぞゑみ榮えける  
春くれば酔人どちのうつつなさいかに見あきし櫻なるらむ  
あはれさの程は知らずて大方は花なき宿もなき世なりけり  
事もなきさし向ひなる花なれど誰にもまさる友どちぞかし  
兎に角に安げなき世のむつかしき知らぬは咲ける櫻也けり  
いづこにて折りしか酔ひて覺えぬど枕頭なる花のひとえだ  
花見れば穩し長閑けし花見つつなど世の人の習はざるらむ  
人にて花とわれとなる時は誰と誰とに似てかあるらむ  
神ならで千たび詣もせられけりさくらもおなじ尊さぞかし  
限なくたをりてやりて櫻花くやしくなりぬたわらはのごと  
夢にてはちりし軒端の櫻花さむるまにまたまた咲きにけり  
何事も思ひはなつに放たれぬほだしは庭のさくらなりけり

待  
花

たはやすく花の枝折らぬ戒のほかには國のきびしさもなし  
花にのみ春はうかれて世の中のよろづのそしり皆忘れけり  
ひと枝とて人に許さば櫻花かぎりもなしに折りやとらまし  
櫻花咲きいづるままに何事もこころにかなふ心地こそすれ  
うき儘の世の腹立も咲きけちて己がゑまひになせる花かな  
歸り來て寢ての後さへ花見つゆられて舟にある心地かな  
われぼめは聞ぐるしかるものなれど宿の櫻にます花ぞなき  
まつ花の待つ人ならばいくばくの遠き國より來るなるらむ  
八重山のあなたのあなた遠きよりくる人ばかり待つ櫻かな  
こきまぜて人さへ待てば待苦し何も打捨てて花のみにせむ  
花まつも心たのしくありしかど今はあまりの久しさぞかし  
今ぞ知る苦しきものは人ならでわれにまたする櫻なりけり  
この春は何故おそき花ならむいつもまたせぬためし忘れて  
遅かれときこえ合せしもの顔にいづこも花の咲かぬ春かな

花  
遅

徒らにのどけき日數すごしきてさかぬ櫻はえせものぞかし  
櫻花心みじかきやどに生ひてすべなき宿世あきらめよかし  
庭ざくらまださかずやと人々のとひの答もつらきころかな  
さきて見よ時まだしくはなき物をなづみがほなる花櫻かな  
餘りにも待たるる故に甘えてもさかであるかと梢をぞ見る  
いつまでかふふみたるらむ櫻花またれてさくをよき事にして  
春ごとの友にはなさじ櫻花わがいふことを去かもきかずば  
まち詫びて咲かじと人の見る時や咲かむと思ふ櫻なるらむ  
誰が待たばとくは咲くらむ櫻花人選びする物にやあるらむ  
またぬ人思ひもかけずくるばかり今も咲出づる櫻ともがな  
おくれぬることをなげかぬ櫻花おのれにおなじ心なりけり  
年ごとにおくるる花を遅櫻おもひ知りてもさやはさかれぬ  
初花の開くる見れば今までに待たせしも又待ちぬるもよし  
さ夜中の夢に見えにし時しもや園生の花もさき出でぬらむ

初  
花

春

燈前初花

花始開

尋花

馴花  
思花

思夜花  
栽花

枝にえだまげり覆へるおくまでもさせる朝日に見ゆる初花  
 まつ人のあるをも知らで櫻花こころ靜かに今日ぞさきぬる  
 まちまちていらだたしくも成ぬるをさきてゑまする初櫻かな  
 灯火をともしせばくらきやみもなし櫻も己がはつはなをみよ  
 いづくよりさきくははれる花ならむ在し苔の數ならなくに  
 尋ね見る朝なあさなにさくら花此木もきのふ花はなかりき  
 咲く花を尋ねてゆけばいつよりか去年こし道に道は成きぬ  
 夕まぐれ尋ねつくせる道づめに一木はさきてある花もがな  
 なれなれて心安きに過たれどなかあしけくもなる花ぞなき  
 思ひねの心の程のとどけらばこなたのゆめも花や見るらむ  
 手折つる跡みぐるしき花の枝なりあふまではいかに久しき  
 折とりしあとの枝口くちいりて心よわけにさくさくらかな  
 唯一重まどのへだてのふし所ここにぬるとは花や知るらむ  
 老て花を植うるは人の笑へどもわれ花みずば誰か見るべき

折花

その枝といひいでかねて櫻花たをるあるじに任せてぞ見る  
 をりて後悔しき心知りながら折らでは折らまほしき花かな  
 おのづからたをる手振も匂ひあへる少女に花は折らすべき哉  
 明日よりは折らじといひし花なれどあくれば心又變りけり  
 我爲にたをるは一枝吹く風の花もてゆくは如何ばかりぞも  
 いま一枝折りても二枝櫻花さてはなかなか足るべくもなし  
 一聲にえもやめられぬ百千鳥花を折るにもさこそありけれ  
 さらばとて一枝たをれば櫻花また今ひとりわれもてふなり  
 枝遠み折りもとられず櫻花はつはつに手のさはるのみして  
 只一枝かげの枝をと人はいへど折る方なげに見ゆる花かな  
 枝折ればあと見苦しくなる花を否と言はれぬ人の世ぞかし  
 折りとりし後の悔をも知りながら片枝寂しく花をなしけり  
 なつかしと折るを否びて花の枝汝が方ざまに引く氣色かな  
 折りとれば枝の花こそ少けれ咲き重なりて見えしまがひに

見花

折りためて一つにもたる花の枝引分つ手にちるぞわびしき  
 庭に植ゑてわが物なるを櫻花もらふばかりに折る一枝かな  
 たむかひもせぬかほにして中々に折る袖はぬる花の枝かな  
 折りとるは嬉しからじを櫻ばな世の中ざまにゑめる顔なる  
 その身こそ鳥とわれとは二つなれ心は花のえだぐりして  
 近く見て遠く見てまた櫻花いかさまにてもあはれなるかな  
 花さけば願みもせず向へどもかたつかたには憂世ありけり  
 けふ一日さけるさくらを見ありきて人々しげになる心かな  
 庭の花いか様にせば味氣なくそなたむけるを此方にはせむ  
 答せぬことは知れれど櫻花ひとりむかへばものいはれけり  
 貴人はこのもとちかくみるものを花にも遠くある我身かな  
 垣越しにおのが軒端の花みればその樹にあらぬ姿にぞさく  
 今日一日世を脱れ来て花山に身を盗みこしこちこそすれ  
 今日といはば今日は花をも見にゆかむ作らでひまのある世ならめや

獨見花

貴賤見花

隣見花

市人見花

花見

花見にゆきける時によめる歌

重からぬ吾身の程の嬉しきはいざと花見に行く日なりけり  
 花しあればかくても命長らへぬなくばなくこそ早く成なめ  
 けふこそは見と見てましと思ひてし花も朧に又ゑひにけり  
 花見つつねぬる山べの木間より起きよともいはず出でし月哉  
 雨降れば川と流るる山路さへ花ゆゑわけて見にこしものを  
 さくはなのもとに心の残るかな何をわすれて歸るならねど  
 花を見て歸る山路は疲るれどこれも樂しきかずならずやは  
 まどろめばよりそふねやの柱さへ一木の花のもと心地する  
 櫻花盛になればただびともよしめきあへる世のけしきかな  
 うらうらとかすめる空にわたる日の影さへゑめる花盛かな  
 いままばし早くおそくは降りもせで花の盛にそそぐ雨かな  
 夕ぐれの雨の降りざま變り來て嵐にくるるやまざくらかな  
 雨ふると人はいにたるこのもとに花の雫の落ちみちらずみ

花時風雨

雨後花

風前花

花時夜風

曉花

朝花

夕花

雨にあひて又風にあふ櫻花さては散らではならぬなりけり  
 ぬれぬれし雨はれぬれば櫻花すがたつくろふ花ざまぞする  
 雨ふればひと夜に花の色あせてけふの盛はきのふ過ぎけり  
 夕まぐれのきばをわたる山風のいまひとたびに花は残り  
 花のごと色にみえては去をれねど心にあたる春のやまかせ  
 なさけなき嵐の風にもいはぬ花の枝さへさけぶ夜半かな  
 百鳥もいまだおき出でぬ曉の去ばしの花の去づかなるかな  
 春の夜の明方くらき野邊に來てよく見えもせぬ櫻めでかな  
 さく花も人ずくななるあさかげは心のままに匂ふいろかな  
 夜もすがら見ざりし儘に櫻花けさなつかしき笑ひをぞする  
 櫻さく山の裙野の朝ぼらけまこと晝に似て晝にまさりけり  
 かしましき人いにしより花だにも静まり顔に見ゆる夕ぐれ  
 櫻花おのがすすめにあらねどもひとり酒のむ夕ぐれには  
 空すこしをぐらくなりて夕櫻またさる方にあはれなるかな

夜花

夢中花

月前花

山花

花山歸路

燈火をともして見ればぬば玉の暗き夜半にも花はゑみける  
 燈火をわがかがぐれば暗き夜にうれしがほなる花の色かな  
 さめぬれど夢に見えつる花の枝とらへながらにある心地哉  
 夢さめてまことうつつになる迄も枕に花の散るかと思ひし  
 夕闇の去ばしの程に咲きつらむなかりし花の月かげに見ゆ  
 出ではてて月も並びぬ櫻花くらべ見よともいはぬばかりに  
 わがむかし太田の山のさくら花誰とか見てしちご生のころ  
 雲とのみ見ゆる山邊のはる花のただ一木こそ庭にほしけれ  
 面白くさけるばかりはえもいはで語れば常の山ざくらかな  
 大たをの山の櫻は咲にけりもろこしびとのめのまへにして  
 まよひては昨日の花のありかにもいたりかねたる山の細道  
 とどまらでわれさへいなば櫻花ちる方うどに成ぬべきかな  
 山ざくら見し故ならし世のうさも知らぬ人にて歸る夕ぐれ  
 いまはとて春の山邊をいでくればもたる一枝になる櫻かな

夢山花 あかずして歸りし故か思ひねのゆめぢにつづく花の山みち  
 谷花 谷陰のおもだたしくもなき花に世の常ならぬ大木ありけり  
 野花 事繁きこの世ながらも花見にとゆく人はゆく春の野邊かな  
 水上花 野邊に来てまじりてあれば何とかや己れも遊ぶ花の色かな  
 島花 眞清水の底にてゑめる花の影わがえ折らぬを笑ふなりけり  
 名所花 志かの島かつまの海士の海士つどひ人まぜもせで花を見る哉  
 故郷花 人言にまさるながたの櫻花めでひろめてもいふかと思へば  
 社花 故郷の人にゆづりし家ざくら猶わがものこのころはなれず  
 櫻の宮花 御まへなる鏡のうちもはな見えて神の心に咲くさくらかな  
 山家花 網島のさくらの宮の花ざかり見る人さへもはなにおとらず  
 門花 ひとの折る春しなれば山郷の花はおそれず枝たれにけり  
 山人は花の惜しげもなかりけり一枝乞ふにも幾枝手折りし  
 己れから植ゑしにはあらで山郷は花あればある家作りかな  
 ふせ庵の門の見入のほどなきにいく木うゑたる櫻なるらむ

軒花 うつたへに折る心なき軒端にもあたへがほなる花の枝かな  
 庭花 我からの見なしのみにあらじかし軒端の櫻よそに優るは  
 誰が里にあるか知らねど二つなきあがほとけなる庭櫻かな  
 さき出でし花ざまかたち似る木なみ宿の櫻の外をしも見ず  
 わがやどの花をよめる

吾が物と花のかずかず植ゑたれど果はたが見る櫻なるらむ  
 家櫻よその梢にくらべ見ておくるほどを知るつらさかな  
 樹間花 松杉のかくせるまにもはるくればもりいでてさく山櫻かな  
 松間花 いかめしき山松が枝に交りてもさける櫻のやはらげにして  
 獨居花 こととはぬことはわすれて朝夕のかたらひ人と思ふ花かな  
 朝な夕な我が獨りごちきくものは軒端の花の一木なりけり  
 見もあかぬ盛の花のもとごころおほよそ人の知れる事かは  
 あまりしく賑ははしくて櫻花さびしく見まくほしき陰かな  
 いそぎこし花のもとにて悔しきはきこえおどしの里の友人

世の中をおしたちてのみあらむよりかげめ安かる花の木隠  
 老ぬればとしにゆるしてもとちかく人おさせたる花の下蔭  
 かた山の花の下かげ家をなみあらばと人になげかしめつつ  
 飲む酒にゑひての契りたがへずも又見にくるは櫻なりけり  
 はるくれば行きかふ人の道まげて花の下蔭ふみひらきつつ  
 花さけば蔭ゆく水もゑみ顔に何ごとかいひて流るなるかな  
 水の上におのが友どちうき出てちる花めづる池のうろくづ  
 花の木を友の數にしかぞふれど今日のまとゐは只三人のみ  
 にくげにも己が足して庭つ鳥ちれるさくらをかき亂らむ  
 面白く花散り敷けば塵だにもそのたぐひにて交りぬるかな  
 父母の喜ぶ見れば見る花のさけるゑまひもひとつなりけり  
 まとゑせし人にかはりて櫻さく木の間にきたる春の夜の月  
 歸れとの里の使のたびたびをわが見る花はいかが聞くらむ  
 この春も同じ櫻のもとゐしてさらなることを又いはれけり

花下道  
 花下水  
 花下池魚  
 花下友  
 花下鳥  
 花下塵  
 花下小集  
 花下月  
 花下忘歸  
 花下咏歎

花前詠歌 誰人かめづる心のことならむおなじことのみ花にいひつつ  
 花のまとの 居並びて見る花なれどおもしろき枝の蔭には吾身ありけり  
 やどにてまとのゐしける時によめる

花のもとにてよめる 見る人のかはれる今日は櫻花おなじこかげも珍らしきかな  
 身を憂しとなどか歎かむなびたてる花さへ咲けるさかぬありけり

諸共におなじ宿にはおひたれど花は榮えてまづしげもなし  
 折りとらば折りもとれとや櫻花枝うちたれてさき匂ふらむ  
 さかりなる一木の花の中つ枝の思ふところにさき匂ふらむ  
 咲く花に遊ぶを見れば鳥だにもはむ事のみは思はざりけり  
 花さけば我かしこげになく鳥の心ごころを知るよしもがな  
 ともすれば花にむれくるむら鳥枝おもげなる己が身にして  
 吾のみのわざかと思へば花の間に獨ごちする鳥もありけり  
 花ちるとおへどおへども近く居てあなづらはしくなく雀哉

花間月  
 花間鳥

旅中花 鶯のつばさほそめて行き通ふ花のうちこそ行かまほしけれ

花時客來 待つ人も待つままに来る花盛さらぬ時にもさありてしがな

花 懐 折れながら花さく枝も見えぬれば心くたさぬ我身ともがな

寄花述懐 今朝のゑみ夕べかはりて櫻花悲しき世にもあへる身ぞかし

吉野にて花を見てよめる

父母のめぐみうれしき我身かなあればぞ見つるみ吉野の花

願ふ事今はなき身となりにけり花さかりなる吉野よく見て

長谷に詣でけるに國なるもと子のもとにやりなむとて櫻の花をつみとりて

摘とりて見ればかはらぬ物ながらはせ山櫻見ればことなる

岡部春平がもとにて

わがたけに及ばざりつるさくら花今年は軒の上に見るかな

いたくわづらひける頃ある人のもとより櫻の枝をおこせけるに

手にとれば死ぬる命もいきぬべきこの一枝の山ざくらかな

うつろひがたの花を

空くらく雨ふりぬべきけしきして限ちかくも見ゆる花かな

めの前にまだちるとしもなければども移ろはしげに花は見えきぬ

ちりのこるこずゑの花も夕まぐれ今一風のこぬ間なりけり

落 花

あはれにも散るまでゑめる櫻花さこそは誰もあらまほしけれ

うきめのみみてこそすぐれひと盛ありなば櫻ちるは何ぞは

櫻花心のままに散りはてておのれもけさはさびしがほなる

我よりもこころみじかき花櫻ながき春日につかれてぞちる

このもとのおどろが中に散りうする櫻の花の惜しくもある哉

去年ちりし頃をおぼえて櫻花またも散るなり物わすれせず

物毎に久しげもなき世なれどもたぐひに過ぎてちる櫻かな

何ゆゑに風の神にはあたまれてちらさでおかぬ櫻なるらむ

これのみや心づからの業ならむ木の間潜りて花ぞこぼるる

折取りし枝の花さへ風吹けば一つにちりて行くがかひなさ



櫻花ちりのまがひにあくがれて我か人も知らぬころかな  
あまりにもふふめる程の久しくてさけばかつ散る山櫻かな  
惜しむかひなき腹だちに櫻花ちらばちれとも任せつるかな  
立ならぶ一木ちるとして櫻花なべてまぬべきものならなくに  
おのれこそさてよからめど散り残るあとを思はぬ花櫻かな  
一志きりさそひみだりし風たえて今こそ櫻おのがちるなれ  
人の老の身にはたがひてゑみつつもわかき盛に散る櫻かな  
いからしき山かぜたてば櫻花音ばかりにもおそれてぞ散る  
惜しとのみ偏にいへば中々にあまえて花の散りに散るらむ  
誰が宿もうらやみなしの春のはて一花残るこずゑなくして  
さばかりの風は障もなき花の散るくせつきて散るかとぞ見る  
歸るさはあざれありきぞ櫻花ちりのまがひに我もならひて  
ちる花の事ぞともなきうら安さ死に安からぬ人にかはれる  
見る人の惜むばかりはをしからで散るを樂しむ花様ぞかし

岸の花みなそこの花向きあひて今日ちりうかむ盛なりけり  
たまさかにこぼると見えし櫻花いや次々に散りてきにけり  
庭の面に散り去く花をまるばして風のすさびの面白きかな  
にはの面の苔路にちれる櫻花ことさらきよく暮るる夕かけ  
垣ごしに散りゆく花をとなりにも袖に受けたるまな娘かな  
ちる心移りきぬらしかたへよりちらぬ木もなくなる櫻かな  
二つ三つ又は三つ四つちる花の惜しげに見えて數ぞ少なき  
行く春を遠くもおはで木のもとにちれる櫻の疲れをぞ見る  
櫻花肩にそでにもちりくれどなつかしげなるひざの上かな  
風吹けばともあらしひに散りにけり花の並木の行あひの枝  
風ふけばまじろくまにも吾前にこし方わかぬ花のちるらむ  
さまざまにおもしろくちる櫻花おのが今はの時も知らずて  
櫻花うかれくして散るころは風もたのしく吹くけしきかな  
ただちりに散りて櫻の何事も知らぬ顔なるうらやすさかな

杯中花

となり人こころもなきに心なくちりゆくものは櫻なりけり  
隣へと吹きこし風のめぐり來てそよよこなたに散る櫻かな  
まづまづとゆづろふ程に杯のうちにもちれる花ざくらかな  
さそひゆく力つかれて散る花を流るるみづにゆづる山かぜ  
あまりしく人の惜しめばちる花にわるびがほなる春の山風  
ゆきあひの風のみだれにもむばかり空にただよふ花櫻かな  
風たえてこずゑを見れば櫻花われからちるは二つ三つのみ  
折々は雨のままにも去たがはで横さまにちる花も見えけり  
などか花いたくちるらむ鶯の羽風ばかりも吹かぬあさけに  
夕暮はおのがちるべき時顔にもろさまさりて花の見ゆらむ  
さばかりは誘ひもゆかで庭の面にもて去づめたる花の夕風  
櫻花ちりかひくもる夕まぐれ手の舞ひ足のふむところなし  
ながき夜の嵐もやがてやむものを暫しこらへず散る櫻かな  
などかわれ何の夢をも見ざりけむ軒端の花の散り果る夜を

夜落花

夜思落花  
谷落花  
水上落花

くるるまでのきばに見てし櫻花めをとぢぬれば心にぞ散る  
かげふかき谷よりおこる朝風にはなちりのぼるとみの大坂  
ゆく水のやはらかなるに誘はれて花もゆたけき流れ様かな  
ちればとく水に浮べてゆく花に死ねば身をやる野邊をこそ思へ  
こころなく水に任せてうかれ行く川瀬は花の夢路なりけり  
流れゆく水尾は水尾にてやりがほに櫻かたよる岸の岩かげ  
山の井のせまき水にも櫻花散りあらそひてうくけしきかな  
ちりうけば同じこころに水泡みたけさへ花にそひても行く流かな  
けさ見れば水は水のみ流れつつ岸のかざりは花ちりにけり  
ものごひの手にさへ門の櫻花あたふるばかりちる朝けかな  
閑居落花 一つ家の物さびしさに堪へかねてちりにげ顔にゆく櫻かな  
わか木の花の散るをよめる

岸落花  
門落花  
閑居落花

咲きそめし庭の若木の櫻花かざりありがほになどで散るらむ  
枝たわになどかさきでぬ櫻花さばかりにてはちる程もなし

遅櫻落花  
若 鮎

今さらにおそきを知りて遅櫻ちることのみを急ぎつるかな  
春さればみやこに上る人のごとのぼる川瀬の鮎のいくつら  
瀬をはしる春のわかゆの忙がしき心のうちに清さありけり  
ながれくる花にうかびてそばえてはまた瀬を上る春の若鮎  
浅緑もゆるを見れば志めはへてわれもまかまくほしき苗代  
何事をいふかもわかずをやま田のみな口ぐちになく蛙かな  
いの川の蛙の聲の諸聲のはてのせまりにたへずもあるかな  
清き川濁れる沼におのづから聲なきわけて住むかはづかな  
とほやまは残れる雪のまだ見えて菜の花さむき野邊の朝風  
ふく風に動く菜の花おともなく岡邊去づけき朝ぼらけかな  
いは垣のはざまの堇野を知らで世はさる物と思ひをるらし  
宇治の田上のあたり小石にて垣をせり。その高さ人たけあり。其内  
多く茶園なり。古今集の岩垣これなるべし。

蛙 苗 代

菜 花

堇

杜 若

かきつばたおのが心のすすしさも姿にみせて水に咲きけり

椿 瓶 蝶

いままでにありし梢を玉つばきあふぎみがほにちれる一花  
玉椿おのれ知らずに花落ちてせんすべもなき悔や志つらむ  
窓のとを出でまどひたる胡蝶かな開放ちたる方はゆかずて  
蝶のごと戯るべくはおもへども心おもきはわが身なりけり  
永き日にうかるる蝶の幾度か飛び別れてはめぐりあふらむ  
ともすればちりゆく花を送り来て蝶さへ蝶とあやまたれけり  
盛なる花のあたりに出でてきて散るか人と人に見する蝶かな  
童べの手を逃れこし蝶ならむはねやぶれても飛ぶが悲しさ  
花ちればおのれも共に飛ぶ蝶の聲立てつべき亂れざまかな  
草刈に刈込めらるな野邊の蝶己がねぶりのさめがての間に  
花の上の胡蝶の眠り移り来ていつまどろびし端居なるらむ  
とぶ蝶も二つになれば狂ふなり一人静かにあるべかりけり  
春の野は向ふ野風の寒ければわが身がくれに来る蝴蝶かな  
賤の女が背に着こめたる幼子のもろ手に持たる山吹のはな

山 行 路 蝶 吹

雨中山吹

山家山吹

藤

やまぶきの心地よげなる花見れば何事をかは憂しと思ひし  
 いつもかく春くれがたに吹く風のさむきにあへる山吹の花  
 雨降ればいやましにのみうちたれてかかぐべからぬ山吹の花  
 そなたには窓さへなくて山里の家のそとものやまぶきの花  
 春の日に心あひなるふぢの花さもながながし土につくまで  
 はひ出でて道にふまるる藤かづらもとのこむらに立歸れかし  
 近づけばまだ手に遠し藤の花さばかり長く打ちたるれども  
 いつしかも長くなりぬる春の日にいまだ短かき藤なみの花  
 みる花もなきかと思へば藤さきて尾上にゆける春の色かな  
 ともすれば峰まで登る春の野の火をのがれえぬ松ぞ悲しき  
 春立ちて待つこと三つになりにつけり櫻と友と雨の晴ると  
 春くれば梅もやなぎも垣こえて宿にえあらぬ枝ざまぞする  
 家人を春の野山にいだしやりて今日は志づけき獨ずみかな  
 いととほき春の山邊を近くおきて前におかまくほしき松原

晩春藤

野火

春の歌の中に

かすみたつ遠山畑の片高にさくは菜のはな穂に出づるは麥  
 やまびとも花は切らじとおもへども心もとなき斧の音かな  
 思ふどち今日のありきはおもしろし檜原榎原楮かたはらのさと  
 のどかなる景色のうちに珍らしく山やくけぶり見ゆる夕暮  
 庭の面の風にうづまくちりの身に花もなりたる春の暮がた  
 くれてゆく春にあはせて何事ぞいそがしげなる山川のみづ  
 ゆく春はゆくへもわかず姿なしいかなる神かとり隠すらむ  
 春ふかくなりぬるやどの百千鳥打羽ぶけどもちる花もなし  
 あくがれし心今さら歸りきてわが身すべなき春のはてかな  
 はるくれてまるねさびしき庵のうち人だにとひて驚せかし  
 春深みおほねかぶらも諸共に花のたぐひになれるころかな  
 さくらばな藤山吹とかぞふれば春にのこるは我身のみして

ある夕べ

春のくれ

庭なる木かげをはきける時によめる

櫻花ちるちるとのみいひし間に青葉になりぬまたも今年は



春風  
春雨

一日にも俄に寒く暖けくこちかとおもへばあなし吹くなり  
櫻花散りてののちのつれづれのいやつれづれに春雨ぞふる  
春雨のおのれ寂しきことなくて限もなしやくる日くる日に  
春雨にぬれてや人をとひゆかむ誰が寂しさも同じと思へば  
春雨の小雨さびしみひさごさへふるに音せぬ夕ぐれの色かな  
たまさかにはれまもあれど春雨の猶ふりたらぬ雲の色かな  
たわらはのもの乞ふこともことわりに寂しさ永き春雨の空  
草香江も袖の湊も見るばかりたらひの水にはるさめぞふる  
降出でてさびしかるべき春雨のけしきふくめる谷の杉むら  
春雨のさびしきころはひとつにも住ままくほしき近隣かな  
雲はれて空はよき日になりぬるを苔路にふくむ春雨のつゆ  
かすみつつふるとも見えぬ春雨の心かはりてあらし夕ぐれ  
音ききて雨にあはまくほしからむ枕がもとの瓶のをやなぎ  
長き日もさびしく暮れて友もなく酒もなき夜に春雨ぞふる

春雨晴  
夕春雨  
夜春雨

市春雨  
ながめの頃

さわがしき博多の市も春雨のふりまづめたる昨日今日かな  
折りさせる花のちれるもさびしきに庵のうち暗き春雨の頃  
誰とひて見ばやと思ふ人もなし又も今日こそ暮がてにせめ  
折々は馴れたるくせによりながらうとうとしかる春の埋火  
唯一つおふる木もなしま近くは撫でても見まくほしき芝山  
花見つつ山をめぐりていくたびも同じ所のおもしろきかな  
生ひ出るもの皆うれし春の野のこはつくつくしそこは早蕨  
春の野に放ちやりたる己が身ももとのうき世に歸る夕ぐれ  
ここよりは移るふ花の影もなく水のみゆくが寂しかりけり  
浅き瀬にまらびまらびて流れ来る枝もさくらの花ざかり哉  
ちりぬれば一花残す影もなくあまりに水のありのままなる  
さむけれどすみれの花もさき出づる長良堤の篠の志たかげ  
荒津瀉ひと日に汐かれてあらいそひろき春のこのごろ  
よる浪にぬれたる裾のかわくまで奈多の汐干の磯づたひ哉

春埋火  
春山遊  
春野  
醉歸  
春川  
春池  
春堤  
春磯

春 篁  
 山 居  
 春 社  
 春 寺  
 春 旅  
 春 泊  
 春 木  
 春 鳥  
 群 鳥  
 遅 馬

うぐひすのまれによこぎる影見えて春まださむき竹の中道  
 隣どち暇おほくていたどりの酔をさへ志ぼる春のやまざと  
 長き日をむかひあひたるこま犬のいつまでとなき神の廣前  
 はるの日の長長しきに佛達うちむかへれどことどひもなし  
 ちる花に目をも送らず佛たちならびおはする峯のふるてら  
 歸る雁かげかくれゆく濱松のあなたのをちやおのが古さと  
 こし方に冬の日数はつきはててここより春の船路なりけり  
 おのれさへ花ありがほに松杉もかげに櫻をちらしつるかな  
 百千鳥催しがほにうちむれてさかぬさくらになく朝けかな  
 花さけば人にかはらず宿ごとにいひふれてなく百千鳥かな  
 さまざまの鳥おもしろき夕花に又くははりぬひわの一むら  
 何處にかともすればゆく百千鳥歸りこぬまに花もこそ散れ  
 長閑なる花の木間にせはしくもむれたる鳥の枝ぐりかな  
 のれといへどのる人もなき歸り馬春日長くも引く手綱かな

春 戀  
 首 夏  
 水邊 首 夏  
 灌 佛  
 卯 花  
 牡 丹  
 新 樹  
 風後 新 樹  
 新 竹

はるごとになが片戀の櫻花散らぬこころはこなたのみして  
 さしてゆく人のひがさのかず見えて都大路に夏は來にけり  
 大船の綱手にかかるうき藻さへ今は若葉になりけるかな  
 よそよりも夏になりぬる程見えてあけ放ちたる川づらの宿  
 かくれます御影のみこそ歎きしかまた生れます今日の御佛  
 時鳥やどさまほしき卯の花にあらぬ巢かくるくもの絲かな  
 うの花の散りはじめたるこぼればな積らせて見る垣の下蔭  
 二十日草はつかなる間に衰へてこの世の富は時の間ぞかし  
 残る花ありやと來しも忘られて若葉見ありく夏のやまざと  
 さまざまの山の若葉の色色をおなじみどりと思ひけるかな  
 暮はてし春のなごりの心から花めかしくもみゆるかしの芽  
 けさも猶靡きしままにふし柴の若枝は風にこりや志つらむ  
 やや高く成も志ながら若竹の子なるすがたぞ末にのこれる  
 大方は若葉になりて竹の子のまごらひこらも生ふる頃かな

時鳥

野に山にわかばもゆれば空をさへなつになしても鳴く杜宇  
 時鳥たがはぬ聲と聞きながらまぎらはしきが多き世ぞかし  
 いづかたの空まで行きて子規をしみ残しのこゑは鳴くらむ  
 子規つれなしなどとうらむれどさる心こそひとにおほけれ  
 かれ知らでわれ待ちわたる時鳥うべあるしなき片戀ぞかし  
 ならび居て共に聞くにも子規人はおもしろく吾はまがなし  
 一こゑのおぼつかなきも杜宇さだかになして人のいふらむ  
 時鳥なくひと聲にさしなみのとなりの琴の音はたえにけり  
 宿近く來ゐるも知らで杜宇くもゐにのみもまたれつるかな  
 ほととぎす一聲なきし聲のあたり家もあるべき夏木立かな  
 さばかりの今宵の月に何事ぞよそ顔にして行くほととぎす  
 暗なれど行方さだかに時鳥とほざかりゆくこゑのひとすぢ  
 なくなかも過ぎゆくあとの時鳥さきなる妻や追てゆくらむ  
 よど舟におくれ先立つほととぎすともに都にのぼる鳥かも

月前時鳥

暗夜郭公

雨中時鳥

水邊杜宇

松間子規

人傳時鳥

加東利貞と大和に行きける時かめのせ峠にて子規を見てよめる

早苗

梅雨

六月

ほととぎす行方を知らにかくしたる大城の山の松のむら立  
 ほのかにもなくねは聞かで時鳥昨日も今日もうたて人づて  
 羽ぶき立つこずゑの鳥におどろけばわがなつかしき山子規  
 とりさして歸る早苗の小山田に夕ぐれ寒くさざなみぞ立つ  
 五月雨の降りいづる音の面白さ今年も我身きくかと思へば  
 枇杷の實の色づくみれば五月雨に獨飲ままくほしき頃かな  
 五月雨の日をふる儘に水まして小田の上行きたななし小舟  
 さみだれの晴れし今日より六月の空になしても照る日影哉  
 きえきえて光續かず飛ぶ螢そなたと見ればこなたにはして  
 ただ一枝草を興へて籠のうちをほたるとぶ野になす心かな  
 民の家の麥かりほせる里中にほたる見にとて人のきませる  
 かぜ吹けば川瀬の螢流れ來て伊豫簾にとまる夕やみのまど  
 河風にむかふ螢のゆきかねてただよふのきの松の志たかげ



野 螢  
鵜 舟  
紫陽花  
なでしこ

己れのみきゆるを見する螢かなもとより闇は何もなき野に  
はなたれて籠のうちなる數の鵜の嬉し顔なる諸羽ぶきかな  
あしたあした夕べ夕べに移ろひて色片よらぬあぢさゐの花  
家人の集へる如くうちよりてひまなく咲けるあぢさゐの花  
放つ矢のゆくへたづぬる草むらに見いでて折れる撫子の花  
里遠き野にさき出でて只ひとり親もなげなるなでしこの花  
よそめには茅萱のみこそ見えにしか分くれば咲る野邊の撫子  
ながれ来て種もやここによりつらむ入江の隈の撫子のはな  
水淺く清く流るるかた知りてそなたになびく河原なでしこ  
夏川のくづるる岸のあやふきに生ひて咲きたる撫子のはな  
夏の野の廣き茅原になでしこのここに一花またさきにけり  
みどりのみ見るも苦しき夏の野にさきまじりたる撫子の花  
いでまこといかなる人の寫すにもゑがくはおとる撫子の花  
あびきする綱手さはらでのがれたる大江の岸の撫子のはな

がうか  
けし  
夏菊  
河骨  
蓮露  
蓮實  
桃實  
瓜  
あふぎ  
蟬  
夕立

いま去ばしねぶらでも見よねむの花己が梢の三日月のかけ  
花ちりてあとにのこれるけしの實の寂しく見ゆる山賤の庭  
夏咲くはなつの氣色にさくの花姿さへこそすずしかりけれ  
行く水をけさ出できぬる河骨のいかに沈みて苦しかりけむ  
夕ぐれの風を涼しとねぶる間にはすの一花ちりつくしけり  
けさ見れば蓮のまる葉にゆれもあはで端つ方にも並ぶ白露  
居並びてあるだに暑き夏の日に身に身を寄てなれる桃の實  
土にはふ瓜の末なり末ざまになり行ける身の果をこそ思へ  
世のなかはのびちむまの骨折にやがてわが身ぞ古扇なる  
松が枝にすがるやがても鳴く蟬の其かやすさは我ぞ乏しき  
つくづくと木間を見れば鳴く蟬の鳴ぬもありて物ぞ悲しき  
恐しきけしきはやみて夕立のつね降る雨になりけるかな  
降るふらぬ定めかねたる氣色しておのれなづめる夕立の雲  
夕立の雨に逢ひぬる大野山おのれひとりやすずしからまし

夕立晴

夏雨後

蚊

かやり

納涼

すずみ

夏の歌の中に

夏 夕  
夏 日

夕立のはげしきあめは遠ぞきてまへにながる川の音かな  
 ゆふだちにさして行かふ市人の傘は目がさに成にけるかな  
 はれぬれど梢にふむ夜半の雨にてる日涼しく見ゆる杉村  
 夕されば軒端に群るるかにかくにはかなき身こそ術なかりけれ  
 ともすればもえて烟らぬ蚊遣火のうたて覺ゆる世にもあるかな  
 たちならぶ梨の若葉のひまもれて涼しき風の細げにぞ吹く  
 たそかれとわかずなり行く橋の上に聲知る人のつどふ頃哉  
 そこ引のさあみの小鯛舟に煮て人みなあそぶ夏は來にけり  
 風わたる梢すずしき夏蔭に笑むばかりにもうごくならの葉  
 よそにして立つかと思ればとぶ蝶の又すがりぬる姫ゆりの花  
 夕立のはるる景色の涼しくてところどころに山ばとの鳴く  
 大寺のかげをかぎりて日あたらぬ芝生すずしき夏の夕ぐれ  
 雨晴れし木間の日影庭の面にきはきはしくも暑き今日かな  
 庭草に水そそぎたる夕まぐれ涼しといふはきはきよきなりけり

夏 夜

夏 月

夏 野

夏 川

夏 山家

夏 里

夏 松

夏 艸

夕まぐれ松かげすこしくらみ來て今ぞ涼しき風は吹くなる  
 涼しやと思ふまでこそすずしけれ今はねぶたさ限なきかな  
 夏の夜のふけゆく月の涼しさにわらは交りの聲さへぞする  
 物もへばねざめながらも目を閉てあけしも知らぬ夏の短夜  
 何とかや夏になりたるかげ見えて涼しさふくむ水ぎはの月  
 夏の野は一本のかげもなかりけりくさにつなげる牛の引綱  
 あめはれてゆきかひまげし夏川の清く涼しき底のうるくづ  
 夏くれば水に住みてもあるばかりはだか童のむるる灘の川  
 人と人かたらふ窓のうち見えて谷間ゆかしき夏のやまざと  
 をとめらがむれて絲引く山里の夕べすずしき門のつきかげ  
 駒だにもおのが尾ふりて拂ひをる五月蠅いぶせき夏の里中  
 松さへも枝の下風とほしやりて腋すずしらにたてる磯かな  
 ねこの子の首の鈴がねかすかにも音のみ志たる夏草のうち  
 なでしこの花もまじれる夏艸をおしまるめてもになふ里人

夏 草花 朝顔のさくかと思へば長き日もやがてひるがほ夕がほの花  
 夏 蘆 つのぐみし浦の蘆原いつのまにやはらぎ靡く夏はきぬらむ  
 雨後水草 みなぎはの今ひとときはもまさりこぼ沈みはつべき河骨の花  
 高良山にて 涼しくて谷ふかければ高良山夏もきこゆるひよどりのこゑ  
 夏 獸 夏くれば野邊のを鹿の角落ちて己が妻さへ見も馴れじかし  
 夏 灯 ならばたる市の燈火中々にすすしくみゆるゆふまぐれかな  
 初 秋 あきかぜの初渡りする淀の橋人まだ知らぬあけがたのそら  
 昨日よりさらにも空の秋めきて色かはりこし日かげ月かげ  
 秋のこしけしき見ありく淺茅生にめでたきものは撫子の花  
 おもしろく時うつりゆく心かなわが酔ざめの秋のはつかぜ  
 道の邊の腰をれすすきさながらも仰ぎて見たる初秋のそら  
 袖垣のくまどのそなた尋ばかり出づれば過ぐる秋の初かぜ  
 秋たちて百舌鳴く野邊の静けさに萩の盛はいつかと思ふ  
 端居する板の手あたりひえて來て秋とは去るくなれる夕陰

初 秋 江 初秋の梢をわたるかぜの上にあちるかと思ゆる三日月のかげ  
 去らくもの心かろくも行き通ふ奈多のいり江の初秋のそら  
 初 秋 旅 鞍の上を吹きこす秋の初風にわが身乗りてもゆく旅路かな  
 たなばた祭しける時

所せき宿もなげかじひとへなる垣の彼方はあきの野なれば  
 面白くよろめく足の歩みな神酒のすぎたる神わざぞかし  
 星祭醉客 麻がらのもゆる限をわかれにてたまおくりするすぎの下門  
 佛 祭 市人もみやびは知れり家の前のひろばかりにもうる秋艸  
 秋 草 あはれなり木にも草にも厭ひなくよすが求むる朝顔のはな  
 朝 顔 吾すべき業をまづしてそなたよりかいまみしたる朝顔の花  
 朝顔の葉かげの花の面がくしはかなややがて移るふものを  
 立ちさらでここにありせば袂にもものぼり來ぬべき朝顔の花  
 誰にかもよく似たるらむ朝顔の志ぼみながらものこる一花  
 まとひたる竿のさわたりおもしろみゆく限なき朝顔のはな

夕ぐれの垣にならびて朝顔の明日のまうけの花くくみかな  
 柴垣によるぼひ残るあさがほのうたてもさける枯がたの花  
 夕まぐれ今も咲くべき景色して今日は暮れぬる朝がほの花  
 おのれからはかなく咲きておく露に涙ぐましく見ゆる朝顔  
 衰へてさく朝顔のおくれ花さく日咲かぬ日今朝は咲くかも  
 きちかうのことし生おなる一つ花いま一つさく枝もなくして  
 童どちわるびたはぶれ一つだに咲けば摘とるきちかうの花  
 をちこちに穂には出づれど花すすき同じ心の招きざまかな  
 うらやすくむかひかへたる薄原昨日はそなたけふは此方に  
 こし秋をうたがひがほに花薄ほにいでさして幾日へぬらむ  
 まつ山の谷間たに間の荒田までおのがありかになす薄かな  
 分けゆけば手きりあしきり花薄なつかしげなる姿にも似ず  
 なにごとをさも心えてはなすすきうちうなづける秋の夕暮  
 秋の日のさびしき時は花薄こなたむけるもうとましげなる

桔 梗

薄

穂に出でし尾花が中にをしげなく駒ひきいる市るのさと人  
 水蓼の穂たでを鮭にとりかけて萩みる今日の長閑なるかな  
 夕日こく籬にさして秋萩のうちたれざまぞいふよしのなき  
 われのみか曇りふたがり雨ふりて月にも見せぬ秋萩のはな  
 をぎの穂もほろろぎ立ちて夕月のかげに光れる柴垣のかど  
 かがつらひまとひてのみも果のなき此世や野邊の葛の眞かづら  
 ゆく方におのがたづきのなればや空にいだきて纏ふ葛花  
 水邊 葛 川ぎしに浮べすてたる船にだにつなでづたひに來ぬる葛花  
 久留米柘植信厚七草園の歌

花 野 まとひあひて尾花くず花なでしこの花にも咲ける朝顔の花  
 天保十二うしの秋家のめぐりにありとある本草の葉を紙に摺りて、それに歌をかきつけ  
 けるを二卷となして、教子徳永ぬしにとらせける中の歌ども二十首。  
 よもぎ いかにしてふまでつみなむわが宿の門田の畔はなはなべて蓬を

いばら 鬼の子は鬼なりけりな今年おひの茨もいばらありと見ゆるは  
あざみ 花咲けば手もふれかねし薊だに人に折らるる物にぞ有ける  
絲瓜 世の中は絲瓜の皮の有ながらありと思へるかひはなくして  
一葉 このもとに繁きものから折とれば只一つ葉の一つなりけり  
おばこ 朝夕に踏ひしがれしわが門の垣根のおばこ實になりけり  
わすれぐさ 物事にわすれ草こそかなしけれ思ひ出すべき何はあらずて  
まめ 世の中は門田のくろになる豆の我ながらみの行方知られず  
なし たえて世になくばなしにてあらましを侘しきままにありのみぞうき  
ひえ 卑しくてよきに交れるひえの實は田をかるくも悲しとや見ぬ  
ふぢ のぼるべき便なれば藤かづらはひ纏ひてぞ人にふまるる  
とくさ 花もなく實もなき庭の木賊原ただいやましに生なまるのみして  
月くさ 舟よするみぎはの波のいさよひにいくたびひたす月草の花  
ほほづき 己が身を玉とつづめるほほづきも秋はかれがれに成にける哉  
なすび 秋風にかれがれ残る茄子畑いともものうくやならむとすらむ

からうり 里人の市に賣りいづるから瓜のなど賤しくて重げなるみぞ  
はす 蓮の實に交るまひなのまひてなど世の人数に入らむとすらむ  
こも 穂に出づる汀の眞菰みづの上に見えこし事は昨日と思ふに  
わた た 山と積む市のくり綿くるまでにいかばかりなる心づくしぞ  
をぎ 徒らにたかきにもあらずわが宿のあばらかくせる軒の下萩  
露 危くて過せる世にも似たる哉こぼれ落つべき露のゐどころ  
霧 家ひとつ二つ見え來て朝ぎりのうちにつづける中島のさと  
かぐ山 のそがひの堤けふゆけばすそ野にあがるかま川の霧  
立ちてのみあるかとおもふ秋霧の軒端をはしる古賀の山里  
わか杉 のこずる靡かし目のまへを尾ごしに走る山のあさ霧  
老樹搖生霧 谷ふかき檜原うごかし立つ霧にわが心こそぞろはしけれ  
原霧 ほどちかく立ちたる野邊の朝霧の下うすらぎて見ゆる松原  
雁 そとも田に來居るを見れば年毎に數もたがはぬ雁の一つら  
むるる雁汝がごと友は願はねど一人ずみこそ物さびしけれ

浦 雁  
虫

いつもく、庵に添たるものがほに外面の小田に來る雁がね  
 引ならず山田のひたにおどろきて俄にたかく過ぐる雁がね  
 旅人も笠きながらにかへりみるやすの大路のはつ雁のこゑ  
 打むれて騒ぎたてども小田の雁ゆく方見ればつらも亂れず  
 荒津渦家よりたかく立つ波になくかげ小さき空のかりがね  
 庵の内の燈火きえて寒けきに鳴き初めたるきりぎりすかな  
 なく虫は何を鳴くかは知らねども月こそ我は物がなしけれ  
 松虫もまつ人かずにせられけりさかゆる人は訪はぬわが宿  
 秋風に吹かへさるる桐の葉の下にちぢめるきりぎりすかな  
 山里の岩のはざまのきりぎりすかたくなしかる住居にぞ鳴く  
 さまざまに鳴く虫の音のうちにしてひとりまぢかき蚕かな  
 大舟のすいたの下のきりぎりすいつのひとまに乘移りけむ  
 われとてもすべなきものを蚕ものうしろに來つつ鳴くなり  
 かぎりなく遠き野末になく鹿のきこえきこえぬ聲の悲しさ

寒 虫  
鹿

山家群鹿

野 分  
月

何となく見ればかなしくあさましく角落したる鹿の草ぶし  
 都人とひきてあらば見せましを川かみわたる志かの一むれ  
 野分こそ吹たちにつれ秋草のかよわき花をあはれみもなく  
 たな雲のたな引く上にましら玉おけりと見えて出づる月影  
 よく見れば我にめやすく志たしくて遠くもあらぬ空の月影  
 行末のあまり遠きにたへかねて空に消えゆくありあけの月  
 いれば入る出づればいづる月影と我は友にて友ならなくに  
 皆人のわがものがほにめづれども誰が友となきおほ空の月  
 諸共によくとはなしに行き違ふ雲と月とのすさまじの世や  
 靴の音をさなげなるも過ぐるかなまこと晝とも思ふ月夜に  
 むら雲の絶間を月の出でしよりゆく水見ゆる野邊のをち方  
 いつよりか西に向へる我ならむ月の行方をたどるともなく  
 玉すだれ一間二間もかかぐれば殿のうちみな月になりゆく  
 さながらにありつるものを暫しわがめで失へる三日月の影

三日月

秋

夕月 出月

はしたなき片山郷のはねつるべはねたる空の三日月のかげ  
窓のとの唯片そばをはつはつにさしてもいぬる夕月のかげ  
山の端を見つつある間に峰の月おのが後の戸にさせりけり  
立出でて見るをもまたずそなたよりまづ影させる庵の月哉  
月影をいだしはなちて山の端に去ぞきもどれる夕ぐれの雲  
月影の出づべくなれば山の端もいと際ことにさやかなる哉  
ゆく末は山にか野にか知らねども我身と共に入りがたの月  
つどひして物さわがしくめでましや一つの月は獨こそ見め  
よひよひにながめし月と諸共に友のまとるもかくる頃かな  
かくれ居て我あとさらぬ影法師を並びてだに月を見よかし  
さをばかり高くなりぬと見る月に半むなしくなるひさご哉  
三日月の入るを見るまも慰めのなきにはまさる酒のひと杯  
月清み酒はと問へば少女どもゑみて答へもなげに見ゆなり  
行末は雲ふたがりて見えながら方たがへてもゆかぬ月かな

月下無酒 雲端月

月下獨酌 獨居月

夜々見月

入月 月會出

雲間待月 雲間月

雲うすき空には月の來ながらもいつあらはるる光なるらむ  
村雲のおしくくまれるそきへにもある時はある秋の夜の月  
折々は月も此方や見まほしき雲のひまよりのぞくなるかな  
中空にとどめまほしき月影をともしなひがほに雲のゆくらむ  
薄雲にねぶりがほなる空の月はるるは夢のさむるなりけり  
まちわたる月より外に何事ぞおのれもそひていづる去ら雲  
いでそむる月をばよきて山の端にほどよき雲のをり所かな  
薄雲におほひとられし夜半ながら月を心にいだきてぞぬる  
はてもなく去かも動かぬうき雲をよきぬは月も心なげなる  
大空はかぎりもなきを浮雲のかならず月のあたりをぞ行く  
今一重くもをいづれば雲もなき空なるものを知らぬ月かな  
月は今わがやのうへにきたるらむ雨ふる梢てりがほにして  
かきくらし雨はふれども嶺の月心のうちに出づるころかな  
雲うすきところのあかければ何處も月の在がほにして

雲中月 月前雲

雨中月

雨後月

雨 月 ときの間にかはるこの夜かな今までは月いまよりは雨  
 山 月 峯一重あなたに出づと見えながらいくらの山のをち方の月  
 山中 月 晝と見るこよひの月に生駒山大和にこゆるたびびとのこゑ  
 野 月 花の如つとに折られぬ月なれど歸る野邊よりたぐひてぞくる  
 江 月 ふけゆけば遊びの舟のこゑもなくすてていにたる湊江の月  
 水 月 浮べつつ行くとはなしに月の上を唯すぎにのみ過ぐる川水  
 汲む水にやがて宿りて月ばかり手に取やすき物なかりけり  
 浮ぶかと見れば浮べる水の月そこにあるかと見れば底なる  
 水鳥の立のさわぎにさわぎては又去づまりぬみな底のつき  
 ただ一葉ちりて浮める桐の葉のかげ出でかぬる水その月  
 我宿のものなりつるをとどめえでとほくぞやりし海原の月  
 奈多の沖の此方見やりて行く月に一人向へる人のなきかな  
 ただ一人夜ふけて行けばゆく月と我とのものぞ廣き大路は  
 市人に今日は交りて月を見むものさびしかる里は見あきぬ  
 市 月

隣 月 山里の月は月なるかげにして市にて見るは異にもあるかな  
 何となくとなり〜に變りぬる月の影見てありく夜半かな  
 庭 上 月 松杉の影ことごとくにうつりたる庭めづらしきやどの月かな  
 山 家 月 窓もなきはにふのこやのそともより入る方なげに照す月影  
 山家歸路月 歸るさをおくりくる間に山里の月もみやこの月になりゆく  
 庵 月 伏庵のおくまでちりも拂ひしをさのみは入らでいぬる月影  
 荒 家 月 あるじだに心もつかぬ我庵のあれしいたまを知れる月かな  
 ねやの月 おもほえず枕がもとのさやけきにまろび起ても見たる月影  
 窓 月 みぐるしと人はいはめど月ひとりめで顔に入る庵のやれ窓  
 戸 月 おもしろく月さし入れるつま戸よりわりなく出る夕烟かな  
 簾 中 月 吹く風の吹き揺がせばをすのくに我影ならぬ月も入りけり  
 松 間 月 僅なる我身じろぎにかばかりも見えけるものか松のまの月  
 木 間 月 ひと度も行かぬ木曾路のおもほえて宿る心の木がくれの月  
 月前渡舟 山陰をいづる川瀬のわたし舟なかばよりこそ月に見えけれ  
 秋



月夜客來 月きよみ誰か訪ひ來てかどの外に二人三人の聲のするかな  
山に遊びける時歸りくる道にてよめる

見つつこし川瀬の月をゐでに置いて吾は家路に別れゆくかな  
山邊より歸るわが身を送り來てあくれば門を月も入りけり  
うちすてて早く寢よとやいひやらむふけて悲しき秋の夜砧  
たが里もきこえ合せてうつばかりうてば何處もうつ砧かな

今宵うつ砧は遠しな川のあなたもあなたいづこなるらむ  
夕霧の立ち隠したる岸づたひみな家ならしころもうつこゑ  
岸擣衣 永き月夜妹が業こそわりなけれさもうつたへに空は見ずして

月前擣衣 清ければなほきよかれと秋風に塵をもすゑぬ去ら菊のはな  
菊 山川のあなたの岸のはつ紅葉橋なればや今日ものこれる  
紅葉 來馴れたる人のみ今日は訪ひぬべし心な置そ庭のみみぢ葉

木隠れの檀の紅葉ここにありと夕日の影ぞさしてみせける  
春の花あるをも知らぬもみぢ葉は秋ばかりなる此世と思ふ

秋の歌の中に

あきくれば眉をおろして青柳も女さびたるすがたをぞする  
植ゑしより秋の俵になる迄はいくらのわざか盡しきつらむ  
あき風はさむけくなりぬわが君の遠き東におはしつく間に  
少女らがとるやからさを幾そ度うちてか稻の糶となるらむ  
見るものは柿一つにぞなりにける梢むなしき秋のくれがた

暮 秋 秋深み壁にかけたる團扇さへおのがにあらぬ風に吹かれて  
葉かげなる瓜の色ぞめ見ぐるしく畑に残れる秋のくれかな  
をしむ人なくしてくれゆく秋の果さびしき宿を誰か知るらむ  
秋のはて 池水のあなたに遠くさせる日のわづかにのこる秋のほど哉

暮秋瞿麥 尋ねいでていま一本と見れどなき秋の末野のなでしこの花  
秋 夕 山鳩のただひとつがひ枝にゐてさびしがほなる秋の夕ぐれ

雨中秋夕 何とかや雨ふる空もあからみてさてかきくらす秋の夕かた  
長 夜 長き夜と思へどながき長夜かな今より起きて塵もはかれず  
秋 風 大空に日は照りながらうき雲のかくす間さむき秋のやま風

吹き靡け去ばしゆるべぬ秋風に身をすぼめたる窓のなよ竹  
 賤の女が山の蕎麥刈る秋風に背におふ子さへわりなくぞ泣く  
 ゆふ暮の野を過ぎ行けば斜なる日かげまじりに秋風ぞふく  
 奈多の浦の眞砂吹き上ぐる秋風に磯邊の小松なべて隠れぬ  
 松浦潟あきの鹽かぜ海ふけば海士の磯屋をうつまさごかな  
 秋の雨の寂しき今日を友もなし海苔を火にあてて獨こそ飲め  
 ゆく水のさざれにあたるさおとにも静けさ志るき秋の山蔭  
 二つ三つところどころに人すめる家なつかしき秋の山ごえ  
 もみぢ葉のちりうくなべに扇さへ流し添へても見つる山川  
 秋來ればわが物としもなけれどもひでたるわさ田見る心地よさ  
 見渡せば秋の千町田かりはててわが庵ひとつ残しゐるかな  
 更に又生ひし心もとげやらでかるる侘しき小田のひつぢ穂  
 秋の日はうららにさして里々の粃する音のゆたげなるかな  
 里人の俵ごしらへひまなきに共に群れたるむらすずめかな

秋田家

刈田

秋田

山路秋興

山越

秋山

秋雨

秋海風

秋 水 小田の畦のただ一くはにおとし水音もなきまでなれる夕暮  
 あしやの里にて

秋更けて湊邊さむくなりしより蕎麥うりめぐるさよ中の舟  
 山寺の秋さびしらに佛たち立ちならびてもおはすなるかな  
 も ず 聞知らぬ人もあらまし様々の鳥の音まぬる百舌のそらねを  
 なにごとぞ聲きく人も一人なき立枝の末のもずのものまね  
 棹にゐてまなく動かす百舌の尾の唯にありてはあられじの身か  
 つばくらめ打むれて歸る折しもあれいさご吹上る奈多の汐風  
 其方にて住むべき國もまだ知らぬ子つれの燕けふ歸るなり  
 秋 獸 秋ふかみ落つる木の葉のうちよりぞ出で来る柚の板負の牛  
 散果てむものとも知らでみの虫の秋の木葉に猶すがらむ  
 秋 虫 蜻蛉 初秋の風の上にも身をとめてここにそこにも飛ぶ蜻蛉かな  
 雨まじり秋風ふけば臥庵のかげをたのみてとぶあきつかな  
 いなご 行かひの袖に取つくいなごまる田を蒞果てて住處なければ

落 鮎

秋風に門田のいなごふかれ来てをりをりあたる窓の音かな

く り

秋深み落ちくる鮎のやなもれて行くとも其身時の間ぞかし

い ね

吹きあらす野分の風をよるこびてむくの實ひろふ里童ども

なるこ

ゆふされば家路にかへる里人になへる稲は土につくまで

案山子

事もなく寂しき時は見やらるる八千町の田の稲のあからみ

なるこ

人なしと見ゆる山田の田ぶせより思ひもかけず引く鳴子かな

案山子

矢つがひておどすそほづも老ぬれば近づく鳥も笑ふばかりぞ

なるこ

田を遠み笠の下面かよく見えで誰にか似たるそほづなるらむ

なるこ

秋の雨のふるてるなしに笠きたる山田のそほづ疲れ顔なる

なるこ

見と見れば門田のそほづいつもく其方に人のある心地して

なるこ

ゆふぐれもいそぎめぐらで水車短き日ともなきけしきかな

初 秋 冬 車

今朝みれば雲も木葉もそなたへと行かぬものなき冬の山風

初 秋 冬 車

かたぶくる傘もほろろに降る雨の寒けき野邊を人通ふなり

時 雨

去ぐるればいにしへの友今の友なべてこひしき神無月かな

時 雨

くづれたる柚山かげの木立なみ隠るる方もなき去ぐれかな

時 雨

あなたよりこなたよりくるさよ時雨音行きちがふ曉のそら

時 雨

いづかたと行方定めず神無月みちゆきぶりにふる時雨かな

時 雨

村時雨横さまに降るときしもあれ松の姿はおもしろきかな

時 雨

山とほき難波の浦は時雨だに風にきそはでゆたにふりつつ

時 雨

筑紫湯奈多の長濱ながければ過ぎはてもせでやむ時雨かな

時 雨

大船のならばはしらを横さまに過ぐるみなとの初時雨かな

時 雨

都にも降るものながら山里は去ぐれざまこそ又かはりけれ

時 雨

いづちにか時雨行きけむ橋一つ渡りて見ればよき日なりけり

時 雨

神まつるやはたの宮の初去ぐれ詣でこみたる人のかさはも

夜 時 雨

さ夜時雨ふりやむ音のうらやすくさも思ひきる世ならましかば

山 時 雨

やまかげの檜原杉原松原におとかはりても行く去ぐれかな

山 路 時 雨

さきだちて山路過ぎ行く牛の親に子牛より来る村時雨かな

冬

行路時雨  
船中時雨  
水上時雨  
都時雨  
市時雨  
田家時雨  
窓時雨  
松時雨  
竹村時雨  
落葉

行くままに程ちかづきし山里をまた遙かにもなす時雨かな  
ふりもあへず波路の時雨すぎしかど船の帆繩に去づく白玉  
ふりきぬと沈み果たるには鳥の又うかび出てあふ時雨かな  
東山のぼりもはてずまづ見れば都の去ぐれ鳥羽に過ぎゆく  
み山べの物さびしかるけしきもて市にふり来る初時雨かな  
難波の市いづち見るにも所せき家のはざまの初去ぐれかな  
降りいづる空をも知らず門田までぬれにいでたる夕時雨哉  
せきはてて何所も分ぬくら闇に窓を知りてもうつ時雨かな  
わが門の一木の松に音たててまた降りいづる夕去ぐれかな  
大空は雲もなくして竹むらのうちよりきぬる夕去ぐれかな  
うれしくも木葉にあらぬ吾身かな秋のかぎりを限にもせで  
己こそ面白からしあなた向き此方向きてもちれるもみぢ葉  
荒き雨ふりくる空の景色にはあたらぬさきに散る木葉かな  
もみぢ葉は事ぞともなく散にけりさも惜からぬ此世なるらむ

月夜落葉  
軒落葉  
蔦落葉  
くちは  
このは  
木  
枯

神無月つき夜になればましろなる壁に影してちる木葉かな  
今日ふきし庵の軒端にかねてより散れるが如くちる木葉哉  
松の蔦離れがてにはまとへれどその葉の紅葉もろく散けり  
朽ながら残る久しき木葉かな身を捨てて猶すてぬばかりに  
何とかや童に似たる木葉かな風さむからぬかたすみにおて  
蜘蛛のいに散り疊れるもみぢ葉の危ふげ乍ら猶ある世かな  
こがらしの音恐しき夜のま哉かるがろし身はとりも行く迄  
もみぢ葉をまろばしちらし庭の面にひとり楽しむ木枯の風  
窓にきて絶る鶺鴒もゆくりなくあわただしかる木枯のかぜ  
まな鶴のむな羽のうら羽さかだてて木枯あたる門の澤みづ  
袖さへも吹きとりつべき木枯にうべ止まらぬ峰のもみぢ葉  
寒しとも思はざりしを埋火のとはなるれば霜夜なりけり  
さればこそ霜ふりぬらし人起きて雪の如しといふ聲のする  
鶏のねがへる音を聞きながらいかにもすれども寒き夜の去も

霜

冬

庭霜  
泊霜  
千鳥

まばらなる庭の落葉の上へのみ置くかと見えてのこる朝霜  
朝日影まだよくささで大船のかげの小舟にのこるはつ志も  
たまさかにひと一人くる離洲を珍らしと見るいそ千鳥かな  
走りてはとまりとまりて行く千鳥ゆく時にこそ人に見えけれ  
松浦瀉はまかせたちて旅人の笠のうへ行くむらちどりかな  
浦風にむかふ波路も友千鳥ともあはせたるちからにぞゆく  
冬くればいと浅びたる川中の水尾わたりするむら千鳥かな  
たつ波の立のさわぎに友ちどり雲るにたかくあがる一むら  
磯の上を走りくゞてむら千鳥とどまる所なげにもあるかな  
いくたびか影失ひし友ちどり身ををれかへる波のまぎれに  
荒磯に馴れてはあれど友千鳥すそ寒げなるたちすがたかな  
浦ちどりひとつくゞに濱崎の松の間過ぎてまたもむれつつ  
やらが崎出づればむかふ汐風に入江のごとも行く千鳥かな  
よる波の打ひろされる中にだにあさりて立てる磯千鳥かな

川千鳥

水鳥

行く人の近づくままに又たちていや川のぼる川ちどりかな  
芦邊よりさし入る川の朝潮をよきて並み居るいそちどり哉  
見よとてや入江の岸に一木おちず杭ごとにおてならぶ水鳥  
水鳥はたちて跡なき川の面にやがても落ちずまふ一羽かな  
浮び出て見てはかづけど水鳥の沈めるまにもかはる世の中  
冬枯の入江の蘆のくま毎に入りては出でてゆくかもめかな  
磯ぎはを照らす日影の長閑けさに水を離れて歩むみづとり  
夕されば寒き波よる香椎瀉をしもたかべもうちまぜて鳴く  
さばかりにぬれそぼちたる波を出でて安き鷗の一羽ぶき哉  
灘の川の汀の鴨のともねむりおきならべたる物とみるまで  
多多羅川心ゆくまで満つ汐にうかべる鴨の並みつつぞくる  
けさ見れば汀の鴨のみづからもおき並べたる友ねぶりがかな  
窓のとにふり来る雨は雨ながらおとは霰にはやなりにけり  
いかめしき岩にあたりてとびかへる霰こそいと荒々しけれ

あられ

雪

待 雪

夕 雪

夜 雪

雪 影

清海某春日出新田別荘十景之内、二上山雪を、

岡 雪

雪中山家

閑居雪

清けれど塵芥にもふる雪をおのがこころに惜しとこそ見れ  
 所せき家のはざまの庭をだに見いで顔にも降れる去らゆき  
 吹廻る風のまにまに大たわのたわになだれてふるみ雪かな  
 つもるかともたれし雪は降らしめで雲はだらなる夕晩の空  
 雲間よりあかくなり来て夕日影さす方ざまに雪は降りつつ  
 わたる日は垣のそなたに傾きてゆふかげ清き垣の去らゆき  
 暗き夜の空は見えねど庵を出でて仰げばみ雪降てありけり  
 松の間の燈火あかきまどの戸にふるかげ見ゆる夜の雪かな  
 雲間より月さし出でて窓の戸にふる影見するよはの去ら雪  
 二上の山の白雪もろともに消ゆればきえて降れば降りけり  
 わがあとを又ふみとめて歸るなりむかひの岡の雪の夕ぐれ  
 朝な朝なつもれる雪を湯にたきて谷の清水もくまぬ頃かな  
 人一人とひしあとのみ猶見えて今日も残れる門の去らゆき

閑庭雪

船 雪

雪中行路

雪中鳥

埋 火

爐 火

衾 火

寒 燈

神まつり

冬の歌の中に

松が枝に積りあまりて庭に落つる雪のみ雪に跡はつけけり  
 片おものましろになれる柱さへえもいひしらぬ大船のゆき  
 ゆき深みただ一筋をふみわけて大路もけさはせまきほそ道  
 宿るべき木の間もなくて飢鳥のなく聲かなし雪は降りつつ  
 きえくゝて灰となりぬる埋火を人より外におもひつるかな  
 長き夜をうづもれはてて埋火のおのれ獨やさむげなからむ  
 むつかしき世の中知らで山里の冬の楳火のあたりどちかな  
 起出でてわが寐ぬくめの麻衾をしくもさます冬のあかつき  
 唯一つのこるともし火火ながらも冬の夜ふけて影ぞ寒けき  
 落積る御前の木葉かき掃きて年にひと日のかみまつりかな  
 あらざらむ後こそかねて悲しけれ枯たる菊も香は残りけり  
 雪ばかりいらかの上に見ゆるかなみねくゝとほき渡邊の橋  
 おもしろく橘の實の色づくを枝にあらせぬ木津のさとびと  
 あられ降り雪散るころの臘醅春をおもへばたのしからずや

いつしかもむなしくなりて降る雪の寒き夜にたく炭俵かな  
 おほまきの網めづらしと博多人わたりきて見るふゆの姫島  
 霜さむきこの葉のまたの蚕よろほはしくぞこゑもなりゆく  
 ぬれぬれし旅をこそ思へ神無月去ぐる頃になる時ごとに  
 夜をさむみ川風あたる橋柱ひとならねばぞさも立てりける  
 船人もふねをとどめて陸にあがり市に物かふ年のくれがた  
 師 走 年のはてやや近づけば世のなかの人のいそがしくわれ閑なり  
 十二月 皆人のいそがしければ訪ひもこで吾暇あるとしのくれかな  
 歳のくれ 庵一ついと狭けれどもちいひを世の人なみに並べつるかな  
 何處にかゆく心地する年なれど吾身一つに負ひにけるかな  
 山里は年の終もわかなくにいそがしげなるひよどりのこゑ  
 世の中をあぢきなみたる年の暮つかれねぶりの埋火のもと  
 貧居歳暮 昔よりもたる佛も誰がのにかなるべくなれる年のくれかな  
 つごもりの夜妻子どもうちつどひて

年の暮に人にとらすものなどやりはてて  
 志めはへて吾門掃む身の程を悔いてあるまに春は來ぬべし  
 くれはてて今宵思へば一とせを得たる外には物なかりけり

難波にて ころらへし荷積の船のかず知らず汀にならぶ年のくれかな  
 年のくれ、森一鳳が侍女ども二人きたりて、そこら見めぐりて、ここはもちひなきにやとい  
 ひける折しも、盃とりてありければ、

冬 日 酒あれば心もちひもつかずして年の暮ともなきいほりかな  
 藻がくれに冬籠りせるうろくづも出でて來ぬべき暖けさ哉  
 短 日 何をする暇もなしと年毎に日のみじかさをわぶるころかな  
 唯ひとり人の訪ひ來て時の間の世語りの間にくるる今日哉  
 冬 朝 小山田の水田に立てる芦たづの上毛も寒くうごくあさかぜ  
 親も子も打すすろひてそば湯さへ曇ふる夜は哀れにぞのむ  
 寒 夜 煮ゆる湯に蕎麥かきたてただ獨霞の音をきく夜のまかな

山家寒夜

冬月

寒月

冬山月

冬雲

冬雨

冬風

冬山

冬川野

ただ一つまくらのもとにまろびこし木葉うごきて寒き山里  
わがどちはいたく酔果てて酒飲ぬ月一人こそ寒く見えけれ  
人かげもなくして寒けき大路かな行く方とほく月は照らせど  
夕ぐれのさとの時雨にちかづかでかた山かげにすめる月影  
何とかや月にはあらでおそろしき物いでつべき冬の夜の雲  
ものすごく月をかくしてすみぞめの雲恐しき冬の夜のそら  
音たてて霰と降らば晴れましを小雨の長雨はれがてにする  
おのがどち寒きころをあはせても氷の上をわたる川かぜ  
暮て行く年もなげかず冬の山おもふことなく並びをるかな  
いつしかと冬も半になるままにわがかた山は寒くそびえて  
時雨ふり半かくるるかた山の肩もさむけくそびえたるかな  
野々寒きかへさも樂し我宿にかみたる酒ののこりありやと  
儼の川の川橋長しふゆくればたださばかりの水のながれに  
水かるるみ冬の末になりぬれば川のうちにて川ながれけり

冬山家

冬鳥

冬獸

冬虫

冬木

冬松

冬草

冬は

冬枯

冬干

冬車

水尾ばかり中にながれてふゆくれば遠くならべる川の岸杭  
ほたたけばなまなまし木もよくもえて都にかはる冬の山里  
何ごとにいそぎおきてか名のるらむ寒さも知らぬ冬の夜鳥  
さをの上に並みふくだめるむら雀中々寒く見ゆるけさかな  
間なくちる木葉かづきて山路より出で来る牛のすごき夕暮  
いきのこる浅茅が中のいなごまる身も枯草の色になりつつ  
霜さむき庭の浅茅におとろへてまだ残りるいなごまる哉  
霰だに枝づたひして降る物をやはらびもなく立つ冬木かな  
冬たちて風寒からし奈多の磯の足たかげなる濱のまつばら  
山松のもとさへゆるる嵐にもうらやすげなるかげの冬くさ  
冬深みせとの垣つは咲き出でておのればかりぞ時の花なる  
春たたばさしもえあらし何事もうちすてたりと見ゆる枯蘆  
はたの菜の冬の引ぼし家毎に軒にかけたる古賀のやまざと  
みぞれふる河瀬にめぐるみづ車心なしとも見えぬわざかな

冬



冬旅宿 埋火のもとにある身を家人はうみに山にやおもひやるらむ  
 冬泊 志ぐれふる武庫の泊の雨風に船のうちなるふゆごもりかな  
 朝 人起くる音きこえねばわれさへも暗き朝いの床のうちかな  
 胸せばき夜半の思はわがならで明くればいたく變りぬる哉  
 夕日影木のまをもりて幾筋か庭にわたせるきぬのうすはた  
 夕日 夕日影木のまをもりて幾筋か庭にわたせるきぬのうすはた  
 山夕日 夕日影木のまをもりて幾筋か庭にわたせるきぬのうすはた  
 樹間薄暮 ゆふづく日入りての後の松の間のくらきに見ゆる水の一筋  
 海日 並び行く船の間もりて帆かげより磯屋にさせる夕づく日哉  
 夜 まち渡る高嶺の月を出したててまぞき顔なる夜々の山の端  
 ありあけ 夜書をかたみにかへて晝はねぬ夜はねざめぬ何のわざども  
 手をさしてそれといへどもわかぬ迄消かかりたる有明の月  
 残月 けさもまた見る人なきにのこりけり何の心ぞあり明のつき  
 星 風吹けば空なる星ももし火の動くが如くひかる夜半かな  
 虹 あさくらの夕山越えてよそのせにうつろふ虹の影を見る哉

海上虹 夕まぐれ空はれがほに立つ虹のなかくぐり行く沖のとも舟  
 雲 天の原高きひききに行く雲のゆきあひ乍らよそくにして  
 海雲 あまりにも走りただよひつかれてや高嶺の松にとまる白雲  
 雲行 川のごとながれながれて白雲のはては海とも見ゆるをち方  
 海雲 降りふらぬ定めかねたるけしきして己もなづむけきの雨雲  
 山風 山にゐてまづけき雲は誰ならむ空に迷ひて行くはわが身を  
 見渡せばさもながしがし平戸よりつしまの沖にわたす白雲  
 山風 見渡せばさもながしがし平戸よりつしまの沖にわたす白雲  
 行路風 夜すがらの風吹きやみて驛路の駒引き出づる鈴が音ぞする  
 松風 隈々にかくれくも行くものを身にさしあてて吹く嵐かな  
 松風 えもいはず寂しき時はおのれさへかすかに音を立つる松風  
 蘆風 さばかりは枝もうごかで庭松のうはの空なる風のおとかな  
 芭蕉風 ぬれぬれもかしらあげつつ蘆の穂の打靡きたる奈多の汐風  
 雑 ばせを葉のまげれる窓の紙をうすみ折々いろを見する朝風

追 雨

風

風後雨 山雨 野夕雨 海雨 草庵雨 雨晴漏 地震火 蘆火 燼

風なぎてすはれる許みえながら水際をみれば船は行きけり  
日數経てかわきし庭に夜の雨のさ許にては降りぬともなし  
二日三日降ればふるとてかこちけり雨待遠にいふかと思へば  
小笹原とこるゝに動くなりまばらに雨や落ちて來つらむ  
夕暮のそらの雨雲風たえて明日はと見しが今日よりぞ降る  
かやの山このもの雨は風もなし濡るる松さへゆたげなる哉  
夕まぐれともすに早き燈火も見えくる野邊の雨のうちかな  
村雨をのがれ出でたる舟の帆に景色をましてさす夕日かな  
雨をこそ見つつありしかいつの間に眠れる庵の獨なるらむ  
かささせるささぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨のはれがた  
もる雨のもるや何處と火ともせばぬるが上にもきぬる玉水  
餘りにもどけさ過ぎし大御世の心おどしに地やふるへる  
流れゆく入江の水尾のさびしきに影移るひてたく蘆火かな  
もえくひののこり少なき吾身もて物あきらかにする心かな

山

夕山 亂山 かまど山 をのへ 山陰 山びこ

雑

かしましき世をわびはてて山見ればいづこの嶺も雲靜なり  
そばだちて恐しげなる嶺越にまたゆたげなる山も見えけり  
朝よひに見つつ馴れては山もわれも心空しく向ひあふのみ  
朝よひにむかひふるしし夏の山まためづらしき秋の山かな  
三よりのなは打かけて引くべくは何れの山か庭におかまし  
わづかなる松の間よりも見ゆるかな國ふたげたる彦の大嶽  
ねぶりつつありしその間に雲を出でて吾に向へる若杉の山  
とこの山動くべしともなきものを歩まひ長く裾をひくらむ  
月影をいだしはなちておのれのみ寂しくのこる夕暮のやま  
山にきて見れば山のみたてりけり市の家々かず知らぬごと  
山々に立ちもならばでかまど山おのれひとりぞたかく尊き  
寂しきは木もなき尾上春も秋もありこし儘の芝生のみして  
とく行てすみてあるべき山陰を思ひやりても老にけるかな  
さびしさにわれのみ物もいはねば獨こたふる山彦もなし

水

こたへする聲面白み山彦をかぎりもなしによぶわらはかな  
吾如く酒に酔ふらし山びこも打てば打つ手をまねぶ音して  
わがいはの外には家もなげなるをむなしき谷にすめる山彦  
宿近くながるる川の水見ても世は楽しくてすまんとぞ思ふ  
垣間より行く水見えて中々に荒れたる宿のおもしろきかな  
ながれ行く港の水のいさましく海に出でても川をなしけり

妻におくれていと物さびしく世の中わびしくてありけるに慰さめがてら庭にやり水を  
流して、木などうるける時、

玉 水

にはかにも流るる水の嬉しきはゆきかふ魚と我となりけり  
うかりつる心やり水流るれば悲しきことのある身ともなし  
軒端より落ちては走る玉水もおのれくをくだくなるかな

間居垂水

苔の上に落つるたるみの獨ごち聞き知る人も無き住居かな

潦 水

木蔭より流れ出たるにはたづみ流れはゆかで晴るる雨かな

水 音

暮れぬまはこころもつかで川橋の柱にあたる夜半の水おと

泡

水の上にながるる泡のかるげにも行末知らでゆく我身かな  
汐さきをまづやりこして岸陰に心よげにも舞ふみなわかな

雫

おちやみて竿に並べる雫みれば何ともなしに物ぞさびしき  
雨やみし軒のひさしにすがり居ていつ迄待たば落つる雫ぞ

川

いささ川流るる水の浅きにもほどにつけたる魚ぞあそべる  
餘りにも平に過ぎてやまと川あやめかしたる岩だにもなし

塘

下る舟上るふね見てうるし川渡るとなしに立てるさとびと  
見渡せば川にそひたるつつみさへながるる水の姿なるかな

渡

やまと川わたせる駒の渡りあがり堤につづく夕ぐれのそら  
今迄に人をのせこし駒さへものりたる古賀のわたし舟かな

橋

行く水のわきて流るる廣瀬川わたれば又もわたりなりけり  
滞るるせぎのみ志ぶぶくゝに流れ出でても猶在る世かな

おせぎ

ほどもなき前の棚橋過ぐる間もわが世渡りの外ならなくに  
我を知るけしきもなしや馴れくゝて日に幾度かわたる板橋

斷橋 夕日 橋路

わがすめる野邊の小川の一つ橋わたり馴れては幾年か經し  
川くまの板橋の上をただひとり人渡るなりこなた見つつも  
中たえてえもわたられぬ川橋をゆかるるまではゆく童かな  
ゆき通ふ橋の人かげそのままに入日にうつる川づらのまど  
行くままに家續きなる都路のいづこの程にひなび來ぬらむ  
行くままに寂しくなりぬ里はづれまばらに家も細く成來て  
遠く有てよそより見ればいつもく行交ふ人の豊げなる哉  
引きつれて大路出づなりうま車またうまくるま牛くるま牛  
道のくまめぐり行くまにいつよりか向ひてたてる若杉の山  
きの川の堤はながしやすらはむみづおもしろき所えらびて  
なはのごとたわめる山路見るまに其如くゆくわが心かな  
はるかなるをちの山ばなこし人の又見えなくなり暫し隠れて  
そこなりとやすく打いふ山人の道なかなかにとほがのの里  
打群れて山路こえくる旅人のおちかさなりて見ゆる坂もと

大 路 山 行 路 川 路

谷 道 樵 路 行 人 平沙渺々來人遠

かへり見てわがゆくさきに行く人もわれも寂しき山陰の道  
ひとりして行くにもせまき山の間水さへそひて下る細道  
ゆきかひにいこひなれたる道の邊の石や遅しと待渡るらむ  
うち渡すをち方人の道おそくゆきはつまじき野の景色かな

野 田 坂 畦 石 原 海 上 眺 望

ただ獨うらわを遠く來る人にさびしさそふる夕づく日かな  
朝戸出のすさび歩きの門べよりいつ野にきつる我身なるらむ  
そともたの十まち二十町我宿のもの顔にして人のものなる  
かくばかり登りかねたる坂路にも片へ平らに小田も在けり  
あなうたて狭きが上にせまかれと削りなしけむ小田の畦道  
とにかくに道むつかしや山こえてまた爰よりはあらしき石原  
ひとりこしあとのみ見ゆる荒津濁きよき眞砂に人影もなし  
見ゆる日もありとはいへど荒津の沖何れの雲か新羅なるらむ  
手にだにもすすゑて見るべき妹が島遙かに細く幼なげにして

海邊眺望  
入江

田に立てる人まばらなるそなたには船も行交ふ引津野の浦  
うしほひて見れば流るる水尾ばかりめぐりて遠く行く入江哉  
汐みてば唯一重よるうは波に今かくれたるいそのはなれ洲  
多多羅島こぎ出でて見れば唯一つさびしく見ゆる崎守の庵  
箱崎の濱の夕なぎいづこにも今ひとところありぬべしやは  
よする波かへるさまにはたわすれて汀に残すうきも亂れ藻  
舟よせて見るべくもなく荒びたる芥屋の大門の今日の白波  
けやの浦を誰に語らむ巖までのぼりておつる沖つゝあらなみ  
人も亦さることすなりうつたへにくだけぬ岩を知らぬ白波  
見渡せば八重かさなりて沖べより波を追ひくる波の果なさ  
ここまでも夜半には波の打よせて松にかけたるちり芥かな  
沖邊よりあとおひくくて来る波の碎くる見れば何故となし  
浦にいでて見る心地よさ沖つ波へ波打ちあひて空に立つ浪  
やまと川みづはくだれど立つ波のみをさかのぼる沖つ潮風

湊亂  
波波

いつしかも干潟を遠くあさり來て鳥居はるけき箱崎のはま  
ここよりは佐原の郡をのへなるこだかきまつを境にはして  
難波江の市の賣物おほかれどこれなくてはといふ物のなき  
遠近にかよふ徑のなつかしき野にあらましを市に住みけり  
並松のはかたを過ぎて橋二つわたればやがてふくをかの里  
罪人をうしなふ磯に立ち並みてうき世遊びの家もありけり  
ゆくままにいや重なれる松原のまばらに成て海ぞ見えける  
花だにもうゑそへましをさびしらに松一つ立つ志賀の唐崎  
われ獨とめらるべくはなけれども見ればかしこき關の荒垣

潮干  
郡市  
福岡  
博多  
宮崎  
唐崎  
關

今泉に移り住みて

家野  
一家  
いそや

世の中を思ひもかけずのがれ來て今日すみそむる今泉の里  
誰人かかたらひとりて家たてむさびしかるべき山の下かげ  
庵一つもちたるのみや野に住て牡鹿にかはる我身なるらむ  
まつら潟あまの磯屋の程なきを打碎くべく見ゆる志らなみ

わらや 戸 門 垣 柱 庭 隣 閑 里 山 寺 祠

似げもなく古きわら屋の繕ひにところどころの新しさかな  
へだつれば隣々になりにけりただ一重なるいへの戸なれど  
今日も又わがやに我身かへりきぬ限の門出いまだこずして  
はるばるに見ればぞ里は懐しき訪へば蘆の屋よるぼへる門  
山ざとの折かけ垣は荒れにけり一世に人のひとたびやゆふ  
世の人は草がくれなる柴垣のおもひの外にへだてありけり  
老の身は繩目ゆるべるくづれ垣とかくしてこそ世にも堪けれ  
ゆきあたるやみの柱の罪なきにわが過ちを負はすなるかな  
わび人の宿は訪ひくる人もなしわが見ん爲に庭もきよめぬ  
隣どち生るるあれば死ぬるありただ一重なる壁ごしにして  
所せくとなりくをへだてたる世の中垣のむつかしげなる  
これのみや今日はありつる事ならむ松の實一つ落ちし夕暮  
貪しげにさとの社は荒れにけり富みなむ事は神も知らずて  
心ありてむかふともなき眺めにぞわが見いでたる遠の山寺

山ざと

山家人來 山家燈 山家垣 山家橋 山家苔 山家鳥

谷陰のここにかしこに片よりてさびしかるべく見ゆる山里  
わが宿をここにもがたと都人いひのみいひて住まぬ山ざと  
よそながら見てや此世を過ぎぬべき住ままくほしといひし山里  
住めば又ここも詫しく成にけり住まで住ままくほしき山里  
住むべきはまこと山里誰の身も輕めあざける人なしにして  
馴れなれて世は哀なしいざ行きて畚下しする山に住みてむ  
かぜ吹かば深き谷にも落ちぬべきたかをのおくの峰の一里  
大方はあるじはなく山里はとなりだのみの引たて戸かな  
燈火のもとにかたらふ人かげも松の葉ごしに見ゆる山ざと  
このまよりくる人かげのあまたしてたれかと心さわぐ山里  
山里の竹の枝垣みやこにもゆはまくほしくあはれなるかな  
ただ一木木をわたせれどあぢきなくうき世に續く山陰の橋  
深みどり小高き山のいはほより苔おひつづく庭のおもかな  
山里はましこつつ鳥にはたたき居ながら樂し目の前に見て

田家人來

田のもより我門さして來る人の近づかぬまに誰と知らばや

漁村

浦とほくゆきあつまれるものがほに洲崎に立てる家の一村

故郷

家もなくなりぬるおのが故郷の道去るべする駒のかなしさ

旅

故郷は松見ゆばかりこしかども誰か知らまし今日歸る身を

旅

山こえて海見いでたる松の間にかくれゆく船あらはるる船

旅

おのがきるこよひの宿の麻衾またきて明日は誰かふすらむ

旅

ねざめして寝ながら見ればわが臥せる枕につづく松が浦嶋

旅

おなじごとたち並べどもここよりは我國ならぬ道の邊の松

旅

かへり見る里のむらやま並びて何といはねど我ぞ悲しき

旅

今はわれ幾里々か過ぎつらむ別れかねたるこころながらに

旅

姿さへ所かはればかはり來て知りたる山の名を問はれけり

旅

古市に今幾ほどかあるといへばその古市ぞここといふなる

旅

うひにこし旅にはあれど何とかや見しすがたなる越の遠山

旅

見馴たる山かと思ふ山もあれどこし事もなき旅路なりけり

山

越

旅

きこえずば猶聲だかに道問はむこなたに行くや志賀の山越

旅

旅すれば軒の上にも行く川のそこばかりなる宿もかりつつ

旅

すゑとほくまがひ路もなき一筋を見てもつかるる旅心かな

旅

かたがたに旅はゆけども行末は皆がら死出の山路なりけり

旅

家にてはとかくいはれし木枕の高きひききもなき旅寝かな

旅

いくばくも道遠からぬ心地してまた來べしとも思ふ旅かな

旅

朝立しけさのここちも異ものに夕べになりてうき旅路かな

旅

旅にありていく春秋か過ぎつらむ月の頃こそ家を出でしか

旅

ゆあみしてけふの一日の旅疲れもとの吾身になる心地かな

旅

わづかなる家と家とのひまにのみ降る雨見ゆる旅の宿かな

旅

こえかねてやぎふの山の岩枕せしとかたるも旅のつとなり

旅

たふれふす松ぞ悲しきその如く旅路の末にならむと思へば

旅

宿るべき里見えきてもいくたびか今は近しといこふ松かげ

船

追風にふねつきぬべきとの里眞白き濱邊やがて見ゆらむ

船路

いくばくか今は來ぬると人毎にとひきくけさの湊出のふね  
 忘れたることはなきやと思ふまに遠くなりゆく湊出のふね  
 帆上ぐれば船の朝いひたく間にも陸路一日の程は來にけり  
 ところせきわが乗合の船づかれみな人毎にぬるぞわざなる  
 松も生ひ岩もならびて船にすらとまり／＼に庭はありけり  
 漕ぐ儘に夜明けて見れば見知りたる昨日の船に又並びけり  
 浮寝する港はわびしさ波さへひた／＼とうつ音のきこえて  
 小船さへこぎむかへ來て大船の出づる泊のいさましげなる  
 漕ぎ出でてさきかあとかも知らざりし船は入きぬ同じ泊に  
 窓に窓むかひあひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる  
 入日さすなこのまほひの夕まぐれはしだてかくる沖の大船  
 船の帆はゆたに下しつかき抱てまぼり取るまもなしと見るまに  
 田代より日田の方に行きける道にてよめる  
 志るべなみ覺束なくも吾がゆけば果は道なし山ばかりして

泊船

山かげに隠ると見えしくま川の又見えくなり道のゆくてに  
 長野正勝がとよ國ゆきの話  
 身にいたむところありて、ものに乗らでは道を行く事あたはず、いとゐなかだちたる  
 山中に宿りけるに、今日のる駒をと宿あるじにあつらへたるに、今朝あさ霧深ければ  
 駒をとらふることかたからむ、さりながら、のり物なくては出で立たせ給ふことえな  
 らじとあれば、まひて駒をとらへ見むとて野邊ふかくゆきたるに、よくもとらへ來て  
 いと嬉し。いざめせとて鞍おきて引よするに、めうまなりければ、子ありて、母馬につき  
 てきたり。まだ乳をのむなりけり。さてこれはいかがはするといふに、母につきてく  
 べしといふ。え歩まじといへば、馬は生れて十日をふれば一里、廿日を経れば二里は  
 あゆむ。こは生れて一月を経たれば、五里六里はやすくあゆむべしといふ。あはれが  
 りて其おや馬にのりてゆくに、子もつきてくるいとかなし。その人にかはりて、  
 我さへに歩む身ならば馬の親をのらでも引てゆかましものを  
 貧しくておくる人なき別路につづき立ちたる道のべの松  
 中島廣足故郷に行くに別るとて

別

中島廣足故郷に行くに別るとて



浪速渦やがても歸る波を見よ君が往來を去るすなりけり  
熊谷常任江戸におもむきけるうまのはなむけしけるに夜にいりて月のかげいと寒し。

鳥

ももとり

ひな

鶴

群鶴

幾度もきみが別を惜しみつつたぐひもゆかぬわれや何なり  
はなち鳥はなたれしかとおもふ身に今一重なる空の大あみ  
事なくて木間に來ある村鳥のあさるばかりや志わざなるらむ  
打群れてさのみなきては百千鳥何れの聲も聞きわかなくに  
あぢきなき人おとすればあはれにも聲細めたる百千鳥かな  
生れ出でて程も經なくに雛のこはうちつけにあさるなる哉  
近づけばさらぬさまにて歩みのく山田の鶴も人うげにして  
さ波立つ水田にたてるまなづるのおし羽も寒くあたる朝風  
たづの親の舞習はしに雛つれて空に行交ふ今日の長閑けさ  
うち羽ぶく氣色もなしに青雲の空にうきてもきぬる鶴むら  
湯の原の小松が原はいと清したづもすみかを選びつるかな  
親か子か妻にてもあらむ覆羽の虫とりかはす小田のたづ群

雞

鳥

朝鳥  
夕鳥  
雀

庭つ鳥おのが羽がひの狭ければくくみあまれる雛の數かな  
心地よき聲にもあるかな庭つ鳥まづ打羽ぶきさてぞ鳴なる  
庭つ鳥羽打着するはぐくみをもりいでて子のあるが悲しさ  
木の實とも何ともわかず庭つ鳥あさり出でては子に與へつつ  
にはとりの互に雛の盗みばみ見ながら親はよそめのみして  
飛びにぐるつばさ頼みの山鳥人あなづりのわざのみぞする  
己が身にまがふばかりもなれる子を猶はぐくめる親鳥かな  
ただ一つたてば皆たつ友鳥さてこそ思ふどちにはありけれ  
よそよりはいづれもおなじ村鳥おのが妻こそ夫も見知らぬ  
まだしくもまだ見ゆる子を親鳥飛習はしにさそふなるかな  
生駒山みねきはだちてさやかにも明け行く空を行く鳥かな  
荒津瀉あれたる風にむかひても歸るはかへる夕がらすかな  
雀の子親にかはらずなりぬれどまだしき姿なほのこりけり  
居ならべる夕けの時にうちむれておのれもつどふ庭雀かな

さ ぎ 多多羅川河の洲崎にたたずみて長居の鷺のえものなげなる  
 人の身にまたくかはれる事もなく夕けに出づる軒のむら鳩  
 おのがどちおもしろからし山鳩の今朝の共鳴き聲を揃へて  
 もろともに聲をそろへて山鳩のえもやめられぬ夕暮のこゑ  
 たたら川満ぬる潮の引もあへず洲崎にきゐる庭たたきかな  
 庭の池の汀に來ゐる石たたきなゆゑ石をたたくなるらむ  
 さざき住む庭の垣根は荒れたれど結むすかへ難み任せてぞ置く  
 いとながき日を寐くらして梟の寢覺にぞ鳴く夕ぐれのこゑ  
 さへづれる聲いと細きこがら哉さばかりにても鳥の數かも  
 板橋の上にもれゐるむくどりのむくかたかたに心あるらし  
 耳づくの耳とがましきすがたかな何を梢に聞きてあるらむ  
 かはせみの水におち入る音だにもたえてきこえぬ夕暮の宿  
 まばらなる柳が枝にひよ鳥の景色ばましきをりどころかな  
 追はれきてとなみにかかる群鳥のちぢの聲きく我ぞ苦しき  
 網 柳 閑 角 白 小 梟 鳩 山 雙 鳩 さ  
 間 居 鷗 頭 雀 鳩 鳩 鳩 鳩 ぎ  
 鳥 鳥 鳥 鷗 翁 雀 鳩 鳩 鳩 鳩

渚 衆 市 かも 馬 牛 虎 狙 犬  
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥  
 むれて鳴く沖のす鳥の様々にいづれの聲かいつれなるらむ  
 定まれる道の空にもあり顔に山かたつきてゆくあささかな  
 木立なき市にも住めば住み馴れてのきの瓦にひよ鳥の鳴く  
 とりあたふ物さへなきを行く船のあと慕ひつつくる鷗かな  
 波の上に身をなぐばかりうち入りてやがて靜にうく鷗かな  
 田をすきて引返す間の暫しだに草はむ駒のいこひなむとや  
 野べ遠くかけ重なりて行く駒は道をれてこそ數も見えけれ  
 ぶぶぶにまが引く小田のことひ牛うたれぬ先に歩めと思へど  
 初はつに來て大津の大路けふ見ればよくも牛には生れざりけり  
 大津牛のあへぎあへぎて見苦しく何の報にかくはうまれし  
 用ゐねば虎も猫なる世の人をかたちのみ見て定むるが憂さ  
 おのがゐる枝のゆらぎに身をはねてとほき梢にわたる山狙  
 人よりも猿の舞こそあはれなれいかに鞭打ち教へたるらむ  
 かへりくるわが足音を聞き知りて出づる犬の子何與へまし  
 雑  
 九三

猫

わが宿を宿にて住める迷ひ猫いかなる人にあかれ來つらむ  
 衾さへいと重げなる老の身のぬるが上にもぬるこねこかな  
 親の身にのする子猫のおとがひも現なげなる身の寝様かな  
 草の實を吾身につけて猫の子の何ともなしにあるがわりなさ  
 つかれたる老の親猫仰ぎ寝ておのが乳房を子にまかすなり  
 いかばかりふりたてぬとも蝸牛角おそろしと人の見ましや  
 奥まれる家をぞもたる蝸牛わがあさましきふしどには似ず  
 雨ふらぬ木葉がくれのかたつぶりいつ引出づる車なるらむ  
 ゆくゆくと見ゆれどおそき蝸牛いくかの道の垣ほなるらむ  
 そよといふ笹のさ音に引き入りてなきがらがほになる蝸牛  
 行きがたき梢をゆきて蝸牛いとむづかしきみちごのみかな  
 年を経て家離れ得ぬかたつぶりはなれぬ家は己れのみかは  
 はちす葉のうへに今朝ある蝸牛こはいかさまの佛なるらむ  
 黄昏の軒のつまゆくかたつぶり日くれ道のみ遠げなるかな

蝸

牛

あきつ

蜘蛛

蓼

魚

鱗

飛

白

魚

かろき身は分ちもなしに打群れて上に下にも飛ぶ蜻蛉かな  
 旅人の道ゆく笠の上になににあなづらはしくゐるあきつかな  
 夕暮のいそがしげなる市人に交りあひても飛ぶあきつかな  
 手ふるれば身じろぎもせぬささがにの死にたる様もせまほしの世か  
 ゆられつつ風にさ渡る蜘蛛のいの危きわざのせまほしげなる  
 何事もかしこまるべき事なきにおき手がましきひきがへる哉  
 潮先に行くうろくづの童どちをどりくゞてさもやうれしき  
 行く川の浅みに集ふうろくづの身にふさはしきをり所かな  
 餌につきて命失ふうろくづを人よりほかにおもふなりけり  
 おのがひれ翼をなして飛ぶ魚の沖のせごしに過ぐる一むれ  
 のぼりえでかごに入りたる白魚は水のおとせる命なりけり  
 つくしの海ちかき川に、白うをといふ魚、春のはじめより川上にのぼる  
 をとる。其やな、水のいたく落つる所は、ちさき魚升ることをえず、故に淺  
 みをたどりて升るに、すこし水勢あるにうちおとされて、かごのうちに

龜の畫に  
貝

流れ入ることなり。このうを畿内などにはあることを見ず、佳品なり。

何をして我身あらまし龜の世のその萬世をあたへましかば  
 皆人に拾ひとれとし言はねどももて來ておける波のよせ貝  
 手に取て空しと捨つるうつせ貝みな世中はかくこそ有けれ  
 いづくにか我身きぬると思ふらむいちにまるべる奈多の蛤  
 波風にうちさらされてみなし貝なにの心もなぎさにぞよる  
 まけてかつ心は無しに川海老の肱のみはれる此世なりけり  
 川岸のあし間のかにの張るひぢもまけじ魂あればなるべし  
 小倉人までつく様のおもしろさ我さへ船をとめて見るまで  
 いろいろに様様に木のおひ姿あはれと見るにあかぬ山ざと  
 ねたる木も船木にきるを老の身のふしたるままに今は幾年  
 庭の面に落つる櫃の實いちひの實まるびうせても世を遁ればや  
 夜すがらの風のたまもの捨ひてむ木の本ごとの松の枯枝  
 なにの木も下枝ぞつらき情なくおつる雫にうたれのみして

木葉  
松

思ふことなす事もなき夕ま暮うごく木葉にめをぞとどむる  
 根をあげて横にふしたる岡の松又起つべしと思ふ世は無し  
 さきおひてここの人の過しよりあと寂しかるあらら松原  
 目の前にきらるる柚の斧の音も聞くや聞かずや立てる山松  
 生ひなみて行くけしきなる小松かな磯の洲崎のあらむ限は  
 洲崎へと立ちはしりたる人顔にならべるものかよさの濱松  
 人通ふ道のながては並松のならぶすがたも行きがほにして  
 老ぬれば松の葉さへもおのづから打すげみたる面顔にして  
 高松の梢つらぬき生出でよかげにしあらば千代もうれたし  
 世中に靡きげもなき一つ松そしらるべきももとよりぞかし  
 庭松の作りこしらへ何事ぞありのままこそあらまほしけれ  
 めをのごと見ゆるもあれば嶺の松一本離れてあるも有けり  
 生ひ立てるところひきくて谷の松嶺の草にも及ばざりけり  
 かくばかりとどろき落る瀧の音を靜かに聞きて立てる山松

松 枝 松が枝のとゆきかく行きくぐりあひて行方を見れば寂しくもなし  
 松 子 けさ生ひてまだ種かづく松の子は幾年経てか雲かからまし  
 松 葉 思ふどちあなた此方のさだめなくねたるが如もちれる松の葉  
 待 人 こぬ人をわがたちまてばわが如く松さへ共に並びぬるかな  
 野村貞則貞一さいき常貞など語らひて、いかづちの山にまうでける時、かしこに二夜三夜  
 宿りて歌などよみけるに、松のたてりけるをよめる。

杉 人にこそかはらざりけれ山松もおのが友どち立ち並びつつ  
 ますぐする杉の風折世の中に曲らで立てる志るしとぞ見る  
 おのれのみ高き願のありがほにただそびやぎて立てる杉村  
 いまはただおのれまかせにつまれねば葉廣になれる門の桑原  
 心のみたかをの山のなら柏ならぬことこそなさまほしけれ  
 おひたてばさられさられてくぬぎ原生立つ時の無きぞ悲しき  
 人知れぬおどろが中の落栗のなかなか生ひて丈だちにけり  
 かれながら梢に残る栗のいがの離れがたきは此世なりけり

櫻 欄 板 竹

竹の子 紆 篁

枝にては怒らしげにも見え乍ら殻を出ぬれば手まさぐりのみ  
 いで聞けと音もよほせる景色してすすろ立たるすろの亂葉  
 山松のいたさく音のあぢきなさ千歳もちぢにきり碎くやと  
 あたひにもなる時なくて吾園のやせたる竹の世の寒さかな  
 情なく子を取られたる吳竹のおや寂しくものこるけさかな  
 あぢきなく子をとらるるも知らずしてさも親げなく立てる吳竹  
 貧しさは子の子の末もかからまし我やせ藪に生ふるくれ竹  
 吳竹の子はいづこにか生ひ出でむ己が在かを己れ知るのみ  
 なにとかや人ごちして親のもと引はなちうき園の竹の子  
 かりそけし園のたかむらおやなきも子は生ひいでぬ所所に  
 など早く老となるらむ筍の子は子ながらにあらましものを  
 童こそいたくほりすれ吳竹の子はこのどちや思ふなるらむ  
 世中に苦しむ我やいたづらに生ひ曲りたる木根いはねの竹  
 たがすめる庵と知らねどなつかしく笑ふ聲する竹むらの奥

小竹原 年を経てすめる山邊のささ原にこの頃知れる道もありけり  
 松竹 松もいはず竹も言問ふ様ぞなきさて千代へては友も友かは  
 雨後松竹 珍らしき夜のまの雨のうるほひに松と竹との今朝の色はも  
 草 一つ葉のただ一つこそをかしけれ幾葉も出でば常の草木を  
 枇 人のみも木の實草の實おなじくて枇まじりになる此世かな  
 さりともと思ふことありつるに、ひつぢを見て、

棗 吾 果もなき軒の雫にいつまでかうたるるつはの一葉なるらむ  
 芭蕉 蕉 竹むらに生ひ交れども芭蕉葉の猶さながらの廣葉なりけり  
 菜 獨 活 身をよきて人のかよへば芭蕉葉の心のままに廣葉なりけり  
 菜 獨 活 世の爲にならずと思はばかくやせむ我身に似たる苑のま引菜  
 芋 豆 うどめほる谷の底なるをとめども稀には嶺の往かひも見よ  
 芋 豆 はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきて在けれ  
 芋 豆 さや豆のうちゐただしき並びざま我身のなりぞくらべ苦しき

零餘子 わりて見る度に面白いいつも並べるさまの同じ莢豆  
 蕪菁 時くれば脆くぞ落る山の芋のみはたが身にも變らざりけり  
 瓜 風寒くなりぬる圃の土の上にみを現はしてゐるかぶらかな  
 蓼 ね ぎ あまりにも赤裸なる畠の瓜かれ葉のかげもすくなげにして  
 ね ぎ つくづくと見れば面白し我園のひともしのみの一つ一つに  
 かたばみ ものげなきかたばみ草のやつれ葉のふるれば手にも種のちりきて  
 くずのみ はふ葛の咲あつまれる花のあとに又其如く實もなりにけり  
 茨 いばらさへ花の盛はやはらびて折る手ざはりもなき姿かな  
 萍 ながれくる水のうきくさ友をえて一つところによどむ川岸  
 蘆 程もなく生ひやはらぎぬ蘆の芽の角のぐみてこそ昨日見えしか  
 蘆 枯ぬるはさながらおきてあしの芽の異物がほにおふる頃哉  
 村山漢古がもとに消息しけるついでに  
 風吹けば汀の蘆もそよぐなりわがつれづれに何をいはまし

岸 蘆  
尊 蓍  
衣 苔  
難波にて  
繡  
傘  
破 笠  
鐘  
履  
破 笠  
鐘  
晩 鐘

岸遠くさせる夕日のかげうけてすすしく見ゆるあしの本立  
けさは三つ昨日はふたつうきぬなは寂しき池の心葉ぞかし  
そこにしも何のゆかりか知らねども苔生ひそむる庭の岩角  
あさ衣かどかどしくもくせづけてなよび少く見ゆる世の人  
あはせては又ときはなつ古衣かくてぞ春もあきも經にける  
なつかしきわがふる郷の名にしおふこれぞ筑紫の博多織衣  
表のみめでたく見えて縫物の裏むつかしき世にこそ有けれ  
君が世は山の陰さへみやこびて雨に出でくる谷のからかさ  
隠れ蓑隠れ笠こそもたらねど人知れぬ身をたかしとぞ思ふ  
軒端おつる雨にひしげてうたるれど昔おぼゆる竹の皮がさ  
二つづつならぶあしだの何處にも獨はゆかぬ契をぞおもふ  
海ごしにいと音ちかしはこざきの神の御幸のあかつきの鐘  
あけ渡る空清げなる鐘の音におきいでて見て又もねにけり  
いつよりか入相の鐘はなりつらむ心づきたるはての一こゑ

燈

ともしびを友かと思れば今一人うしろにゐたる影法師かな  
ところせきねやの神たちましませば朝をぐらしと火を奉る  
わが如く果を果なるものならで消ゆればともすねやの燈火  
かかぐとて闇になしたる燈火のわれから罪もつくる此世か  
かかぐるに中々きゆる燈火のすておく方ぞ世はまさりける  
かかぐればわが居眠の燈火もめを開きたるけしきなるかな  
かかげたる時のみ明し燈火も我ぬねぶりにねぶりとぐひて  
うしろにも倒るばかりの居眠を咎めぬものはともしなりけり  
ともしびの消えて思へば我もなく心ばかりぞ残りがほなる  
火をけせばありつるものも一つなし我身に殘る心のみして  
燈火と我とは儚<sup>はな</sup>なよひひにもものもえいはぬ業くらべして  
子を寐する親もねぶりにて燈火の獨さやかにふくる夜半かな  
宵々に同じところに見ゆる火の晝はいづれの家とわかずて  
なにごとをいへどこたへぬものながらわが歎には動く燈火

孤 船

燈

中々にくらくさびしく灯火のまひろきいへにただ一つして  
 今去ばし近づくまでとおもふ間に帆おろしそむる湊入の舟  
 西吹くと思ひもあへず阿治川の川瀬をのぼるかすの船の帆  
 木津川にあぢ川に入る船の帆の行く方わかすみよしの沖  
 心なきものとおもへどありがほにならびをるかも小舟大舟  
 水だにも入りぬばかりの船ばたの危ききはぞわが世渡りは  
 たび人のいかにのりてか淀船のとまのうへなる數のすが笠  
 何の風ふくかと思れば港よりまともにのぼるにし川のふね  
 博多へと帆をむけかへつ也良が崎のこの尾端を廻るとも舟  
 磯近くおろす帆かげの其方より又入る船のおもしろきかな  
 おなしごとむかひあひつつ湊べに人めかしくもならぶ友船  
 心のみ張れる帆の如さきだててさのみはゆかぬ舟ぞ吾身は  
 帆をあげて沖に出で行く友舟のあと追ふものは心なりけり  
 磯近み帆はおろせれど船ぞ行くまかせはてたる風の名残に

難波にて  
 夜 舟  
 出 舟  
 湊 船  
 川 舟  
 米 船  
 漁 船  
 破 船  
 艦 船  
 網

大船のはしるへさきをあやふくもおして横ぎる海士の小舟  
 沖邊よりわが方さまにくる船のかはり易くも吹く帆風かな  
 あぢきなく帆風とられし友船のこころもゆかでなづむ此頃  
 目をとびて思へば今も浮び出づる奈多の入江の海士の釣舟  
 暗き夜は舟も見えねど淀川の水のうへゆくともし火のかげ  
 岩はなをやがてもをれずゆたにめぐり千船も同じ湊出かな  
 湊邊はあした賑し競ひあひて帆あぐるさぐる入る出づる船  
 乗る人も立てりながらに行き違ふ港の舟のことぞともなき  
 竹越しにのぼり下りの舟見えてながれたのしき川島のさと  
 あやふくもつみあまりたる俵かなわづかに残る舟の水ぎは  
 ゐながらも一人こぎをる蟹船のうら安げなる磯あさりかな  
 旅人のいのちすてつるわれ船の板にのりても遊ぶ海士の子  
 ぬれぬれていと重げなる友綱も波のうへ打つふねの朝かぜ  
 こぎ出でて見ればおもしろし筑紫瀉博多の海のそこ引の綱

雑



鹽 竈  
車 車  
風 車  
水 車  
書 筆  
硯 硯  
鏡 鏡  
顯 鏡  
枕 枕

汐がまに満くるうしほせき入て清く淺きがいふよしのなき  
むな車むなもといたき宵々のおもひめぐらし何のためぞも  
妹が背に眠るわらはのうつつなき手にさへめぐる風車かな  
みだれ吹く風にまよひてむかふ方さだめかねたる風車かな  
かつ見れば水こそ水をくみあぐれいく度となくめぐる車に  
いそぢ經て今日みる淀のみづ車昔のままにめぐりぬるかな  
いつよりかひらけながらの窓のふみ風ばかりこそ翫びけれ  
ともすれば投捨つべくも思ほゆる筆をばいかで取ならひけむ  
徒らにかずのみおほき古筆の用ゐられでも世にあるぞよき  
友とおもふ友はこの世にたえてなくわれたる硯一なりけり  
する墨の残り少くなるままに老のよはひのほどかとぞ見る  
中々にきよきに過ぎてます鏡おきある塵のあらはなるかな  
徒らにわが身フルゴロオトガラス水に虫ある事も知らずて  
うたたねの昨日の晝寐思はせてありしところにある枕かな

毛 羽  
羽 羽  
鳥 銃  
冑のかたに  
紙 鳶  
獨 樂  
こがね

いざと思ふあしたの床のおきうさに枕はなれて手枕ぞする  
いつもかく吾身にそへる肱枕むつかしからず取いづるかな  
世の中の治めがたきや是ならむ一毛ぬくにも身さへ動けば  
そめてきる人こそおとれ百鳥のおのづからなるおのが羽衣  
人毎に魂なくなれば身も朽ちて塵はく鳥の羽ばかりもなし  
白雲にはねうちつけて飛ぶ鶴のつばさも今は塵ぞはらへる  
寐鳥うつ夜半の火音におどろきて空に亂るるあしたづの聲  
とるものかとらるる物か二つなき首と一つの我がぶとこれ  
わらはべの枕のものとのかのぼり夢の空にや舞あがるらむ  
まふこまのよるぼはしくもなるを見て我もやがてと思ふ悲しさ  
童べの手まさぐりにも舞ふこまの目もまふばかり暇なの世や  
まふこまのめぐりめぐりて末途につかれ見えくる老ぞ悲しき  
手に取て見れば何ともいはぬ色の黄金は我を厭ふなりけり  
わりなしやこがねを見れば道の邊の石の佛も口ひらくとか

う つ は 民の家のさしびた極木葉は搔世はさまざまのうつはどもかな  
 年を経てなれしふせ屋の手とり釜手をとる者は己のみして  
 う す 隣どちひびきあはせて搗く白のおとあはれなる山もとの里  
 世中をめぐりはてけむ石臼のわれて残れるいさら井のもと  
 桶 人心くちて離れて桶の輪のわかれわかれになるがすべなさ  
 櫃 やがて又底あらはれてあぢきなし鼠もはめるよねの志ら櫃  
 梶莊子 はねつるべ操る業を厭ひては火も手してこそとるべかりけれ  
 俎 板 かず志らぬ魚の命は板の上のかたなの跡に志るしぬるかな  
 ふらすこ わが酒のかぎり見えたるふらすこに人の命も悲しかりけり  
 蕙 おもふどちむしろ敷きたる所さへ忘れて遊ぶ野邊のをち方  
 石 ゐのこにも弄ばるる玉銚のみちのいしくれたれに似たらむ  
 輕 石 水にだに浮くかる石のかるければ沈む時なき身の安さかな  
 い は ほ ゆきかよふ人には遠くよきさせて道のみなかに立つ巖かな  
 塵 拂へども立まふ塵の去りやらでただおき所かふるなりけり

酒 人なげにめの前をしも行きかひて塵さへ我を輕めがほなる  
 我身さへ同じ物なる世を知らでよそざまにのみ拂ふ塵かな  
 塵はけば清き眞砂もたぐひつつよきもあしきも一つなりけり  
 月のまへ花のもとにも聖とかいふものませば憂き事は無し  
 今日今日あらむ限はのみ暮らし明日の愁はあすぞ愁へむ  
 思ふどち限も知らずのむ酒のゑはでも酔る世にこそ有けれ  
 獨 醒 ゑひぬるを見ては笑へど唯獨さめたる人もをかしからずや  
 おもしろく酒に酔たる人のうちに獨さめては苦しからずや  
 たはれつつ酒に酔たる人のうちに獨さむるも苦しからずや  
 有 酒 なき時はなくて幾日か過すらむある日は酒のあるに過つつ  
 酒にゑひて川におちいりてよめる

水に身をはめても今宵おもしろき心は何のなさけなるらむ  
 何をかもおとしかせしと水みれば底にのこれる片われの月  
 大山經雄のもとにして、酒をのみける時盃をもちりける間に、いざと歌をこひければ、

盃にむかへばかはるころかな  
といへりければ、あるじ、謠のごとしといふ。さればとて、

むかしの人はうべもいひけり

禁酒しける時瓢にかいつける

今よりは酒をのますな櫻花おのが木かげにまとゐぬとも  
摘ためてほしのの里の少女どもこのめもむ日の盛なりけり

茗 神 祇 たてまつるともしの光あかければ神の心も去かぞあるらむ

忠 武士の手馴の弓矢ひとすぢに迷はぬこころたてまつらばや

歌 これや身のいける限の思ひ草さきの世よりの種と知らるる

今ぞ知るおのが心ははるけなで生ける限のなやみぐさとは

身におはぬことのみ言ていつも歌の心に恥思ひつつ

つまづき さきにゆく足のつまづき笑ふなりおくる人は過ちやなき

たがふ 我心いはば人にやたがはましへつらひなんも淺ましの身を

もぬけ ぬけたれど穀を離れぬ心地して猶うつせみの我世すべなし

たはぶれ 世中をただたはぶれに言ひなしつ心のうちぞまこと悔しき

さだめ こちといへばそちが勝れる心地してここと定むる方の無き哉

あをし つくづくと見れば變れる木々の葉をなべて青しと思ひける哉

仇 いきたるを殺さじといはば仇をなす虎狼も市に出でぬべし

形 烟ともつちともやがて消えましを暫し形のみゆるなりけり

影 わが影と思ふものから水底にあるはよそなる人ごちちして

幽 たのむ方いと狭げにも見ゆるかな吾身のかげになれる吾影

無き人のなしともなくて在顔にいつまで見ゆる姿なるらむ

鬼 ともすればいかり争ふ人の面のただ角なきや鬼にことなる

博多人は博多はえ見ずゐな人これをめづべし

所せくおしくくまりてたち並ぶ市の家居のめづらしきかな

達磨乘蘆葉 蘆の葉のかるき一葉にのりを得て心は風にまかすべきかな

ますらを 壯士の弓とはりたるをごころもうらがへりては涙落ちけり

歌 老ぬれどまた此春もさく花のちる花のともいひくらしけり

俗 人 人  
 賈 翁 賣  
 釣 翁 賣  
 瓜 賣  
 花 賣  
 市 女  
 蠶 婦  
 海 人  
 海 女

舌たゆくものいひ習ふたわらはやいひもかなへぬ今の歌人  
 月花に心うときもことわりによだけさ志げき人の世のなか  
 今年生ひの未だ實らぬよねをさへかねて賣かふなには賈人  
 釣りもえで歸る籠かごのむなしきをかるめがほにも吹く嵐かな  
 たらちねは米こめの料しゆをや待ぬらむまだ片荷だにうりもせなくに  
 かふ人のすくなき時はうりあるき八十の衢に叫ぶばかりぞ  
 さまざまの花うりありく花賣にならまほしくて見たる花籠  
 大御世はあやしきいちめ中々にみやび装ひえもいはぬまで  
 長き日をさへづりくらす市女ども杪にさわぐむら鳥ぞかし  
 中々に桑子かひてもいとなしに生れ合ひたる身の宿世かな  
 志かの海士の輕き小舟の世渡りに身をなさまくのほしき頃哉  
 ただ一人舟にある子のなく聲に底よりうかぶやら崎の海人  
 乳をのましめてまた海に入るとかきくいとあはれなりや。泣く聲ち  
 ひろの底まできこゆる、またあはれなり。

老翁

塵拂ふこころもなしにすべて世を其ままにしておく翁かな  
 おいの身のゆがみ衰へ年ふれば心もさこそなるべかりけれ  
 いつよりかおもて皺びて老のどちいづれも同じ友垣ぞかし  
 今は身に翼おひてもたゆからむすべなき老に成にけるかな  
 何事も聞えひがめて老の身のこと確かなるおもはくもなし  
 いつしかもわがとりなれて後手うしろでの老のすがたは誰に習ひし  
 今の身はよそ人なりな三十ぢにもわがならざりし昔思へば  
 皆人にわらひけたれて中々にまめだつ老のつぶやかれかな  
 何事かいひさして末はわすらるる老こそおいの心なりけれ  
 たがかしし物とはなしに假の世を返す時こそ近づきにけれ  
 老らくの古へがたり古へはおなじことのみありしばかりに  
 おいぬれどおとしあふさぬわが心今幾年かかくてあるべき

老來見來榮枯事萬事惟應一咲放翁酬

老ぬれば驚くばかり變る世もただ打聞きてゑめるばかりぞ

難波にて  
童

ふた俵三たはらをさへかたにあげて藏をいでいる若男ども  
幼なげも早なくなれる童さへ背におはるるや樂しかるらむ  
幼きもまた幼きをなつかしみ鳥の子いだくさとのたわらは  
童ども日に幾たびか泣くならむさもあつらへに涙いできて  
なにごとか遊ぶあそばぬいさかひも泣くぞ限の童べのとも  
中々におのが親をばさきだてて遠きあとよりゆくわらはな  
おのがかげ鏡のうらに尋ねつる童ごころよにくげなかりし  
幾ばくのおとりまさりも見えぬ子のおへるおはるるあはれなる哉  
何を見るめもめづらしきけしきかな羨しきはちご生ひの時  
耳にあててなづなの子ふる童どもさこそは我も昔ありしか  
泣くものは大人にならじなくものは柿も與へじ梨も與へじ  
けふ見れば少女になりぬ去年迄は一足しても飛しならずや  
何事と問へば答へずをとめども皆までいはで笑ふなるかな  
さかしらにわらひ語らひ大人にもわれなりがほの里の女子

少童  
女 謠

嬰  
子

おやこ  
妻 子  
子

あけぬれど親の心のやみのうちに朝いせさする家の少女子  
親も子も世の渡らひに隔てゐて死ぬる時にや來ても泣くべき  
諸共に住めばかしまし諸共にすまねば寂しうたて妻子ども  
親なけば子さへ泣くなり世中のせむ術まがなさも何も知らずて  
衣手に取纏る子の泣きながら親にひかれて行くがかなしき  
孫をはじめていづく

初春にいだきそめたるをのこ孫わが手のうちの玉ぞこの玉  
うまごの上をよみて江戸なる父のもとにいひ遣はしける

友  
おのれ  
身

た童のけづり殘せるかむる髪はつかに君が見るよしもがな  
ともすれば馴こし方に引かへて歩むよりとき片ゐざりかな  
懐にいつしかいらす成にけりわがおほしてし子の其子さへ  
かたがたに善さもあしさもありぬべし同じ心にあらぬ人どち  
わが身こそ我心にもかはりけれ己れといふは孰れなるらむ  
限なく世にありありて在の果思ひこそやれいかなる身と

ものげなき身を持ちながらともすれば**貶め**ざまに人を見るらむ  
 死にて又こむ世は知らず今の世は人々しくもなる覺えなし  
 貧しきは富を羨み富ぬればまづしきかたのおもしろげなる  
 折々はさらぬ家にも行きねかしいつより來ぬる身の貧しさぞ  
 ききすてて飯いひたく親の見ぬまにも聲の限に泣くうなわかな  
 打はへて常になりぬるかねおひめさてもうからぬ吾心から  
 いかづちの轟くほどの名なりとも何にかならむ心あらずば  
 味氣なく物もふよりはまどろまむまだ一時はぬるまあらまし  
 老の身のいだけるひざをあぢきなく幾度放つ眠りなるらむ  
 ぬるまこそあやしかりけれ魂のなきにひとしき骸かたにはして  
 さめなくに去ひて覺させる轉寐の心は未だ寐てこそありけれ  
 ねぶりつつ照る日にあたる水際の鷗におなじ老のわざかな  
 ゐねぶりは獨ある身の業なれや是にまされる事なかりけり  
 村雀ひさしにあさる音さへもいつよりききし朝いなるらむ  
 うたたね  
 睡 覺  
 あさ い 睡  
 村雀ひさしにあさる音さへもいつよりききし朝いなるらむ

寐 覺 海山のとほきながめの夢さめてひろばかりなる床の上かな  
 ゆ め ねても夢あても夢なる老の身はやがて現もなくなりなまし  
 おのれをさなかりける時家につかへりし和平といふ老人、今はなくなりしかど、ある夜  
 の夢に、かやのうちにありて、ともに歌などよめるとみてけり。たにざくの上に、善惡不  
 二とかきて、  
 何をよし何をあしとか定むべき朝よひ毎にかはる世なれば  
 おぼつかなきうたなれど、夢にみえし歌なればそのままにおきぬ。

心 時に移り人に去たがふ心から身は愚かにもなるかとぞ思ふ  
 わがこころ人の知らねば人心われもえ知らじ知ると思へど  
 大方はひとにそむきていひぐせに左といへば右とこそいへ  
 あしからばあしといふべき人の身をわざとはなくていひけつが憂さ  
 一筋のかたくなにしもなりやらで身は様々に愚かなるかな  
 そなたにはよくも離れてあるものを又惑はするうたて市人  
 みな人のひたおもてにも向きあひていかで偽る心あるらむ  
 人 心  
 思惟不一  
 欲 一筋のかたくなにしもなりやらで身は様々に愚かなるかな  
 偽 みな人のひたおもてにも向きあひていかで偽る心あるらむ

世

何となく語らひいづるまめごとと笑ひ崩すは今の世ぞかし  
 樂しきは苦しき中にありといへどあるにもあらで憂世なりけり  
 末の世といつより人のいひ初て猶世の末にならぬなるらむ  
 世の中を夢かと思ふうちにもまた酔も交りてさめがてにする  
 かしましき此世後の世遠ざけてかけ離れたる住處をもがな  
 吾身のみ憂しともいはじ世の人の落あふれたるいくらなるらむ  
 皆人のうしとしいへばうき方に世も靡きよる物かとぞみる  
 何事も後の悔こそ術なけれふたたびきなむ世にしあらねば  
 今よりは今年よりはいひながら幾ばく経ても安げなの世や  
 夢とのみ見ゆべき此世中々にまさしくつらき事ばかりして  
 末の世の頼もしからぬ人ざまにならじと思へどなるぞ悲き  
 我身こそ何とも思はね妻子等の憂してふなべに憂き此世かな  
 よそめのみもて隠されて世の憂め見てみぬふりもあはれいつ迄  
 世の中の人の衰へいつもいつも同じことにてきくぞ悲しき

うき世  
歎世

世情

庭に出でて木葉などはらひける時に世中のことなど思ひ出でて

けふといふことを

世の中の人のこころは山風の吹きくる方にちりはらふなり  
 けふけふとすぐせる今日の今の間も再くべき時ならなくに  
 年を経てなきに去るきをよき事のあるべかしくも思ふ行末  
 志な高き事もねがはず又の世はまた我身にぞ成てきなまし  
 いく程と命の終知るべくは知るやまさらむ知らざるやよき  
 たしかにももたるがほなる命かな露に泡にもたとふる物を  
 短くて世を去らむとは思はねど千代とは餘り久しかりけり  
 身におはぬ人の數々去たがへて行くをかぎりの寺まうで哉  
 睡りつつ汀の鴨の見るめにも身は恥かしきいとまなみかな  
 今やうきすぎし昔やつらかりしよき事のみもなき此世かな  
 あけぬれば世の中ざまに又なりて夜半にも違ふわが心かな

未來  
思來世  
命  
千歲  
死路  
述懷

とかくしてこしらへわびつ吾心頑がたなしきがもとの身なれば  
おのれさへ骨身に背く世の中を人なつけてと思ひつるかな  
世の中の人にことなるほこりより妨げおほくなる吾身かな  
世の人に畏まるとも何ならむ物はかなびて在るぞまされる  
いつの時定かにならむ侘わぬれば唯あけぬ夜の心地せられて  
うき故に憂世といふも知りながら何にためたる歎なるらむ  
ともすれば愚なる身も忘れて己がくといはれつるかな  
水底の魚くひもちて浮ぶ鵜も身の爲にこそ身をも去づむれ  
何事のただ片はしを知りそめて心得がほになれるなるらむ  
唯一人われをよく知る人しあらば千々の誇りは土塊つちかぞかし  
今日ぞわが限といはば今までに何を志いでし此身なるらむ  
水も木も音する宿にひとりゐて聲なきものは我身なりけり  
とび虫の飛び逃げぬべき事もせで世の塵にのみ交りをる哉  
空高きころなければかひもなく堤を見たるみじか人のみ

## 折にふれて

目に塵の入りしばかりに天地の心もわかずなるこの世かな  
世の中はちぢみの布のかたかたに心そむきて平らげもなし  
五十ぢかと見るまに六十ぢ近づきて三年四年は一年にきぬ  
年の數かぞふる程はたがはねどまだ七十ぢの心地こそせね  
老ぬれば身も全まからず成にけりいかなる人かさしもなからむ  
古狸死にしふりする時だにもあるときはある宿のあけくれ  
すべもなく苦しき時に世のうさもなげなる人のゆけ語して  
憂世をばとく遁れゆく術まぞなき翼生ひてもあらぬ身なれば  
つらき世をとく捨ばやと思へども鶺あにかかれ鳥の身ぞかし  
物もへば心なげなる童さへわが身にそひてたはぶれもせず  
脱だるべくなりぬる身をば中々に時めかしても人のいふらむ  
貴人きにあらねばこそはやすく見れ花といへば花月といへば月  
この葉ちるやがてもあとに含みきて心弛ゆるびも無き月日かな  
花をまち月をば見ると伏庵の靜かなるまにいそがしきかな



二日三日ねたるその間にうたてしく物つもりたる枕上かな  
よの中に塵も我身もかはらねば輕めらるべきことわりぞかし  
よの中は鍛冶の相槌おのづから心合はではえこそたたれね  
こし方は憂き事のみ年月をそれならでなき吾えものかな  
おのれからそこに生れて畑も田も賣くひ虫は我身なりけり  
紅のすゑ僅にも摘むはなのうることにすくなもとめとめて  
何故か此世はうきと尋ぬればものてふ物の足らぬなりけり  
かからではならじと思ふ事もなく有の儘にてある吾世かな  
面白き晝寢の夢のさめやらでとほき彼世に行く身ともがな  
はかなさは何をか何にたとふべき唯世はもろき物集めなり  
行けばゆくかたに従ふ杖と笠これのみわれにつかへ人なる  
いくばくのうさにもあらぬ世中を術なき迄に歎きつるかな  
世中をかくもよだけく走り歩き何のかひにかなる身なるらむ  
あなたよりこなたを見れば此方よくあなた此方に迷ふ心か

何事もやすくうちいふ世の人の詞にのみもいざなはれつつ  
志たがへば心も人になりはてて我身われともなきぞ悲しき  
ひとごころわざとがましく青淵の危き際をゆく世なりけり  
大御代はいとさ許りもなき物を世をうがりたる人癖ぞかし  
否といはば何かは否といはざらむ人のまにまにあらましの世か  
ともすればにごりぬ澄みぬ川の水世の人心さこそありけれ  
朝夕に貧しき宿は事かけておごるおごらぬほどにいたらず  
楨柱太きも箸になりぬべしあしきをさがとそぎにそぎなば  
人に物を吾やりたらぬ心から乞ふ身にやがてならむとすらむ  
さめて又ぬるを思へば朝宵も生れて死ぬる身に似たりけり  
いとまありて友なきときのともなれや夜の間は鼠晝は野鳥  
うかりけることどもありける時  
さりともと思ふ事のみ多けれど皆世のうさに打けたれつつ

さびしき時によめる

みる物もなきかと思へば吾門にいつも立ちたる松は在けり  
聞く物も無きかと思へば野邊遠く畑打つ音の幽かにぞする  
思ふ事なきかとおもへば昔よりうき年の暮ちかづきにけり  
ものさびしき時よめるうた

目の前に一つおちたる松の實の更にも落ず暮るる今日かな  
寂しさに手をのみくめる夕暮もをざさは露の玉をこそもて  
蜘蛛の糸にかかれる木葉數ふれば軒の松の葉梅さくらの葉  
世がはり 世中の變れるかひもなかりけり憂きは憂くしていよよ憂ければ  
世中の事どもを歎きて

永らへて我身有なむ程にだにいかに此世はうつろひぬべき  
世中苦しげなるをよきて野遊したる

野を廣み打いでて今日も遊びつつ袖打ふるに障る木もなし  
またある時は 今はとてうちぬる時は命さへわが身と共にのぶかとぞ思ふ  
世中うき事ども多かりける時

よそにのみいひ笑ひつる人事は我身の上にもたたくありけり  
世中はあらぬさまにしなりゆけど馴れてや人の驚きもせぬ  
人心あやしとみれば吾身にもうたがはるべき事はありけり  
心にはすてしものから我身世にあればありとて人も許さず

難波にありてよめる歌の中に

鄙ちひに生なてへつらふ事も知らぬ身は都ぶりにはこと違ひけり  
市人の行きかふ去げさ見あきては野山を思ふ朝よひのそら  
古里のすまひなつかし杜若かきのつつじもいまやさくかと  
雲間よりまたくも見ゆる遠方や歸らまほしきふるさとの空  
ふるさとおきて出でこし古枕あが歸るをや棚に待つらむ  
思ひ出でてもとのすみかに歸りなむ我身やいまは何の國人  
ある夕ぐれ鳥の飛ぶを見てよめる

數ふればここに住みても十年餘り天ゆく鳥の一とびにして  
大坂の豪富鴻池かしま屋など其外さまさまの金持どもとまとゐしける時

まな鶴の群れたる空に交りても身の嬉しさに鳴く雲雀かな  
殿村茂濟が竹林寺にての會 わらびの晝

をりとらで見ることまされ白露の玉まきいづる野邊の早蕨  
人をそしる俳諧

人心いらのいらだちあるは又なまこのなめら骨なしにして  
文久三年四月十一日、八幡行幸拜みにとて淀まで行きたりけるを、宿かす人なくていとわ  
びしきを、去ひてただの家を一夜を請てをがみけり。將軍家をはじめ、堂上残らず、在京の諸  
大名のいでたち花やかなる事いふもさらにて、鳳輦はおはしませず、引つづきてくる御輿  
にめされて、鳥羽いなりの御小休、夜五つ時八幡につかせ給ひて、その夜神殿にやどらせ給  
ひてふし給はず、明日還御まします由なり。此年頃、外國の船あなたなしがほなるを、うち  
わたさせ給はむの御祈ならむかし。

大和十津川戦争

男山今日のみゆきのかしこきも命あればぞをがみそめける  
世の人の心の中のただかひもあらはれ出づる十津川のそら

時世につきてよめる歌の中に

春くれば立いそがるる小田の雁ゆたに歩みてあらむ頃かは  
なには湯芦原狭き世になりてさわがしげさのまさる頃かな  
ここかしこせめ戦のうれたさに民は野がくれ山がくれして  
すみよしのかみはいかがはみそなはす異國船の沖の一むら  
亂れ行く末をも知らで豊かなる世に生れしと思ひつるかな  
ゆたかなる世をすぐし來て何とかや眞の軍まことともなし  
門はしる人の音にもおどろきて何かこころのさわぐよの中  
世中はいと驚きしことだにも笑ふばかりになりけるかな  
安かりし御世にたぐひてことざまに俄に物のむづかしき哉  
顧るあとまぢかくて大御世のゆたけかりしがいまぞ戀しき  
昨日まで戦ありつる海原も立てるかすみは長閑けかりけれ  
征人折花といふことを

樋の口の花はいくさもせぬものを數多痛手を負すなるかな

狂 歌 虫の身は御時節がらもなかりけり晝ものみくひ夜ものみくひ  
萩原廣道が四十賀に

わくれども限知られぬ芦原の千代のかずこそ君が千代なれ  
野村望東六十賀

海山者雖隔千里外祝言者不變在敬里  
ある人の六十賀に

わづかにも唯一めぐりめぐりこし六十ぢは人の老の數かは  
八月すゑばかりにやありけむ、言喜東都にして先月二十二日むなしくなりぬと、友だち  
のもとよりいひおこせければ、

別れつる事をも知らで道遠み猶世にありとおもひつるかな  
法名のみをかきてありけるを見て

昨日まで待ち渡りてし旅人は名のみ歸りぬあらぬ名にして  
日數すぎゆくまに  
うき世こそわりなかりけれ籠りゐて心の儘に歎かれもせず

とぶらひわざしける時、野村もと子のもとより女郎花を折りて、「君とわが樂しと見てし  
女郎花思ひもかけぬたむけにぞをる」貞のぬしより、「うつせみの世のうきことにあふ  
時はわれ一人とも思ひつるかな」これは貞のぬしの三男ゆゑありて東都にしてゆくへ  
知れずなりたるを、其ほど言喜みまかりければ思ひあはせてよめるなり。かへし。

吾もわれ一人とのみぞ思ひてしけに歎くらむ人もある世を  
緒方洪庵章一周忌追悼

櫻花汝より老いし我が身さへまだあるものを先に朽つらむ  
野村貞則が一周忌のとぶらひにとて向陵にもものしける時

君まさば今日のまとゐの何處にか打語らひて居てかあるらむ  
池上吉兵衛祐正一周忌

君歸るときもなくして徒らになににめぐれる月日なるらむ  
櫻東雄追悼 寄花懷舊

ひとめみし一木の櫻ちりはてていつか昔になれるなるらむ  
二川の大人なくならせ給ひし頃は江戸にありけるに、今年三年にならせ給ふに、

いつの間に三年へにけむ東にて驚かれしは今日にぞ有ける  
酉二月十二日上寺村元祖大隈主水助治言二百五十回、同村教念寺にて法事執行しけるに、  
すなはち此寺主水助開基にて代々子孫なれば、住僧よりいひ遣はしけるに、此頃の病に  
てえゆかず。

うちむれて魂祭する人かずに心ばかりは入らむとぞおもふ  
元治元年三月すゑつかた中風をやみて

死出の山近く見え來て悲しきは外によき路もなき身也けり  
病にかかりてよめる歌の中に

昔べにわが身かへりて童べのあゆみならひになれる老かな  
若ければ物すみやかにとのひし心もにぶき老のはてかな  
缺けながら猶残りる硯こそなれば死にたる我身なりけれ  
我身をや死出の山松待ぬらむ千代も八千代も其方にてこそ  
童にもまことなりぬる老の身はありき習ひの時もありけり  
くまもと國手にまゐらせける

ある時 逢見ればやがてよくなる心地してまことくすしき君ぞ此君  
死出の山こえこえて行くさきまでもわが敷島の一すぢの道

年のはじめよりいたくわづらひてふしてのみありけるに、中村石玘のもとより、梅の花  
のいとをかしきを見せけるに、

かすみ立つ春べになれば、野に山に梅こそにほへ、たが里もさ  
かりときけど、園生にもにほふといへど、病める身は見むすべ  
をなみ、夜もすがらなげきあかしし、敷たへの枕がもとに、ここ  
ろありて人の見せける、梅の花ただこの春は此ひと枝のみ  
霧こめけるあしたに、

あさ戸あけて田のを見れば、ほどちかくあぜ行く人の、人影  
の見ゆとはすれど、そなたよりくるかもわかず、こなたより  
ゆくかもわかず、そのかげの朝ぎりのうちに見ゆばかりして

みぞれ みる雨に雪かもまじる、ふる雪に雨かもまじる、ましるきは積  
れる雪を、軒端よりおつるは雨の雫なりけり

大隈言道集 終

の僕<sup>コレ</sup>カリニ木<sup>ノ</sup>偶<sup>ノ</sup>哥<sup>ト</sup>号<sup>ケ</sup>タル物アリ、魂<sup>タマシ</sup>靈<sup>シ</sup>ヤリニ姿<sup>カタ</sup>モ意<sup>ココロ</sup>モ  
 昔<sup>ムカシ</sup>モヤリ、カレ歌<sup>ウタ</sup>ハ千萬首ヨメリ、氏<sup>ウヂ</sup>箆<sup>ヘ</sup>ニテ水ヲ扱<sup>ア</sup>ゴトシ、  
 當<sup>トキ</sup>是<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ウタ此<sup>ノ</sup>箆<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>漏<sup>ス</sup>スリヤシ、シカレニ是<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>偶<sup>ノ</sup>何<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>セバ  
 亦<sup>モ</sup>入<sup>ル</sup>キタラシ、僕<sup>コレ</sup>ツラク田<sup>ノ</sup>舎<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ウタヲ見<sup>ル</sup>ルニ、木<sup>ノ</sup>偶<sup>ニ</sup>テ世<sup>ヲ</sup>  
 終<sup>ル</sup>人多<sup>ク</sup>シ、古<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>師<sup>ト</sup>ヤリ、吾<sup>ノ</sup>ハアラス、吾<sup>ノ</sup>ハ天<sup>ノ</sup>保<sup>ノ</sup>ノ民<sup>ト</sup>ナリ、  
 古<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ニアラス、ミダリニ古<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ヲ執<sup>ル</sup>スレ、吾<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>何<sup>ノ</sup>ハ何<sup>ノ</sup>兵<sup>ノ</sup>衛<sup>ト</sup>、  
 ナル事<sup>ヲ</sup>シスレ、意<sup>ノ</sup>ノウハベノミ、大<sup>ノ</sup>臣<sup>ノ</sup>ノ如<sup>ク</sup>ナリテ、ヨウウタ  
 ナブ、尊<sup>ヲ</sup>キコトシテモアルベケレ、氏<sup>ノ</sup>ノ賈<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>冠<sup>ヲ</sup>袍<sup>ヲ</sup>キスレ也

# ひとりごち

## 大隈言道

○僕われかりに木偶人形歌と號けたるものあり。魂たましひ靈たましひなくて姿も意も昔のものなり。かかる歌は千萬首よめりとも、籠かごにて水を汲むが如し。當世いまの人の歌、この籠かごを不し漏はは少なし。まかるに是木偶、何年せば靈たましひや入きたらん。僕われつらつら田舎人の歌を見るに、木偶人形にて世を終る人多し。古人は師なり、吾にはあらず。吾は天保の民なり、古人にはあらず。みだりに古人を執すれば、吾身何八、何兵衛なる事を忘る。意のうはべのみ大臣の如くなりて、よむ歌さぞ尊たがきことにもあるべけれども、そは賈人の冠袍を着たるなり。全く真似にて、歌舞伎を見るが如し。或歌よみに喩して曰、真似ならば易き物、歌舞伎役者も菅丞相になると。まこと菅相公たらんと欲する者、俳優の如くせんや。又古歌の如き歌よまんとする者。藝の如くせんや。善人たらんと欲せば、先づ心よりはじむべし。善歌よまんと欲せば、先づ心よりはしむべし。心を種として、吾が歌を詠するに、俚心俗意、もとよりにて、いまだ風姿髣髴たる事を不し得、年を経月にわたりて、漸しにすこしつづつ古人に近づく。全く不し似を以て古人にちかすとす。古人によくにたるを以て古人に遠しとす。古歌を學ぶ道のいとくはるかなるを知るべし。

○歌は身分と、別に引はなつものにはあらず。されど今人の歌は、人事と別ちて兩途となると、頼山陽が云し。また、歌を以て歌とすといへり。吾かねて、歌と言ふ物をよむべからすと云ふ、此謂なり。

○強て雅びをかざり偽はらば、後人に天保の御世をくりますなり。後より顧みても、天保年間は、如斯ありしと、歌の趣にいちじろく見えんこそ、歌の正道にてあらまほしきわざなれ。もとより今の天保御世、昔にすぐれたる事多ければ、偽りかざらば、たまく眞の事あらんも、偽におちて、口惜かるべし。昔太平記著作の時、足利直義、撰者玄恵に語て、自らの悪事をしるせる所は、焼失すべしとありしに、玄恵が曰、焼べからず、さあらば後代の人、又焼失の咎を記せん、願くは公の政道正しからん事をと言ひし、まことにさあるべきことなり。

○この木偶歌を見るに、詞心ともに昔の人の物なれば、いとあはれにめでたし。今人吾意をよむは、吾物なれば、歌がらあしく、詞思ふままにならで、あるは變體となり、ことやうなる歌となる。今の新刻鮫玉集などのうち、ことやうなる歌多し。これは木偶歌よりいと劣りて見ゆれど、未熟のなすところなれば、年を経て直に至るべし。かの木偶歌は、是よりもはるかに淺學にて、いまだ己が歌詠んとする礎さへ無きなり。まことに難き道なりし。この木偶歌、古への集に入ても、まがふ物なり。さあるべき理なり。然るに古人にまがはば、夫にてよろしかるべきか、後世より見てわかちなくば、夫にてよろしかるべきかと、心づきしより、昔の集どもをよく見ると、口眞似の歌も見えぬにはあらねど、すべては新正なる物にて、吾咏とならぬはなし。秀句佳句の目ざましき歌は、よく人の目に立て、新正なる事見ゆれど、何のこともなきやすらかなる歌に、新正ある事後人よりは甚見えがたし。三代集を始め代々の集の歌の内に、かく何の事もなきやうに見えたる歌に、新正ありて、吾物なる事を知らば、道にちかづきたりと思ふべし。吾心神の止ると止らぬとにあるべし。月花にも、目のとまると止

らぬあるべし。

百人一首

わたの原こきいでて見れば久方の雲居にまがふ沖つ白波

この歌、よく古體をよめりと、古人もいへり。かの形のみうつせる木偶の類ならず。場所たがへるを知るべし。萬葉詞のみにて作る歌は、心は今の卑俗にて、かの町人の衣冠なるを心づかでは、吾も古人になりたる心地すべし。靈魂を失なへる時なり。

桂園一枝

梅が枝に春と鳴つる鶯の行方も見えす雪はふりつつ

言道曰、一二の句調今少しと思ふ事あれどそはこゝに云がたし。

この歌いとあはれにめでたし。彼木偶ならず。されど木偶の歌よみより見ては、あはれなるのみにて、其場所かはれるに、見えぬ所あるべし。その差別、己れも十箇年ばかりこそ見出たれ。

桂園一枝の歌大ぬきの内、すべて在ふりたる事をよむべしと言ふは、初心に教ゆる一端にして、さるは初學の人、一ふしを言はんとする時は、忽ち調亂れ、理とほらざるに至るが故なり。此叟たちは是を學びてよし。されどまことは珍らしからず。ふりたる所をのみ學ぶべけんや。

○無情の物に、心をあらせて詠むが歌の例なりと云ふ事、あらぬ教ざまなり。何ぞわざと意をあらせんや。己が今日の言語に氣のつかぬ教へざまなり。心をあらせと云ふが、歌を作るよりの教なり。

ひとりこち



一首の上を不解してめくら咎めに咎むるはいかに。

○近世詞の延約のべちよめと云ふ事あり。これも前條に同じ事にて、同じくはノビチビミと云ふべし。世々の人已れ私に詞をのべたりちよめたりすべけんや。自ら伸たり、縮みたりするなり。近世の國學家、みだりに延約を云も、あたぬ事多かるべし。

○歌を咏む者は、冠を着たる心にてよむべしと云ひ教へたる人あり。これも道にとりて妨あり。さるべき理なし。貴人は貴人、下賤は下賤、世人は世人、隱逸人は隱逸人、老、弱、男、女、皆別々に己れ相應の歌あるべければなり。又稽古には、女になり、男になり、老になり、少になり、物にかはりて咏む事古今同じ。それは其かはりたる事を端書すべし。

○五雜俎と云ふ書に、畫中の人に書法を論ずる所に曰、畫に似せんと欲するものは、ここを去る事いよく遠しといへり。又曰、これはひとり書家のみにあらず、畫家、詩家、文章家、皆同じといへり。歌も又さる事なり。性は相近。習は相遠。

○周南峰之詩

閑閣風騷萬卷詩

拈花摘葉尙新奇

莫嫌句裏無唐律

唐句吟成不入時

この詩いかにも感ずるに堪へたり。されど新奇のみを求むるを、わざにして止まらんや。吾心の置所定まりたる上は、是よりこそ、己が嗟嘆と歌と等しくならんの場所に出たるなれば、今の歌よきこといまだすくなし。何ぞ

このまゝにてやまんや。

○己れが歌を卑しといふ人あり。下賤なればさも在べし。又異體なりと云人あり。さる歌もあるべし。皆未熟の致す所なれば是非もなし。然るに己が心を咏じて、古人に向はんの志ある人、此所を不<sub>レ</sub>過して、直渡する梯あらんや。己れいまだ其近道を知らず。凡て世中の諸道、近道といふ物なし。むだ道なきをこそ善とはす可き事なれ、此むだ道を経ずして行く事も、いと難き事なり。凡てさる人も世にあるべからず。菜摘み水汲み仕へてこそ、法華經も得べしと拾遺集にもよみたれ。木偶歌をよみて心を安んじたる人、己が心をよまば、忽ち卑しき歌出來、忽ち異體なる歌出來ざらんや。歌の道は公にて、歌は私ものなり。思慮を加へ、左右の善凶を顧て、さて其後に、云出る物にはあらず。物に觸れ事に依りて、卽座に感發する咏嘆なり。詞の近古などを撰む暇あらんや。今日獨言して嘯きあるくが歌の元なれば、歌を以て歌とするとは、天地のたがひあるを知るべし。京師香川景樹が云、歌は思慮を加ふべき物ならねば、いにしへに似せんとする暇あらんや、吾これを似せたらば、やがて飾れる僞のみ、又似せんとして似べき物ならんや、是を似たりと思へる、いとあぢきなし、今の大神世の風は、後の御世に移らん後こそ、あきらかには願頭かんづかられん、と言へり。まことに志かなり。

○鈴屋翁のうひ山ぶみに、歌の論あり。その論うたを作り物に許したる趣なれば、己はとらず。いかにも後世作り物に落たれど、其作ると云ふうちに別ちあり。根より歌、不<sub>レ</sub>作して出來る物ならんや。三十一文字の限あれば、自然にあらはれぬ物なる事は、論もなければ、前に云ふ自然のひとり言などは、今いはんとて、かまへていひ出る物にもあらず。自が誠忠よりふと言ひ出るなれば、自然の物といふべし。其獨言則ち咏嘆なれば、歌なり。是

はこれ作り物にはあらず。ここが歌の根元なれば、其意をすて、作り物に許しては、本意を失ふなり。譬へ未熟の内、いまだ作り物を爲ならふにも、此本旨を心がけんこそ、年を経て妙處にいたらん道はふみ別けめ。彼の初山ぶみに云へるが如く、後世に至りて實情をよめるは、百に一つも有難く、皆作り事になれば、作るべしと云ひて、此度は新體の歌、此度は古體の歌、御望ならば、いくつにても古體を作らんなどと云ては、作り物に墮落せり。凡てかかる事、歌の上にある事ためしなし。此度は何の體などかまへずして、近古の體、うちまじりて出で來るぞ自らなる。眞目なる時は、眞目なる歌出來、滑稽なる時は洒落なる歌、かの俳諧など雜りて出來るが自然なり。俳諧とて別に志るし集めたるは、撰集の時の事にこそあれ。又かの初山ぶみに云へる、今人實情のまよむをよしとせば、今人は今の世俗のうたふやうなる歌をこそよむべけれ、と云へり。是は譬へをよくえざる言なり。世俗のうたふ歌中々にあはれにて、作りものよりよろしき歌、いくつともなし。拙なげに人もおもふらめど、

曇らば曇れ箱根山晴れたとてお江戸が見ゆるではなし

など謠ふは、調も自らなりて、はた秀句ならずや。この秀句も、歌詞にもとめては、本旨を得る事なし。自然の嘆語にある事なり。秀句の事は後にいへり。

○俗人は俗を以てせずんば不<sub>レ</sub>尊、雅人は雅を以てせずんば不<sub>レ</sub>尊、事物好惡、雅俗によつて人情反覆す。野人の爭論は、野人の長などの判をよくきくべし。賢者の判耳に入がたし。君子小人自ら好惡を異にするなり。歌も達不達にて善凶ことなる事多し。月花雨露草木のあはれをも現に見知らず歌の上のみにて人の歌の吉凶を云はたがふ事あらん。

○初心をもて已達をうががふは大やう違ふ事多しと景樹もいへり。山のはに棚引しづむ白雲の上より出る秋のよの月。○わがうたよむ人ならては歌の論はしがたし。

○江府平春海が或人と争へる來復の文章に、さるあらそひがましきことはせじ、月花を見る身のいかで物あらがひは得せじ、といへる文あり。争ひがましき事は、せぬがよきは固よりなり。然るに此月花を見る身とあるが、なべて歌人は隱逸家になりなんとす。歌はさる物にては無し。前にも言へるが如、謝家は謝家、世家は世家、貴、賤、老、少、男、女、自らわかれて己がまに、歌あるべきなり。是は己れが知らぬ道の上なれど、去來と云ふ人の句に、何事ぞ花見る人の長がたな。といへるは、己れ言道が躬に似て、己れが意にはたがへり。何ぞ花見るは隱逸者のみのわざならんや。甲冑ながらも花を見るべし。明日の死を決したる兵ども、陣營などにある花を見れば、いかにあはれならざらん。今にも喟嘆の趣向出んとするにはあらずや。亦凱歌などにも、月花をなどかうたはざらむ。田廬などの農夫は、裸にても月を見るべし。こは皆世人のさまなり。隱逸家は、七部集月見せん伏見の城の捨廓。これは兵革をうとんじて無用なりと思ふより、その軍ありつる城の捨廓にてこちらは月見せんと云、わかちあるにはあらずや。亦、秋風やまらきの弓に絃はらん。といへるは、俳諧者流、隱逸家らしき句とも不<sub>レ</sub>見めづらし。なべての人、如意と言ふ物などを持たらんやうにのみなりてはいかが。此句は然らず。また、鴨なくや弓矢をすてて十五年。と云へる、隱居して年経たる昔時を鴨の聲に思ひ出でて、己れが今の身を思ふ、いとあはれなり。俳諧はもと歌と同じ意にあるべきものなるべければ、一つの門を立てば家の内せばくやなりなん。すべて風雅といふ事を隱逸家に限りたる名と思へるは、何も不<sub>レ</sub>知の心なり。

○歌は人情をいひて別に物なし。もとより前にもいへる如く、左右を顧て工夫する筈のものならねば、歌の道はかやうなどと云ふ事さらになし。皆人情なり。故に漢意なりとて己れが真心ならばいかげはせむ。佛意なりとて己が心ならば避くべきにあらず。漢意佛意をさけ、さて歌をよまば、自ら大御國風の歌も出来ぬらめど、吾國昔より儒佛を用ゐたまひ、今世人それにそみて生れたる民なれば、それを除くといふ事かたし。亦除かるべき事もあらず。何事も時の政にまかせて、左右の尊卑、事物の善凶も定まる事なれば、世にまかせて、此歌のさまも心得べきなり。其世のあやまりは其世のあやまりにて、歌人のあづかる所にはあらず。呼子鳥が猿ならば、猿にてもよし。わかり來らば其時よみもなほすべし。

○水鶏の門たたくとよめるは、もと人まつ人の心より、かの鳥のなく聲さへ、人の門たたくかと聞きなせるなり。さる心を失へる歌今の世に多し。つづりさせと云ふ蟲も、衣ともしき人の、秋の寒くなるによりて、蟲さへつづりさせといふかと聞きたるなり。二つながらその本意を失ひては、よむ意違ふべし。

○歌を頻りによまんとし、風流を去きりにせんと思ふは、花に面を付て見るにひとし。餘りに立入過て見えがたし。前に有地を取りて見ねば、花のあはれも、人のよしあしも、見えがたし。古人と立ならびたるおももちして、風雅をするは、これは湯の沸あがれるが如く、まことのとりとめはいとすくなし。そのわづか残れる所、己がまこと持前の風雅なり。強て風雅を作り添へたるは、的切なる歌も出来ぬ事なり。木偶歌と、眞の歌との境、此所に在べし。眞の風雅は己が本心を先として、月花の惜き情を悟り、杜鵑のおもしろからぬ聲も、あはれになり、霞をあはれみ、露をかなしみ、昔人のあくがれしも宜なりと、まこと知る時ぞ自らの風雅心には基つきぬべき。

唯歌は花月を譽はやすものと心得たるは、まだしき程の心地なり。

○博多福岡にすみながら、其地をよめる歌當世すくなきは何ぞ。博多とよめる歌、續風土記にも數々見えたるを、知らざらんや。福岡と唱へはじめたまへる名をおきて、福岡などと書く人、あらぬ心得なり。

○英一蝶が畫、徹書記が歌など、其世にて異體といへる沙汰あり。師に少しもかはらずものせんと思ふ人なるまじければ、然あるこそ吾物なるべけれ。今の禪宗も渡りこしはじめは、達磨宗とてあらぬ物の譬にもせり。無宗是宗などといひて、いと心高きものを、目なれたる物の異物なるには心づかで、新なるもの宜きをも、異物といひなす世なり。歌もまた然り。

○小倉殿人丹羽相馬といふ人來りて、吾にかたらひける時、まづある人の所に立ちよりて、己れが在所をたづねつるに、その主人、歌よむ人にて、相馬に問て云、君が歌は新體か古體かと。相馬いはれけるには、新體か古體かと問れては、いはんすべなきやうなれど、強ていはば、新體にてもあるべし、と言ひきと己れに語られたり。世に早くより、新體、古體といふこと、ややいひ來れども、今はさる詞いひがたき時になりて、物事ひらけたれば、問さまの不調法なる故、右の答あり。かの二條家冷泉家と、復古の古言家の歌は、新體古體といはでは、言ひやすからねば、さも云ふべきを、君の歌は新體か、古體かと云ふ時は、新體といはずして何ぞ。己れ天保の民の歌なるをや。何も今なる物を。

○香川景樹が集桂園一枝、己れ八九年前書肆にてふと見しに、その名に目がつかで、凡人の集ならめとあなづりたるを、今よく熟讀するに、古人に劣れること莫大なれど、今人にまされる事百倍なり。これもなみくの目に

ては、見えがたからんか。(あしき歌もあれど) 田舎人は古歌に引くらべて論じ、凡人を聖賢に比して褒貶す。熊澤了介の言へる、凡女を以て賢女たらんとすと云ふに異ならず。(今の歌を以て今の歌に比して優劣を見よ。古人のを以て今の歌を見るは己が心のみ高ぶりたる杓子定木なり) 此集の序に、景樹がいへる如く、今志ばしの齡あらば、古今集頃の佛に似たらんものも、まれくには出で来る事もありなんものを、老果たるを悔嘆きたる、まことにさるべき事にて、(景樹などは古今集などをかく難き事に言へり。田舎人は古今集にも易く近づきたる面もちなり。さる事あるべからず) 田舎人の古人に直付けするとは、雲泥の相違なり。何ぞ古今集などの丸似せんに、景樹が力にて、田舎人に劣らんや。歌の難き事を思ふべし。今の古言家まだしき人は、定家、家隆卿も、萬葉の風は咏み得給はずして、さる體をよみ給へりと思へるはをさなし。時に似けなきをおきて、その世の體にてよみ給へる事明らかなり。拾遺集に、萬葉を和せるといふ歌見え、新古今にも、萬葉を直していれられたるは、有まじき事ながら、既に歌の體、世々に順ふさま見えたり。夫になましくしき古言家、象をのみ萬葉古今に偽り似せて、古人にこえたりとす。笑ふに堪へたる事どもなり。

○心のすききらひを以て、物の吉凶をいふは誤なり。譬へば、今の京畫を嫌ふ人ありとも、その京畫よきはよきなり。狩野家の畫よしとも、その畫あしきはあしきなり。歌も同じく、人に似て風はたがへど、よきはよし、唯吾好む所を以て、世間の廣き物の善凶を定むる事なけれ。世間の人、己が好むかたに譽なして、吉凶を云ふ事常なり。

○歌は幼なかれといふこと、昔よりの教あり。されど、歌のみを、幼なくよむにはあらじ。すべて此をさなきは人の實心なれば、今日の言語に、心を付てきくべし。いかなる人も、をさなき事を云ふ、是則歌のをさなきなり。吾身と引はなたずして、直語を以て歌をよまば、をさなき言、眼前にあるべし。

○伊勢人荒木田久守、己が歌を見て、など體を同じくはよまぬと言ひきと、同じ伊勢人の語りき。さる事も有るべし。いかさま同じ體にのみよみたき事なれど、自らまじはるは近古に習たる故なり。古今集秋の歌、忠岑、

山ざとは秋こそことにわびしけれ鹿の鳴音に目をさましつ

又、同じ人の歌に、同集雜、

落たぎつ瀑布の水上年つもり老にけらしな黒き筋なし

とよめる、同體ならんや。山里はの歌は、其頃の體にて、瀑布の歌は、そのさま古へのほりて、今の京のはじめともきこゆ。かく同じ人にて同體にならぬが自然の事にて、いかがはせむ。これは中に立たる人の、聞きたがへて語りしにやあるらむ。

○己れ初學に諭して曰、歌は花月を咏むものにはあらず。その月花につけて、吾心を言ふものなり。かく教へたるは、心を種とする事を忘れじ、月花の講釋歌をよませじとて云ふなり。己れを於きて、月雪の上のみいへば、自身はいかにありても、歌は歌にて別物となる。後世これになる歌多ければ、さる本の意を知らしめむとて月雪をよむものにはあらずと教へたり。されば、月花をのぞきて、吾心を云ふのみにても宜しかるべきを、目にかかる所の月雪、耳に聞くところの鳥聲、歌の種となれば、それにつけて、感嘆すべき事なり。(古今の序、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけていひ出せるなりと云へり。心と目と耳となり。)

○己が家せまくいやしきは、いふも更なれど、山野凡そ十里餘りの眺望ありて、丑寅より未申までよく見え、橋も四つ五つ、行人なども見え、月によく、雪によければ、随分の美觀なるを、よしともあしとも不云して、歸る人あり。又折々訪ふ人とても、日々の様は見まほしかるべきを、障子をだにあけずして歸るあり。俗人はさもあるべし。詩歌の事などを、あくばかり語りひて、風景を見ずして歸るは如何にぞや。以て歌爲歌と云ふことは、ここにあるべし。山があはれなる、花がおもしろき、川がきよき、など歌にいふは、何を見てさは云ふらむ。ある人、女郎花のうつろへるを見て、今が盛ならん、などと云て見けり。是も歌よむ人なりければ、己れ心のうちにかしく、たま／＼花を見れば斯の如し。吾庭の女郎花、はや實になれるを、かく云ふはなかく風雅の目にやと言はまほしかりし。力なき事どもなり。古今集に、

女倍芝吹過ぎてくる秋風は目には見えねど香こそあるけれ

これは、女郎花の香をかぎ知れるなり。すべて梅の香はいふもさらにて、藤の花、菊の花、いづれも異なる香のするを、昔人はよくかぎ知りてぞありけむ。是も花をめぐりよりの事なり。此歌終句、あるけれと咏める、ただかをりのするのみならむや。女郎花の香ときき知れば、あるけれと言へる也。今人とは、いたくかはりある事を知るべし。

○人の面のかはる如く、歌も人に似て別々なり。其性質、松もあり、竹もあり、梅もあり、いづれも同じからず。更にうごくまじき所あり。師なる人あやまりて、柳の性を松にせんとし、竹の生れ付を梅にせんとす。また學ぶ人、さる事かと思ひ、同じく己が性質よき所あるも、あしき所あるも、まひて變ぜんとす。いたく

あるべからざる事なり。松の性は、松を以てよきに長じ、柳は、柳を以て長せん事云に不及、さすれば己が生れ付の事なれば、松の勇壯なる、竹の眞直なる、柳のたをやぎたる、己が性にまかせて長じ、とり／＼にめでたくなるべし。さるを、教へあやまりて、しひたる事をするより、松も生涯柳の風を作り、竹も生涯梅の風をして終らば、己が性の美なる所はあらはれずて、あらぬ物になりて、今の俗筆、花押をだむに異ならず。歌をつくり、つくらぬと云ふ事も此所にはじまる。かくいへばとて、梅柳の如く、其性にまかせ置きて、學ぶ事のなきと云ふにはあらず。歌はもとより可學ものなれば、己が生れ付にまかせて、よく長せん事を求むべし。これは歌學のみにあらず。何の道もさるべき理なり。

○歌の體いろ／＼ある物を、眞實を好むとて、唯涙ぐましく眞目なる事ばかり云ふは偏れるなり。もとより、眞目なる心の時は、眞目なる事を云ひ、戯れたる時は戲言を云ふ事なり。世中にたえて櫻のなかりせば、とうめき出たる時もあれば、又いざ櫻吾も散りなん、と潑り立たる時もありて、種々に歌のさまかはるべし。古今に瀑布の歌、

きよたきの瀬々の白糸くりためて山分衣おりて着ましを  
こきちらすたきの白玉拾ひ置て世のうき時の涙にぞかる

これはこれ、世にあるまじき事なれど、瀑布を見て興のあまりに戯れいへるなり。滑稽にて眞目なる歌とは違ふ事なり。此類四季の歌は云ふに不及、何の巻にもあまたあり。眞目なる歌を實情なりとて、夫にのみ偏るべからず。此戲はた實情の外ならず。

○歌のかたちを一同に定てよむ事、あるべきことならず。己が心まかせの咏嘆なれば、てにをはなどもさま／＼

かはりて、出で来るぞ自らなる。直語にていひはなつさま、古へよりの歌の句法なり。にけり、ぞける、こそけれ、は云にも不<sub>レ</sub>及、同じこそ結び詞にも、けれもあり、けめもあり、てめ、らめ、せめ、なめ、などうつろひかはる、さもあるべき事なり。てめ、けめなど云ふ詞を、古めきたりとて不<sub>レ</sub>言は何の事ぞ。凡て古今集などの歌によく心を付て見よ。後の集とはすべて同じからぬ所ありて、結びなどもさまざまかはりて、歌の體一樣にならぬは、自然にまかせて自由にむすびなどをする故なり。同じ形のいくつともなくならびをらんはいと見苦しく、さることあるべきにあらず。もとより撰集は、同じ形の歌をならべじと心を用ゐたるものなれば、四季の序をして歌を書いて見たる人ならでは、其由知るべからず。先づ年内の立春より初春、中春、晩春となるがうちにも、霞の立つをまち、さて立たるを見、梅を待つ歌より、梅のさきたる歌とついで、次第に花柳の盛になり、又落花の時になり、晩春のさびしく暮るるまで歌をそろへんに、歌のそろはぬ事、まことに數百の歌をよせても足るべからず。たまく、年内の立春の歌はあれども、花盛なる歌がなく、花盛の歌はあれども、散りたる暮春の歌がなく、あるは又よき歌ながらも、あまりに同じやうなる歌にて、同じ處にのせがたく、其ついで歌の並、竹に木をつぎたらんやうになりて、並べがたく、又はよき歌なれども、入れぬべき方なき心地して、はぶかんも本意なく、とにかくにそろへがたきは撰集なり。すべては花を待つ歌より、花を待ち得たる歌となり、はた盛となる歌などならびてこそ一首一首のあはれもまし、見る人の心おもしろく、月日の立つ次第も見え、たとへば花まち侘びて屈するうたあれば、其次にまち得たるうたありて殆どあはれをまし、隣の歌より隣に句ひあひ、照し合て其集めづらしく、めでたくはなるべけれ。さまでもなき己が詠草にても、歌數おほくて、四季をわかたんとすれば、忽ち此意ありて、よき

歌にも、書き入ぬべき所なき心地する歌もある事なり。茲を以て古への撰集などの難きを思ふべし。又さきに云へる歌の順を立つる所に、同じ歌並ばぬをよしとすれども、亦わざと同じやうなる歌を並べて出して、興を添へたる所まもあり。古今集をよくよく見て知るべし。又巻中に無類なる、ことざまなる歌まれに入たる、譬へば後拾遺集に、

梅が香を櫻の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな

かやうなる歌は、人の目に立ちて、ともすれば人のあしさまに云ふものなれど、さる歌もあるが、其一卷のはえにて、人の見て倦まぬやうに、わざと心を用ゐたるものなり。

此巻は、我師大隈言道大人の大坂に登らする時、生がたみとして、奉書紙に歌六十首と、源氏年立三巻を贈らるるに添へ給へる也。

利明

## こぞのちり

### 大隈言道

○わがものを詠まんとすれば異體になり、異體ならじとすれば古人のものになる。歌の難きところなり。さばれ、古人の歌をいくつ詠みたりとて、不<sub>レ</sub>詠も同じ事なり。生涯歌なくて歌よみなるは悲しむべし。

○すべて先哲がた、歌を詠む詠み方をのみ、とありかくあり、或は花山一條、又は萬葉がよし、古今がよし、何の時代は悪し、某の代は手本にならずなどと、その詠み方をのみ云ふは、家を作るに、家はいはで、材木のみの詮義なり。まづ家はいかなるものといふ事を先に心得て、さて雨露におかされぬ爲のものといふ事を考ふべし。

○物にせまりて急にいふ詞は、思惟を待たねば、その詞皆わが真心に落つることなり。言を飾らずしておのが心をいふなれば、無情の物にもこころあるが如くいふ、又をさなくいふ、これぞ歌の本心なりける。深く思慮をして、左右のよしあしを定めかへり見て後にいふは、真心ならず、歌ならずと知るべし。

○唯今の人は、古歌に引きくらべて論をし、凡人を聖賢に比論す。熊澤先生がいへる、今人凡女を以て賢女たらんとすと云ふにことならず。これは歌のことならねど、ある儒者、豊太閤を不仁者といへる事あり。いかにもさることなるべけれども、道を以ていへば凡そ世界に人あることなし。人を以て見れば豊太閤の如きは尠なしといはんも片腹いたし。春臺雑話に、楠公討死の時少し早しといへるも、後よりの論にて、神ならぬ身いかで知るべ

き。跡より論ばかりたやすく云ふにて、此歌もまた人の歌はとさまかうさまにあしといへども、吾歌はいかにもよきは稀なり。

○狂人のまねをすれば狂人、賢人のまねをすれば賢人といへること、徒然草にあり。此言、益軒先生、學の道に害ありとのたまへり。いかにも真似するもあしくはなけれども、眞の道は不<sub>レ</sub>然とこそ思へ。歌も真似にてはいかなり。

○道同じからねば不<sub>レ</sub>語といへり。歌の道はいくつもあるべき事ならねど、當世、心を詠まんとするあり、歌を詠まんとするあり。本居主の道は、歌を作りものにゆるしたり。己れが道は、自然を以て咏嘆せんとする志なれば、歌の善凶を見るにも異同あれば、其立てたる道の論はあるべけれども、歌の善凶は論じがたし。彼方にて善きも、此方にて凶しとすること互にあるべし。

○桂園一枝評といふものあり。京師景樹が集を評せり。小倉殿人秋山庄兵衛光彪が著述なり。其論中、不<sub>レ</sub>中あるべけれども、すべて立てたる歌の心得は論ぜずして、一首一首の歌を論ずるゆゑ、坊主を髪なしとて笑ふ如き論あり。坊主は無<sub>レ</sub>髪を以て善しとこそ立つらめ、其立てたる道の論をおきて歌の善凶をいふは、當れる事ありとも闇の礫なるべし。

○萬葉集より古今集頃の歌を見れば異體なり。古今集の頃より新古今集の頃を見れば又異體なり。また其世にての異體あり。世々體裁かはるは自らの勢にて、さらではかなはぬ理なり。古今集已下の歌人、萬葉體の歌を作り得ずして其世々の體に體をなしたるにはあらず。貫之ぬし、躬恒ぬし、基俊ぬし、俊頼ぬし、定家卿、家隆卿など

萬葉を尊む事甚しけれど、似せ物つくらんとはせず。似せものつくらんに、萬葉にても古今にても、今の古言家に劣り給はんや。當世に似氣なき事はいはじとこそ、古へを學んでその世の體になりたる事明らかなり。

○漢語梵語も今は國語同前なるは、嫌ひなく歌にいふべきものながら、其選びをせねばならぬことになりてより歌學びよくせずはいはれぬことになりたるなり。今の人の平語の如く歌詞を自由にせずは、おのが心のままをいひいづること難かるべし。さればかく、詞のよしあし其姿などを習ひ得て其後に詠むことになりたるは、いと悲しきわざならずや。

○ただ心を種にて詠むべし。その歌の善凶は詠者の知る所にあらず、撰者のあつかるるところなり。いかさま自分にも選ぶ事無きにはあらねど、自ら自身のことは知りがたし。

○歌のよしあしは撰者のなすところなり。撰者儒家なれば其<sub>レ</sub>ところにひかれ、撰者佛者なれば佛にひかる。これは歌人のあづからぬ所にて、わが<sub>レ</sub>ことを専らひひたるぞわがものなりける。撰者の<sub>レ</sub>ところは、政道に御國の習はしあれば、今の國政、儒佛神の三道を兼ねて思ひ志みたる心よりの定めあるべし。ただ獨國風をすていたく昔の<sub>レ</sub>ところを詠まんは、今の歌にはあらしかし。又きよく今をはなれて昔にのみ立ち返ることは、とても不<sub>レ</sub>及ことなり、歌人、今の民なるものを。

○禪宗にて無<sub>レ</sub>宗是宗といへる、わが歌も流なし。

○人はよくもいへあしくもいへ、うけひきがたし。ただ耻<sub>レ</sub>己。

○古人も人にして今人も人なり。かはりたることかつてあるべからず。



○心をよむ。歌をよむ。題をよむ。

○景樹曰、歌はおのづから天地のうちにはらまりて、まことよりなり出でたるものなれば、わざと設けてうたふよりいへる名にはあらで、嗟歎の詞即ち歌なり、いま譜節してうたふのみをいふ詞ならず、されば公に訴ふるなどのうたへも、悒鬱<sup>あは</sup>しき懐ひをきこえあぐるの名といへり、鶏のなくをうたふといふも、其ひく聲の長ければなり、世にうたはるなどいふも亦しかなり、といへり。言道曰、おのれ此七八年ばかり昔まで、歌のさまをさとりす。つらく思ふに、わが真心を詠む時はいとく難く、はた昔ぶりによりて詠めば古人の如き歌いできて、其歌おのがものとも思はれず。されど其歌古へ風なれば歌にとりてはよしと見ゆる歌多く、わがこころをよめばいと卑しく異様なる心地して、わがものからいやしめらるるを思へば、その世に似ぬ古へ風の歌よまより、此いやしきさま今の世に似て、しばし學びのほどにはよしといふべからんか。されど古へより代々に移り變る歌の撰集などにも、かのわがものならぬ古へぶりを其時詠みたる人もあらんを、今より見ればその時代に似けなきことも見えすして、なべて其世のよき歌のうちに入りし歌やあらんと思ひしことあり。後よりの別ちなくなれば、よき古風こそよかるべけれ。その古風はわがものよりもやすきわざなれば、萬葉ならば萬葉風、古今ならば古今風にてさてあるべしなど思ひまどひしを、つらく思へばさにはあらず。景樹のいへる、今の風は今の御世の風にして、後の大御世にうつりたらん後に明らかには回頭<sup>かへり</sup>られんといへる、まことさるべきなり。その今風の中にもおのづから古風なるあり。殊更に今めかしきあれど、おしなべて今の世にして、古へにも後にもあらず、猶今なれば、景樹のいへる、歌は思慮を加ふべきものならねば、古へに似せんとする暇あらんや、わがこれを似せ

たらんはやがて飾れる偽のみ、又似せんとして似べきものならんや、これを似たりと思へるはいとあぢきなし。といへり。まことに然るべきなり。本居ぬしの初山ぶみに、新體も古體もよむといふところに、今の世人真心をいはんとせば、藝子おやまなどの歌のごとくこそならめ、真心をよめる歌は百に一首もあらじ、といへる、いとあらしくしきいひざまにして、論するにたらず。

○源氏などに、物を今めかしといひたるは、新正なりといふ、珍らしぶりたる詞か。すべてありふれてはあはれも少なければ、歌の今ぶりなどはここにあたるべし。されど今の世江戸風などのたはれ唄、新内めりやすなどいふもの、いかにも當世人のこころに好ましがる意はいかがにや。この風に今やうの詠歌もなりぬべきか。歌はうたふといへど、三十一字うたふ人もなくしていかげならんか。景樹のいへる歎息とせばよろしきを、五七の数はいかで嗟歎にあるや。今も催馬樂などの今風ならぬ雅音も、聞けばいと古へのかしければ、今風にのみ流れんも一向ならんか。後の世のよき事もあれど、古へのまされること又限なし。されど古への物ごとよきを思へば、今も古へにならば、何も後よりはよく見えなんか。今の新内めりやす、後世にはいと風雅らしくきこえましを、昔も雅樂と俗樂とは別のものなれば、猿がふがましなどいへることあり。延喜延長の頃はいふに不及、萬葉已前上代も雅俗の歌あるべし。いやしき人はいやしき歌をうたひ、尊き人は雅なる歌をうたひしなるべし。されど神代にいたりては、今いふ雅俗など貴賤ともに殊更にわかちいふことはあるべからず。當世のうたふ歌、いやしき者にはかの新内めりやすの今風の歌あれど、貴人には昔の催馬樂昔の今様或は亂舞謠など、昔さだまれるをのみうたひて、今うたふ物の新らしきは無し。これもあるべき筈なるを、なきは貴人のおとろへか。

○新學異見序に曰、神世の歌は神世の俗言、萬葉古今の歌は大泊瀬の宮より今の延喜の御世迄の俗言なることを辨まへず、云々。言道曰、これは古學復古の人をさしていへるなり。然るに今の世は俗言もて歌をいふこといかなり。また延喜より大泊瀬の代といふとも、歌には漢語を用ゐず、こなたの詞をわざと選びて歌をよめるはいかに。されば狂歌俳諧などの俗談平語こそ、今の世のおのづからなる調なるべけれ。されどそはいと卑しけなれば、殊更に選みてわざと歌をものするも是非なきわざとなれるか。上代は俗言の歌にてよかるべけれど、今はおのづからの漢語まじりにてはいひよけれど、いかにもいかなるべし。歌詞を習ひてかまへて詠むもところは真心ながら作はつくり物なれば、おのづからうめき出でたる嗟嘆とはいひがたし。習ひて後にわが心をいひ述ぶる道となれるなり。俳諧發句などの、心のままに漢語をまじへていふぞ、今の人のまことの嗟嘆とはいふべき。されど俳諧師は句作のことにのみ心を用ゐれば、そのこころ知れる人まれなるべし。

○よく雅言を心のままに習ひ得て、其後は心詞もおのづからなるまことの歌となるべし。學ばねばかなはぬことここにあり。されど猶心して漢語などいはずれば、作りものになりたるにはたがはねど、作り物と許しきはめたらんには、甚たがふことあるべし。初山ぶみにいへる、その作ることも世の中にありとある人心なればなどはいへど、そはさることにはあらずかし。自身よみいづる所も、心よりとかまへずして、歌といふものにしてつくりては細工物も同じく、ことたがふべし。詞は得がたしとも、わが心のつゆたがはぬやうにと詠み出でんことをこそ願ふべきことなれ。作り物とゆるしてなどかよからむ。

○鶯のささば鳴きは平語、ほけきやうと音になくは歌ならむ。諸鳥皆しかり。鶯のさへづりも、よき鶯の音をきかせてそれに習ふなれば、習ひて後に歌を詠むもさるべきことか。

○眞淵うひ學びに曰、萬葉を常に見よ、且我歌もそれに似ばやと思ひて年月によむほどに、其調も心もこころにそみぬべし、といへり。言道曰、これはうひ學なれば、初心に教ふる道を諭されたるにて、今の世人學びといふことなくては、うちつけにまことの歌いひ出づべきこと能はねば、萬葉を見よ、それにならへなど諭されたるを、こは皆初學のほどのことにて、終にはわがものとなりて、古人にもよらず今人にもへつらはず、われとわが嗟歎のうたなれど、師なくしては今はいり難ければ、定家卿も、舊歌をもて師とすとのたまへるなり。されどわがものとならん時のことをここに洩らしたれば、何とかいつ迄も、古歌似せばかりをするが如くきこえたり。されば景樹新學異見に曰、按ずるにこはゆのしき妄論なり、歌は情のゆくまに／＼ひとり調なりて、思慮を加ふべきものならねば、古へに似せんとする暇あらんや、もしこれを似せたらんは、やがて飾れる偽のみ。又似せんとして似べきものならんや、これを似せて似たりと思ひをらんは、いとあぢきなし。といへり。言道曰、これは歌の正論にて、即ち歌はかかるものなるべけれど、今初學びの人何によりてか歌を詠み出でん。よく似せたりとて似べき物ならねば、そを見て歌の文字數、姿のあらまし、意のわけなど見知るべきよし、眞淵ぬしのいへるなり。學びの道なくば、新學異見などと題することもあらず。初學と題するにてうひ學びの程の心得とは知らる。景樹のいへるは、異なりたる歌の上にていへるにて、新學の文字にはいかが。さはいへ、歌の本意はさるべきなり。これらはいふと學びにいふともきこえがたかるべし。學びとは眞似することなり。いと古へは歌學びといふことは無かりしかども、今は學ばずしてはなり難ければこそ、うひ學びなどいふこともあれ。古へ今、人の心はたがふまじけ

れど、人の詞のすたれゆくままに、いかんとも志がたきは天地のおのづからなる業なれば、歎くにもあたはぬ事どもなり。景樹は歌のいかなるものといふことをいひ、眞淵は歌の學びといふことをいはれたる文なり。また眞淵の論は、歌といふものを詠み習ふ論なり。景樹は、歌の主意をいひて、學ぶことをいはず。言道曰、何の道も學ばずして己とよきに到らば、さばかりよき事はあらじ。されど學びてよしあしまじれる道に入り、年月を経て後にあしきことのみを選びすてんより外はあるまじ。初めよりよきことを選びとる力あらば、師といふものはなくてありなん。何の道も志かなり。されど歌は外の技藝とは別にて、おのが心をいふものなれば、一つには心得がたし。○桂園一枝に、松間月を、

洩すべき松のこのまの心とも知らずや月のかくれそめけむ

小倉光彪が云、人の見るを厭ひて月の隠るる心は絶てなきことなり。此歌眞心を失へり。彼の、まだきも月の隠るるか、といひ、又、雲がぐれにし夜半の月かな、などいひしは、比喩の歌なればなり、と難じたり。それを陳じて、大幣に、中川自休が云、月は人の見るを厭ひて隠るる心は絶てなしとや。師はさることをふつに知られず。人に見られじと松陰に月の忍び隠れたりと、思ひたがへられたるならん、云々となじり云へり。この難陳をよくよく考ふるに、光彪、月は心のなきものと定むることいかが。景樹また、月は心あるものと定むるもいかが。共に眞心にはあるべからず。有もなしも共に定まらぬが人の眞心なり。そのころもてよみいつるが歌なるべし。これはこの一首にも限らず、歌毎に然なるべし。この所いと思ひわきがたけれど、ただ己が心人の心をさぐり見るに、古へも今もおなじことにて、不決なるが本心なり。かの阿蘭陀などの窮理も、猶不決にこそあるべけれ。

されば詠み出づる歌にも、その不決よりして詠まぬ歌は古今にあるべからず。さて此歌を、アノ松ノアヒダヨリ漏ルベキコトヲモシラズシテ月ガ松ニカクレタノデハナイカ、かやうにいへばその歌の調緩なる故に、月は常に法度心のあるものと景樹は思ひつめたる如きこと。さる心いかでかあらむ。この所光彪がいへる、眞心を失なへるなりけり。さては、曇らば入りね秋の夜の月、ものいひかはせ、などよめるをいかにといはむ。これは常に心のあるものと月を思へるにはあらず。其時にせまりて、心ある方にいふが人の詞なり。この歌にては、もること知らぬ月の影かな、又、もるも知らずで月ぞかくるる、などと急にいへば、決定なれど眞心をたがへぬなり。即ち其時のせまりたる心を直にいふにて、譬へば、わが忍びるたるも知らぬ月ぢやとも云ひ、邪魔になる枕かな、そちらによれ、などいふこと、無情の物などに志かいふ常なり。則決定していふはここにて深く思慮して、此歌の如く知らずや月のかくれそめけむ、といひては、さるためし古歌にもあるべからず。今の人心にもあるべからず。光彪がいへる此譬にて、比へば、世をいとひて山に入りたらん人を見あらはしたる時などのことにして、かくあらはるるも知らずでかくれ給ひけんのところならばさも詠むべし。大ぬさに、月の桂も秋は猶、おそくいづる月にもあるかな、の歌など引き出でたるは、當らぬいひざまなり。

○今世歌を玩物とする、あらぬことなり。後拾遺の序に、平城の帝は萬葉集二十卷を撰びて、常のもてあそびものと去給へり、とみえたるは、如何にと人いふべし。是は、某の時かかる感吟の歌、某がよめり、又かかる時何某かかる歌よめるがあはれなりとて、書き集めさせ、人情を感じ思召ししを、もてあそびものとは書けるにて、今の世の人、詠出を弄びて心にもあらぬ事を志ひて求めいだす玩物にはあらず。辨ふべし。この玩物は、已に歌

となりたる後のことにて、實事に詠める歌などを取集めて、後の玩物に去たるにて、詠ずるを弄物にするにはあらず。今は詠出を弄物にせんとて詠むなり。古へはよめる歌を後に集めて弄物とせり。



福岡市外言道故宅

(田代春海氏所蔵)

## 緒言

佐佐木博士の歌學論叢を讀みて、大隈言道あるを知りつるは七年以前の事なり。仍て續日本歌學全書を繙き、近世歌人の和歌と言道のとを比較するに及んで、益々言道の凡歌人にあらざることを知りぬ。就きて想ふ、言道は生前あまたの歌を詠みたりと言ふ。今世に公にせられたるものは、其數多からず。他の遺詠拾はば猶拾ひ得可し。言道の傳記未だ詳密ならず。他日言道の眞價大に掲るの日、傳記編纂の要起るべきに、心を致す者少きは遺憾なり。己れ其人に非ざるも、微力を致さば、他日歌集編纂の日來り、傳記起稿の要起るの日、或は以て若干の和歌と幾何の資料とを編者に致すを得むかと。而して當時既に事歴滅没の恐あり、歌文亦散佚せんとするに會し、遂に己が菲薄を顧るの違なきを思ひぬ。

かくて三年を過ぎぬ。其間意外の困難ありて、事を擲たむとせしも幾度なりけむ。歌文の蒐集は歳と共に蒐め得たる處ありしも、事歴の討案にありては、翁を知れる一族故舊の既に物故せると、資料の闕如せるとは、今少しく早かりせばの嘆を深からしめたりき。

斯くて和歌の蒐集にありては、略ほ蒐むべきは集め得たるを思ひ、茲に第二期の研究に入るべきを以て、久保猪之吉博士を介して、歌稿を佐佐木博士の許に致しぬ。これ實に大正四年十二月のことなりき。

次ぎて佐佐木博士より來翰あり。傳記の起稿と歌論の討案とを囑せらる。傳記の起稿は、其人に非ざると、討究疎漫の故とを以て之を辭退せり。然れども其後、翁が自筆の大隈氏系譜略記を得たると、新に資料を得て、略

ほ編年の體を得るに至れると、敢て驚鈍を致さむの微忱とは、遂に意を決して筆を執るに至らしめぬ。無似自ら愧ざるの責は、一にかかりて著者にあり。

翁に歌論『ひとりごち』のあることは、來示以前既に進藤氏より聽き得たる處のものあり。爾來所在を失せしかば、探討頗る勤めたりしも、何等得る處なかりき。然るに昨年末、本書が福岡なる平岡良助氏に歸したりしを聞き、安川敬一郎翁を煩すに及んで始めて書寫することを得、これを博士の許に致せり。次ぎて博士は、本年一月、『幕末歌壇の新聲』てふ題下に、翁が歌論の第一次研究を發表せられたり。

本書の成る、經過大凡斯の如し。始め遺稿を求め、資料を蒐集し得ば足れりとせしが、遂に自ら稿を起すに至りぬ。然るに本編後半以後、病に臥して執筆意の如くならず、踏躑滯、意を竭さざるもの多し。完備は己の期する處にあらず、ただ涓埃よく世に資するあらば幸甚なり。

終に臨んで、先輩故老の諸氏が、或は内秘を披きて耳聞し又は目睹せられたる處を語り、或は笥を傾けて資料を供し、或は簡を裁して事實を報ぜられたる、著者の深く徳とする處なり。茲に謹記して以て謝意を表す。

大正六年十月

梅野滿雄識

### 大隈言道傳 目次

家系及び一族	一
翁の師二川相近	四
學系竝に淡窓の感化	七
幼時と修養期	二二
覺醒竝に覺醒以後	二六
中年期の閑適遊行	三六
上 阪	三七
滯阪竝に草徑集梓行	四二
晩年と臨終	六〇
生涯の概觀	六四
爲 人	六七
交友及び門人	七四
歌集竝に遺稿	八〇

附 録

清原姓大隈氏系譜……………六三

大隈氏系譜略記……………六六

大隈言道年譜……………九二

學 統 譜……………一〇二

# 大隈言道傳

梅 野 滿 雄

## 家系及び一族

大隈言道翁、姓は清原、大隈を氏とし、通稱を米屋清助と言ひ、萍堂と稱へられた。其遠祖は天武天皇第三の皇子舍人親王で、親王より四代を経て少納言清原通雄に至り、天延元年貶せられて九州に下り、豊後國に住し、豊後國玖珠郡、速見郡布院、日出庄、豊前國安心院、筑後國、生葉、竹野の二郡を領せられた。それより十數代を経て、長野主水助治言に至り、豊後國玖珠郡大隈村に住せられた處から、長野の姓を改めて大隈とせられ、慶長九年を以て卒去せられたが、法名を教永と言ふ。教永の養子なる重富勝廣はもと肥後の浪士であつた。筑後竹野郡吉本村に住んでゐるが、後家督を市太郎勝義に譲りて剃髪し、僧となりて教念と稱し、一寺を上寺村に建てて教念寺と名付た。教念は即ち此寺の開山であつて、法名を以て寺號としたのである。豊前、豊後、筑後の三國に二十四家と言つて、二十四の舊家があるが、皆郷士の類で孰れも大家である。其中より出た人で、肥後侯の家老にも同姓の人があるが、勿論此清原の流を汲んだものである。寛政の末つ方主水助治言の二百年忌に、教念寺より、豊前豊後筑後等の一族同姓に回章を以て案内があつたに、來り會する者二百五十餘名の多きに及び、盛んな

る追遠であつたとの事である。其時翁の父言朝も一座せられたが、牌前の祭文は平松村の醫師足立春臺が讀んだ。春臺は清原氏の一族の端で、主水助二百年の祭文を讀んだ所以を考ふるに、翁の高祖父某と言ふ人、上寺村に住んでゐたが、身は隴畝の農夫でありながら、學問に志すこと篤く、始め貝原益軒の門に入りて切磋せられたが、晩年古學に歸し、京都に上つて伊藤仁齋の門人となられた。春臺は此高祖父の門人であつたから、祭文を書いて治言の二百年を弔はれたのである。而して高祖父が仁齋門下であつた關係から、其の家には仁齋の書を始め、伊藤五藏の書等も秘藏せられてゐたが、翁在世の頃には上寺村の本家も斷えて、仁齋の書は勿論、五藏の書等も、悉く散佚してゐたのである。大隈家も主水助治言在世の頃は、家は豊かに榮えて居たのであつたが、其の後家運次第に衰へ行きて、翁の祖父清助の頃には困窮最も甚しく、貧苦の裡に人と爲られたのであるが、漸く年長じて博多に出で、川口町なる茶屋某の許に勤められ、其後那珂郡赤坂村に移り、後又同郡八反田に住し、最後に福岡樂院抱へ安學橋に住はれた。此清助と言ふは、幼少の折里乳流しとなられた人で、餘程の艱苦を嘗められたと思はれるが、孜孜努力の結果、遂に許多の家を建てて、これに依りて大いに産を起された。翁の父言朝の代に至りては、家益々富みて福岡でも名ある商家となられたが、家豊かなるにつれて、神社佛閣等への寄進を始め、世の爲め、人の爲めにも盡されたること多きが中に、太宰府菅廟神前の蓮葉水は、元施主ありて寄進せられたのであるが、其人歿して敗滅に歸したのを、言朝再立の志ありて、蓮葉を梅花に鑄替へ、銅瓦にて蓋をなし、それも梅の花形にて鉢も柱も五角のものを建てられた。而して大隈氏の神燈は、提灯の張替までも寄進せられ、香爐臺の香も年中永く奉納せられた。又大隈家の菩提寺なる藥院香正寺の本堂再復の時は、巨額の金子を喜捨せられた計り

でなく、赤地の錦の水引、懸替の水引等をも高照院法月（翁の兄言愛の法名）の爲とて寄進せられた。香正寺の寺運衰へたる頃、開山日蓮上人の御筆、清正公の肖像、其他清正公の書翰など、脇方に質入となりしを、綿屋忠次と申合せ、中名島町一同にて出財して受出し、元の如く納められた事もあり、又鐘樓の梵鐘を上方迄も勸進して新に鑄立て、永く寄進せられた事もあるが、鑄付し名元に大隈宗繁とあるは、言朝の幼名を宗繁と言つた爲である。其他の俗事に至りても、博多福岡の質屋中の掟を定められたのも、町役所に願出、懸札等を懸しめられたのも、皆これ言朝の力である。

言朝性質溫和にして文雅の嗜み深く、歌を能くし書に巧であつたが、其の書道の師は二川相近の師、中牟田浙江であつた。此浙江は、甚だ書に巧であつた所から、龜井南冥も其の子昭陽を始めとして、子は残らず其の門に學ばしめられた人で、名聲藉甚、門人も多かつたが、言朝も亦就きて學ばれたのである。言朝若かりし時、浙江の宅にて七夕祭の催ありて、門人の筆蹟等陳列展覽せられたが、『過客滿堂、戶外市をなす』の風情で『未曾有の盛會』であつた。當時出陳の言朝の書は、南冥も痛く賞讃せられたが、浙江も亦『貴兄様草書人々相尋、運筆〇〇たる處に人眼を驚し被下候。』と述べて居る。又當時町役所の質屋の記録に、言朝の書いたもの數多あつたが、町役所の吟味役眞藤三郎は、其の書類を取出して宅にて手習せられた程で、翁も『言道が父言朝、若かりし時田浙江に學びてかく點を受けたる由、性質穩かにして書もよし、言道等が及ぶ處にあらず。』と述べて居られる。言道の兄を茂甫言愛と言ひ、書を二川相近に學ぶ。其十七歳の書なりと言ふを見るに、筆力雄健にして若き人の書とは見え、將來の期待も格別であつたが、纔かに十九歳にて夭折したのは洵に惜む可きである。



翁の母は、刀工系譜竝に鍛冶考等にも載られたる、信國又左衛門光昌の第三女である。光昌の子三人皆女子にて、相續すべき男子もなかつたから、弟子の内より相續を立て、別家せられたのが則ち博多在住の信國である。光昌の兄は大和守と稱し京都に住んで、勅命により仙洞御所の御劔をも鍛へた程の名工であつたが、隱居して俳名を江棧と呼び、福岡で死んだ。辭世に『うれしうれしその約束の時鳥』の句がある。光昌の長女は其名をのぶと稱し、幼より書をよくし學問あり、畫を清人沈南蘋に學ぶ。京畫未だ起らざる前に南蘋風を書いたのは、此伯母と越後屋行藏との二人であつた。書の師は誰と言ふ事はなけれど、龜井南冥未だ若かりし時、常に出入せられたと言へば、或は南冥其人であつたらうか。後梅澤加太夫に嫁がれたが、生める處の子四人あり。梅澤利平、牛尾與平次、阿部傳右衛門、梅澤善十郎即ちこれ。翁若年の頃、伯母なる梅澤方に行かれたに、伯母、翁に向ひて、『お前達は手跡見事なり、此方利平等は文盲なり、口惜しき事なり。』と申されたが、利平は藩學東館の儒者であつて、善十郎も亦句讀師であつたのを、文盲なりと言はれた伯母の見識、恐しき事なりと翁もいはれて居る。

## 翁の師二川相近

翁が和歌及び書道の師は、藩の名家二川幸之進相近である。相近は松蔭と號し、幼にして穎悟、六七歳の頃より能く字を識り、十歳にして詩を作り文を綴つた。夙に龜井南冥に就きて教を受けたが、藩學甘棠館の起るや、

入りて生員となり、遂に輦門の俊秀とその名を等しうせられるやうになつた。性書を嗜むこと甚だ深く、遍く晋唐の古法帖を臨摹し、褚遂良、顏真卿、米元章等の諸大家に出入し、研精すること十年、書大いに進む。學ぶこと深くして意増々滿たすして曰く、『墨帖は其形骸を求むるのみにて神韻を得ること難し、然るに本邦上世の書は、法を晋唐に取り其真今に存するものがある。殊に釋空海の書の如きは、韓方明に親炙して指畫最も精絶である。されば古法を求めて異邦の墨帖を學び、徒らに歲月を費さんよりは、範を近く本朝に求むるに如かず。』と。茲に於てか、博多東長寺に至り、寺僧に請ひて海師の眞墨なる最勝王經及び千字文を見、固く請ひて來り學ばむ事を許された。行厨を携へ行きて臨摹すること三年、風雪寒暑を避けず、遂に其奥竈を窺ふに至つた。寛政六年擢でられて書學師員に任せられたのであるが、時に年二十有六。攻磨の苦は痛骨に徹す。然かも相近屹々なほ四十餘年、上は晋唐より下は元明に及ぶまで、諸家の筆意を究め、その精髓を萃めて一家の風を案出した。世これを稱して二川流と言ふ。

相近四十歳の頃より柵木屋の草堂に家居し、多病と稱して出でず、來り訪ふ者あれば喜んで引接したが、身は一步も門外に出でず、餘命を草庵の裡に託して、書畫を樂しみ詩歌に耽り、興來れば簫を吹き琴を弾じて悠々自適、一生を文墨風流の間に送つたが、和漢の學を折衷して其一に偏することなく、國體を重んじ、皇室を尊び、古忠臣の義烈を欽慕する所から、菊池寂阿公が五百年に當つては、懷古の律詩と和歌とを捧ぐると共に、芳野の櫻を公が墓畔に植ゑ、或は後征西將軍宗良親王の歌集を、長女つるに書寫せしめて吟咏自から樂しみ、毎年年頭の試筆には『わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて昔のむすまで』の古歌を謹書して神前に供へた。相近も

とこれ多趣多能の人、其天分の流露する處、書畫音樂往くとして可ならざるはなしであつたが、和歌は別けて好む處であつて、遺詠數千首に上つて居るが、又今様歌をよくし、『鴨の羽がき』と稱ふる歌集の中に、六十餘首の今様歌を載せて居る。中に頼山陽の作なりと傳へられたる、

花よりあくる三芳野の春の曙見せたらば唐土人も高麗人も大和心になりぬべし

の一首がある。相近深く音樂を愛し、簫、横笛、琵琶、十三絃琴の類に堪能であつたが、晩年雅樂を修め發明する處多く、今に遺愛の樂器等も保存せられて居る。

相近人と爲り恬淡寡欲、情を名利の外に放つて貪賤に安處し、風流自から樂み、戸損じ疊破るるも知らざる者の如く、生平寒素に甘んじ、節儉を旨とし、入るを計つて出るを制し、心を用ゐること極めて慎密であつたが、性深く櫻楓を愛し、庭中芳野及嵐山の櫻と梅尾の楓とを移植して愛賞措かず、其居を嬰風山房、又は小嵐山房と稱へ、己が號をも櫻楓堂主人と稱したが、會て藩主より嵐山種の櫻を請はれたる折、相近一朶の花に添へて、

我がたのむ君なればこそ手折つれ類あらしの山櫻花

と詠んだ。

相近が曲折多き七十有餘年の生涯は、天保七年の易簣を以て終を告ぐるのであるが、其教を奉じ其言に聞きたる者、耳授傳聲不知不識の裡に、其人格信念に裨染薰化せられた者も少くない。當時の門生交友の中、大隈言道石松元啓は歌道に、三宅源八、富永辰十郎は音樂武技に、或は師、或は友として從遊したのであるが、彼の勤王の女歌人野村望東の如きも亦、此翁の餘風を受けたものである。別けて我が言道翁に至りては、風懷楚楚、師翁

の面影を髣髴せしむるものも少くないが、其中五六の主なる類似點を列擧すれば、一、言道翁は、初期の和歌に於て専ら師翁の體を學び、中期の覺醒と共に、自家獨創の歌風を詠み出たのであるが、師弟孰れも和歌の嗜深く、始終一如歌道に盡瘁せられたこと。二、書道に於ても相近に二川様あるが如く、翁も亦言道様の書風を發明したが、翁が能書の聞え高かつたことは、當時大坂に於て難波三筆の目ありしにても知られる。三、氣宇高逸、戸損じ疊破るるも意とせず、清貧に安處したこと。四、櫻楓を愛し、自然を愛したこと。殊に言道翁にありては、分けて櫻を愛し、自然に對する熾烈なる愛と、密固奇警なる觀察力とを有してゐた。五、孰れも文墨の技に長じ、音樂に興味を有したこと。相近、言道、望東孰れも繪畫をよくし、望東の筆蹟亦師を習うて言翁に酷仰す。六、資性孰れも恬淡寡欲、時流を超脱して高情仙の如く、塵外に優遊したこと。以上を其主なる契合點とするのであるが、篆刻の技の如きも、相近より翁に、翁より望東に傳へたもので、現存せる翁が自刻の雅印、及び望東が刻せる平尾村の石印の如きも刀法誠に見事である。

### 學系竝に淡窓の感化

元和偃武の後、文運俄に興隆せんとして曙色漸く動き、旭日瞳々の勢を醗酵し來らんとす。此時に當りて京坂文學の淵藪、早く既に、松永尺五、木下順庵の如きがある。鷄鳴て煦々、我が鎮西の地、曉色霽霽、創始期の文學界

早く既に純儒を出だす、實に之を我が貝原益軒となす。益軒博洽の學を以て、中央王畿の文化を潤澤にすると共に、筑藩亦餘響を受け、程朱の學盛に起り、元祿享保の世益軒の高足竹田春庵あり、其孫子儒素を世々にし、一藩翕然として宋學を奉じたが、天明三年六月古學派の儒醫龜井南冥を起用し、藩の子弟を教育せしめんとす。之より先き春庵の孫竹田定良、藩の儒員として子弟教化の任にあり。仍て益軒派なる定良と、古學派なる南冥とを對立して教授せしめらる。藩學茲に於てか分脈あり。即ち、竹田派の學問處を東學問稽古處と稱し、單に塾・古館又は略して東學と呼び、後に修猷館と改め、龜井派の學問處を、西學問稽古處と呼び、甘棠館又は單に西學と言つて居た。西學は南冥の癡謫後斷滅したが、彬々たる人材其門より出で、南冥昭陽の學は本源脈々、筑藩の文化に大なる寄與をなすと共に、一は流れて南豊に入り淡旭二廣の學となり、一は支藩秋月なる原古處及び其子白圭より北豊に入り、村上佛山が水哉園の學となつたのである。而して翁の師二川相近と廣瀬淡窓とは、同じくこれ龜門の高足であつて、翁の父兄親戚も亦龜門と黃緣淺からざるを見る。されば翁の學系を以て龜井派の出となし、其國學の系統を溯りて、翁より二川相近に復歸するを妥當とする。

翁は、漢學を豊後國日田郡なる廣瀬淡窓に學ぶ。其在學年時は長くも三年を出ぬが、翁は齡人壽の半を過ぎて、人多くは攻磨の志漸く泯滅し去らんとするの時、其家家を捨てて驟然南豊の僻邑に遊ばれたるを見れば、其志洵に牢乎たるものがあつたのを疑はぬ。淡窓は詩より道に入るを以て教育の要諦とせられたもの、即ち『人間固有の情を導きて有韻の語に入り、之れを諷詠懽悞する裡に、技日を追うて進むに至らば、之れに授くるに文章を以てし、之れに講ずるに六經を以てせば、道茲に得べし』とせられたのであるが、由來宜園詩を以て海内に鳴る。而

して詩と和歌とは、諷詠咏嘆に發して根柢を情思に置く、生涯を擧て歌道に優遊せられたる翁が、其好む處に走り、入りて宜園の生となられたのも、亦以て因由ありとす可きである。

淡窓幼にして龜井昭陽の門に入り、學を昭陽に受け詩を南冥に學び、主として本朝諸家の詩を範とす。然るに姪濱の甘古堂に唐宋詩醇を見るに及んで、深く感悟する處あり、後唐宋六家を主とし、蘇陸二家の風を慕ひ、特に陸放翁を摸したが、中年以後は唐宋明清の別なく、己の欲する處に順つて取捨し、以て自家の簡鍊峭勁なる詩風を熔鍊した。翁もまた、漢詩竝に漢學に對する造詣深く、人格を陶鑄し、己が思想に培はれたのみならず、取つて以て其歌材を豊富ならしめたるは僅少でない。其事實に現れたる類例を見るに、唐宋諸家の詩文を摘出淨書せられたるものの現存するは勿論、或は楊誠齋が、

秬有清霜凍太空、更無半點荻花風、天開雲霧東南碧、日射波濤上下紅。  
の詩より、

出でそむる月のうちにも花薄うちまねきぬる秋の野邊かな  
と詠み出られたる、或は村上佛山が春郊の七絶、

村南一抹夕陽斜、天鷄聲々入絳霞、春火無人來撲滅、隨風燒上野棠花。  
に默會する、

ともすれば峰までのほる春の野の火をのがれえぬ松ぞかなしき  
の歌ある、或は歌題を莊子德充府中の、

家系竝に淡窓の感化

無耻語老聃曰、孔丘之於至人其未耶。彼何竇々以學子爲。彼且軒以詭譎幻怪之名聞。不知至人之以是爲己。桎梏耶。老聃曰、胡不直使彼以死生爲一條。以可不可爲一貫者。解其桎梏其可乎。に求めて、桎を、

はねつるべあやつるわざを厭ひては火も手してこそとるべかりけれ

と詠まれ、或は歌題を陸游が、老來見榮枯事、萬事惟應一咲調と言ふに求め、扱は和歌の評語に漢詩を引き、この詠草〇印十首ことに面白し。その褒美に扇面一つまるらす。こはさいつ日、京師よりもらひ來りたる扇面なり。京都東山の女逸人蓮月、大佛の宮の士官の女もはや老女なり。歌よみ家にてはなく、まこと世すて人にて陶器をつくりて月日を送る。まこと風流の人なり。先月もと子(野村望東尼)が處につかはしたる蓮月の歌、やどかさぬ人のつらさを情にておほろ月夜の花の下ぶし

大坂に上り來て、かやうなる歌ははじめて聞き侍り。さりとて此歌古人のごとしといふにはあらねど、歌のかたきことこの位の歌も出来る人なきぞかし。昔の口まねならば誰もくやすし。唐句吟成不入時と、唐詩のまねのみをにくむ宋人の詩なり。まことしかなり。

と述べられたるが如き、又は門人季厚の歌を評して、

大原人など京に出ぬとて、さまかはれるふりもなし。なほ眞柴などをかつけるなり。京に住居したらばさもあるべし。住居の意句中に見えず。歌をザツト心得たるよりのあやまちなり。兩句三年得、一吟双淚流、知音如不賞、歸臥故山秋、とは賈島が詩なり。心をこむることの深きを見るべし。うたも詩も同じことなり。

と教へ、扱は漢詩と漢文と和歌とを撰びて併書せられたる、

雪後園林纔半樹、水邊籬落忽橫枝。

雪降れば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし

郁芷芳蘭櫻樹、百品萬朶皎々如雪、斯集如雲斯起春霞朝舒、秋霧夕卷、眼迷魂飛、寶

車回轆、鸞舞地驚之態、懸針垂露之異、奔石墜石之奇。

金風の吹きたよはす白雲はたなばたつめの天つ領巾かも

の如きがあり、且つ翁が平生好んで書かれたものに、地僻衣巾古、年豐咲語譁。とか、古調詩吟山色裏、無絃琴在月明中。とか、不作風波於世上、自無毀譽到胸中、間從世外觀今古、とかがあり、又、

朱門茅屋偶爲隣、北阮誰憐南阮貧、却是梅花無世態、隔牆分送一枝春。

糴米歸遲午未炊、家人竊憫乃翁飢、不知弄筆東臆下、正和淵明乞食詩

行遍天涯等斷蓬、作詩博得一生窮、可憐老境蕭々夢、常在荒山破驛中。

等の如きがある。淡窓もとこれ温厚篤實の人、其學多くは自發自習の餘に出づ。而して翁が造詣する處も亦、主として自家研精の苦になる。詩と歌と其撰ぶ處を異にすと雖も、歸趣一如、心源を同うするまた一奇なりとすべきである。

## 幼時と修養期

翁は、寛政十年を以て、福岡樂院掬へ安學橋の家に生る。父は茂助言朝、母は信國又左衛門光昌の女であつて、翁は其第四子である。兄を茂甫言愛と言ひ、十九歳にて没し、二人の姉あり。長は福岡唐人町上原徳助に嫁し、他は同町上原久三郎に嫁ぐ。次は言道、次は清右衛門言則であつて、翁の今泉隱棲後、安學橋の家を繼ぎ、末弟三右衛門一敬は、那珂郡春吉村なる西田家の養子となつた。翁幼にして聰敏、書を読み字を習ふを以て樂とし、嬉戲するに箒を揮つて地上に大書する事もあつたが、日夕二階なる己が書齋に籠りて學に耽り、寢食を忘れるに至る。其姊、言道何事をか爲すと、翁の室を窺ふことあれば、輒ち恐ろしき舞樂の面を蒙りて之に示し、驚き去らしむるを常とした。

翁は八歳にして父を失ひ、九歳にして兄に別れたので、陶鑄薰化の事は、専ら其母及び其師の力に待たねばならぬ。翁が二川塾入門の年時は、當時の入門薄なき爲め討尋の餘地なく、茲にこれを詳にする事が出来ぬ。然し當主二川氏も言はれる如く、今となりては、勢ひ翁の年齢上より、これを推測するより外に道なきかと思はれるが、翻て想ふに、其間又機微の存するありて、多少の測度を許すのである。即ち翁の兄言愛の十七歳當時の書を見るに、筆力雄健、其間餘程の鍛錬を積まれたと考へられる。されば其入門年時も略ほ想像せられるが、翁も亦七八歳の頃より、兄に伴はれて通學せられたのではあるまいか。蓋し如上の推定は、當時入門の舊慣年齢、並に翁の舊居安學橋より、柵木屋町なる相近塾までの距離、約十四五町餘を加考したものである。

翁、相近の門に入りて專精研鑽、孜孜として攻學懈らず、積年の發憤砥勵は、書道に和歌に異常の進歩を齎した。而して翁が初期の書竝に和歌を見るに、孰れも皆師承を恪守し、書に於ては二川様を學び、和歌に於ては師翁に承けて、古今の流れに涵泳したが、其間天分の流露すると、才藻の煌耀するがあつて、他日の大成を暗示する。

相近が和歌に對する見解は、石松元啓が、天保四年五月、筑前藩内壹百三十三人の歌、歌數四百九十四首を撰んだ山里集の序に窺はれる。その全文を採録すれば次の様である。

歌は思ふことを述ぶるものなれば、心のままにいひ出るぞ歌のもとなる。されば、その思によりて、調のあがれるもくだれるもあるべし。又詞によりて、聞ゆるも聞えぬもありぬべし。中頃、歌合てふことのありしよりこなたは、心に思はぬ事をしひてよみ出でつつ、人に勝たんとせし業こそいで來れば、詞もあやに言ひなして、こと様なるわざもあるぞかし。されば、思をのぶるはよそになりもてゆきて、ただ人にめでられんとし、人を驚かさんとするが歌人のわざとぞなれりける。はいなき事になん。代々の歌を見て知らる。されど、人の心はまことなるものなれば、又おのづからに思のままなるも、そが中には見ゆるぞかし。これまた世々の歌を見てしらる。又數多よむをおのが功とせしことも、人に勝たんとせる業になん。慈圓僧正の一時百首の詞書などを見て知るべし。かかる業は、保元平治の亂れよりこなた、世も靜かならず、人々戦に心をよせて、ひたふるに勝つことを好めればなるべし。元和の大御代よりこなた、世も平らけく、御惠も民草に洽くなりぬれば、人の心も上つ世のごとぞなりにける。されば、詠み出たる歌も、おのづからに調も心も古へぶりに立かへりける。されど、はじ

めに言へる習はしをうけて、ありのままに言へるは、幼なき業のごと思ふ人も侍れば、世にふさはしからぬもありぬべし。その珍らしきわざは、人々の才により出で来るものなれば、おしなべての人は、さとりがたきもあらんかし。我友なる石松ぬし、大方の歌よまぬ人も、さとりやすき歌どもを、聞くがまに／＼かいつめて、山里歌集とは名に負せたり。こはかしこかれど、我君の、山よりつづく里は福岡、ときこし給ひしをもて物せしとぞ。太宰府には、我君のもたせ給ひし萬葉集ををさめ、また或人の家には、玄陳が書きて奉りし歌詞のふみなども侍れば、この歌よむわざは、我君の御心にもかなひてんかし。

天保四年さつき

二川相近志るす

翁が初期の和歌を載するものに二あり。一はうた草紙の目ある自筆の小冊子であつて、巻尾に『おのれいと若くてよめる歌をかいて参らす。いとまだしきほどの歌なれば、うひ學びの人の見んには、中々なることもあるべし。こころやりのかきちらしなれば、亂りがはしきはゆるい給へかし。』云々の奥書があり、一は前に述べた山里集所載の歌であつて、天保四年五月、翁が三十六歳以前の歌、春の歌八首、夏の歌一首、秋の歌六首、冬の歌四首、雑の歌七首、都合廿六首を載する。此外翁が初期の歌集に、南樓集、さゝのや集、梟居集と言ふがあれど、南樓集、梟居集は其所在を知らず。さゝのや集三巻は、翁の自筆本にて、己も嘗て一覽せし事あれど、未だ攻究の機会をえず。然れども、中に『天保十二うしの秋、家のめぐりにありとある木くさの葉をかみにすりて、それに歌をかきつけけるを、二巻となして教子徳永ぬしにとらす』との詞書もあれば、こはうた草紙、山里集以後のものであることは明かである。而して此等山里集以前の和歌を見るに、孰れも亦古今の流を汲み、當時の類型に嵌

つたもので、後年翁が、ひとりごちの初めに『僕かりに木偶歌と名づけたるものあり』云々と述べ、且つ『己れも亦此木偶歌を詠てぞありし』と告白せられたる、所謂人形歌の類で、未だ翁が特異の歌風を流露するものがない。書道に於ても二川様を學ばれた處から、筆蹟師翁に酷似し、中年以後のそれとは、手法全く一變して居る。

翁が修養期に於ける事歴は、殆ど泯滅し盡して、今又討究の餘地もないが、其間知り得たる二三の事例を擧ぐれば、先づ翁の勉學に就きては、衆口等しく一致する處で、翁は夙に紀記萬葉の類は勿論、歴代の選集より家集の類に至るまで専念攻究せられたが、其中最も力を籠められたのは、萬葉及び古今の二集であつて、家集の類では西上人の山家集であつたと思はれる。翁と西行との契合點に就きては、考竅の餘地を存するものと信するが、按ずるに翁は、一面、西行に私淑せられると共に、一面、西行必ずしも企及し難きにあらずとせられたものではあるまいか。深く古人を景仰し、常に歌の至り難きを嘆き、謹厚謙讓絶えず切磋せられた翁にして、西行の和歌三首と、己が和歌三首とを併書して比照せられたるがごとき、春温脈々一路の推度を入れるの餘地を示すのではなからうか。西行の歌それは、

稍うつ雨にしをれてちる花の惜しきこころは何にたとへむ

散るを見てかへる心や櫻花むかしにかはるしるしなるらむ

道のべの清水流るる柳かけしばしとてこそ立ちとまりつれ

と言ふのであるが、翁はこれに配するに、

さそひゆく力つかれて散る花を流るる水にゆづるやまかせ

散りのこるいはま／＼の花さへも流れのこらぬ春雨の空  
もみぢ葉はいづちゆくらむここにこそ積りてあれといふ方もなく  
の三首を以てせられた。

翁未だ若かりける時、三四の友と名島(筑前の勝地)に詣でられたに、多々羅川の渡にて、舟の彼方の岸に着く内に、女子共の二人して鏡を見たる處を詠めと言ひたる人ありければ、翁、彼方の岸に至りて眞砂の上に、

ます鏡そこにうつろふ影さへぞ君と我とはむつまじけなる

と書かれた事もあつた。又其頃、太宰府に詣でられたに、彼所に待つ人ありて急ぎ行かれたに、同じ道にて吉富杵村、或人と打連れてこれも詣でられる様であつたが、翁の行過られるを咎めて、いと早足かなと笑はれければ、翁、いそぎゆく此道ならで何道か君にさきだつの道のあるべき

と認め従者に與へて過られたが、此吉富杵村は、當時二川相近と其名を等しうした藩の名家であつて、劍を能くし、書道に和歌に堪能であつたが、此歌翁が把持の一端を窺ふ事が出来て甚だ面白い。

### 覺醒竝に覺醒以後

天保三年翁の齡三十五歳の頃、翁は、世渡滔々萬葉古今の流れに墮ちて、人眞似の歌のみ多く、彼此相率るて

累葉相傳の故法を恪守し、師に受け父祖に繼ぎ一意古人を模したりし結果、何時しか生命なく靈魂なき木偶歌世に擴がりて、市井の商人も堂上縉紳の歌を詠まむと勉め、天保の民にして尙ほ且つ延喜天曆の古體を擬し、貴賤上下齊しなみに陳套を趁うて走るに味到せらる。茲に於てか翁、憤然起ちて舊來蹈襲の典型を破り、和歌の結縛を解きて清新自由の天地を開き、和歌本來の眞に歸らしめむと思ひ立たれたのであるが、翁は這箇の自覺に達し、決意牢乎計圖既に成ると共に、己が主張を布き、己が歌風を廣めむには、門子を教養して汎く教を垂るるを以て急務となし、遂に歌會を起し門を開きて子弟を迎へられた。翁が這般の消息を傳ふるものの中、歌論ひとりごちには、其覺醒の動機を説きて、

この木偶歌を見るに、詞心共に昔の人の物なれば、いとあはれにめでたし。今人吾意を詠むは、吾物なれば歌柄悪しく、詞思ふ儘にならで、あるは變體となり、こと様なる歌となる。今の新刻鮎玉集などの内、こと様なる歌多し。これは木偶歌よりいと劣りて見ゆれど、未熟のなす處なれば、年を経て宜に至るべし。かの木偶歌は、これよりも遙に淺學にて、未だ己が歌詠んとする礎さへなきなり。誠に難き道なれば、左様に古人の様に容易に詠まるるものにはあらず。己れも十二三年前までは此木偶歌を詠てざありし。この木偶歌古の集に入りても擬ふものなり。さるべき理なり。然るに古人に擬はば夫にて宜敷かる可きか、後世より見て分ちなくば、夫れにて宜敷かる可きかと心附しより、古の集どもをよく／＼見るに、口眞似の歌も見えぬにはあらねど、凡て新正なるものにて吾詠とならぬはなし。秀句佳句の目醒しき歌は、よく人の目に立て新正なること見ゆれど、何の事もなき安らかなる歌に新正あること、後人よりは甚だ見えがたし。三代集を始め代々の集の歌の内に、かく

何の事もなき様に見えたる歌に、新正ありて吾物なる事を知らば、道に近づきたりと思ふべし。

と述べ、又詠草文月の巻の奥書には、歌會成立の往時を回想して、歌まきをつくりて、人の歌のよしあしをいふこと、はたちあまり二とせ三とせにやなるらむ。其久しきにたえず物したるもあり、又たえてものせぬ人もあり。はた世を去りたるもあり。なからよりよみはじめたるも、ちかきもあれど、おのが教のおろかなるには、おもしろき歌など、あはれなるなどよみ出でて、師ははだしなどいふ俚言にたがはず、嬉しとも嬉し。

抑も、おのれがつたなきのみにもあらず、昔の歌の歌まねのみにて、いつれも今まで年をふるごといと久しければ、後の世に笑はれなむものから、やをらかくまでになしたるは、むけにいひそしるべきにあらず。猶すたれたるわざならめど、たけたる人よく見わかちて、この道いやましにさく花のごと、世に傳はれかし。

安政二年八月一日

大隈言道しるす

と述べられた據て以て翁が歌風の變革と、門生教養の動機と、其覺醒年時とを察知す可きである。以上引用せる二文の中特に注意す可きは、翁が覺醒年時に關する記述であつて、即ち彼に據れば、『己も十二三年前迄では、此木偶歌を詠みてぞありし。』と記し、此に隨へば『歌巻をつくりて人の歌のよしあしをいふこと、はたち餘り二年三年にやなるらむ。』と記されたが、歌論の成る、抑も何時の頃なりけむか、ひとりごちに執すれば、そは天保の頃、彼が中年の作なりけむとの推定はつけど、年時未だ定かならず。此書はもと翁が上阪の折、生がたみとて、其直門なる眞藤利明に贈られたるものなれば、翁が蹶起上阪ありたる、安政四年八月以前の作なる事は自から

明らかなるも、その起稿年時を定むる事能はざるは遺憾なり。されば吾人は勢ひ詠草奥書に憑據せざるを得ぬ。之に據れば、卷末明記の起稿年時、安政二年より遞次逆算して二十二年以前と言へば、正に天保二三年に拘當し、翁の齡方に三十四五歳の事となる。然して又翁が歌論にも、『強て雅びをかざり僞らば、後人に天保の御世をくりますなり。後より願ても、天保年間は如斯ありしと、歌の趣に著しく見えんこそ、歌の正道にあらまほしき業なれ。もとより今の御代、昔にすぐれたる事多ければ』云々の語、竝に『君が歌は新體か古體かと言ふ時は、新體と言はずして何ぞ。己れ天保の民の歌なるをや、何も今なるものを。』云々の辭があつて、天保の作なる事を暗示する。加之他に文獻の據る可く事例の傍證す可きもあれば、翁の覺醒を以て天保二三年の事と爲すを妥當とす可く、これを以て確密に近く、翁の行實に近切なりとす可きである。

斯くて翁は三十四五歳の頃より、生涯の回轉期に入りて、藤田正兼一派の手痛き排斥をも、『言道の歌は其體鄙し、言道の歌は其歌格壞れたり。』との世の痛撃をも意とせず、『我は天保の民なれば天保の歌あるべし。』我は市井の商人なれば、商人の歌を詠まむ。商人にして、衣冠束帶せる公卿のうたを詠むは、歌の本意にあらず。』と高唱して、卓然己が所信に就き、清新輕妙なる自家特異の歌を詠み出られたが、翁が二川様の書風を脱して、己が書風に復歸せられたのも、此覺醒以後の事である。

翁は若きより、和歌の研鑽に書道の磨勵に、專念没頭せられた結果、日夜沈潜、身家を顧る暇もなく、物賣る業も治産の事も人に任せて、己れは只管風雅の道にいそまれた處から、流石に豊かなりし大隈家も、家運次第に衰へ行きて、窮苦漸く翁の身に逼るに至つた。されば翁は天保七年八月六日、三十九歳にして家を弟清右衛門言

覺醒竝に覺醒以後



則に譲りて、己れは妻子を具して、市外今泉なる池萍堂に隱棲せられた。翁の二女うめ、當年の窮迫の様を語りて、

我等が今泉籠居のはじめの程は、安學橋なる言則の許より、約束の仕送りも絶えて、困窮最も甚だしく、赤貧寒素、明日の煙も立て兼ねる程にて、庇は朽ちて雨の漏るに任せ、壁も障子も破れ損じて、蕭條たる荒屋訪ひ來る人もなきに、心細き言はん方なく、流石に母も涙にくれ、人知れぬ思に打屈せられる姿も痛々しく、幼き胸にも幾瀬の思をしたが、父は心にも止めぬ様にて、和歌にのみ心を寄せつつ願もせぬ様であつたが、當時の事は心に沁みて、今に忘れぬ。

と折々述べられたとは、田代家に残れる口碑であるが、翁が當年の述懐に、

我身こそ何とも思はね妻子等の憂してふなべにうきこの世かな

と呻き出られたるが如きは、這般の實境を反映するもので、其末子惣次郎を、博多の高柳氏に里乳に遣はされ、其儘惣次郎は、同家に里乳流となつたのも此折の事である。其後、翁は母を弟言則の許より迎へられると共に、言則は遂に安學橋の家を出でて、博多に住ふ事となつたが、當時、言則が翁に與へたる打撃も亦沈痛なるものがある。此等の事件簇出し來りたる、天保七八年の頃を以て、翁が窘迫期の絶頂とす可く、それより年處を經るにつれて、次第に此苦境より脱せられる事が出來たが、其後と雖も家計多くは不如意勝にて、大阪假寓の十年間は勿論、故山高臥の後と雖も、清貧に安處し、物外に出で、一生を寒素窮乏の裡に過された。謂ふに翁は幸文、曙覽等貧歌人群中の人であつて、窮迫困苦の中に焙鍊せられた自家特異の心琴は、鏗爾として自ら響き、翁が數多き遺詠の内、

特種の光を放つて居る。今少しく之を抽出すれば、

侘人のやどはとひ來る人もなし我が見むために庭もはきけり

わが宿の荒れし庇をいま一重うちかさねたる松の朶かな

都邊は家のみおほし我里は花こそいたく咲きさかえけれ

貴人うまにあらねばこそはやすく見れ花といへば花月といへば月

價にもなる時なくて我園のやせたる竹のよのさむさかな

おのれからそこに生れて畑も田もうりくひ虫は我身なりけり

をりくはさらぬ家にもゆきねかしいつより來ぬる身の貧しさぞ

天保七年九月二十七日、翁の師二川松蔭卒す。幼より其提撕を受け、年を加ふると共に情誼愈々密に、推重感孚、服心を輸したりし翁の悲嘆は幾何なりけむ。當時翁は江戸にありて、親しく藥を進め、喪に服するの誠を致す事は出來なかつたが、歸來常に音問を怠らず、交態依然として其人在すが如く、思慕切々、相近遺愛の筆を、これこそ師翁の形見ぞとて、愛玩常ならず多年秘藏せられたが、其三年忌の折は、門人故舊の和歌を蒐めて、故翁の靈前に捧けられた。

二川の大人、みまかり給ひて、今年三とせになり給ふをいたみて、おのが知れる人どち、こなたかなたにつどひて、歌をなしものするに、すべてまだしき人々なれば、よからぬも侍るめれど、此ままにうちすてなんもほいなして、かくかいつめて御前に持ちささけまつる、み心もましまさばめでさせ給ふべし。

天保九年長月晦

と詞書して、望東、幹辰、常貞等十三人の歌十四首と共に翁は、

君がうゑしにはの楓のいろづけばわかれしころになるぞかなしき

二川のうしなくならせ給ひしころは、江戸に侍りけるに、今年三とせにならせ給ふとききて、

いつのまに三年へにけんあづまにて驚かれしはけふにぞありける

み筆のあとを見て

いますかと思ふばかりに見いるかな君がみふでのみとせへぬれど

等の歌七首を手向られた。

天保八年、同九年も漸く暮れて、翁は天保十年四月、攻學研磨の志切々息まず、遙に十里の山河を踏みて、豊後國日田郡なる廣瀬淡窓の門を敲かる。宜園現存の入門簿を見るに、

筑前福岡

大隈清助

四十二歳

入門 天保十己亥四月十日

紹介 廣瀬信平

とやうに、其郷貫、姓名、入門年時並に紹介者の氏名等をも明記してある。紹介、廣瀬信平とあるは、淡窓の弟

にして、信平多くは伸平と書し、舊筑前藩の用達を勤む。藩邸との往來頻繁にて、福博の商人とも親しき關係あり。されば豫て翁とも舊知にて、這次紹介の勞を執られたるかと推度される。翁が宜園在塾の年時は、當年の月旦評なき爲め、之を詳にする事が出来ぬが、天保十三年に於ける淡窓の筑前第三遊の折は、既に歸郷家居ありたるに徴すれば、在塾永くも三年を出でぬ。淡窓が懷舊樓筆記を驗するに、翁が今泉の池萍堂過訪の條下に『清助は歌人なり。暫く予が塾に寓せし事あり。』とあれば、在塾思ひの外に短かりしやも未だ知る可からず。宜園在塾中の事歴亦茫洋、捕風捉影の嘆を深くするのであるが、翁ある時、筆のすさびに書き出られたる文の机上にありしを、淡窓見られて、其才の優れたるを知り、それより後は別間に置きて、客人の如くもてなされたとの事である。こは翁の門人小金丸生氏が、扶桑會雜誌中に述べられたものである。

天保十三年二月二十八日、廣瀬淡窓先師龜井昭陽の墓に賽せんと欲し、時の都講武谷祐之（筑前の人、字は元吉、禮瀾と號し、後藩の侍醫に任じ、種痘告諭を刊行播布す。）を伴ひ、來りて筑前に遊ぶ。淡窓の此行淹留三十有餘日に渡り、過訪應酬寧日なき様であつたが、其間月形健助、長野和平、三原一郎、茜屋惣次郎、宮本春棧、承天寺大完、聖福寺龍岩、同先住湛元、米屋清藏、（精しくは大熊清藏言足と言ひ、御風樓と稱し、翁が従兄弟なり。儒學に通じ且つ和歌を能くす。化政の頃其名を上國に馳せたる博多の松永花遁、奥村玉蘭の徒と親しみ好く、頼山陽、貫名海屋の徒と締交して、山陽の書後等にも名字を止めて居るが、淡窓も亦、『尙庵、月形父子、龍岩、御風樓皆新交の親善なる者なり。』と述べて居る。其父言苗は、寶曆七丁丑の歳を以て城南警固村赤坂に生れ、父に随つて藥院安學橋に住す。年二十にして家産を弟茂助言朝（言道の父）に譲り、別に家を福岡中名島町（今の下名島町）に買

覺醒並に覺醒以後

ひて之に居る。言苗幼より俳諧を好み。遺詠若干卷を家に藏す。天保三年五月十九日病で卒す。(南畫師石丸春牛、中西耕石の徒を會して、詩を講じ詩文の刪正を行ひ、暇餘近郊に名勝古蹟を探りて、時に或は榎田宮より住吉に詣でては白魚梁を見、更に酒を命じて言足が進めたる麴條魚の羹に、住吉河畔の絶景を賞し、扱は老儒月形鶴栖を訪ひての歸るさ、大休山に登りては流觀顧眄興趣湧くが如く、久知函崎勝、始聞有大休、云々の長句一篇を賦し、箱崎宮に賽しては風景殊絶海西第一と稱し、神興涌くが如く清遊暇なき様であつたが、淡窓の懷舊樓筆記、竝に濃瀾が南柯の一夢には、淡窓の今泉過訪の一事を除きては、他に録する處なきも、想ふに翁も亦、尙庵、龍岩、御風樓及び宜園の門生、大賀、平岡、三原の徒と共に、種々斡旋ありたるは想像するに難からぬ。三月十九日淡窓翁の招に應じて今泉なる池深堂を訪はる。文雅の士の來り會する者十數人、上村尙庵、大熊清藏、中西耕石、武谷豊瀾の徒亦席にありて詩酒徵逐、興趣盡くるなく、書を品し畫を評し、揮灑淋漓、献酬應答數刻に渡つて散會した。淡窓當時の概況を録して曰、

十九日、大隈清助が招に赴く。清助は歌人なり。昔年暫く予が塾に寓せしことあり。祐之と共に出て一郎、玲藏を訪ひ、相伴ひて尙庵の中島の別莊を訪へり。莊水に近くして景狀極めて佳なり。初め甚之允、尙庵謀りて予を此處に留めんとせしが、故障ありて遂げざりしなり。(中略)。遂に清助が宅に至る。清藏、尙庵、龜年(中西耕石)も亦來れり。饗應あり。夜に入りて歸れり。清助名は言道、其宅園亭頗る雅致あり。予詩あり曰、  
卅一言歌自作家 幽居風景亦清嘉 短籬影蘸平池水 蜀帝花交燕子花  
と、以て當時の景況を概見す可きである。濃瀾が手録する處の南柯の一夢に據れば、此時翁は印譜を愛せられる處

より、請ひて以て淡窓の雅印を押されたとの事である。

天保十四年五月二十四日、翁の室四十二歳を以て卒す。福岡藥院香正寺なる祖先の塋域に葬る。法名を夏岳院妙雲信女と言ひ、其墓は言朝夫妻の墓に面し、翁の墓と竝んで居る。中名島町大熊清次郎の女にして事歴滅没、婚嫁年時をも詳にすることが出来ぬが、翁の家集さ、のや集には、

ことし五月末つ方、妻におかれて、いとものさびしく、世の中わびしくてありけるに、慰めがてら庭にやり水を流して、木などうゑける時、

にはかにも流るる水のうれしきはゆきかふ魚と我となりけり

うかりつる心やり水ながるればかなしきことのある身ともなし

の二首を載せ戊午集中には

めなるものみまかりける後に松、

いぶせしときりにし門の松だにもなきあと見ればものぞかなしき

と哀傷の歌を載せ、望東が向陵集には、

さ、のやの翁の妻君うせられて、七日にあたる日に、

なき人の忘れがたみと思はれてたむけに折れるなでしこの花

の一首を載せて居る。(おのれ、翁が居貧卓然、風格の高きを想ふ毎に、其母覆育の深切と、室家内助の劬勞とに想到せずんばあらず。翁をして成立を得せしめ天分を發露せしめたる、必ずや母と妻と二人者の努力與りて多き

に居る。然して如斯きの人、行實泯滅し盡して、何等後人の追憶に資す可き物なし。己が討索の疎漏なるは勿論なれど、或は其親戚故舊の家に、土地の故老に、或は香正寺の塋域なる墓誌銘に、さては同寺の過去帳に、四五大隈氏一族の系譜に、討究頗る努めたりと雖も、未だ以て其名をも明らかめ得ざるは、甚だ遺憾なり。茲に記して以て世間匿好の士の垂教を仰ぐ。

妻を失はれたる嘆さへあるに、翁は己れも亦痛く患はれて、春まだ早き弘化の睦月の頃より重き枕に就かれたが、門生中村石玳せめては翁が病中の徒然を慰めむためとて、今を盛の梅一枝を贈つたに、翁は喜ばれる事限りなく、長歌一首をものして謝意を表せられた。又其頃櫻の花を人の得させたるに、翁はつく／＼と打眺めつつ、手にとれば死ぬる命もいきぬべきこの一枝の山櫻かな

とほほ笑まれた。翁は病癒えて後、肥前國田代に行きて、村山漢古の墓參をせられて居るが、此頃久留米柘榴信厚が七草園の歌、山田乙丸が女を教ふる歌、荒木田久守(久老の子)が七十の賀等を詠んで居られる。

### 中年期の閑適遊行

翁の齡四十五歳を過ぎた弘化の頃には、名聲次第に四方に布きて、近きあたりは更なり、遠き國々よりも訪ひ來りて、書を請ひ歌を學ぶ者も少くなかつた。斯くて門人も亦年と共に加はり、社中も多く會も盛んで、福岡近郊は

勿論、他の地方よりも遠く教を請ふ者あり、古川直道、宮崎重道、小林重治、芳井弘道の如きは今の嘉穂郡飯塚より、西村久明、末松名種の如きは糸島郡姪濱前原地方より、村山氏一派の如きは肥前國田代より、遙に教を請うたが、月々歌會の催ありて、入撰の歌を定め、天位入撰の者には翁自ら淨書せられたる歌卷を與へて賞とした。歌會の様を周知せる八木祐之氏の話に、翁は歌會に臨むに、質素なる綿服に短き羽織を重ね、杖をつき草履を穿ちて參會あり。打集ひたる門人の中を通りて設の席に就き、直ちに開會披講等にかかられたるが、其風丰云爲は雅びたる裡に一種の威重があつて、立言精確、謙讓の裡に極めて眞摯なる態度を持せられたが、筆刪加朱流るるが如く、門人の推服も亦異常で、『今泉の先生、今泉の先生が』とて下にも置かぬ様であつたと言ふ。斯くて月々の歌會を始め、四時の雅會に師弟參集の中心地點となつたのは、實にこれを翁が今泉の池萍堂、(或は單に略して平堂、又は萍堂、或は南堂、別にさゝのや、又は小竹園と稱す。)望東が隠棲平尾の山莊、及び翁が今泉のさゝのやより程遠からぬ、藥院小性町なる八木氏の馴花亭等である。

翁が歌集戊午集並に望東が向陵集を見るに、嘉永二年の頃より、師弟應酬の歌を載する事次第に多く、春秋の花紅葉につけて閑適悠々、師弟遊豫の雅會は其間幾度となく催されたが、戊午集には、

向陵にて花盛によめる

一木にもかくるばかりの庵にしておほくの花のあるじなりけり

向陵にして花見ける時

むしろせきけふのまとの花のかけなかはは我身ひたつちぞかし

中年期の閑適遊行

等の歌を載せ、望東が向陵集には、

平尾なる山の高根のもとゐしたる時、言道翁、『羨る湯も松の音たてつなり、』とかいつけて出だされければ、木のもとに落葉かきよせ火をたけば

と言ふを載す。歌道に沈潜し風雅を趁ひたる嘗にこれのみでない。嘉永二年の暮には、年惜む業せんとて風流男の友打連れて、望東が向の陵の山莊を訪ひ、或は又の年なる五月四日には、さゝのやの翁自ら笹粽を持ちて、望東が柴の庵を敲き、嘉永四年の睦月晦には、望東さゝのやを訪はれたに、翁今日を始めに月毎に月惜む團欒せんは如何にと語らる。皆可笑として夜の更る迄集ひて、月の名残を惜まれたが、向陵集安政三年の卷には、左の興味ある挿話を載する。

寢待ばかりに、宵の間曇りければ、皆ふしたりしに、曉の月はいかにくくと戸を敲く聲を聞けば、さゝのやの翁の驚かざるなりけり。貞貫君も喜びて、いそぎ戸をあけて見るに、月いと清し。やがて、

曉の月はいかにとたたく戸に晴れたる月をねやに知りつる

かやなどまくりのけて、酒肴やうのものとり出でつつ物語るうち、明はなるる空殊に明し。山の端出づる日影も亦めでたし。

有明の月みながらにささぬ戸をさして入くる朝日かけかな

清興さこそと思はれる。往年、望東より翁に宛たる尺牘に、左の一通が残つて居る。又以て師弟親和、互に風雅に心を寄せた佛も忍ばれる。

此頃の月の清さ、いかがすぐさせ給ふらん。おのれ、今朝まで故郷にもものして、この曉に山里(向陵)にいに侍りぬ。明日は例の神祭の日なれば、いかで彼處に渡らせ給へかし。古へ人の文のあつめたるもの、明石ぬしより借り侍りたれば、御まのあたりに見まほしくなん。何事も其時ならでは。

まつ蟲のなく山里に歸りてもたれをか我は待たんとすらむ

嘉永二年二月十二日は、翁の祖先、大隈主水助治言の二百五十回の忌辰に當る。されば上座郡(今は朝倉郡)上寺村なる教念寺にて法會を執り行うたに、此寺もと治言の子勝廣の開基にして、子孫代々の住職なり。されば此寺の住持竝に大隈主水同導にて翁を訪ひて、參拜を請はれたに、翁は病にてを行かず、和歌一首を寄す。其歌

うちむれてたま祭する人数に心ばかりは入らむとぞ思ふ  
と言ふのであるが、翁の従兄弟なる大隈言足も亦和歌を詠じて、追遠の志を述べた。

家集戊午集を見るに、此頃の歌に『飯塚八幡宮神前』の歌一首を載せ、また今橋集上の卷には、『飯塚宮崎重道が父重徳七回、眞福寺にて一會、法名一貫居士。』寺にまるとるをして歌などよめる時。』寺の花ちるを見て。』等の詞書して、三首の歌を止めて居るが、此飯塚町は、福岡を去ること一日程の北方にある、筑前國嘉穂郡の一驛にて、迂折せる八木山の坂路を経て之に通ずるが、翁はもとより翁の高弟野坂常興、野村望東の如きも屢々訪はれたる土地にて、後年望東、常興と共に此里に行くとして八木山越の折に、

山の半よりあなたにやありけむ、大木の松の倒れたるが、皮のきて白くなりたるに、書きつけたるを見れば、『いはがねの碎けてさめよ武夫の國の爲にと思ひきる太刀、薩摩藩中、有村治左衛門』とあるを見て、

こは三月三日、櫻田にて水戸の士と共に命をすてられし人ぞかし。かかる事思ひ立ちて江戸に行ける時、此道や通りけむなど言ひつつ見て、

岩がねの碎けても猶さめやらぬ夢のゆくすゑおもひこそやれ

と詠み、更に路傍に撫子の花の咲けるを見て、

はぐくまむ草も枯れたる冬野とも知らでさきぬる撫子の花

と口吟みつつ根ごし来て、神無月十六日の日も早や黄昏れるに飯塚の里に着き、小林重治が庭に移して、

生かへり長く咲けかし根こじ来て老のかたみに植うる撫子

と書きて主に遣したとのことである。此處には眞道、重道、重治、弘道等の門人があつて、翁は花の頃は更なり

夏秋の移るにつけて、屢此里を訪はれたが、是等の消息を傳ふるものの中、望東が向陵集には左の歌を載する。

さゝのやの翁の、年毎に飯塚に行きて、春を暮してのみ歸らるれば、今年もやといひ遣しける。

春ごとに君をとどむる飯塚のさとの櫻はきりもすててむ

翁は又肥前國田代、基養父(元の基肆郡、養父郡今の佐賀縣三養基郡)、筑後國久留米、吉井、高良山等にも知己門人ありて、生前幾度か此地に過ぎられた。然して田代地方に於て、最も密切なる關係あるを村山漢古となす。己れ嘗て此地を訪ひて、田代、鳥栖、古賀、小松、竝に、小松なる大興善寺に、事蹟の討案に従ふ事累日、探討頗る勤めたが、其間何等耳聞する處なく、只僅に二三短冊小書箋の類を蒐め得たるのみであつたが、翁の束臚に、

田代きやぶの方も、四五年前より私まるり候て歌の體一變仕候。唯一兩年によくよみ直し候老人なども御座候。

すき御座候節そと罷出可申、さなくてはこの様なるむつかしき題よみ、一向に面白からず、また本意にももつづき兼申候。わたくしの名は言道コトミチ、姓は大隈オホクマ、號は小竹園、俗稱清助、歳四十五歳、

よそぢとて驚かれしを夢のまに又ひととせも加はりにけり

いくばくのこととは思はず十年だに昔のかたにかへしてしがな

と言ふがあつて、翁と此地との關係を語つて居る。又村山氏との交渉に至りては、現存せる短冊書箋の類、竝に戊午集所載の歌文等に據りて推度せられるが、翁は、『むらやまの大人のはじめて消息遣はしける時、秋たつ日なりければ』と詞書して、

あき來ぬと聞くぞ嬉しき今年はた月みる友のそひぬと思へば

と詠みて送られたが、其他に『村山の大人を訪ひて、一二日ありてかへりける時よめる。』『村山の主の七十ちの賀に参りあひてよめる。』『村山のぬしの別によめる。』等の歌があつて其交態を流露する。然して翁は、弘化元年には村山漢古が墓參をして居られるが、茲に又嘉永五年の夏には、再び原田、田代を過ぎ、千歳川を渡りて、

いつよりの千歳かわかぬ千歳川はじめもはてもなき名なりけり

と口吟みつつ久留米に着き、それより暫時高良山(筑後國にあり、又の名不濡山、國幣大社高良神社)の亮恩僧正が許に宿りて、

名に負へる草木もみえぬ今日なれやぬれせず山の夕立の空

と言ふを始めに、戊午集中には四十八首、其他に八九首の歌を残されたが、當時高良山には亮恩、亮純の二僧正

あり。亮恩は詩を能くし、亮純は歌に巧なり。此時亮恩老して亮純寺務を見る。翁高良山の飛雲樓に萬葉古今の二集を講じ、歌會を催し歌話をなす。席上倦みて眠る者あれば、翁輒ち狂言の可笑しきを誦して一座を笑はせ、再び講を繼がれたが、當時久留米の歌人にして、翁と交渉あり、此等の歌會等に出席ありたるは、矢野一貞、船曳鐵門、拓植信厚、山田六右衛門、林田守秋、岡一角、中村水城等の人々であつて、當年の出題多くは眼前矚目の事物にして、『歌は見る物聞く物につけて言ひ出るものなれば』、これを詠まれよとやうに即吟を促がされた。或時本坊の犬二三匹して、隱宅の犬の來りけるを咬むを見て、あれをあれと指さされたるも詠む者なし。翁即ち筆取りて、

少きが多きにかたぬことわりに争ひまくる犬ぞかなしき

と書きて示された。又或時、今朝は朝顔を詠まれよ、あれをと指さされるを見れば、軒の傍に物干竿あり、よべ取入れる事を忘れたるに、朝顔早や上れり。皆歌あり。翁も亦、

今朝見ればまじに上りて竿の上にくくへなけなる朝顔の花

と詠み出られた。或時高良山の本坊にて書畫の蟲干ありけるに、翁は防虫用の樟腦を口にせられるより、人々怪しみて之を問へば、『人は知らず、己れには藥に成る』と答へられたとの事である。翁は又、新しき筆を用るる時は穂先を切りて使はれたと言ふが、此等良山行實の一切は、嘗て此事歴に遭遇せられた、厨幾太郎氏の語る處である。由來翁はふでや筆を愛用し、多く穂先を切り、筆の中軸を持ちて揮灑せられたが、翁が直門にして翁の手蹟を學ばれたる望東は、穂先長き水筆を用る、筆の軸先を把つて書いたとは、望東の生家なる浦野勝氏の

直話である。越て嘉永六年四月、翁は再び筑後に入りて、屏風山北の吉井(今の筑後國浮羽郡吉井町)を訪はれたが、當年の消息に左の一通が残つて居る。

御宅を立候て秋月(筑前藩の支封)あまぎ屋に折角御添書被下候へ共、〇〇途中にて存出候處、同方には縁者など邪魔に相成居申候條、同方には參り不申、且又秋月はそと内所にて打過申候つもり處、旅宿に其夜より三兩輩士宦の輩まゐり申候處、熊本ぬし内儀は留守にて不得面話、三ナギ(筑前國朝倉郡三奈木)など行過、〇〇ぬし方に四五日滯留いたし、夫より吉井に參り候處、これはかの方に一兩人知人も有之、ここには又長滞に相成申候。久留米、田代よりも參り候様申來候へ共、長旅に相成申候につき、まづ志波(朝倉郡志波村)の方に引取、夫より朝日(朝倉郡朝日村)を経て一昨二十五日歸宅仕候。

と、以て當時の旅況を概見す可きであるが、彼の戊午集には、吉井庭中涌泉の歌一首を載する。吉井の知人、そは檜崎なにがしと言ふ人なりし由なれど、未だ深く考へぬが、高良山の遊行を始め、今次の旅も亦例の長旅となつた。

翁は又早良、糸島の邊りは更なり、北の方遙かに宗像、遠賀、蘆屋等(孰れも筑藩治下の地)にも幾度か遊ばれたが、戊午集卷六には、『あしやの里、黒山越後守利簾四十の賀』の歌を載せ、残存せる束牘には、『わたくしこと近年しきりにまたれ申候間、ふくま(筑前國福岡)の方にも近日出かけ申候。』と書し、或は『あしや惠徳丸茂助たよりに、千船集の事雜書式三枚、直道ぬしにも御見せ被下候哉』と記し、更に又他の短簡には『先月來糟屋より宗像、遠賀、山鹿、蘆屋等を経めぐり、大名連に御座候まま何も風雅は出來不申候、どうで一人旅ならでは、樂も

出來不申候。云々の書狀があつて、泯没に瀕せる翁が當年の行實に、一道の微光を投じて居る。

翁は天保十四年の夏、妻に訣れてより、母と己れと二女うめと、市外警固村今泉の池萍堂に、寂しき月日を送られたが、弘化四年七月二十日、女うめを藩士田代庄作正良に妻せた。正良は俗に謂ふ家取掣で、其儘田代の姓を名乗つた。此田代正良、元は糟屋郡山田村に住し、後福岡養巴町に移れる人にて、繪に巧なり。うめを娶りて後池萍堂に同棲したが、翁の子四人、其中長女しなは、夙く福岡唐人町上原久次郎に嫁し、嫡男信太郎は、有井氏を繼いだが十四歳にて夭折し、次は二女うめ、次は末子惣次郎であつて、博多萬行寺前町なる高柳氏に養はれた。嘉永元年八月二十九日、此日翁の母長逝せらる。法號を殘岳院妙照日秋信女と唱へ、藥院香正寺なる言朝の墓側に葬る。年を享くる事七十有九である。同じく嘉永戊申十二月二十五日、清右衛門言則病没す。法名を古竹有聲と稱し、卒年正に四十九歳であつた。

嘉永二年には、うめが世繼の男子を擧げた。此兒名を鐵之亟と言ひ十一歳にて蚤折したが、正良は藩主長溥に従つて江都に祇役し、御祐筆を以て奉公した。初め二年の任期であつたが、更に二年の勤續を命ぜられ、前後四年間滯動した。役竣て後、正良は鐵之亟が四歳の折始めて歸國したが、其間翁はうめを扶けて、幼孫覆育の事に當られた。翁もといたく小兒を愛し、閑庭嬉々として小兒の遊ぶを見て無上の樂とせられたが、此程世繼の男子孫を抱くとて、

初春にいだきそめたるをのこ孫わが手のうちの玉ぞこの玉

と喜ばれ、初孫生れての又の年、魂祭の折には亡き人々に告ぐるとて、

まだものを言ひならはねど聞しめせ世つぎのをのこ家に生ぬと

と詠みて捧けられた。この眞玉とも白玉とも愛でられし初孫が、次第におよづけゆきて、『かむろ髪』美しう、『かたるざり』する様を見ては、『めぐしともめぐし』とて、江戸なる父正良が許にはるくと寄せられた歌に、

童べのけづりのこせるかむろ髪はつかに君が見るよしもがな

ともすればなれこし方に引かへて歩むよりとき片るざりかな

と言ふのがある。翁は初孫の上のみならず、正良が東上途中の苦、竝に滯京祇役中の心勞にも心を致されたが、戊午集には、『田代まさら江戸にゆきけるをおもふ。』『江戸にありけるまさらがもとにいひ遣はしける。』との詞書があつて二首の歌を載する。正良は役を竣て嘉永五年に歸國し、再び翁と同棲したが、翁は其後別戸離居を思立たれて、『大低庄作處も世話相仕舞』たれば、『博多矢倉門に於て』今泉の宅よりは勝りたる家屋を求め、『別戸のつもり』なればとて、資金の調達にかられた。不足金十三兩の内半は、宮崎重道の世話にて直知出金を諾し、自餘の半金は、飯塚なる小林重治に借用を相談せられたが、如何なる理由か、翁が此企劃は、遂に實現するに至らなかつた。

翁が天賦の歌才は、春秋幾多の鍛錬を経て、益々光を放つと共に、感興湧く處秀歌口を衝きて發し、聲咳玉を綴るの概があるが、其間又數四の逸話が残つて居る。嘉永二年翁の齡五十二歳の頃、翁は日々一日百首を詠まむと思ひ立ち、數日間一日も怠る事がなかつたが、只初孫の生れたる日のみは其暇もなく、僅に六十首を詠みて止みぬと言ふが、こは翁の門人小金丸金生氏の記すところである。



又翁の親戚なる福岡唐人町の上原氏は、是韓堂と稱し、家富み紙と薬とを商ひたる處より、翁は常に此處に來りて、紙を持行きて歌を書し字を習はれたと言ふが、こは故上原善四郎氏が嘗て己に語られたる處である。由來翁は連詠妮々、數十百首の歌を詠まれたが、時に又、門生舊知を集めて百首會の雅會を催された。翁の書箋に、

ある人どち千うた集といふことをして遊びける時選びいだける

あらそひしことも忘れて童どもまたむつまじくあそびぬるかな

と言ふのがある。孰れの年孰れの折にかありけむ、翁は彌生の頃、八重なる櫻の麗しく咲けるに、欲しさ言はん方なく、己が着たりける衣を脱ぎて主に取りらせ、懇に請ひ得て歸り、庭前に植ゑて衣更の櫻と名付け、年久しく愛られたが、其後翁が禁酒の折、愛用の飄に添へて、隣なる眞鍋氏に送られたが、今は昔の主もなく、哀れ衣更の櫻一株、同氏の南園に伸びむとする幹も枯れて、地上尺餘葉のみして痛ましき姿を止めて居る。遺愛の瓢それには、門人伊東祐思氏が、當時瓢に添へたる翁の歌、

今よりは酒をのますな櫻花おのが木蔭にまるとるしぬとも

てふ一首を、二片三片散れる櫻を描きたる側に添してしるされたが、酒を嗜むこと彼が如く、酒を樂み、酒を謳ひ、酒に酔ひて川に陥りてもなほ、

みづに身をはめても今宵おもしろき心は何のなさけなるらむ

と興じたる翁にして此禁酒の事ある、誠に珍らしき事と言はねばならぬ。

## 上 阪

言道翁、歌道改新の壮志を起されてより、年光流るるが如く、居諸積つて二十五年の久しきにもなりぬ。其間歌道の奨励に、門生の教養に専心攻苦、日夜切々として屈せず撻まず心力を傾倒せられた結果、嘉永安政の頃に至りては、幾多の門下を養ひ得て、其高足に野坂常興、野村望東の如き、或は、幹辰、利明、直道、金生が如き、(石松元啓亦教を受く、現在の歌巻にも元啓の歌多し。)或は巾幗に望東が友、いそ、つる、つち、さき、ちかが如きあり。翁の歌風次第に流播して宿志漸く舒ぶ。されば翁は更に一步を進めて幟を京阪の間に樹て、己が歌風を廣めむとの切なる希望も出でしなる可く、且つ家集も一度は上梓して世に問はむとは、翁が多年の志願である。しかも齡は既に六十に達しぬ。荏苒日を送らば何れの時か家集梓行の機會を得む。即今直ちに起つもなほ且つ遅きの嫌あり。餘命幾何もなし、豫て歌道に捧けたる命なり、死すとも惜しからず。いでや己が歌風を廣め、己が主張を布き、且は家集出版の爲め萬難を排して上阪せむとは、これ翁が胸中秘奥の呷なりけむか。茲に於てか翁、安政四年八月十五日、遂に意を決して都に上らむとす。剖なく止む可きならずとて、門人故舊も惜しき訣を告ぐ、向の陵なる望東は、盡きぬ名残に己が庵に招じて翁の出途を送つたが、早、鹿島立つ日も來りければ、望東、

たひらかに歸りきませと言ふまにも我が命さへかつ思ふかな

と打嘆きつつ、千代の松原まで送らむとて出づ。翁はさる方に行くとして宮崎石秀を具して行く。望東は素行と二人して彼の松原に行きて待つ。やをら待ち得て、此處にて訣る可かりしに名残は盡きず、今少しとて二股の瀬ま

で皆従ひ行きて、其處にて別るとて、望東、

君と我が海山とほくへだつとも月はかたみに見るべかりけり

と契りつつ互に惜しき袂を分たれたが、翁はそれより八木山を越て飯塚に出で、彼地の門生と訣れて蘆屋より船出せむとて、佗しき旅を急がれしが、程なく蘆屋の港に着きて便船を待つ。此地はもと翁も幾度か訪はれたる土地にて、越野守任(蘆屋の巨商、屋號を本家かけやと稱し、游道極めて汎く、越前福井なる井手曙覽とも知音なり。)黒山利簾、惠徳丸茂助等の知己門人もありたる處より、乗船次第に遅れて、『秋も暮れ行くまで出立たでなど』望東のがりのいひやつた。望東、

難波江に行くともゆかぬかりぶしはよしやあしやと思ひこそやれ

と詠んだが、翁はやがて此處を立ちて、安政四年冬十月、多年憧憶の都大阪に着きて、中の島なる筑前藩の倉屋敷に旅装を解いた。

當時藩の勘定奉行に生田久繁あり。翁が直門にして大阪の銀主方とも交際あり。翁が上阪以前に早く其名を阪地に馳せたる、此人等の力にかと思はれる。年定かならねど、七月二十四日附の翁が束贖に、『お勘定奉行生田久繁ぬし、年來わたくしに被學候て、(妻壽子亦翁に學ぶ)大阪御銀主方詰中に歌の贈答など御座候由、鴻池善五郎より頼物、下拙に註文書まるり近く相認め可申候。いづれも言道の名を存居候由、名計にても宜敷御座候。序に御話申上候。』とあり、以て翁が上阪前に其名の阪地に聞え居たるを知る可く、又這次上阪の一因此處に胚胎するを見るべし。時恰も生田久繁大阪詰方中なりければ、翁は直ちに筑前橋の倉屋敷に入りて久繁が身を寄す。され

ど此處許『いと物せはしき』家なりしかば、去りてある方に一月餘りも寄寓せられしが、『こも人のしんじちがやかましくて、長くはえありがたく、文など書く暇もなく佗しければ、又家をかへて、』中の島の洲崎、梅檀木橋第二樓に轉住して、其居を觀水居と稱し、舟居室と名付く。翁が當年の消息を傳ふるものの中、筑紫いそ子に宛てたる尺牘には縷々數百言、往時の委曲を盡して居る。

こゝに参りし時は、御屋敷はいと物せはしくて、片時たえず侍りしかば、とある方に一月ばかりも侍りつるに、こゝも人のしんじちがやかましくて、長くはえありがたく、文など書く暇も侍らで佗しければ、また家をかへ侍りて、今の處いと狭くきたなけれど、大工などものして、たてぐ疊などそれこれとするに、萬の調度一つたらでは、家もつこと能はず。此ほど常興まるりて、朝よひの見ぐるしきおのれが手助かりにはなり侍れど、すり鉢すりこぎなども未だ侍らず、これにて事のたらはで、よろづさばけぬをしらしめすべし。さはいへ、いと心やすく人のさまにならぬこころよき。今はいとよくありつき侍りてなむ。なには橋、天神橋、天満橋、中の島の長橋(筑前福岡なる)を三つ合せたらむやうなる大橋を、はるかに望む川端にて、川は淀川となる川口にて、いと景よろしき故、今は命ものぶばかりなるを、あまりに知る人多くなりて、騒がしけれど、世渡りぐさのよすがなれば、すべなくかかづらひ侍る。

右の文中『とある方に一月ばかりも侍りつるに』とある、抑も誰を指さすにか、こは今もなほ明らかめ得ざる處である。

他に束贖二通、若干の重複はあれど、行文躍動、潑刺として翁が阪中客居の景況を顯現すれば、次に之を節録

する。

芳書雖有披見仕候。(中略)

わたくし無異、今程梅檀木橋第二樓、中の島のすき島居室と號し申候。勿論筑藩大隈言道の門札うち、大分知人多く相成、却て殺風景に候間、唯閑靜を宗として獨居、毎日鍋一つのかしぎ、主従一人、來客は彼方より持出ならでは引受申さず候。無賓主之くらし、糶米は脇より到來いたし、とかく他行致方も利口とやらつき申候。こゝもと弟子新社中見申候處、爰は愚の愚、黃面先生の彌陀のみ道人達ゆゑ、其方は黄金の山、わたくし住居の向ひ、かしまや雁治、日本一金のかたまりに御座候。一つも羨しからず候。(中略)わたくし住居、直道の新宅の風景に大に似より、彼の三大橋はるかに、毎朝霞よりあらはれ候等は、金城目前、生駒山遙かにて、雪中月夜誠に面白かる可く奉存候。色々風流家多く、されど歌よみは熊谷、萩原遠行いたし候につき、名家もなく當時凋落仕居申候。(後略)

又更に十二月五日附、眞藤利明に宛てたる尺牘には、

寸楮敬上仕候。寒氣強く御座候處、益御壯安奉欣掛候。私事無異在坂、唯今は中の島洲崎住居、見はれよく、難波橋、天満、天神三大橋をうちこえ、御城のこらす、生駒山連山うちつづき、朝暮眼前、船の往來などに慰み居申候。久しぶりの登坂にて、一躰之人の風俗迄違ひ申候やうに覺申候。唯自由之宜而已にて風雅なる事は更に無御座、ただ名利の地に御座候。まばらに人の頼み候物など書揮いたし申候ばかりにて、萬葉假字もよめ不申候位之土地に而、萬事御察可被下候。春は上京致し、嵐山、吉野、また早春には月の瀬之梅十五村を尋可申と存罷

在候。(後略)

とあり。前記の尺素三通を併せ考ふれば、大坂客寓當時の景況を髣髴すると共に、其寒素孤獨の生活を述べては、唯閑靜を旨として獨居。毎日鍋一つのかしぎ、主従一人、と喝破したる、或は其假寓の風景を叙しては、『かの三大橋はるかに毎朝霞より現れ候等は、金城目前、生駒山遙かにて、雪中月夜誠に面白かる可く』と述べたる、或は『いとけいよろしき故、今は命ものぶばかりなるを、あまりに知る人おほくなりて騒がしけれど』云々と言へる。煩悶市中の風神躍動、翁が當年の面目を現前する。

翁が大坂寄寓の砌、居中幹旋、多大の便宜を與へられた者に大岡克俊がある。此人生田久繁と等しく、藩の勘定奉行にして和歌の嗜あり。安政五年正月、克俊大阪詰方交代の藩命接手、同年四月六日午刻、筑前倉屋敷生田方着、次ぎて久繁と交代す。克俊が大阪詰方日記を見るに、同年六月十一日の條下に、『曇後雨、兼て登阪寓居致候大隈言道初而入來、酒飯出、』とあり、これにて翁が克俊を訪ひたる時日を明むる事が出来るが、今少しく逐次翁に關する記述を摘出すれば、『九月十二日、晴夕方小雨、三家名代因み會として相招、玉藤屋持出、但河佐仕出、鶏料理は手前仕立にて持出、大隈言道召連、席書等有之。』と記し越て、安政六年正月廿三日には、『晴、舖時より大隈言道僑居せんだんの木橋に罷越酒肴共持出、木村、牧、金子同道。』又、『七月廿三日、例月天神侍中谷市作 會座に候處、暑中お長屋手狭につき拙者お長屋に持出相催、今日神樂奉納に付、原田水山、大隈言道、梅田茂十郎等も罷越、』とあり。安政六年十一月十四日には、お長家に於て謠講開催の旨を記し、經政、殺生石、葛城、俊寛、山姥等の謠が催されたが、翁の名は、六浦、天王寺屋五兵衛、松山鏡、橋本辨三郎、三輪、丹波屋利三郎、龍田、

主人、女郎花、大隈言道とやうに一調の部に記されて居る。克俊は又郷國より送り來る翁宛の書翰の配附、物品の送致等にも便宜を與へられたが、望東より克俊宛の書翰を驗するに、孰れも亦此等の事實を反證する。或時鴻池、かしまや等の豪商參會あり、克俊其席にて翁を紹介せらる。翁直ちに、

まなづるの群れたる空にまじりても身の嬉しさになく雲雀かな

と詠出られたが、此歌痛く人々の嘆賞する處となりて、それより次第に信望を得、同地の富豪とも往來の途開けて、名聲を博するに至つたが、茲に又田代氏に一つの口碑があつて、翁が當年の行狀を語つて居る。何時の頃にかありけむ、大岡克俊淀船にて下坂の途に就いたに、偶々傍を過る船中に翁ありて、京に急ぐ折なりしが、翁船のすり交ひ様に『これ參らせむ』とて、手にせる歌卷を船中に投込みたる儘袂を分たれたと言ふが、此卷今果して如何なり居るにか、庶幾くば再び求め出して、此大御代の光にも遇はしめたきものである。

### 滞阪竝に草徑集梓行

翁が滞阪十年の長き生涯は、市井塵寰の熱鬧煩擾の餘沫を受けて、俗事亦蟬集し來り、福岡在任當時の如く、悠閑文雅の樂も意の如くならず、ことに翁が着阪當初の頃は、家郷近親の人々にすら手紙を書く暇もなく、日夕棲々、俗事にも放膽なる事が出来なかつた。着用の足袋の如きも或は今泉の留守宅より、或は唐人町の上原より

度々上されたが、翁は其消息中に『うめ殿よりの足袋大に用達仕候。國にては冬春毎年一足にて相濟候身ながら、一月に三足宛はきくづし申候。これにて身の動作御察可被下候。うめ殿にも御話奉願候。』と記し、又他の尺牘にも、暇なし暇なしと述べられたが、翁は、此忙しき中にも素志の貫徹に勉め、歌道に盡瘁せられた結果、門人も年と共に加はり、其名も次第に四方に布きて、書名亦遐邇に騒ぎ、當時既に難波三筆の目があつた程で、京都の雲上にも交際あり、彼地にも門人があつて折々上京せられたが、翁の歌風は寧ろ阪地に歡迎せられて、京都にはさしたることもなくて止んだ。惟ふに翁は翁自ら任ぜられたるが如く、牆東の隱者であつて市井の歌人である。されば翁の歌風が尙古の府であり、傳習に囚はれたる京都に容れずして、反つて不羈自由の大阪に容られたる原より其處である。大阪に於ける當年の交友の中には、中島廣足、萩原廣道、近藤芳樹、岡部春平等の人々があるが、女の歌人では播州明石の人に古屋槌子と言ふがありて、上阪當時翁の爲に斡旋せられ、色々の便宜を與へられた。卯月二十二日發筑紫いそ子宛の手紙に、

こゝもと槌子といひて、五十ちあまりなる女、明石の君の家中にて、萬葉などよく手に入たるが、おのが上をよく世話して、此ほどは明石に歸り侍りぬ。弟子ここにもあまた侍り。明石兵庫などにもかすく侍りて、待ちかねたりしふみ、又歌などかなたよりおこすることおびただしとか、いかで明石兵庫にもおのれに時々下れかしなど、そそのかし侍るになむ。

の一節があつて此等の事實を語つて居る。

翁が大坂觀とも謂つ可き觀察所感の一端は、現存せる尺牘中に見出す事が出するが、今其中より一二を抽出す

れば、先づ着阪當初のものには、前に引用せし書の一節に、  
久しぶりの登阪にて、一躰の人の風俗迄違ひ申候様に覺え申候。唯自由之宜而已にて、風雅なる事は更に無御座、ただ名利の地に御座候。まばらに人の頼み物など書揮いたし申候ばかりにて、萬葉假字もよめ不申候位之土地にて萬事御察可被下候。

と述べ、又他のそれには、

大阪は筑前よりも人氣鈍く、一躰山遠くして雨ふるもやう、雪もさのみはふらず、星のギラツク夜天もなく、人情平らか也。まこと難波わたりの春のけしきをよめるさること也。夫ゆゑ人も鈍けれど、往古よりこときまりて、小兒までもことキマリたる習風なれば、筑前のあらうちよりは事切迫にて、ソコニハ鈍氣も御座なく候へども、直雄、重道など御同道にて御上りあるものならば、こゝの人たちはタマラカシ不申候。わたくし事も歌には退屈なし、人情のシマリには困り申候。

と述べ、流石に翁も土地の平俗にして名利の地なると、人情のシマリなきとに嘆聲を漏されたが、當時の門人多くはまだしき者のみにて、將來の期待もいと少なかつた。されば翁は郷國よりする和歌の優れたるを書取りて、こゝの門人にも示し、又京大阪の歌人にも示して自らを慰められた。

○じろしのみ歌、こゝに書いとりて侍れば、ここの女どもに見せ侍るべし。またここのはいとうひくしきのみなれど、おのれが弟子ならで師匠だつものは、京都をかけて數多あるに見せてこそほこり侍らめ。ここの人は負をしみ少く、もと子(望東)などの歌、いづれも感心し侍るぞかし。さいつ日京都にしばらく参りて、千種殿

の局たりし式部にも逢ひ侍り。つち子といふ女、ここのには高名なりしも、明石の浦に歸りて久しく出でまうでこねば、ここのは皆おのれが弟子のまだしきのみにて、見せ参らすやうの女の歌も侍らす。

此種の話は、他の尺牘中よりも引く事が出来るが、畢竟翁には、期待に添はぬ若干の事項もあつたであらうが、翁が非凡の歌才と不斷の努力とは、次第に阪地の信望を贏ち得て、異日翁自らも『筑前よりは、しらせ給へる人數に侍れど、國々のしる人、京大阪までもおのれをただにはおかず。ありがたきことながら、ゆくさき短き者は、若き人のやうにせば、昨日今日にやかぎりなむと、せめぎ侍りてなむ。』とか、『わたくし事獨居にて、短日三度に紛、まことに煙中之風雅多事すぐしがたく、しかし阪中豪富の別荘など、紅葉、百本二百本こけつきなど、金錢の光を見めぐり候處、ヤツハレ金多き家に風雅も集り申候。』とか記されたが、後年野村望東上阪の砌、郷國に書を裁して、阪地に於ける歡待の模様を叙し、更に筆を轉じて、これ偏に翁の信望の然らしむる處と結んだ。文に曰、

ここのと大家の町人ども、まことに御國の御家老も御及びがたき事どもにて、家内のふりあひもお大名の奥殿のやうなり。未だてつべんの町人などにはゆき不申候へども、中くらるさへかやうに御座候。一昨日は鞠けりの方にて、歌のくわい御座候て夜九つ頃までかかり申候。晝はまり、夜は歌にて御座候。歸りは加東なにがしといふべつかふ店、これは名高き三井ごふく屋のむかへ、やはり三井が出店にて御座候。ここにとめられとまり申候。縞縮緬の夜着ふとんに、おきこたつまでいれて、夫婦してねどこなど引、手をとり足をとりてとりもち申候。其外歌よむ人又はとりもちの人どもより、あがめられて高名くといはるれば、少しむつかしく耻を

かかぬ用心こんきうなり。しかしここにくるより初めて、かくとりもたるゝは、言道先生が恩ぞかし。居諸十年、大阪滞留中の翁は、其郷閭に於けるが如く貧困であつた。中の島の洲さき柗檀木橋畔の觀水居と言ひ、船場今橋一丁目の僑居と言ひ、天満若松町光專寺の借家住居と言ひ、孰れも寒素窮乏の裡にありて、洒脱飄逸、酒を樂しみ、風雅に耽り、和歌に甘心した。翁は市井の喧騒より出でて『唯閑諍を宗として獨居、毎日鍋一つのかしぎ主従一人、』とやうに昂然として嘯き、米鹽金錢は目にも止めず、切々不斷の奮闘を續けられたが、何時の頃にかありけむ、窮迫困苦愈々翁の身に逼りければ、流石の翁も遂に一時の急を避けむが爲に、仲士頭となりて糊口を凌がれた事もあつたと言ふが、當時單に歌人として門戸を張り、活計を立つる事の困難なりしは、今日よりも容易に認知し得られる處であるが、茲には此事實に觸れたる望東が書簡を節録する。

過ぎし御たよりの文いとく嬉しう、たいめの心地にくりかへしてなむ。(中略) 蓮月尼をとひ侍り。たにざく三葉ばかりもらひ歸りしかど、歌思ひです、ここになければかいつ侍らす。いとおもしろき歌なり。早よはひ七十五なる由ながら、未だ五十ばかりとも見侍る。いとくうつくしき尼ぞかし。昔はいかに花さきし人ならむと忍びやられ侍る。(中略) 此春は不快にて藪ぬしにありしうちより、かしの初ひなの細工の手つだひ先生やくして、やうく昨日三日すぐして、今日はいとまと思ふに月の瀬に行くといそがはし。右の細工事廿年もやめしを、中々にここにてかやうのことに歌もやめ、あだし心を費やしあたらしき、いとわびしけれど、はたこのかはりとせいをだしてなむ。此わざをせばやすく都すみも出来はべらん。歌よみにては中々ゆくことにてもなし。されば蓮月もする物師となりてあるぞかし。式部もほり物師ぞかし。素行ぬし、つる子ぬし

にも此文御見せありて宜しく御傳へ、とてもく文かく暇すくなし。俗人とあけくれどやくとくらし侍るは、かねのなき故ぞかし。此春ばかり歌よまぬ年今までなし。

人にただまかれくくてゆく水のすまぬ心をあはれとも見よ

三月四日

望 東

いそこの君御もとに

翁は萬丈の紅塵裡にありて塵網を脱れ、悠閑孤筆、風月を愛し自然を樂しみ、春さり來れば阪地の樋の口、京都の嵐山、さては大和の芳野の櫻に、秋さり來れば京洛の風物を見廻り、東山、通天、三尾の楓に吟嘯暇なき様であつたが、忙しき中にも故郷福岡なる門子を忘れず、或時は書を飛して、『歌の道やめさせ給はで、向陵とたかさ同じに遊ばせかし。』と奨め、又或時は福岡、飯塚等の門人より送りこせる咏草を添削して下すと共に、和漢の書籍を初め短冊色紙の類に至る迄、何くれと買求めて下されたが、這個の消息を語るものに次の如きがある。

暑氣相催候處、彌々平らかに渡らせられ奉祝候。わたくしこと無事相凌居申候間、御心易く覺召被下度候。扱兼々御申越の萬葉書御手本大に暇取、さぞく御待かね奉察候。被遣候御手本、わたくし筆には合不申候間、致兼申候。よろしく御許被下度候。御短冊は京都に注文致し候間、近き内に下し可申候。何事も繁多にて少しも執筆出来兼申候。

いつぞやはなの川(筑前那珂川)鮎澤山、ジャガタラ(朱鬘)等御贈、御深切奉感謝候。(後略)

又、

御たにぞく下し侍る。丁度おのれが心になへるものなく侍れど、大阪は思ひの外無調法にてつまり不申、よろしくゆるし給はるべし。御歌ことに面白く、則ち拜點ささけ侍る。日の短かさに大はんだにて、御屋敷にもえ行かず、聞え上たき事のみ。(後略)

此等二通の尺牘、素より翁が日間瑣末の行實を傳ふるもの、取立てて言ふ可き事でもないが、此種の情報甚だ多く、雲路百幾十里、互に音問を怠らず、師弟輯睦して一家の如く、師翁の好むところなればとて、或は那珂川の干鮎、或は白魚、干沙魚、扱はこぶのりと、いろいろの品を上せて、孤獨の翁を慰めたが、翁もまた故郷忘じがたく、思は常に福岡なる門人の上に馳せて、激勵誘導深切を極めて居る。これ等門人の家に就きて、現存の尺牘を驗するに、孰れも交態歴然、溫情溢るるが如く、讀む者をして景仰の念を禁ぜざらしむる。殊に野村望東を中心とせる婦人の一團、八木つる子、筑紫いそ子、花房さき子、村田ちか子の如きは、心契戀々、互に慶福を頌ち、憂戚を等しうせしが、翁に對する推服も亦異常で、師弟唱和、中心を推して歌道に切磋せられたる當年の行實は、洵に是れ一場の美談である。

翁が上阪の後、福岡なるさゝのや門下を率ゐた者を、翁の高弟野阪常興となす。常興は博多大濱の人にて、氣概に富み、和歌に巧なり。翁上阪の後、己れも後を趁ひて梅檀木橋畔の觀水居に入り、朝よひの手助をなしたるも此人である。望東書を裁して翁に送る。文に、

ゆくりなく旅だたせ給ひしより、いつこにか渡らせ給ふらむと、いと覺束なく思ひきこえ参らせしほど、やうやうそこにおはしまして、ゆたかなる御すまひなどに物し給ふ由、承り傳ふるに、いささか心のどめ侍りぬ。

猶平らかにこそすぐさせ給ふらめ。されど弟君うせ給ひつる由、遙かにきかせ給ひけん、御心のほどこそ推量り参らすれ。さる御事にも歸らせ給はねば、秋さへそなたに過し給ふらむと、覺束なさも限なくなむ。

君がゆき歸るもまたでこし秋は月のひかりもなき心地して

言の葉の色だに薄き物から、かくてのみやはとて、かれこれ言ひ合せて、夏秋の歌ども、いささか書いつめさせて聞え参らす。こたび常興をそそのかし侍るにつけても、おのれ男にしもあらばとのみ、しるしなき事さへ思ひくらし侍りぬ。いかでとく歸らせ給ひねかし。何事も急ぎ侍りてかいあはせ侍らず、よろづかれより聞えあぐべし。あなかしこ。

とあり。以て當時の消息を了得す可きである。

翁が遊行癖は、上阪後と雖も變るところはなかつた。春秋の移るにつけて、大阪近郊の地は更なり、或は嵐山に洛外の花を賞し、或は鴨川橋畔に洛中の月を愛で、酔うては夢を乗せて淀川を下り、風霜幾年か京阪の間を往返せられたが、安政五年正月、月の瀬の梅見にとて長瀬某と共に大阪を出づ。家集今橋集より當時の旅況に關する部分を抄出すれば、

月の瀬梅見、うまのとしむ月廿六日、長瀬某と出で立つ。京橋の鶯、なか洲のとり、丹波山の春雪、川清く廣し。八幡の神社(ココニトマル、タタミヤ三右衛門、放生川橋ぎは)木津の中食、加茂の止宿。二十七日、廿八日、月の瀬。窪田某魁春洞、カチャ兵助。

梅見つつあくがれ行けば山鳥の尾山長引月がせのさと

其夜大雪ふれり。家も巖も梅にこそ、風景いはん方なし。あるじの齡を祝ふ。  
花ごよみ見るたび毎におもひでむ千代にかはらぬ梅の忍まひを  
なが引。

なが引のをおろしにちる梅の花なだれて落る雪にぞありける

木津より船に乗る。

こぐままに山もわかれて行く船を今はとあがる人ばかりかは  
たかむらのうゑかへ竹、二もとばかりづつ、藪より梢のみ見えていくつともなくゆく、人かけは見えてに  
なひゆくなりけり。

いひかしく頃やきつらむわがのりて行く舟にても煙たつなり

舟ののほり下り、右に行き左にたわみ、瀬の浅き深きにしたがひて、上りくだる様いはんかたなし。山に

こそかかることはありしと思ひしを、水尾をたどりて船どものあつまり下る、山路のごとし。

やましるなじま川べに梅あり。

おのづから山と川とにあやなして梅のすがたのめづらしき哉

文政二年己卯の年、伊勢韓聯玉といふ人筆をとりはじめし月瀬梅花帖、二川、月形（孰れも筑前藩士にし  
て、一は翁の師二川相近、他は鎮西の老儒と目せられし月形鶴栖翁か）などの詩もあり。

二日の夜、淀より夜川にて、三日の朝、大坂八軒屋につく。

翁は又、月の瀬の探梅に赴かれたる安政五年の事にか、扱は又の年にか、彌生十日に家を立ちて、大和芳野の  
観櫻に赴かる。

吉野花見にとて、やよひ十日あまりいでたちて、二上山のくほみなるたけのうちといふ所にやどとりて、

あすは見むよし野の花も夜一夜をまだへだてたる竹のうちの里

古市。

古市にいまいくほどかあるといへばその古市ぞここといふなる

はせに詣でけるに、國なるもと子のもとにやりなむとて、櫻の花をつみとりて、

つみとりて見ればかはらぬものながらはせ山櫻見ればことなる

見わたせばみわ山のをはつせ山としふる門のかはるせはあらじ

よしのにて花を見てよめる。

父母のめぐみうれしきわが身かなあれはぞ見けるみよし野の花

ねがふこと今はなき身となりにけり花さかりなるよしのよく見て

馴花、

おいの身にほどうちあはぬ友なれどさりけもなしになるる花かな

かへりて見ればかめにさしたる椿、ちらでかれてのこりたり。

旅のまにさせる椿はかかれたれどさてもゆかしき花のおもむき



翁の風流はこれのみに止らず、花の盛に初瀬に詣で、慈恩寺に宿り、或は石山を拜み、あは川を渡り、扱は如東利貞と大和の國の國めぐりして、かめのせ峠にては、

はぶきたつこすゑの鳥に驚けば我がなつかしき山ほととぎす

と詠み出られたが、翁の尺牘にも、

毎々上京のうちにも、高尾の紅葉、梅の尾、楨の尾などことさら見事、東山、通天などこれ又見事、大に相樂申候。高尾は山川幽谷のながれ殊更にて、格別京師に遠くも御座なく候。あはれ御上りあれかすとそののみ相待申居候。最早秋も過候につき、來春は必ず待ち候。

と述べられた。以て翁が遊行の一端を見る可きである。

翁は萬延元年(或は翌文久元年か)二月四日、居を今橋一丁目堺筋に卜して之に移り住はれた。假寓の様は女婿田代正良に致されたる次の尺素に活躍する。

新春の貴書拜披、愈々御安祥御越年、御賀年始目出度奉賀壽候。私事不相變達者御放念被下度候。二月四日轉宅いたし、船場内に引移申候。今橋一丁目南側。御屋敷にはちと計遠く相成候へ共、向へは日本富豪の關脇平野屋五兵衛、隣つづきは則御藏元鴻池善右衛門、うしろあはせは前之番附大關三井八郎衛門の店なり。その向ふ店鼈甲棚の主人、則ち越後屋藤助私を引寄せられ、何から何迄世話致し遣され候へ共、心底難澁漸く此頃ありつき心静まり申候。一寸庭に櫻一樹を植ゑて、

きのふけふおのれも我もなれずして市のすまひはものぞ侘しき

花咲くべくふみ出たるは、まことあはれになむ。毎日々々風雅は少く、多事のみにてあかしくらし、餘命の少きに何事ぞと存じ、田舎の閑日月戀しく相成申候。希くは都會の花柳を田舎の寂しきに移して、事少き田舎暮しをもがなと奉存候事に御座候。此春は嵐山再遊を存ち居申候。京師にも少々弟子出來申候間、十日計りは滞留仕り可申候へ共、一夕にて淀船にて歸阪致し候儀故、何ともなくたやすけに存じ居り申候。

久しぶり代右衛門に對面致し、彈正殿頼みの書等世話致し候。著書出來致し候はば、一先下國可仕とも奉存候。望東ぬしよりも色々申參り候へ共、田舎人は上方を知らず、上方人は田舎を知らず、紙筆にはわかるものには無御座候。うめ殿より申來候五日市下し申候まま御遣し被下べく候。飯塚より御許へ到來物の禮申遣可申候。かしこより詠草、田代より詠草等參り申候へ共、益々添削も出來不申候。

岡田屋娘縁付致し候由、中々事多くそのままにて御捨置になし、何も私留守にていと何處にも御鳴謝奉希候。この矢立は三井の悴、わたくし孫あることを知りて遣しくれ候様に申候間、幼な心感心仕候間、唐人町延壽郎に御渡被下可く候。町人の様にならでは相すまぬ器と奉存候。(後略)

文久三年癸亥三月四日、時の將軍徳川家茂、京師に朝し二條城に入る。越て四月十一日、孝明天皇石清水八幡宮に行幸の御儀あり。こは、天皇家茂に節刀を賜ひ、攘夷を誓はしむる爲であつたとか。翁鹵簿を拜して、續草徑集に記して曰く、

文久三年四月十一日、八幡行幸拜みにとて淀まで行たりけるを、宿かす人なくていと侘しきを、しひてただの家に一夜を請てをがみけり。將軍家を始め堂上のこらす、在京の諸大名のいでたち、花やかなること

いふも更にて、鳳輦はおはしませず、引つづきて來る御輿にめされて、烏羽いなりの御小休、夜五つ時八幡につかせ給ひて、その夜神殿にやどらせ給ひてふし給はず、明日還御ましましけるよしなり。此年頃、外國の船仇ながほなるを、うちわたさせ給はむの御祈ならむかし。

をとこ山けふのみゆきのかしこきも命あればぞ拜そめける  
と述べられた。

翁大阪に去りてより、年光流るるが如く逝きてはや五歳にもなりぬ。福岡なる門人よりは、早や歸れ、早く歸りませてふ書簡は幾度か翁の許に致されたが、向陵なる望東よりも屢々下阪を奨められたに、翁は未だ其時ならずとて、此等の切なる願を退けられた。翁の消息に、

孫の顔はそと下りて見まほしう侍れど、あさらなるちぎりにて、一つ處にもえあらぬは、すべなきえにしとこそ思ひあきらめ侍るなれ。向陵よりも下れちよと下れ、又のほるはさはらじなど、段々いひおこし給はれども、未だ家集をだにもせす侍れば、今年のうちには歸ること覺束なし。

とあり。以て翁が決心の牢乎たるを知る可きである。野村望東、亦夙に上京の宿志あり。その動機につきては、望東が上京日記に、『幼きより一度は百敷の大宮を拜み奉り、ついでに都の花紅葉、名所古跡を見ばやと、常に忘るる時もなかりけり。ざるを我師言道のぬし、この五年ばかり大阪に物せられしを、彼處の歌人留めて歸さざりければ、いかで上りてなど思ふうち、貞貫君もなくならせ給ひしかば、忘れ形見の言の葉は、いかで梓にも彫らせてむとのたまひし事もあれば、我が言の葉の色なきと共にして、ざる方にもとてまづなほ先達の許に行きて、

覺束なきふしぶしをも問ひあかし、選びをうくべしと思ひおこして、彼是に語らひけるに、うべなりといふ人多かりける。』と記されたるが如く、禁裏拜觀、歌集出版、師翁過訪等の宿志を遂げむとて、上京の途に就いた。時將に文久元年十一月の事である。越えて十二月六日、望東を乗せたる船は、風帆恙なく難波に着きて、安治川口より中の島まで水棹さしつづつ行く。日も早や黄昏れるに中の島なる津島屋東藏の二階に宿る。次で八日急ぎ師翁を訪ふ。久しぶりの對面に『嬉しさ言ふばかりなく、かたみに涙さへこぼして』物語られたが、十二月十六日、大阪筑前橋發の望東が書翰に、

年も深くなり侍るを、御方々平らかにこそ渡らせ給ふらむ。おのれも漸う少しおりあひながら、ここかしこ大家より招かれ、文かくひまも侍らず。さりながら舟路ものどかにて、よろづことなくすぐい侍れば、かしこながらみ心やすくおほし給はれかし。常興、言正は京に行きしかば、今はただひとりつしま屋の二階に住み侍るぞかし。

めのまへの安治川舟の行かひをゆたにまだ見るひまなかりけり  
いづこにてもいとなき世にこそ。ここは先生の家遠ければいとわろし。されど東郷ぬしよりのみの文、又は大岡よりのたのみにて、たのもしく宿よりもすれば心づよし。

とあり。

次で望東は翁に請ひて、向陵集の序文を得む事を約し、大阪を辭して京師に上り、鳳闕を拜み、名勝を探り、大和の月の瀬に遊び等して、過訪遊賞暇もなき様であつたが、翌年五月十二日再び大阪に下り、同じく十六日夕刻乗船、歸國の途に就いた。

文久二年の頃翁は、大阪天満若松町光專寺の借家に移居せられた。上原尙文氏は心の華誌上に於て、大阪北區若松町なる光專寺は、翁の寓居の北隣にして、翁は實に此光專寺の借家に住せられ、又此寺の所謂檀家なりしなり。予酒舗重松保助氏の教により、寺を訪うて翁の事を正ししも、寺僧人代りて少しも明らかならず。然るに此寺に『慶應三年歲丁卯八月更檀越名前別録。三郷全山』と表記に記せし古帳簿あり。是當時の戸籍帳簿にして、當時皆之に依れるなりと云ふ。此帳簿中に左の如く記しあるを見る。

北大組第十區若松二番町

天満十一丁目光專寺

大隈屋言道

卯七十死ス

此卯年は即ち慶應三年にして、翁は此年に死せしに非ざることは、前述の諸項に證せり。然れども慶應三年にして、翁の齡正に七十歳なりし事は、確實なる證左なり。但し此帳簿には皆生年月日なし。是或は當時の法なりしならむか。予寺僧に梅田碑文と年齢の相違を語りしに答ふる様、當時は若し其人歸國して死去すれば、其國より通知を待ちて記入するの例なりき。故に或は記入する者誤りて、卯の年に死せしものと記せしならむか云々。其墨色を見れば、正しく大隈屋等の文字と差異の著しきありて、後日の記入なる事を知れり。と述べられたが、今春おのれも亦、若松町なる光專寺を訪ひしに、寺は先年の天満の大火に焼け、今は大阪控訴院の地域内に取り入れられ、礎石をも止めぬ様にて、中の島の觀水居や、今橋一丁目堺筋の舊居や、世の變遷に漏れず、これ亦何等得る處もなかりし。

若松町居住の年次、そは斷定的に確記する事は出来ぬが、然し推定資料として二の材料がある。一は翁の門人小林重治が壬戌調撰の奥書に、『難波天満大隈言道』と識されたと、他は左に採録する處の翁が尺素である。

○月三日の御狀拜見、御滿堂御壯榮慶祝仕候。わたくし無異大に安逸暮居申候。もとより事をやめ申候へば其方が氣易く、見物などは見のこし不申候。御安心可被下候。

流行病にて所々御大層の御守、御上せ被下大に難有奉存候。ここもと麻疹の後に病死の者多く候へ共、それは事仕舞、只今は御國急症の類にて大人まで大に死去致し、私のとより寺到而小寺にて、庄（福岡なる）の寺程も無御座候も、毎日葬送日により三度も致し、梅田千日など迄出浮、チャンボウに相成申候。隣家には墓も無御座候。

頃日わたくし歌撰出にかけり、一向に暇無御座候。千首計出版いたし可申つもりに御座候。出来次第懸御目可申候へ共、板行急には出来不申、冬にかけては少しばかりづつ彫立可申候。申上度事山々讓後便申候。

書中『麻疹の後』とあるは、これ文久二年の疹毒流行の後を指す者であつて、『頃日わたくし歌撰出にかけり』と冬にかけては少しばかりづつ彫立可申候。』と述べられたるは、草徑集粹行の前年即ち文久二年の冬に相當する。

翁が大阪假寓の第六年も事なく暮れて、明くれば文久三年亥の初春、陽光の來復と共に、翁が宿志を遂ぐ可き時期が到來した。翁は文久二年の頃より自詠撰出にかけり、自ら版下を書し、冬にかけては少し宛彫立、遂に文久三年正月廿日、草徑集三卷の上梓を見るに至つた。多年の素願を達し得た翁の喜び知る可きである。翁は之を諸方に分つと共に、福岡なる知己門人等にも頒たれた。筑紫いそ子に致せる文に、

かの集ももと子には遣して、かつがついづれにも出来次第二部三部とつかはし侍れど、未だ御連中にもえささけ侍らずなむ。こたび百部もすり出でば、必ずささけ奉るべし。さいつ日花房ぬしふといらせられ、京都にゆかせらるる由、あくる日御屋敷に尋ね侍りしかど、早舟にて京の方へ立たせられけるよしなれば、家集一部あつより京に送り参らせしを、此頃は勅使御下向にて、あかしとやらむにつきそはせてゆかせ給ひける由、まこと御屋敷には、一月に一度か二度かとはえゆかぬ身なれば、何事も聞き侍らず。

と述べ、又、飯塚なる小林重治に裁せる翁が手書には、

御精翰奉拜披候。向暑の候益々御清榮奉欣抃候。扱過し頃者久振調華顔大悦奉存候。御満座中往年よりも御心易く被仰下大に嬉しく、御迷惑の御事共申上候處、程能御聞通被下偏難有御儀奉存候。扱又先頃上阪不圖途中より差起、雀躍のあまりまづ一度上阪いたし不申候ては、摺立何かも出来不申候につき、意外の失敬相働、もと子などにも苦心をかけ候段、無此上大罪、それには御深實に御教示被下候廉々徹心肝申候。以來は何事も御趣意に奉仕候。乍去、こゝもといづれ片付不申候ては、直雄ぬしにも申上候通、何分出帆出来不申候につき、頃日すり立の内、百部程さし下し候につき、御賣廣め相成だけ早く御上せ被下候はば、早速爰許出立いたし可申候。委細は直雄ぬしに申上置候。直道ぬしに急御談合奉希候。わたくし下り候へば、田代(肥前國)木やぶ(肥前國基肄郡、養父郡)筑後其外御郡中、唐津、肥前等にも上下草徑集如何様にも賣弘可申候。板はもとより所持致居申候につき持參致し、二篇も蘆屋割腕家に頼みほらせなどいたし可申候。仕立も飯塚にて屹度出来可申見込申候。時に直雄ぬし阪着對面後、わたくし大不快、中風發し半身しびれ申候へ共、幸に得奇藥早速清快

仕候。何副氣力疲平無御座段は、書揮にも御高察可被下候。過日の不快を思ひ返し候へば阿房らしく候へ共、誠に難澁至極にて、

死出の山近く見え来てかなしきは外によき路もなき身なりけり

あさまし乍らむかし物語御推讀被下度、爰にて一首致し度候へ共、よくなれば歌も引こみ申候。向後何も相憤保養一邊に仕居申候。御大笑。う月二十五日。

と述べられたが、右の尺牘中一の疑議あり。『過し頃は久振調華顔大悦奉存候。御満座中往年よりも御心易く被仰下、大にうれしく』云々の條下竝に『扱又上阪不圖途中より差起、雀躍のあまりまづ一度上阪いたし不申候ては、摺立何かも出来不申候につき、意外の失敬相働』云々の一節即ちこれ。此文意よりすれば、翁は下阪ありて筑前飯塚なる小林重治、竝に同地の門人に逢ひ、重治には何か懇談あり、望東にも苦心を懸けたる後、草徑集摺立其他の用件出来、急遽上阪せられた様に思はれるが、翁は果して歸國ありたるか否か、これ疑問の存する處である。翁の令孫田代春海氏は、『言道は、阪地滯留中一度歸國ありたるが、再び上阪を思立たりければ、強て引留たるに、飯塚に行くとして家を出でて、其儘上阪せられた。』との事であるが、此尺牘と合せ考ふれば、草徑集梓行後一度歸國ありたる後、再び上阪せられたとす可きである。翁が中風罹病は同年三月末の事にして、望東は上阪中早く既に、翁の健康に就きて、『言道大分としがより、この冬(文久二年)の寒さなどもさはることもやと存候やう御座候。』と申送つたが、果して重病發し大に腦まれたが奇藥を得て清快、後又再發するに至つた。翁時に六十有七。

晩年と臨終

翁は半生の希望であつた草徑集梓行の後、草徑集二篇三冊、歌數、千餘首の出版計畫を立てられた。草徑集巻尾の茂村恒久が跋にも、『又二篇も程なく物す可くなむ。』と豫告せられたが、遂に剞劂に附することなくして止んだ。

文久三年十一月、翁はかねて望東より依頼せられたる向陵集の序を脱稿した。越て元治元年六月、野村望東、福岡なる向陵にて六十の賀筵を開く。當時太宰府謫居の三條實美公を始め、他の四卿よりも祝の歌を賜はる。翁も亦迢々たる雲路遙に次の歌を寄せられた。

野村望東六十賀かきて筑紫につかはしける

海山者雖隔千里外祝意者不變在敬里

慶應紀元の頃、近藤芳樹、眞鍋豊平などと集ひて歌詠まれけるに、

皆人と共に心はあるものをしひてもしたる夜のまとるかな

と詠じ、又岡部春平がもとにて、

わがたけに及ばざりつる櫻花ことしはのきの上に見るかな

と詠まれた。其間又河内大龍寺にての歌、京師大火の歌、中風罹病の歌、くまもと國手に送る歌、懷郷の歌、等も詠まれたが、其中最も面白きは、

もろともに住めばかしまし諸共にすまねばさびしうたてめこども

この歌を、ある君にきこえあげたることありしに、そのころ御ふたところ、はなれがちにおはしける折なりければ、あはれとおほしけるよしある人のつてに聞き侍り。よき人もわれらごときものも、心は同じことありけるにや侍らむ。

と述べられた事である。

慶應元年十月福岡藩には大獄が起つた。勤王の志士佐幕黨の爲に構陷せられ、或は自刃或は斬罪或は遠島幽閉等、嚴罰に附せられる者相次ぎ、閩藩勤王の士蕩然として地を拂ふに至つた。望東亦之れに座して幽閉せられ、次で、玄海の孤島姫島に配流せらる。此由大阪なる翁の許に聞えければ、翁、

さはることありて、もと子引こもりけるよしきこえければ、

うすぐもる月のあかりは見えながら手をだにささぬ程ぞ侘しき

と嘆き、姫島配流の事を聞きては、

(上略) 追而は明白の時も可有御座候哉、老人の事ゆゑ、島にて自滅いたされ候はば、甚いたはしく奉存候。

殊更當冬より一粒も入來申まじく、内所オクリも出來兼候はんと、嘸々不便に存やり申候。島にても牢居の事ゆゑ、執筆タンハコならずとこそ存やられ候へ。

云々と、咨嗟憂冲痛く望東が上を案ぜられた。

翁が故山歸臥の年次は、未だ之を詳にすることが出來ぬが、龜井南冥が和歌の端書の終に、『慶應二年丙寅十月、

大阪天満にて六十九翁大隈言道。』と記されたれば、書揮當時までは必ず在任せられしなる可く、又翁の二女うめの話なりと言ふを聞くに、翁は二月頃歸國あり、夫れより二年ばかりしてみまかりぬと言へば、必ずやこれ慶應三年二月のことなる可く、其の間多少の出入はある可きも、之を以て大處を得たりとす可きである。翁が歸國に關する田代家の口碑、それに據れば、翁は歸國を思立たれたに、阪地の誰彼止めて歸さざりければ、身一つにて免れ歸られたが、歸國後といへども屢々迎への者來りたれど、遂に斷りて出處を肯せられなかつたと言ふことである。

故山高臥の翁は、今泉の舊廬に、酒に負き櫻に負き、缺けたる硯を抱きて靜に病を養はれたが、由來翁は酒と櫻と硯とを以て三つの友とせられたもの、今は酒も捨てぬ。櫻も捨てぬ。

友と思ふ友は此世に一人なくわれたる硯一つなりけり

とて筆硯にのみ親しまれたが、病進みては親しき硯、懐かしき硯にもいつしか疎くなりもて行きて、『三つの友達一つだになし』と感慨を罩められたが、されどく捨て難きは歌なり。

これや身の生けるかぎりの思ひ草先の世よりの種と知らるる

死出の山越えく／＼てゆく先までも我がしきしまの一筋の道

と、豫て和歌に對する深き／＼愛着を詠まれたが、歌集續草徑集を見るに、卷末の十數葉は運筆流石に澁晦し來つて、書體模稜の箇處多く、晩年まで筆を捨てざりし熱心の程も窺はれる。慶應四年七月の頃に至りては、病愈々重りて、正良夫妻を始め看護に心を許す暇もなかつたが、翁或時ふと筆紙を請はれるままに、板の上に紙を延べて

持ち、書き終られるを待つたに、翁はやがて萍堂言道居士と書し、これにてよし、香正寺の僧も何も言ふまじとて筆を擱かれたが、これ實に翁の絶筆であつて、翁の卒去後其儘墓石に刻せられた。

慶應四年(明治元年)七月二十九日、此日偉大なる天才歌人、萍堂大隈言道は、大星の地に墜つるが如くに逝いた。年を享くる事正に七十有一である。遺骸を福岡藥院香正寺なる祖先の塋域に葬る。墓は北に向ひて言朝夫妻の墓に面し、室信國氏の墓を右にし、山崎氏の墓を左にする。表に、

萍堂言道居士

と翁自筆の六字を刻し、裏に、

慶應四年戊辰七月二十九日 年七十一 大隈姓

と刻す。墓石は天然石を用ゐ、高さ三尺幅二尺位、臺石二枚ありて天然の儘を用ゆ。

大阪市北區梅田の舊墓地には、阪地の門人が翁の死を悼んで一基の碑石を建てた。こは翁が生前愛用の敗筆を埋めた敗筆塚である。表には大隈先生墓と刻し、碑陰に『大隈清助、姓清原、名言道、萍堂其號也。筑前福岡藩、寓三十大阪府、以三國詩鳴。著草徑集。頗有書名。歸省卒。年七十有二。明治紀元歲始戊辰初秋二十有九日。葬於本國。阪府門人欽慕其德。相謀埋敗筆。以建之云。友人田癡撰並書。』と記された。石材青石を用ゐる圓柱形にて丈け二尺二寸餘であるが、赤みたる自然石を以て臺としたり。文字は楷書であるが、文中翁の年を七十有二とせるは、七十一の誤である。往年竹柏園の大人、梅田の三昧に翁の墓を探られたに、土地不案内にて探り當られざりしが、大阪なる磯野秋渚氏、大人の囑を受けて梅田の墓地を探られたに、氏は遂に墓地の東南端なる楠樹の下に、件の墓

を見出されたが、墓前に櫛の枯れたるが捧げられてありしと言ふ。己れも亦本年三月梅田なる東福寺別院に翁の墓を尋ねたに、時恰も墓地整理中にて所在を失せしが、漸く門内前庭の無縁塔中に、青石圓柱形の碑核のみを見出すことが出来たが、同じき四月佐佐木博士の下縣と共に、博士は平岡良助氏と謀りて、東福寺別院と交渉し、同寺の諾を得て、之を藥院香正寺なる翁の墓側に移すこととなつた。

## 生涯の概観

翁の生涯を概観するに、其門子野村望東が生涯の波瀾重疊、幾多の曲折を経、巾幗婦人の身を以て國事に奔走し、慨憤憂國幾度か死生の地を出入せられたるには似ず、極めて平淡なる生涯であつて、當時奔騰を極めたりし世波にも泥まず、或は勤王或は佐幕、囂々たる物論の裡より出て超然脱塵、和歌を樂しみ、和歌に遊び、家産を蕩盡して悔ゆるなく、身世を抛つて赤貧に安處す。其和歌に對する不斷の執着を歌ひては、『これや身の生ける限の思ひ草』と稱へ、酒を樂しみては、川に陥りながら李白が放狂を思ひよそへて、『水に身をはめても今宵面白き』と興じ、去往彼淡淡水の如く、大なる不平もなく大なる煩悶もなし。斯くて又解き放つ古衣、春も秋も安く過ぎつつ、市中の煩悶にありて市中の塵網を脱れ、市井の商人を以て任じながら、一點市井の氣なく、自然に憧憬れ、四時の變移を喜び、吟咏遊豫風雅の明暮を送りつつ、春は更なり秋の紅葉冬の雪、扱は清水流るる柳蔭に杖

を曳きつつ、自然に生き自然と同化し、果は己れをさへ自然に飽和せしめたる客觀の態度を持せられたが、翁にとりては自然の景物は言はずもあれ、日間瑣末の事象に至るまで悉くこれ歌であつて、目の觸るる、心の動く、直ちに歌と迸り出づるのであつた。

おもほえず枕がもとのさやけきにまろび起ても見たる月影

いざと思ふあしたの床の起きうさに枕はなれて手枕ぞする

二日三日降れば降るとて嘆きけり雨まち遠にいふかと思へば

要するに翁が七十餘年の生涯は、概して平淡單調にして、波瀾なく屈折なしと云ふ事を得べし。然りと雖、翁も亦身家を漂蕩革新の天地に置かれし者、微細に考究し來れば、其一生の經過原より坦途を行くが如くならず、富限の家に生れて産を失ひ、早く妻に訣れて空屋に居り、清貧寒素、大阪に上りても年頭なほ餅もなき爲體にて、一條の杖を己が仕へ人とし、月と己と己が影と三人して花を愛づる、孤獨悲涼の境に墮せられたるさへあるに、優れたる天分も世の認むる處とならず、歌風世にあはず、一代の名花空しく福岡藥院香正寺畔の土と朽ちて、墓前の莓苔拂ふに人なく、幾多無名の亂塔に伍するを思へば、翁も亦數奇不遇の歌人なりと言ふ可く、身家を歌道に投じ、切々攻磨暫くも怠らず、『自然門弟の内にて、我が跡を繼吳れ候人も出で來むかと、多年俗中にまみれて人を引立候つもりなれど、只今まで左様の人も見えず』今は早や是れまでなり。『人は邪癖とか放癖とか笑はば笑へ、二川死後は閉戸、世間と斷たむ。』とさへ思ひ切られたのであつたが、懐かしきは和歌なり。『又々多年俗塵に交り、塵網にかかりて、最早初念に立替り、』致々刻苦。『外の著書は心に不懸、誠に歌の書のみを眼を曝し、』切々

血を吐くが如き磨勵を續け乍ら、『世間に劣りては、産を破りて六十迄片時不怠出精せし甲斐もなく、残念の事なれば、命あらば歌帖も梓行し』、世に問はむの志止み難く、遂に上阪を決行せられた。然して在阪七年にして出版せられたる草徑集三卷は、實にこれ心血の流露であつて、翁が風霜六十年の努力の凝塊なりと言ふ事が出来る。かく觀じ來れば、一見平淡なる生涯も、曲折萬態、緊張せる心線は、鏗々金石の響を立つる。翁が歌道に對する敬虔なる態度と、眞率謹嚴なる風度とは、世にありては門子を激厲し、世に就きては後人を作興振起せしむるものであるが、翁が晩年、老齡蕭々の夢を載せて故山に歸り、病を今泉の隱棲に養ひつつ、老いては斯る事のみ言ひ暮すとて、書き留められたる三首の和歌、

誰がかしし物とはなしに假の世を返す時こそちかづきにけれ

ますぐなる杉の風折世の中にまがらで立てるしとぞ見る

こしかたは憂き事のみを年月をそれならでなき我がえ物かな

殊に後の二首の如きは、翁が生涯に對する自己批判の歌なりと云ふ可く、畢竟翁の生涯を指して平淡單調なりと呼ぶも、そは生涯の大觀にして、深く翁が内生活に入り、更に其精神生活を窺へば、常に緊張せる心琴を抱きて、不斷の努力を續けられたとす可きである。

己れ嘗て翁が手書せる東坡が洗兒の詩、

人皆養子望聰明。 我被聰明誤一生。

惟願孩兒愚且魯。 無災無難到公卿。

竝に

爲愛詩名吟到死。 風魂雪魄去難招。

直須桂子落墳上。 生得一枝宛始消。

と言ふを讀みて、翁が當年の感懐に味到したが、想ふに翁も亦多感薄倖の歌人なりとす可きである。

爲 人

翁は遠く清原の流を汲み、近く一門好學の感化を受け、且つ風光明媚なる那珂流域の天地を搖籃とし、立花、竈門、背振の連山が包む、蒼古雄渾なる自然の懷に抱かれ、人心豁達なる福岡に人と爲られたのみならず、家父言朝天資寛宏にして謙退、よく人の爲に計り、己を薄くして世の爲に盡されたが、翁も亦父の素質を受けて性質恭和、舉止樸實、溫然親しむ可きであると共に、其間又一種の威重を備へられた。翁が極めて謹厚なる人であつた事は、家集草徑集の序に、『おのれが筑紫には歌人多く』もとより宜しき歌あるべうも覺えねど、世の大人方稀にも目とどめ給ふがあらば、一歌にても採るべきはとり、『など謙遜して居られるのでも解るが、又己が門人に對しても『おのが教の愚かなるには似ず、面白き歌あはれなるなど詠み出でて、師ははだしなど言ふ俚言にたがはず、』とたたへ、平生の書簡等にも平假名にて『わたくし』と書し、『拜點ささけまつる、』と叮嚀なる文字を用ゐられ



だが、詠草短冊等を清書せられるにつけても、

昔二川ぬしに参り居申候折柄、箱崎初穂とりに神主まり候處、先生百銅ばかりを紙に包み封を致し、上に二川幸之進と謹而書取申、則おくばりに被渡候。今様は左様に参り不申候へ共、書家は一字もフダン、ヨソユキの差別なく謹而書き申す事也。かりそめの巻にても手跡にても、わたくしのさへ所々にはりつけにも相成居候間、此巻も謹而御名乗御書入可申候。その心得にて認申居候。たにざくなども心に叶候ものは、我が書物乍人よりも愛し申候事也。頼氏佳墨をすり候ものは、書あまりを殊に惜み候由承り候。とやうなる謹嚴なる態度を持たせられた。

翁は極めて質素なる人であつた。一見恰も田舎の人の如く、背低く頭兀して小さき鬘を結び、麓末なる手織木綿の衣服を着け、草履を穿ち、行步座臥作らず飾らず、極めて質實簡樸なる生活を送られた。

翁は、高廉閑逸、和歌を樂しみ自然に親しまれた。翁が世に残された草徑集三卷、其遺詠を味ひ來れば、髣髴として其人格を流露し來ると共に、飄逸脫塵、世事に泥まざる翁の眞面目を顯現し來るのであるが、翁が生平愛用押捺せられたる雅印を見るに、清原眞人と刻して其世系を示せる、松下生、萍堂逸士、牆東老夫として陰に脱俗の隱者を以て居り、或は陸田齋、茱萸之居、滯穂、吠畝の雅印に田野の人たる意を寓し、福有風景と琴書生涯とに自己の信念と生涯とを標榜し、松石、松竹、華畔の文字に自己の嗜好を表明せる、孰れも亦高臥悠々、閑適自然を樂む翁が風神を放射せぬものはない。

翁は、自然に對する強き執着と、深き觀察力とを持つて居られた。翁が自然の愛は其天稟であつて、明瞭なる

觀察力は寧ろ後天的である。翁は深く自然を愛せられる處から、之に對する博大なる同情心を持つて居られた。此熾烈なる同情心は、禽獸虫魚の類はもとより、凡常無生の物迄に及んで居る。例へば櫻の枝の折られむとするを見ては、

花の枝をよぢなむとする人見れば我も折らるる心地こそすれ

と悲しみ、或は松の碎かれるを見ては

山松の板さく音のあぢきなさ千年も千々に切りくだくやと

と憐れみ、扱は無心の橋柱にさへ同情して、

夜を寒み川風あたる橋ばしら人ならねばぞさも立てりける

と詠まれたが、此同情心は、翁が麗はしき素質の閃き出たるものである。

翁は近世稀觀の天才であつた。歌人に尊む所のもの其歌才である。翁は此歌才に就きて最も豊かなる天分を持たれた。翁が縦横の歌才は、其和歌の上に光輝を放つたが、即詠即吟幾度か人をして瞠目せしめて居る。或時門人列座の中、物書かむとて紙を延べ筆を執られたに、杜鵑一聲五月の空に鳴きければ、

筆とりても書きそむる時しもぞ半なくべきやまほととぎす

と書き示された。又或時、今泉の南堂にありて南表の障子を引かれたに、折しも窓の外には農夫が田をすき返してゐた。然るに時雨の雨のはら／＼と降り來りければ、直ちに、

窓の面の田をすきかへす程もなく冬になしたる初時雨かな

と認めて側なる吉田一畝氏に渡された事もあつた。

翁は不世出の歌才を有し、即詠即吟に妙を得て居られたにも不係、常に推敲を怠らず、苦吟慘憺、歌の至り難きを嘆じて居られる。其門下に教ふるにも、賈島が五絶、兩句三年得。一吟雙淚流。知音如不賞。歸臥故山秋。と言ふを引きて推敲の必要を述べられたが、翁の歌集を見るに改刪數四、抹殺又抹殺、原歌の面影を止めざるさへあるに、源氏、山家集、拾遺員外、莊子等と其出所を記し、且つ種々の記號を用ゐて己が歌の優劣を分たれたるが如き、亦以て翁が和歌に對する眞摯なる態度を窺知す可きである。

翁は、自己天分の高きを知り、己が所信に向つて精進する意志の人であつた。二川塾入門の始は言はず、天保三年の覺醒より明治紀元の易簣まで、風霜三十五年の長き、如何に身家を擲つて歌道に盡瘁せられたるかと思へば、己が天分に向つて猛進せられた、強き意志の人であると言ふ事が出来る。

翁は又、和歌に對する大なる自覺と大なる抱負とを持て居られた。覺醒以後、翁は常に和歌の道の正しきに歸さむとの素願に向つて猛進せられた。然して世間尙且つ翁の和歌を嘲つて、翁の歌は卑し、翁の歌は異體なりと言ふ人あり。翁之に向つて一矢を放ちて曰く。

己れが歌を卑しと言ふ人あり、下賤なればさもあるべし。又異體なりと言ふ人あり、さる歌もあるべし。皆未熟の致す處なれば是非もなし。然るに己が心を詠じて、古人に向はんの志ある人、此所を不過して直渡する棧あらんや。己れ未だ其近道を知らず。凡て世の中の諸道、近道と云物なし。無駄道なきをこそ善とはす可き事なれ。此無駄道を経ずして行事もいと難き事なり。凡てさる人も世にある可からず。菜滴水汲仕へてこそ法華經

も得んと、拾遺集に詠みたれ。木偶歌を詠みて心を安んじたる人、己が心を讀まば忽ち卑しき歌出來、忽ち異體なる歌出來ざらんや。歌の道は公にて、歌は私ものなり。思慮を加へ、右左の善凶を顧てさて後に言ひ出る物にはあらず。物に觸れ事によりて即座に感發する咏嘆なり。詞の近古などを撰む暇あらんや。今日獨言して嘯きあるくが歌の元なれば、歌を以て歌とするとは天地の違ひあるを知るべし。

と、翁は當時の一般歌人の歌を木偶歌と罵り、我は天保の歌人なりと喝破して居られる。こは當時翁を措きて何人も言ひ得なかつた所であるが、此一事を以てしても、翁の眼中既に當時の歌人なき慨があつた事が分る。或時翁、己が磊塊を吐き歌つて曰、

舌たゆくもの言ひ習ふたわらはやいひもかなへぬ今のうた人と、又、

何事をいふかもわかで小山田のみなくちぐちになく蛙かな  
と心火一閃當時の歌人を笑殺せられたが、又當時嘉永三十六歌仙てふ撰集ありて坊間に流布す。こは本居春庭、同内遠、熊谷直好、足代弘訓、加納諸平、中島廣足、八田知紀、萩原廣道、井上文雄、近藤芳樹等三十六家の歌を選めるものであるが、門人某書を飛して翁が内秘を叩く。翁即ち答へて曰、

扱又嘉永三十六歌仙の義御問被下、一昨々々が書肆にて相求一讀仕候も、わたくしの目には付不申候故、早速人に與へ申候。友達春平(岡部)等の歌御座候へ共、あまり嘉永も言ひ過ぎにて、嘉永の不手際どちの恥がましく古人に向ひ候は、來世にも人の事ながら汗顔の仕合せと奉存候。あまり何も知らずの撰と存じ、ちよと見申

候のみにて人に遣し申候。大切なる年號を書けば、古人は申に不及後世恐る可く奉存候。あまり御意を被懸候歌拜見不申候。豊樹ぬしと御論ひ御尤に奉存候。わたくしの歌は遣はさる可くば、一二首にて御すませ被下度候。先日博多の者も彼方(筑前小倉)に参り、今の千種卿にも對顔致し、出題など御座候由、さのみ面白き事とも存じ不申候。鴨川集五篇、中の島書林に下させ置き申候。此節谷川(翁の門人、谷川幹辰)下り中山悔み話承り候處、谷川大分やりつけ候由、右鴨川にもわたくしの社中の内二十人計りにて、百六十八首入撰致し、國中師家四人自詠社中迄入れ、不殘にて百首計ことに人は三十六七人にあまり候。諸國人大抵これにて相分候儀故、御安慮被下度候。(中略)……後鴨川彼地にも入り來り、谷川等の歌も感吟の歌入撰に相成居候。是にて大抵安堵仕候。とに角己れをみがきさへ致し候はば、言はずとも世上に分明致し申候。社中三十六家位ならばよかる可く、嘉永三十六家はちと痛み入申候。未熟の著述取るに足らず、餘は貴面に申べく候也。

と。又、千種卿の和歌に對する翁が所見の一端を漏されたるに、左の書簡がある。

千種殿鳳和集、御かけにて人にも示し、わたくしも拜し居申候。歌はむつかしき物と見え、上不見驚の心底共致し居候へば、勘辨ちがひに相成申候。存念の箇條大分有之候へ共、堂上の事は存じ不申候が下郎の心得に候間何とも不申候。まかしか様の歌體流行致し候へば、當地古學家の眠をさまし、わたくし流儀に相成候基に候間、甚だ喜ばしく奉存候。今少拜覽奉希候。餘は後便に可申上候。頓首。

と。又、三都の歌人に就きては、

當時三都の歌人、己が自權のみにて歌の力なく、ただ素人だましのみにて可笑事に奉存候。やくに立たざる書

に候へ共、見合の爲め大凡相求熟覽致し居申候。わたくし事は外の著書は心に懸け不申、誠に歌のみに御座候間、世間に劣りては産をかへ六十歳迄、片時も不怠出精致し候かひもなく、残念に御座候間、命御座候はば、歌帖も梓行仕可申、急には参り不申候。門弟うちより御心配被下候由も承り、難有は奉存候へ共、チヨロと致候譯には無御座、宿昔の志願チサトは出来不申候。

と一嘘に附し去られたが、翁もと賦性謙讓、身は一個市井の商人である。曷んぞ内省なく責任なき言辭を弄して快とするものならんや。惟ふに此等の言、翁が赤裸の信念を披瀝せるもの、又以て識見の卓異なると、抱負の絶倫なるとを見る可きである。

翁常に其子を教へ門人を誡めて、『波文字のつく人は一事一業を能くするとも、毛の字のつく人に非れば、世に名聲を馳すること難し。譬へば歌人として歌も上手、學問も該博、人格も高尚、運筆も優美と言はるる人に非ざれば、完全の人とは思はれず。歌は上手なれども學問はなし。學問はあれども人格は賤劣也と言はるる人は、世の尊敬を得ざる可し。』と述べられた。

翁は資性音楽を好み、謠曲を謠ひ小鼓を打ち、氣鬱し心進まざる時は、淨瑠璃を讀みて心を暢べられた。翁又書に巧に、(晝も描かれた)篆刻をよくし、時に門人等にも自刻の雅印を贈られたが、又文字摺をよくし、春の花秋の草、扱は緑濃かなる姫小松、紅燃ゆる楓の一片を採り來つて巧に摺出された。或時姪の嫁ぐに、己れ貧しくして贈るものなければとて、文字摺美しう摺り、夫れに祝の和歌を書して贈られたが、我等は茲にも亦翁が純なる心性を見るのである。

交友及び門人

翁、生前の交友知己決して少からず、其間又爾汝の交際ありたる人々も多かりけむと思はれるも、然かも翁が事歴の茫乎滅没に瀕せると、資料蒐集の困難とは茲にも亦累をなして、身前必ず交渉あり關係なかる可からずと思はれるも、未だ確證なきものもありて、徒らに事歴討索の困難を思はしむるのみでもあるが、これまで少しく明め得たる人々を擧ぐれば、

中島廣足 八田知紀 萩原廣道 佐佐木弘綱 近藤芳樹 荒木田久守  
岡部春平 殿村茂濟 田能村直入 中西耕石 村田東圃  
右の人々の中、廣足、廣道、芳樹、春平等の人々とは、上阪後新に締交せられたるもある可く、又大阪假寓當時の交際を以て最も密接であつたかとも思はれるが、中島廣足につきては、翁が家集今橋集に、

中島廣足故郷に行わるとて

なにはがたやがても歸る浪をみよ君がゆききをしるすなりけり

の歌を留めて居る。

八田知紀につきては、別に文献の徵す可きはなきも、翁の一族藪氏の話に、翁はよく『知紀でばしなければ歌の話は出來ず。』と語られたと言ふが、近藤芳樹、岡部春平に關する記述には、續草徑集中に、

近藤よしき眞鍋豊平などつどひて、しはすつごもりの夜

皆人とともに心はあるものをしひてもしたる夜のまとるかな

岡部春平がもとにて

わがたけにおよばざりつる櫻花ことしは軒のうへに見るかな

の歌を載せ、春平につきては、嘉永三十六歌仙を難ぜる尺牘中にも、『我友春平等の歌』云々と述べられた。

荒木田久守につきては、歌論ひとりごちに、『伊勢人荒木田久守己が歌を見て、など體を同じくは詠まぬと云ひきと、同じ伊勢人の語りき。』云々と叙し、更に戊午集中に『伊勢人荒木田久守神主が七十賀、久老の子。』と署し、和歌一首を載する。

萩原廣道に就きては、今橋集中に、『萩原廣道が四十の賀。』てふ歌一首を載する。廣道より翁に致せる尺牘に改曆之御吉慶不可有盡期候。先以て御壯健被成御超歳珍重不斜奉存候。然ば當發會來る八日に仕候間若御空暇に被爲入候はば、御光來も可被下候歟。併亂雜之事に而一向御構不申上候。題は、

子日祝 懷紙認

に御座候。萬事拜顔之上御斷可申上候。草々頓首。

正月三日

萩原廣道 拜

尙々御出被下候はば、晚七つ時分より御光來被下度候。

中島先生

大隈先生

交友及び門人

かく宛名も、中島先生、大隈先生とやうに竝書せられた。廣足と同格に認めたる注意す可きである。佐佐木弘綱は、翁が生前の知己である。弘綱は翁が優れたる歌人なるを知つて居られた。翁も亦知己の感が深かつたに相違ない。千船集寄稿の關係もありて深く親善せられた。弘綱の尺牘に、

拜讀仕候。如仰春暖相成候處益御萬安奉拵喜候。抑昨年社中より御染毫願上候處、早速御認被下、御詠といひ御書といひ誠以感心、人々嬉がり申候。其後御禮可申上と日々存ながら、度々津藤堂候へめされ、且近隣に頼と師たる人無之、鳥なき里のかはほりにて、諸方へ招かれ、他行がちにて大御無沙汰、眞平御免可被下候。漸く此比在宿、千船集四編原稿にかかり居候處へ、御門人御詠草御遣し大慶仕候。無相違四編へ編入可仕候。河吉一向急ぎ不申甚困入候。何分遠方板本困申候。しかし伊勢にて上木仕候ては、天下に行わたり候儀は難叶、夫故御地にて致させ候儀に御座候。何ぞ進上仕度候へ共、遠方の儀、有合短冊五葉竝拙畫贊一葉を進上、晝は舊冬よりはじめ、いとくつたなく御一笑可被下候。草徑集御次篇御出來候はば御惠贈願上候。一家の御體にて感吟仕候。とかく古人の跡のみふみ候世の中に、かく新らしくよみ給ふは及ばざる處と人々感心仕候。猶御門生御詠追々御惠贈願上候。昨年御三人の儀承知仕候。廣繁君極御老人のよし何卒御長壽奉祈候。出羽秋田邊詠草もあまた來り居候。四編上木の上御覽被下度候。右御禮まで匂々頓首。

三月二十二日

弘

綱

大隈 大人

貴

酬

文中『とかく古人の跡のみふみ候世の中に』云々と述べたる弘綱の卓見もさる事ながら、我等は特に知己を得たる、翁が當年の喜びを想ふ者である。悠々たる三十年、其後全く忘れられたる翁が、再び弘綱の嗣信綱博士によりて推奨せられ、和歌史上不朽の姓字を止むるに至れるが如きは、洵にこれ奇しき因縁なりと云ふ可く、翁が佐佐木氏一家に負ふ處も亦大なりと云はねばならぬ。

交りを結んだ畫家のうち、田能村直久は、梅田碑文に『友人田痴』と記し、中西耕石（筑前人）は淡窓と共に翁を訪ねた事歴が残つて居るが、村田東圃の妻ちかは翁の門人である。また森一鳳の名も集の中に見えて居る。此外翁と何等かの交渉あり、交際ありけむと思はれる者に、

熊谷 直好 長澤 伴雄 佐久良 東雄 西田 直養 僧 幽 眞  
太田 垣運月 高 畠 式部

等の人々がある。

桂園門下の優れたる歌人であつた熊谷直好につきては、翁が手翰に、『熊谷、萩原遠行いたし』云々と、大阪歌壇の寂莫を述べられた一節が残つて居る。長澤伴雄との關係に至りては、伴雄が經營せる鴨川集に、社中二十人あまりの歌を寄せられたが、秦雲渭樹心は互に通つてゐたかと思はれる。

續草徑集を見るに、佐久良東雄追悼の歌一首を載する。これに據れば此勤王歌人と翁との間には、生前必ず面識があつたに相違ない。西田直養は人も知る豊前小倉の人である。同じく九州人であり、且つ境を接した豊前と筑前とに住んだにも不係、交際があつた跡が残つてをらぬ。同じ小倉人でも佐久間種とは、靈犀一點相通する處が

交友及び門人

七七

あつたらしい。紀の川のほとりに庵をしまして居た僧幽真につきては、彼が歌集空谷傳聲集の板下を書かれた事歴が残つて居る。京の女歌人、太田垣蓮月と高島式部とは、これ又面識があつた。殊に蓮月其人の歌につきては、理解もあり同情も持つて居られた。式部と京にて逢はれた事蹟は、前に引ける翁の尺牘に窺はれる。

翁が前後三十有餘年の間、卵翼せられた門人は、數に於て少くない。福岡の野村望東、谷川幹辰、眞藤利明、小金丸金生、博多の野坂常興、筑前飯塚の古川直道、大阪の茂村恒久、緒方洪庵の如きは其主なる者であるが、(洪庵に就いては家集中に、『田中芳樹、古屋槌子、太田崎守その外にも二三人、緒方章がもとに歌よみける序で、蝦蟇の歌』とあり。又『緒方洪庵一周忌追悼』の歌もあり、尺牘中には、『門人洪庵』ともある。)就中最も勝れたるは野村望東である。望東が和歌竝に人物閱歴等につきては、茲にことごとく論ずる必要はない。但し世人稍もすれば、翁が幕末の盤蕩期に際して、國事に干繋するなく勤王の事歴なく、憂國勤王の歌なきは遺憾なりとなすあり。然れども翁はもとこれ市中の隠であつて、超然脱塵世を抜けてゐたのである。翁の歌に、

大御代はいとさばかりもなきものを世を憂がりたる人癖ぞかし

末の世といつより人の言ひ出でてなほ世の末にならぬなるらむ

と時代に對する一種超脱の見解を持せられたが、又前に引ける翁の尺牘中にも、『堂上の事は存不申候が下郎の心得に候。』と述べられた程にて、其門子望東が身家を擲つて勤王の士と締交し、國事に奔走するすら、尙ほ且つ憂沖の眼を以て見られた。翁は商人である。曷んど國士を以て任じ、慨憤憂國の氣を吐く事をせんや。翁は歌人たる

自己天分の高きを知れる人である。而して當今の囂々、又元の昌平に復歸す可く、人口を開けば薄倖澆季の世と言ふと雖も、末の世は終に來らざる事を認知して居られた。此樂觀思想はよく翁をして世外に超然たらしめた。翁が高邁なる風度と、此飄逸なる襟度とは、其和歌と相俟つて、我等が讚嘆の聲を高くする所以である。

翁には勤王の歌は見えぬ。しかし翁は望東を以て門下第一の人とした。望東自身も亦しか任じてゐた。翁が上阪後、さゝのや門下を率ゐたのは野坂常興であつた。望東は翁に宛たる尺牘中に、己が男子ならぬを慨いて居る。望東の自負も亦尤である。然して望東には翁の和歌になき勤王の歌があり、憂憤激越せる高き調の歌があるが、然しこれあるが爲に望東をあけて、翁をおとす事は出来ない。翁が輕々しく許さなかつた事は、當時の歌を木偶歌と罵り、嘉永三十六歌仙の歌を取るに足らずと一蹴し去り、三都に歌人なしと言放てるにても分るが、翻て己が門下に對しても亦、た易く許さなかつた事は、『自然門弟の内にて、我跡を繼ぎ呉れ候人も出で來むかと、多年俗中にまみれて人を引立候つもりなれど、只今まで左様の人も見えず。』と嘆かれたるにても分かる。然して又望東が、文久元年齡五十六歳にして上京せるは、和宮の東上し給ふを拜し、都の形勢を知ると共に、又一つには師翁言道を訪ねて、家集向陵集の撰を請ひ、序を請ふ爲であつたのを見ても、能く當年の師弟關係を知る事が出来る。要するに翁が直門に望東を出せる事は、元より彼が優れたる天分にもよる事なれど、翁が提撕陶冶を経て茲に其光華を放つたもので、我等はか程までに啓沃し得たる翁の大を思ふと共に、又舊筑前藩が、日本の歌壇に此等の代表的二歌人を送り得たる喜を懷ふ者である。

## 歌集竝に遺稿

翁が歌集竝に遺稿に就きては、隨處言及したることも少くないが、他に補足す可き點もあれば、便宜上茲に再説することとする。

翁が初期の和歌を載するものに、歌草紙と稱する小冊子がある。半紙二十枚綴りのもので、巻尾に『おのれいと若くてよめる歌をかいて参らす。いとまだしきほどの歌なれば、うひ學の人の見んには、中々なることもあるべし。心やりのかきちらしなれば、みだりがはしきはゆるべ給へかし。』云々の奥書があるが、此書は石松元啓が山里集と共に、翁が初年の和歌を知る上に就きて必要なるものである。原本は著者の所藏である。

これに次ぎて南樓集、さゝのや集がある。

南樓集、二卷、歌數四千餘首を載することも、翁の尺牘によりて明かであるが、本書は夙くより其所在を失してゐる。さゝのや集三卷、こは天保六七年の頃より同十二年まで前後六七年間の歌を載するもので、福岡なる辛島小四郎氏の藏する處である。(猶次に述ぶる戊午集の中に梟居集の名が見えてをるが、之も傳はらぬ。)

戊午集、二卷、今橋集、二卷、こは弘化元年より嘉永五年まで九年間の作を、安政六年五月より九月までに、難波中の島で清書せられたものである。元越後長岡なる萩原此吉氏の所藏であつたのを、明治三十八年に、大口周魚氏が同氏から譲受られたのである。(この四冊は言道翁全集と題して、大正四年に歌文珍書保存會から刊行せられた。)

草徑集、三卷、家集中最も精撰せられたもので、文久三年正月二日大阪にて梓行せられた。翁自筆の原本は、辛島氏の所藏である。

草徑集二篇、三卷、こは草徑集梓行後發刊の筈であつたが、遂に其事なくて止んだ。草徑集の姉妹篇であつて、原本の體裁書式等も全く同一である。原本は翁の後なる田代氏の所藏である。

續草徑集、一巻、翁が晩年の歌集であつて、文久三年より慶應四年まではほ六年間の歌、歌數四千餘首を載する。翁は此集に名付くるに及ばずして逝いた。續草徑集の名は、佐佐木博士の名付くる處である。今春原本を二分し、一を博士に贈り、他を著者の家に藏する事とした。

ひとりごち、一巻、翁が歌論の書で、卓拔嶄新なる所論に滿ちてゐる。此書はもと翁が上阪の折、其教子眞藤利明にいき形見とて贈られたもので、原本は福岡なる平岡良助氏の愛藏する處である。

こごのちり、二巻、こはひとりごちの原稿ともいふべきもので、ひとりごちと同じ文詞、其他語格のことなどがしるしてある。辛島氏の所藏である。

清原姓大隈氏系譜

(大隈言道傳附錄一)

舍人親王

天武帝第三子而草壁皇子弟也。御母新田部皇女也。天性聰敏、好文學通古今富和漢才。四十四代、元正天皇養老四年五月、奉勅撰日本紀三十卷。山城深草郷、藤森之社所祀、親王之尊靈也。

貞氏王

大納言有雄

或作少納言。達和歌道亦能。至舍人親王在內裏。然貞氏王時、以有雄令居小野。

少納言通雄

或作備前守。通雄天延元年七月御札被削官、配流于豐後國。領同國玖珠郡、同速見郡布院日出庄、豐前國安心院、筑後國生葉竹野兩郡。

但馬介正高 正太夫正道

助道

始以長野爲氏。長野氏十二家に分る。古後、帆足、山田、飯田、栗野、魚返、野上、森、惠良、松木、片平、右田

通平

法名號

通綱

通秦

女子 通秦無子、爲

爲言嫡女繼。重言

言景

秦景

言貞

言治

氏治

繁治

清通

清言

治言

曰長野主水助治言。少納言通雄、天延元年七月、御札被削解官。宇多天皇御宇、寬平二年庚戌、下國配流豐後國。自通雄以來至治言數世、居于豐後國玖珠郡大隈村。其間漂泊所處不定。既來住筑後

生葉郡小○里有年。永祿之頃亦移居筑前上座郡上寺村。辟荒地爲農業、蒙公命爲農長。實治言當郷大熊氏之始祖也。存誠往年造豐後、歷見大隈村尋詢村人。治言舊宅之址、在村落今爲田。治言以郷名爲氏、改長野氏稱大熊、又改治言號勝重、改主水助稱與三兵衛。慶長九年申辰十二月二十六日、終上寺村。法名教永、以後法名用教家云。

重富勝廣

元肥後浪士、住筑後竹野郡吉本村。勝重女再嫁之。以勝重無嗣令續家門。務農長。市次郎成長之後、勝廣養之續家督。勝廣隱退之後、剃髮爲僧稱教念。建一寺於上寺村、號教念寺。教念即開基之祖也。嫁筑後竹野郡下古賀村浪士國武某、壯年而死去。

女子

國武勝義 後改大熊

與三兵衛

正右衛門

孫七

大熊氏、上寺村農長。後讓秀景、蒙公命爲志波村農長。

女子

正三郎

後改孫七。

善左衛門

妻は博多龜屋半左衛門の女。

七之進

女子

正三郎

夜須郡甘木村農長水又五郎妻。

勘

志波村農長を勤む。

七郎治

女子

清助

孫次郎志波村農。

清兵衛

上座郡黒川村農民。

女子

惟より博多川口町茶屋某所に相勤、中年にして那珂郡赤坂に住す。後同郡八反田に住し、又福岡藥院町抱安學橋に住す。妻は春吉村農人女、姓は池上氏。

清原姓大隈氏系譜



女子 博多東町伊右衛門に嫁す。  
 清次郎 福岡中名島町に居す。妻は甘木遠藤惣左衛門女。  
 茂助 父家を譲る。妻は信國又左衛門光昌女。  
 彌吉 孩兒の内河内屋彌市に遺す。

茂甫言愛 十九歳没。

女子幼名よれ 福岡唐人町上原徳助妻。

女子幼名辰 同町上原久次郎妻。

那珂郡今泉に居す。

萍堂言道

慶應四辰七月二十九日逝行年七十一  
 妻は福岡中名島町大熊清次郎女。

清右衛門言則 博多に住す。嘉永元申十二月廿五日逝

法名古竹有聲行年四十九。

妻は博多川端町山端久作女。

某子 早世。  
 女子 福岡吳服町楠屋勘三郎妻。  
 女子 吉田主馬殿内中村甚左衛門妻  
 後又糟屋郡澁田周徳妻となる。

兵次郎 早世。

東造 言義 實一家督致す。

勝兵衛敬正 十九才にて没。

次郎 重房 片山壽作の養子となる。

諫雄 義政 佐田亭助の養子となる。

女子 早世。

健藏 早世。

三右衛門一敬 那珂郡春吉村西田武吉實一養子。  
 妻は早良郡谷平田久助末女。

鐵之亟 夭折す、十一歳。

みき 明治四年九月三日死十六歳。

春海 文久元年十一月廿八日生。

修吉 藪家の養子となる、没。

功 明治八年十月六日没。

康雄 明治八年十月十九日没二歳。

## 大隈氏系譜略記

(大隈言道傳附録二)

## 大隈言道

元祖大隈主水助治言は、上座郡上寺村居住に而、慶長九年甲辰死去せられたり。法名教念と云。上寺村一向宗教念寺の開山に而、則法名を以て寺號とす。もとは豊後玖珠郡より出たる人なり。豊後豊前筑後に、二十四家と云二十四の舊家あり。郷士の類にていづれも大家なり。その元祖あまりにとほきことなれど、京師より左近の公家少納言通雄の裔にして、いまに二十四の舊家あり。其内より出たる人にて、肥後侯の家老内にも同名あり。皆長野姓なり。大隈は豊後玖珠郡大隈より出たる自稱なり。本姓長野と知るべし。これらのことはここに盡しがたければしばらくおく。寛政の末つかたにやありけむ、おのれが亡父言朝、かの上寺村にいたりて、主水助治言の二百年忌にあひたるに、かの教念寺より豊後豊前筑後などの一族同名に、回章をまはしたるに、二百五十何人とか皆きたりて、教念の二百五十年忌訪ひたりしに、亡父言朝もまじりて一座につらなる。其時牌前の祭文は、平松村足立春臺といふ高醫なり。この春臺、在醫といへども萬人にすぐれたりしかば、忝くも敬徳院様御病氣なりし時、めし出されて出殿す。御病體を拜して、御養生御叶被遊まじきを申上、御次にて申上ける時、高録の醫師がたに向、かやうの御容體になぜなし奉りしぞ、祿盗人めと悪口して、もはや致しかたなしと、鶴原雁林の宅に引取、其夜唯今御逝去の時なりと、御城の方を拜しけるに、不違其剋限、かくれさせ給ひけるとなり。

この足立春臺一族のはしにて、主水助二百年の追悼の祭文はかきしやとおもふに、おのれが高祖父何といふ人にかありけむ、かの上寺村にて、農夫の學生ありしが、貝原篤信先生の門生にて、晩年古學を尊み、京にのほりて伊藤仁齋先生の弟子になりしが、則此足立春臺はその高祖父の弟子なりしよし、されば祭文などをかきて、家祖主水助の二百年もとぶらはれしなりけり。其祭文眞筆中名島町大隈清藏方にあり。

伊藤仁齋先生に隨身ありし故、かの家の五藏の書もありしよし、仁齋先生五人の子有、俗名名ごとに藏を以呼、世人堀川の五藏とよべり。委しくは先哲叢談を見てしるべし。今は上寺村本家なくなりしかば、仁齋先生の書はいふに不及、五藏の書なども他家にちりて、のこれるもの無よし。

弘化のころ、主水助二百五十年のとぶらひをするとして、かの上寺村教念寺、上寺村の當主大隈主水と同道してきたられしかども、おのれ病氣にて行事不能、香奠にうたを詠じてさしそへつかはしたり。中名島町清藏よりもつかはしたるよし聞き侍る。此の主水助教永の墓は上寺村にあり。主水助志波村に行きて、家さかえしかども、また零落して我祖父清助は里乳ながしとなりしを、漸人となるに任せて博多にいで、賣家をたてて家をおこされたるなり。祖父の姉君は、博多小山町龜屋といふ酒家なりつるよし。此時はかた紅屋九兵衛といふ吳服屋、祖父の爲大に世話あり。山際九兵衛は大雅堂の弟子にてもよくかく、博多順正寺に墓あり。墓〇の名、南冥先生の弟、曇榮和尚の筆なり。楠や勘三郎妻の母、紅屋の本家なり。これも零落にて茶屋をはじめ、松原正木屋則その龜屋なり。姓を鬼塚といふ。茶屋なれどもと龜屋といふは、大家なれば一族も大家あり。一人の姉君は甘木二の宮某がしに嫁す。おのれが姉唐人町上原家にゆく。いまだ嫁せざりしほど、甘木より五六人きたりて、頻りに姉君を申しうけたしといひける時、何の仕立もいらす、悉皆あり、祖母君の志波よりもちきたられし屏風などもありなどい

ひて、縁をすすめしこと、おのれ幼少にて聞きたり。

先にいひし、足立春臺家はなくなりしかど、甘木に合谷清助後四郎右衛門とて春臺の孫あり。此人詩をよく作り日田廣瀬淡窓先生の弟子也。うたはおのれに學ぶ。かの春臺の遺物此家にあり。近江聖人といふ中江與右衛門藤樹先生の集あり。

## 宰府蓮葉水寄進

太宰府御神前の左にある蓮葉水は、もと施主ありて其輩皆なくなりしを、亡父言朝再立の志にて、蓮葉を梅花に鑄かへ銅瓦にて蓋をなし、それも梅の花形に而五葉して、鉢も柱も五角にて立られしかども、文化二年丑の五月はてられしかば、そのまゝにて行届かざりしかど、毎夕大熊氏の神燈は、長く中名島町と此方よりして、丁ちんのほりかへまで寄進せしかども今は絶たり。其向ふの香爐臺の香も、年中永く奉納せられしかども、家おとろへて絶たり。事の序なればしるしおくになむ。

香正寺本堂再復の時、銀五貫目も出財せらる。なべての旦那とはいたくかはりたる寄進なり。其外赤地の錦の水引、懸替の水引、高照院法月の爲として寄進せしは、文化のはじめにや、水引のこらず、月日法名名等印しあり。開山日蓮上人の御筆、清正公の御肖像、其外清正公の御書翰など、脇方の質入に相成しを綿や忠次と申合、中の番一同にて出財して受出し、本の如く納られしこと、世話計も抜群也。鐘樓の鐘、上方迄も勸化をして新に鑄立、長く寄附せられし、是又大功也。鑄付し名元大隈宗繁とあり、行て見るべし。宗繁は言朝の幼名なり。家おとろへて志すところ少しといへども、寺よりも籠相に取扱申まじきためしるしおくになむ。今の墓所は兩家申合出財

していひうけたれば、寄進物のかはりならず。

言朝書は、唐人町田浙江の弟子にして、おのれらの及所にあらず。其外俗事にいたりても、博多福岡の質屋中の定めも町役所に願出、懸札などありしは言朝の功也。唐人町上原圓朔翁のはなしも委く直々ききたり。町役所の質屋の記録亡父の筆の物澤山あるよし、書よろしければ、町役所の吟味役新藤三郎、亡父の書類を取出し、宅にて手習せられしこと、新藤直はなしなり。今用ゆる處の硯は、高照院法月の形見なり。裏にしるし置文の内、梅澤利平の母は、おのれの母の第一の姉、第二は帆足彌太夫の母、第三家母言朝の妻也。梅澤の母わが叔母にて幼少より書をよくし學問あり。いまだ京書起らざる前に南蕨風を書かれしは、叔母と越後屋行藏也。畫を書、清人沈南蕨の弟子也。書の師誰といふことなしといへども、龜井主水いまだわかかりし時、常に出入せられしといひし、此人にや。南冥先生ある時いづこにてか叔母幼名ノブ十二歳の比、八疊敷計の龍と云大字を砂の上にてかかれしを、二川相近先生をさなかりし時見られしよし、先生のすぐ物がたりあり。叔母書きし屏風飯塚にても見しことあり。古き屏風などに、毎度叔母の手跡はりませなどに見ゆるを見れば、なつかしき事どもなり。此三女の親は、信國又左衛門光昌、則わが母方の祖父に而、近代カチノ書カチ考などにも記しあり。三女のみにて相續の悴なかりしかば、弟子の内より相續を立、別家させられしは則、博多の信國也。祖父光昌上京の時連れられし信八と云ふ弟子あり。百鍊齋哲翁居士とあり。其脇に帆足彌太夫の母の墓あり。又光昌の兄信國大和守の墓あり。此大和守は隱居して俳名を江棧とよぶ。京師にすみ、かぢなりけるに、折節勅命にて仙洞御所御劍を鍛はせ給ふ。今の世にはあるべからずめづらしきことなり。福岡にて死去せられしかば、今の世に名だかき加賀の千代より追

悼の短冊あり。そのたんざく梅澤方にあり。江棧辭世の發句、『うれしくそのやくそくの時鳥』。むかしの墓は石質あしくて磨滅せしかば、梅澤利平再建して左右庵江棧の墓とあり。この安國寺に叔母信女の墓あり。梅澤加太夫の妻なり。うめる處の子梅澤利平、牛尾與平次、阿部傳右衛門、梅澤善十郎以上四人、おのれをさなかりし時、叔母君の曰、オマヘガタは手跡見事也。此方利平などは文盲なり、口惜しきこと也といはれしかども、利平は東館の儒者也。善十郎も句讀師なるを、文盲といはれし、叔母の見式を知るべき也。

大隈言道年譜 (大隈言道傳附録三)

- 寛政 四
  - 同 五
  - 同 六
  - 同 七
  - 同 八
  - 同 九
  - 同 一〇 (一歳)
  - 同 一一 (二歳)
  - 同 一二 (三歳)
  - 享和 元 (四歳)
  - 同 二 (五歳)
  - 同 三 (六歳)
  - 文化 元 (七歳)
  - 同 二 (八歳)
  - 同 三 (九歳)
- △本居内遠生△中島廣足生△大國隆正生  
 △渡邊華山生△林子平卒△高山正之自刃  
 △大鹽中齋生△水野忠邦生  
 △黒澤翁満生  
 △寺門靜軒生  
 △千種有功生△齋藤拙堂生  
 言道、福岡藥院抱安學橋の家を生る。  
 父は茂助言朝、母は信國又左衛門光昌の女、兄弟六人あり。翁は其第四子なり。翁が『系譜略記』に、言朝書は唐人町田浙江の弟子にして、おのれらの及ぶ所にあらず云々。(八九頁二行参照)
- △八田知紀生△黒川春村生△安井息軒生△僧澄月卒  
 翁の弟清右衛門言則生る△井上文雄生  
 △近藤芳樹生△大槻盤溪生△小澤蘆庵卒△本居宣長卒  
 △芳野金陵生△藪孤山歿  
 △伊達千廣生△前野良澤歿  
 △荒木田久老卒  
 五月四日、言道の父清助言朝卒す。年四十三。福岡藥院香正寺に葬る。  
 言道が相近の許に入門せるは此頃の事か。兄言愛は、當時既に相近が櫻楓堂に通學す。  
 △伊能頼則生△山田方谷生△僧慈延寂  
 十二月五日、兄言愛歿す。年十九。  
 △加納諸平生△僧行誠生△六人部是香生

- 同 四 (一〇歳) △野村望東生△藤田東湖生△林鶴梁生△橋南谿卒△伴蒿蹊卒
- 同 五 (一一歳) △青山延光生△廣瀬旭莊生△皆川淇園歿△柴野栗山歿
- 同 六 (一二歳) △加藤千蔭卒
- 同 七 (一三歳) △權田直助生△鹽谷宥陰生△上田秋成卒
- 同 八 (一四歳) △安藤野雁生△飯田年平生△加藤千浪生△村上佛山生
- 同 九 (一五歳) △佐久間象山生△村田春海卒△栗田土満卒
- 同 一〇 (一六歳) △井手曙覽生△鈴木重胤生
- 同 一一 (一七歳) △萩原廣道生△尾藤二洲歿
- 同 一二 (一八歳) △伴林光平生△龜井道載歿△蒲生君平歿
- 同 一三 (一九歳) △齋藤竹堂生
- 同 一四 (二〇歳) △大橋訥庵生△野田笛浦生△中井履軒歿△賴春水歿△安田躬弦卒
- 同 元 (二一歳) △土井聳牙生△古賀精里歿△杉田玄白歿
- 同 二 (二二歳) △僧辨玉生△大沼枕山生△奥宮慥齋生
- 同 三 (二三歳) △菊池三溪生△森春濤生△草場船山生△廣瀬青村生
- 同 四 (二四歳) △市河寛齋歿△原念齋歿
- 同 五 (二五歳) △小中村清矩生△木下幸文卒△内山眞龍卒
- 同 六 (二六歳) △根本通明生△橋保己一卒
- 同 七 (二七歳) △香川景恒生△矢野玄道生△賴支峯生△太田南畝歿△富士谷御杖卒
- 同 八 (二八歳) △清水濱臣卒
- 同 九 (二九歳) △内藤恥叟生△税所敦子生△江馬天江生△太田錦城歿
- 同 一〇 (三〇歳) △横山由清生△龜田鵬齋歿△藤田幽谷歿
- 同 一一 (三一歳) 言道名島に詣つ。△市岡猛彦卒
- △佐佐木弘綱生△久米幹文生△飯田武郷生△平野國臣生△本居春庭卒

- 同 一二 (三二歳) △松平定信卒
- 天保 元 (三三歳) △川田颯江生△石川雅望卒△渡邊重名卒
- 同 二 (三四歳) △吉田松陰生
- 同 三 (三五歳) 言道従來の歌風を破り、一家の歌風をよみ出でたる。

『詠草奥書』に

うたまきをつくりて、人の歌のよしあしをいふこと、はたちあまり二とせ三とせにやなるらむ。

云々(一八頁三行参照)

又、歌論『ひとりこち』に

己れも十二年以前までは此木偶歌を詠みてぞありし。云々(一七頁一二行参照)

野村望東、夫貞實と共に歌を言道に學ぶ

△楠原芳野生△中村敬宇生△頼山陽歿

石松元啓が山里集成る。中に、言道が初期の和歌、二十六首を載す。

△本居大平卒

△頼杏坪歿△中島子玉歿△菅沼斐雄卒

△物集高世生△栗田寛生△田能村竹田卒△狩谷掖齋歿△長瀬眞幸卒

八月六日、言道家を弟清右衛門言則に譲り、今泉の池萍堂に退棲す。

天保七年さるの年八月六日、弟に家をゆづり今泉にうつる。(さいのや集)

言道江戸に上る。

言道が相近追悼の歌に、

二川のうしなくならせ給ひしころは、江戸に侍りけるに、ことしみとせにならせ給ふときいて、いつのまにみとせへにけんあづまにて驚かれしは今日にぞありける

九月二十七日、二川相近卒す。年七十。

△龜井昭陽歿△古賀穀堂歿△村田春門卒

同 八 (四〇歳) △大窪天民歿△大鹽中齋自歿  
 同 九 (四一歳) 九月晦、言道二川相近追悼の和歌を詠進す。  
 同 一〇 (四二歳) 四月十日、言道、豊後國日田郡なる廣瀬淡窓が咸宜園に入門す。  
 筑前福岡

大隈 清助

四十二歳

入門 天保十己亥四月十日

紹介 廣瀬 信平

(咸宜園入門簿)

同 一一 (四三歳)  
 同 一二 (四四歳)

△丸山作樂生△藤井高尙卒  
 言道文字摺をすり、歌をかきて、教子徳永某に贈る。  
 天保十二うしの秋、家のめぐりに、ありとある木くさの葉を紙にすりて、それにうたをかきつけ  
 けるを、二巻となしてをしへ子徳永ぬしにとらす。(さゝのや集)

同 一三 (四五歳)

三月、廣瀬淡窓筑前第三遊の砌、今泉なる池萍堂を訪ふ。  
 △徳川家齊薨△林述齋歿△渡邊華山自歿△屋代弘賢卒

淡窓が『懷舊樓筆記』に、

十九日、大隈清助が招に赴く。云々(二四頁一一行参照)

△加茂季應卒

同 一四 (四六歳)

五月二十四日、言道の妻卒す。年四十二。藥院香正寺に葬る。法號、夏岳院妙雲信女。

さゝのや集に、ことし五月末つかた、妻におくれて云々。(二五頁五行参照)

△平田篤胤歿

弘化 元 (四七歳)

同 二 (四八歳)

十月、野村望東城南平尾村の山莊に退隱す。

△城戸千楯卒

同 三 (四九歳)

△猪飼敬所歿△林裡宇歿△岸本由豆流卒

同 四 (五〇歳)

七月二十日、言道二女うめを、藩士田代庄作正良に嫁す。

嘉永 元 (五一歳)

八月二十九日、言道の母歿す。藥院香正寺なる言朝の墓側に葬る。年を享くること七十有九、法號を  
 殘岳院妙照日秋信女と言ふ。

十二月二十五日、翁の弟清右衛門言則歿す。年四十九。

△海野幸典卒

同 二 (五二歳)

二月十二日、上座郡上寺村なる教念寺にて、祖先大隈主水助治言の二百五十年の法會を執行す。翁は  
 病にてえ行かず、和歌一首をよす。

『向陵集』を見るに、

同 三 (五三歳)

平尾なる向陵を中心として、和歌、觀月等の雅會を催さるる事屢なり。(二七頁一一行参照)

同 四 (五四歳)

翁の初孫鐵之亟が生れたるは此年の事か。父正良は、藩主黒田長博に従つて江都に祇役し、御祐筆を  
 以て奉公す。初め二年の任期なりしも、更に二年の勤續を命ぜられ、前後四年間滞勤す。

同 五 (五五歳)

△橘守部卒△菊地五山歿△岩垣松苗歿

同 三 (五三歳)

△坂井虎山歿

同 四 (五四歳)

△水野忠邦卒△篠崎小竹歿

同 五 (五五歳)

此としごろ、飯塚、蘆屋、鳥栖、田代、久留米地方を訪ふ。

同 三 (五三歳)

飯塚には古川直道、宮崎重道、小林重治、芳井弘道等の門人あり。蘆屋には黒山利麿、惠徳丸茂助

同 四 (五四歳)

田代には村山漢古等の人々ありたればなり。久留米には、高良山に亮恩亮純の二僧正あり、友とし

同 五 (五五歳)

よし。高良山の飛雲樓に和歌を講じ、歌會を催す。當時席に列なりしは、矢野一貞、船曳鐵門、栢

同 三 (五三歳)

植信厚、山田六右衛門、林田守秋、岡一角、中村水城等の人々なり。

田代正良歸國して翁と同様す。

△内山眞弓卒△帆足萬里歿△齋藤竹堂歿

同 六 (五六歳)

大熊清藏言足卒。年五十七。言足は、御風樓と號し翁の従兄弟なり。和歌をよくす。山陽、海屋、淡窓等の諸名家とも交際あり。

△徳川家慶薨

安政 元 (五七歳)

同 二 (五八歳)

同 三 (五九歳)

同 四 (六〇歳)

同 五 (六一歳)

同 六 (六二歳)

△千種有功卒△松田直兄卒  
△本居内遠卒△藤田東湖歿△廣瀬淡窓歿  
平尾の山莊に於けるまゝとは、年々行はれしが今年も亦催さる。  
八月言道、大阪に上る。  
安政四年の八月十五日に大隈言道の大人、都に上らむと俄に思ひ立たなければ、留むべきことにもあらず、わりなく別れすとて、同じく十六日にわが庵に迎へける時、わが心いへば數なり思はなむよし思ひてもたへて忍ばむ。さてその日になれば、かしこに行きて送りすとて、たひらかに歸りきませといふまにもわが命さへかつ思ふ哉  
(上略)都に出立たれて後昔屋のみなとに舟待ちて、かしこにて秋も暮れゆくまで出立たてなど聞し時、よみておくらむとて、

難波江にゆくともゆかぬかりぶしはよしやあしやと思ひこそやれ (向陵集)

言道、中の島なる筑前藩の倉屋敷に入る。其後或方に一月あまり寄寓し、更に中の島の洲崎、梅檀木橋の第二樓に轉住して、其居を觀水居と稱し、其室を覺居室と名付く。言道手簡。(三九頁一行参照)

△加納諸平卒△足代弘訓卒

京洛遊覽、月の瀬の梅見に赴く。

『今橋集』に、月の瀬の梅見、うまの年睦月廿六日云々。(四九頁一三行参照)

同 六 (六二歳)

△徳用家定薨△鹿持雅澄卒△荒木田久守卒△梁川星巖歿△市河米庵歿  
戊午集、二卷、今橋集、二卷を撰ぶ。

本集は弘化元年より、安政四年まで十四年間の作を、安政六年五月より同年九月までに、難波中の島にて撰出清書せるものなり。

△齋藤彦麿卒△黒澤翁滿卒△石川依平卒△夏目麿慶卒△佐藤一齋歿△賴三樹被刑

△吉田松陰被刑

萬延 元 (六三歳)

二月四日、居を今橋一丁目堺筋に移す。  
『言道手簡』に、二月四日轉宅いたし、船場内に引移申候云々。(五二頁一一行参照)

△安積長齋歿

文久 元 (六四歳)

野村望東上坂して言道を訪ふ。

幼かりし頃より、一度は百數の大宮を拜し奉り、ついでに都の花紅葉、名所古跡をも見ばやと、常に忘るゝ時もなかりけり。さるを我師言道のぬし、この五年ばかり大坂にもせられしを、彼處の歌人留めて歸さざりければ、いかで上りてなど思ふうち、眞實君もなくならせ給ひしかば、忘れ形見の言の葉は、いかで梓にも彫らせてむとのたまひし事もあれば、我が言の葉の色なきと共にしてさる方にもとて、まづ猶先達の許に行きて、覺束なきふしをも問明かし、撰びをうくべしと思ひおこして彼是に語りひけるに、うべなりといふ人多かりける。  
十一月二十四日、出で立つ時のことどもうるさければ書かず。(中略)

中の島なる津島屋藤藏といへる宿に着き、心安くなれるもはかなしや。(中略)

八日(十二月)いそぎ大隈言道大人の許に行く。嬉しさいふばかりなし。たゞかたみに涙さへこぼる。

(上京日記)

此歳言道健康を傷ひるたり。

言道大分としがより、この冬の寒さなどもさばることもと存候やう御座候。春渚も常興も京都に行申候まゝ一向見物ごとでき申候。

(望東尺牘)

同

二 (六五歳)

十一月孫春海生る。

天満若松町光専寺の借家に移居す。言道書簡(五六頁一行参照)

又、小林重治が壬戌歌撰の奥書に『難波天満大隈言道』と書す。

五月十二日望東京都より歸坂。十六日歸國の爲大坂出帆。十二日晴、望東尼京より今夕致歸坂。十六日晴、望東爲歸國今夕乘船。(浪速語方日記)

△熊谷直好卒△小林歌城卒△羽倉簡堂歿△大橋訥庵歿△野田笛浦歿

同

三 (六六歳)

草徑集梓行

『草徑集』の序に、

おのれ若かりし時よりよみおける歌どもを、こたひ板にゑりなむとするに、おのれが筑紫にはいと歌人多く、其中にはすぐれたる人も少なからぬを、あながちによそにしられむの心なくて、板になど物する人少なし。さるをおのれ、近頃難波に來りて、この友達、歌集など物するついで、おのれも亦せまほしくなりて、かくみだりがはしくかいつめたれど、もとより宜しき歌あるべうも覺えねど、世の大人がた稀にも目とどめ給ふがあらば、一歌にても取るべきはとり、捨つべきは捨て給はらむこと、今更いふべきにあらず、をこなる人まねにこそ。

文久三年亥正月廿日自記

大隈言道

四月十一日孝明天皇の八幡行幸の御儀を拜觀す。

續草徑集に載す。(五三頁一二行参照)

十一月望東が向陵集の序を書く。

月花をめぐる心あるを、こころある人といひ、これをめぐるこころなげなるを、たゞ人といふ。野村望東子なきより心ありて、事にふれ物にふれて詠み出られたる歌、いくそげくといふ事なし。おのれ若かりしより其歌どもを今の老に至るまで見つるに、なべての人の心およばぬあはれをいひ出で、女のわざとは見え難し。都に上りて堂上のめでにも逢ひ、京人も難波人も、羨しきものにいひとよひけるは、御國にして、むかしより今に、さるたぐひの人ありしを聞かず。吉野、

初瀬、嵐山、月の瀬等をも見漏らさず、御國にしては、平尾なる山かげにおもしろく住なして、花紅葉などを植ゑ、月日を送れる、誰人かは能はむ。此集、そのよまれたる歌どもを、かたはしより自ら記して、世にある程の慰みにせられたる、おのれ教子あまたなれど、また類あることなし。おのれ難波にある程、遠くはしがきを請はれたれば、昔よりのあらましをかいつけおくものなり。とつ國のあらぬ風にうつるはで、かかるさまにて、大皇國風のいやち千世に、さかえなむことこそ願はしけれ。

文久三年亥霜月

大隈言道しるす

(向陵集)

元治

元 (六七歳)

三月中風症發す。

△山崎美成卒△鈴木重胤卒△萩原廣道卒△西田直養卒△廣瀬旭莊歿

『續草徑集』に、

元治元年三月すゑつ方中風をやみて  
死出の山ちかく見えきてかなしきは外によき路もなき身なりけり

△中島廣足卒△伴林光平卒△平野國臣刑死△佐久間象山歿

野村望東が六十の賀の歌を寄す。次きて十月望東勤王の故を以て忌諱に觸れ、自宅に幽閉せられ、後姫島に流さる。翁之れを悲みて歌あり。(六〇頁八行及六一頁九行参照)

齋藤拙堂歿

同

二 (六九歳)

在坂十年

翁が此歳まで在坂ありたる事は、龜井南冥の和歌並に中牟田浙江が尺牘の端書に、この歌は筑前愛宕山風景ことの外にめでたきを見て、龜井道載先生の詠歌並びに書なり。歌よみし給へることいと珍らし。石松甚助元啓が山里集にもいれたり。歌の心いと面白し。また世度助みち哉の戯れごと殊に面白し。また一つのせうそくは、唐人町田浙江の書なり。當名茂甫は則ち己れが父君言朝なり。田浙江は二川相近翁の書の師、この人書をよくして、龜井道載先生も、そ



の子昭陽先生をはじめとして、子は残らず浙江の弟子とす。されば弟子のいと多かりけるを、己れが父君も弟子なりける由、此手簡は、七夕の祭に父君も若かりし時、書をいたされたりと見えて、其文言見えたり。龜井南冥先生も、其夜父君の懸物をめでられける由、文言に見え侍る。石篤兄とあるは、吉田の家臣立石志津馬のことなり。此人父君の友なりし由、その七夕の懸物を、父君より借りにつかはしたるを、不殘使に渡したる由見え侍れば、父君出席あらざりしにつけて、取寄られしなるべし。

何事も昔々になりはててまだ残りたる我ぞかなしき

慶應二年丙寅十月

大坂天満にて六十九翁 大隈言道

とあるにてもしるし。

△徳川家茂薨△柳原安子卒△高島秋帆歿△藤井竹外歿△吉村秋陽歿

同 三 (七〇歳)

歸國して今泉なる池澤堂に入る。

言道歸國の年時未だ定かならず。されど前掲の南冥が和歌の端書もありて、慶應二年寅の十月までは、天満に在住せられしは確かなり。されば歸國は十一月以後の事なる可く、且又田代家に、翁は二月頃歸國あり、夫より二年計してみまかりぬてふ口碑もあれば、旁此年の事ならむと推定したり。中風に罹る。

元治元年三月中風發してより、一旦は癒えしも宿病再發して、之に惱まされたるもの、如し。

『續草徑集』に、

むかしへに我身かへりて童べのあゆみ習になれる老かな

おめ蟲と言ふは床蟲いつも床のしたべにかくれのみして

等の歌を載す。

△徳川慶喜大政を奉還す△野村望東卒△安藤野雁卒△鹽谷岩陰歿△草場佩川歿

七月二十九日歿す、福岡藥院なる香正寺に葬る。

表に

明治 元 (七一歳)

萍堂言道居士

と翁自筆の法號を刻し、裏に

慶應四年戊辰七月二十九日

と刻す。(六三頁四行参照)

年七十一 大隈 姓

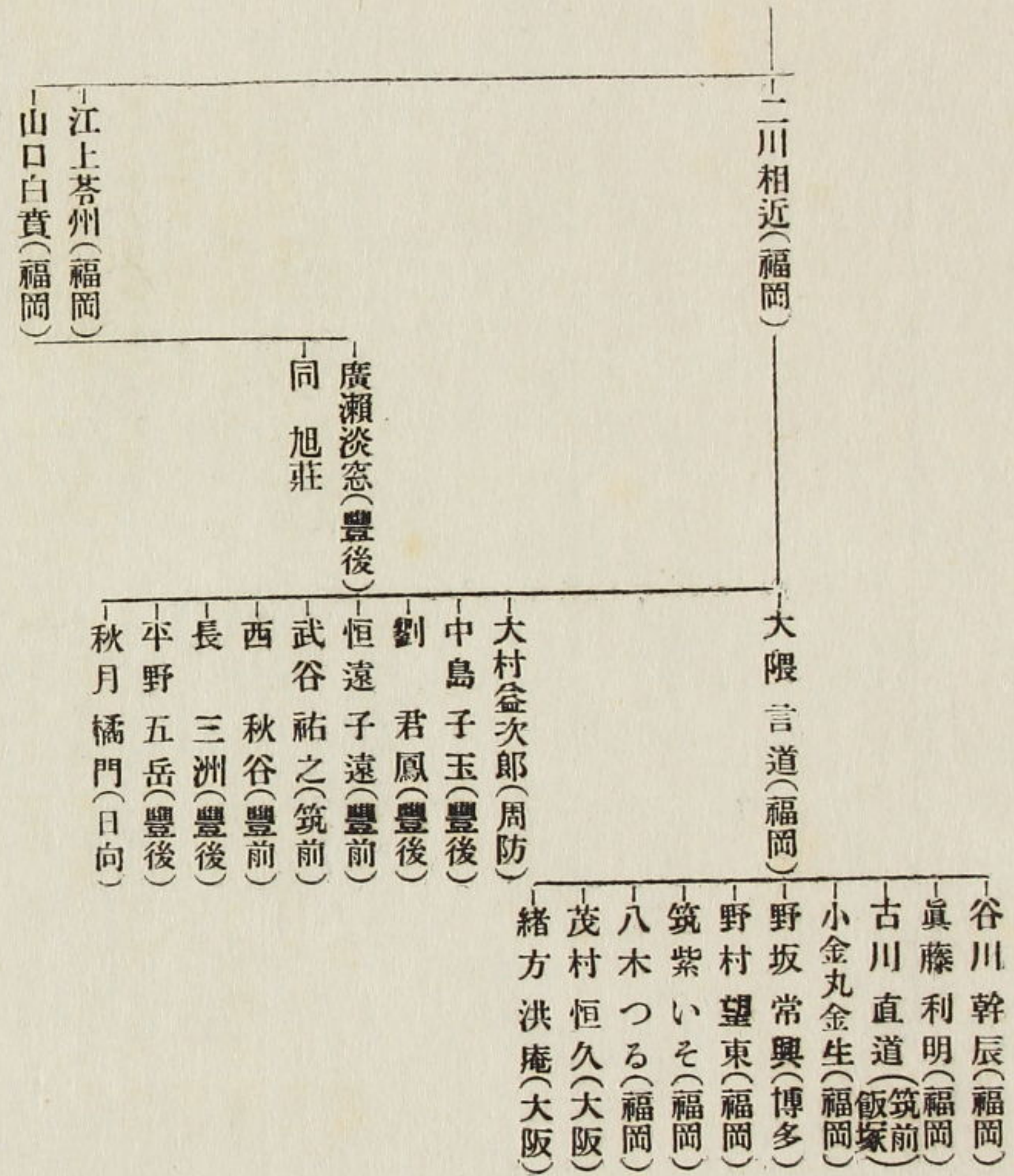
又、大坂なる門人相謀りて、翁の敗筆を梅田、東福寺別院なる楠樹の下に埋め、敗筆塚を造りて碑を建つ。碑文は田能村直入の撰なり。(六三頁一〇行参照)

△井手曙覽卒△森田簡齋歿

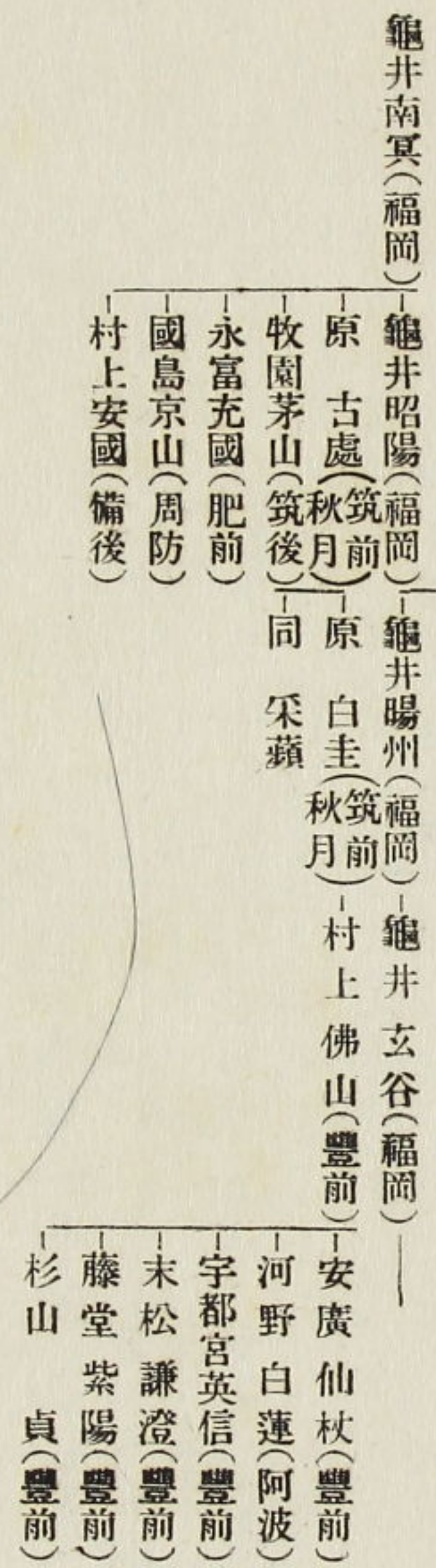
學統譜

(大隈言道傳附錄四)

國學系統



漢學系統



## 大隈言道傳終

## 大隈言道の奥に

- 一、この書はやく刊行すべかりしを、中頃、大隈言道傳の筆者梅野君病みて福岡より故郷八女郡に移られ、予また、歌集の選を志ばく改めつるをもて、いたくおくれつ。されど、この間に、去年十一月二十九日には、福岡市に於て、大須賀巖、平岡良助、伊東尾四郎、辛島小四郎、新開富太郎氏等の盡力により、大隈言道翁顯彰會開催せられ、福岡市記念館には、予に梅野君を紹介せられし久保猪之吉博士の講演あり、通俗博物館には、言道翁遺墨展覧會あり、香正寺には、法會ありき。當時、大隈言道翁記念篇（小金丸金生氏の言道翁略傳、予及び梅野君の文詞を輯めしもの）を印行して、人々に頒ちたりき。また大阪梅田の三昧に、廢臺となれりし言道が筆塚は、平岡氏のいたづきによりて、福岡なる墓畔にうつされぬ。かくて今や、福岡市民の、言道の名を知らざるはなきに至りぬ。喜ばざるべけむや。
- 二、歌集の選は、言道の稿本筆蹟の類をあまねくあさりて、そが中よりものせしかば、類歌の選擇、及び彼自ら二様にも三様にも詠み試みつる語句の取捨等につきて、少なからぬ苦心を費しぬ。集中の歌のうち、既刊の書に出でたると同じからざるものもあるは、この故なり。（類想のもの、類句あるものも、共にすてがたきは並べ載せつ。）
- 三、挿入せる畫像は、養子田代正良の描きしに、言道が病中題しつるもの、言道の裔なる田代春海氏の所藏なり。著書の自筆稿本は、平岡、辛島二氏の所藏にかかる。筆跡は、團、弘田二博士の所藏中よりえらびつるもの。

弘田博士所藏のは、能美慶富の爲に書きしものにて、楷、行、草、假字、大字細字を交へ書きて、言道の書風を代表せる逸品なるが、細密に過ぎて寫真版に附するにふさはしからず、やむなく一部分を掲げつ。言道が、夙く書を二川相近に學びしことは傳記に見えたる如くなるが、その漢様を學びて、更に一生面を開きたりともいふべき超凡の筆力は、これらによりても伺ひ見つべし。故宅の圖は、福岡市外今泉なる池添堂の外観なり。居室は改築せられつれど、寫真に現はしし門前の有様は昔の面影をのこせりと云ふ。なほこの書の表紙は、草徑集のをまねび、題簽は梅野君所藏の言道の書幅よりとり、扉の文字は、三村竹清君をわづらはしつるなり。

四、予草徑集を得てはじめて言道の非凡の才に驚けりし後、間もなく、わが父が選べりし千船集に、言道の歌の載れることを知りつ。さらに、梅野君の調査によりて、わが父より言道に贈れる書輸出でて、兩者の交りありしこといよよ明らかになりぬ。文中、言道の歌風の新しきをたたへたる一句は、予として殊に感ふかし。夫かも言道に就いては、生前父より聴くところなかりしに、ゆくりなくも草徑集を讀みて言道を知り、廣く世に歌人言道を紹介するに至れりしこと 因縁の淺からぬをおほゆ。

大正七年十月

佐佐木信綱識

大正七年十月廿八日印行  
大正七年十一月一日發行

編者兼 發行者 東京市本郷區西片町十番地  
佐佐木 信綱  
印刷者 東京市本所區番場町四番地  
長 澤 泰 知  
印刷所 東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

